
蒼い翼

海土龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼い翼

【Nコード】

N2877J

【作者名】

海土龍

【あらすじ】

幼い頃、天高く手を伸ばせば、白い雲も太陽も、天上に在るすべてのものを、手に入れられると信じていた。ただ今は幼いから、天まで手を伸ばすことができないだけだ、と。
時は乱世。

男として生まれながら、男として生きることが許されない少年の、BL気味、中華風ファンタジー。

1 始まりの刻 天昇る炎

幼い頃、天高く手を伸ばせば、白い雲も太陽も、天上に在るすべ
てのものを、手に入れられると信じていた。

ただ、今は幼いから、

天まで手を伸ばすことができないだけだ、と。

両腕を伸ばす。

手のひらを目一杯に広げた。

空は蒼い。

この蒼だけを見上げて生きてきた。

今はまだちっぽけな自分だけど、いつの日か、この蒼の中に飛び
込んでいくのだと、信じている。

葵暦189年。

青の都、葵陽が紅く燃えた。

紅。

いや、黒い炎だった。

すべてを焼き尽くすまで燃え続けるだろう炎から、濛々と黒い煙が立ち上っている。

男は剣を振り下ろした。

朱。

飛び散ってきたものを避けるように、顔を逸らした。

ごろん、と頭が転がる。

それは男を見上げた。恨めしそうな眼だった。

忌々しく思い、蹴り飛ばした。

悲鳴が響く。

最期の声だ。

そこかしこから響いてくる。

再び剣を振り上げた。

振り下ろすと、悲鳴が響く。

幾度も聞いているうちに、次第に耳障りなものではなくなってきた。

悲鳴。
すぐ手元から響いた。

乱世では、あり得るはずのないことが起こってしまつらしい。

悲鳴は皇城。

それも後宮の方から響いてくる。

逃げ惑う女達。

武器を片手に猛る男達。

廊下に転がる宦官の首。首。首。

もしも、蒼潤そうじゆんが、乱世の始まりはいつかと問われたならば、彼は迷わずこの年を答えるだろう。

だが、同様の問いを別の者にすれば、その者は蒼潤とは異なった答えを言う。

例えば、蒼潤の夫である峨瑛がえいは、農民叛乱が頻発するようになった年であり、己が澗州掎邦の県令になった年でもある葵暦179年こそが乱世の始まりだと答える。

そして、蒼潤の父、蒼昏そうこんならば、己が失脚した葵暦167年こそ

がそつだと答えるだろう。

乱世というものは、そういったものなのかもしれない。

始まりなんてハッキリしたものはなく、誰が起こしたということもない。

なるべくしてなる。

いや、誰が起こしたと言つのならば、皆が、その時代に生きた者たち皆で起こしたと言つべきだろう。

そして、そのように促したのは時だ。

時の流れというものなのかもしれない。

葵暦189年。

恙釜という男が殺害された。

恙釜は大將軍という三公と等しい権力を持つ地位に着いていた男だ。

三公は官制における最高位であり、軍制における最高位が大將軍である。

だが、どちらも名門出が独占する名誉職のため、その実力は求められていない。

恙釜も妹の威光でこの地位を得た。

彼の妹である恙媚は、青王朝12代皇帝の貴嬪として後宮に上がった女だ。

そして、策略を用いて甄皇后を廃し、皇后の地位を得、更には太后の座までも手にした女である。

彼女は多くの宦官を従えていた。

宦官とは男性性器を切り落とした者のことで、後宮に足を踏み入れられる女とは異なる性を持つ者のことである。

多少の例外もあるが、宦官は性欲を持たない。

代わりに、金欲や食欲など他の欲に強く執着するようになるようだ。

醜く太るか、貪欲に金を集めたがるか。

そして、大抵の者は、権力を欲するようになるのだという。

恙媚に従った宦官は、彼女の威光を笠に着、後宮における己の権力を強めようと企む者たちだった。

彼らは己自身のために恙媚を皇后に据え、彼女の生んだ皇子には玉座を用意した。

そんな宦官たちは恙媚にとって宦官は目であり、耳であり、手足であった。

恙媚もまた己の皇子に皇位をと渴望する女だったからだ。

彼女は宦官たちを寵愛し、その意見によく耳を傾け、絶対的な庇護を与えていた。

ところが、恙釜にとって、宦官は目障りな存在でしかなかった。

どこまでも貪欲で、気味が悪く、さほどの学もないくせにやたら小賢しく立ち回る宦官たち。

恙釜は幾度、齒痒い心地を味わったことだろう。

皇帝が宦官の一言で、すでに決まっていた事柄を覆してしまうことが度々あった。

皇帝の権威が失墜しているだけではなく、幼い頃から宦官によって育てられ、宦官たちの手によって皇位に着いた皇帝は、宦官に逆らえないのだ。

虫だ。

宦官など、青王朝に根深く宿った寄生虫としか思えない。

もしくは、獣。

己の欲だけを追って生きているケダモノだ。

せつかく後宮に入れた妹も、自分よりも宦官たちの意見を重んじるのも気に入らない。

恙釜とて、甥である皇子を玉座に着かせたいと望んでいた。

そのためにあらゆる手を尽くしてきた。

それなのに、なぜ、妹は宦官ばかりを寵愛するのか、彼にはまったく理解できなかつたのだ。

そして、恙釜は密かに宦官の誅滅を企てた。

だが、これは妹である恙皇后に知られてしまい、彼女から宦官の耳に入ってしまった。

恙皇后は、実兄よりも、欲に忠実な宦官たちを取ったのである。

そして、恙釜は宦官たちの騙し討ちに遭い、首が胴から切り離された。

これを受けて兵を挙げたのは、瓊俱けいぐという男である。

瓊家は四代に渡って三公を輩出した名門であり、青王朝きっての名家で知られる。

この時、瓊俱は恙釜の副将を勤めていた。

上將の死は後宮に乗り込む良い口実となった。

『宦官を討て。宦官を誅滅し、青王朝を建て直すのだ』

彼の命により、後宮は炎に包まれた。

男 瓊俱は、再び剣を振り下ろした。

首が飛ぶ。

女装して逃げようとした宦官の首だった。

宦官には髭がない。

生えていた者も次第に薄くなり、また新に生えることはなくなるらしい。

これが目印となった。

髭のない生首が後宮の廊下に並べられた。

うち幾人かは、誤りで殺された者もいたやもしれない。

宦官だと判断を下した髭のない者を切り捨てながら、瓊俱は辺りに目を配った。

頬を雫が伝った。

己の汗なのか、返り血なのか確かめる余裕はない。

彼はかけろう景色の中、たった1人を探していた。

青王朝13代皇帝、礎帝。

その姿を求めて、後宮の回廊を駆け抜けていた。

皇帝を傀儡としていた宦官を誅し、この混乱から救い出せば、その名目を持って皇帝を擁立した己が実権を握れるだろうと、彼は考えていた。

彼だけではない。

おそらく後宮に足を踏み入れた将すべてが思っていたことだろう。

紅蓮の炎が瓊俱を焦らせていた。

皇帝がいない。

後宮のどこにも、その姿はなかった。

日が昇った。

だが、未だ濛々と黒い煙が立ち上っている。

不意に歓声が上がった。

誰かが叫んだ。

帝だ、と。

瓊俱は駆けた。

そして、唇を噛んだ。

血が滲む。

己の不運を呪った。

幸運は呈夙しやうそくという男が掴み取った。

瓊具が後に知った事実としては、

礎帝は城内から逃げる宦官の盾に使われて、城外にまで連れ攫われていたのだという。

そして、皇帝を伴って逃げようとしていた宦官の馬車と、葵陽に攻め込む途中であった呈夙の軍が、偶然にも、かち合ってしまった、皇帝は宦官の手から呈夙の懐の中へと移されたのである。

それは、呈夙にとっては幸運としか言い様がなく、血を流したの
は自分であるのにと、瓊具は齒軋りするより仕方がなかった。

彼は自ら天を手に入れる機会をつくつたが、その天を逃してしま
ったのだ。

こうして、乱世が、呈夙の暴政が幕を上げた。

2 幼き刻 血が告げたもの 壱

額に痛みが走った。

痛みは次第に熱を帯び、つうー、と血を伝わせた。

コツン、コツン、コツン。

小石が石畳の上を弾みながら去っていく。

少年は血走った眼で、石を自分の額に投げつけた相手を睨み上げた。

「なんだよ、その眼は！」

「気に入らねえ」

「生意気な奴だ」

「宦官の孫のくせに！」

腐った血。

耳障りな音が大気に響く。

少年は下唇を噛み締めた。

ドクドクと額が脈打つ。

熱い。
燃えるようだった。

あまりの怒りに目眩を感じ、瞳を閉ざす。
血が額から左目へと伝い、更に頬を、顎を伝って胸元に落ちていくのを感じた。

薄く眼を開くと、麹塵色の袍が、じわりと赤く滲んでいくのが見え、再び瞼を閉ざす。
歯を噛み締めた。

どんなに悔しかろうと、そうして耐えるしかなかった。

少年は己よりも年上の少年達数人に取り囲まれていた。

こういう事は度々あることだった。
外とは、自分の想像を絶する愚か者で溢れているところである。
こういう事があるのも、仕方がない。
そう思い、少年は諦めていた。

外にさえ出なければ問題ないのだ。
家の中は安全で、自分に傳いてくれる者が大勢いる。
だが、外に出る必要があった。
外を知る必要があったのだ。

こういう時、いつも、5つ違いの従兄が駆け付けて来て、助けてくれた。

従兄は15歳で、その年齢にしては大柄な体躯を持っていた。
威つい顔をしている。

大きく見開いた眼で睨まれては、大人でさえ竦むほどである。

だが、今は、その従兄は少年の父親の用で出掛けていた。助けは期待できない。

更に、運悪いことに、自分を囲んでいる少年達はいずれもどこそこの名家の子どもだった。

やり返したかったが、そうすれば、後でもっと面倒なことになる。

こんな下らないことで煩わされるのは、今のこの時だけにしたかった。

彼らは気に入らないのだ。宦官の孫という存在が。

そして、その穢れた存在が我が物顔で街を出歩いている事が。

この少年の名を、峨瑛がえいといった。

彼の祖父 峨旦がたんは、宦官である。

これは少年にとって、どうすることもできないことだった。

世は、血の繋がりを尊ぶ時代である。

学があれば、そこそこの地方官になることができるだろう。

コネがあれば、そこそこの国官になることができるだろう。

財があれば、そこそこの地位を得ることくらい、できるかもしれない。

だが、『そこそこ』から脱するためには、血統、つまり家柄が重視されていた。

峨家は、元々は塩の商いをしていた家だった。

だが、峨旦の野心は商人で生を終えるには大きすぎるものであった。

学はあった。コネは少しだが、あった。

金は大いにあったが、高貴な血だけは持っていなかった。

彼には自らの性を切り落とすしかなかった。

そうすることしか、彼の野心に応える術がなかったのである。

後宮で自由が利く宦官は、皇帝や皇后、未来の皇帝や皇后に取り入る機会に恵まれていた。

皇族さえ抱え込んでしまえば、金も地位も、権力も、思うがままだ。

人当たりの良い彼は胡帝に気に入られ、彼の皇子で後の礎帝の教育係を任されることになった。

こうして、峨旦は礎帝にとって、師であり、親のような存在だと思われるような地位を得たのである。

それほどの権力を手に入れた彼だったが、宦官である以上、彼には子をつくれない。

子に財を残すことができないのだ。

自分一人で遊び切れない程の財を譲るために、親戚筋に当たる新家から養子をとることになった。

それが峨瑛の父　峨威である。

峨威の長子、峨旦の孫として生を受けた峨瑛は、幼い時こそは何
不自由もなく育つことができた。

広い庭のある大きな屋敷の中で暮らすだけならば、財があるとい
うことだけで、不自由しなかつたのである。

だが、少年となった彼は度々街へと遊び出るようになって、彼は
思い知ることとなったのだ。

宦官というのは、本来、自分の子孫を残せない存在。

だからこそ、莫大な財や地位を得る。

それらは、子の代わりなのだ。

ならば、父は何だろう？ 自分の存在は何だろう？

宦官の孫など、あつてはならない存在なのではないだろうか？

実際には、峨旦のように養子をとる宦官は他にも多くいる。

だが、その子らは皆一様に穢れたような目で見られるようになる
のである。

本来、あつてはならない存在だからだ。

腐った血。

ポツリと呟かれた、その言葉を初めて聞いたのはいつだっただろ
うか？

もはや、彼は覚えてはいない。

だが、そうと言われる度に、負けてなるものかという野心が燃え上がったこと、

それだけは大人になった後でも忘れられなかった。

鈍い音が響いた。

少年　峨瑛は腹を抱えて蹲った。

蹴られたのだ。

そうと気付いてからも、そうされたことが信じられなかった。

相手を睨み付ける。

すると再び、生意気だと言われて、顔を殴られた。

唇が切れる。

血が滲んだ。

背を蹴られ、地に這い蹲る。

脇腹を蹴られ、転がされた。

仰向けにされた時、ふと瞼を開いた。

蒼。

立ち並ぶ家々の屋根の遙か上方に蒼があった。

空か、と岷瑛は吐く。

憎らしいほど澄んだ蒼い空。

腐っているとされる自分を見下しているかのような空だった。

3 幼き刻 血が告げたもの 弐

「何をしている？」

不意に響いた声だった。

太く、低い。

少年のものであったが、威厳に満ちていた。

峨瑛を取り囲んでいた少年たちは、その一言だけで、慌てふためき、我先にと逃げていった。

取り残された峨瑛は身動き取れず、じっと彼が歩み寄ってくるのを待つ。

彼は石畳の上に転がる峨瑛の元に来ると、その脇にしゃがみ込んだ。

「大丈夫か？」

彼が腕を引くので、峨瑛は上体を起こした。

年上だろうか。

従兄よりは年下だろう。

すると、自分より二つか三つ上というところだろう。

身形が良く、一目で名家の者だと判った。

彼は峨瑛を立たせると、腕を組み、自分より背の低い峨瑛に合わせるように少し上体を屈めた。

「ひどい怪我だ。わたしの家がこの近くにある。来てくれれば、手当くらいしてやるぞ」

「いらない。俺の家もすぐ近くだ」

「ほう。お前、どこの者だ？」

「名を訊く時は、自分から名乗るものだろう？」

「名を訊いた覚えはない。家名を訊いたのだ」

「同じことではないか」

腹が立った。

人とは、その人自身より、その人物の背景にあるものの方が大事なのだ。

そう言われたようなものだった。

背景。

要するに、血筋だ。

峨瑛は眼を細めた。氷のように冷ややかで、鋭い視線を相手に向ける。

「姓は峨だ」

「峨旦の縁者か？」

「孫だ」

祖父の名を口にされて、峨瑛は苛立つ。
だが、彼は気にする様子もなく、ふーん、と鼻を鳴らした。

「わたしは瓊俱^{けいぐ}。奔帷^{ほんい}と呼べ」

「瓊家の……」

瓊家と言えば、四代に渡って三公を輩出した、青王朝きつての名家で知られる。

なるほど、だからこそこの振る舞いなのか。

自信に溢れ、まるで己が王であるかのような態度である。

峨瑛は奥歯を噛み締めた。

そんな峨瑛の様子にも気付かず、瓊俱は続けた。

「ここでわたしと知り合えたのは、お前にとって幸運だったな。
これからは、先程のような目に遭ったら、わたしの名を出せば良
い。」

大抵の者ならば、わたしの家来には手をださんからな」

「家来だと？」

「そう思わせておけ。その方がいろいろと得をするぞ」

唾を吐きたかった。

だが、耐えた。

瓊俱は己が何を言っているのか分かっているのだろうか。

なんとという傲慢。

峨瑛はわなわなと全身を振るわせた。

そつとも気付かずに瓊俱は続ける。

「助けてやると言っているのだ。お前の眼の輝きは生意気だが、なかなか見どころがある。

そのうち、わたしの右腕になれるかもしれんぞ。

確かに、お前の生まれは良いとは言えんが、わたしの側にいれば、それしきのこと、

いくらでもわたしがどうとでもしてやるつ

「……」

「どうだ？」

瓊俱は背筋を伸ばし、峨瑛に向かって手を差し伸べた。

峨瑛はその手と彼の顔を交互に見やった。

悩んでいたわけではない。

ただ、瓊俱の言葉が信じられなかったのだ。

それは、信頼できないという意味ではない。

心底、耳を疑っていた。

震える己の腕を、もう片方の手で押さ付けた。

「わたしの側にいれば、宦官の孫だろうと、こんな風に虐められる

ことはなくなるぞ。

あいつらを見返してやることもできる」

「お前の家の権威を笠に着て……か？」

「わたしはああいうことが嫌いなのだ。ああいう、弱い者虐めというものは」

「弱い者」

ゾツ、と肌が粟立った。

何を言われた？

再び、耳を疑う。

弱い者？ 誰が？ 俺が？

カツ、と頭に血が上った。

見る見るうちに顔が赤く染まる。

バシン、と我に返った時にはすでに、瓊俱の手をうち払っていた。血走った眼を彼に向ける。

「俺は絶対にお前の下には付かん！」

瓊俱は嗤った。

年下の餓鬼の言う事など、戯れ言としか思っていない様子である。

峨瑛は腹立った。
怒鳴り散らしてやりたかった。

だが、おそらく瓊俱は唾うただけだろう。
格下の言うことだ、と相手にさえしないだろう。

やり場のない怒りは、どす黒く胸に溜まっていく。

吐き気がする。

目眩がする。

頭が痛い。

息苦しい。

峨瑛は瞼を閉ざした。

瓊俱。

瓊家に生まれてきた。

ただそれだけの男だと、峨瑛は思っている。

偶々、瓊家に生まれ落ちただけの男。

なぜ、それしきの男の下に付かねばならんのか。

腑に落ちないことばかりが、この世では多くまかり通っている。
そんな気がしてならない。

10の時、13の瓊俱と出会い、それ以来、彼は何かと付けて峨瑛に話しかけてくるようになった。

いらぬ、と言っても、彼は峨瑛が遠慮しているのだと思っているように、

取り囲まれていると知ると駆け付けて助けてくれる。

弱い者を助けることで、優越感に浸りたいのだ。

自分は良い事をしている、弱い奴を庇っているのだと、自己満足したいのだろう。

迷惑だった。

彼が優越感に浸るほど、劣等感が峨瑛の胸を苛んでいく。

悔しい。

だが、この悔しささえ瓊俱には通じない。

20の時、梨蓉という女に心を奪われた。

どうしても妻にしたいと願ったが、

聞けば、すでに彼女は瓊俱の妾になることが決まっているのだと言っ。

親の出世の道具とされるのだと言っ。

それも、正室でも、側室でさえない。妾だ。

初めは妾として侍り、気に入られて側室となる例も多くあるが、

梨蓉は妾扱いして良いような女ではない。

梨蓉程の良い女を、峨瑛は他に知らなかった。

許せなかった。

瓊俱も、梨蓉の親も。

彼女を盗むように奪い、蛾瑛は強引に己の妻とした。
こんなことをすれば、さすがの瓊俱も自分に腹を立てるだろう。
嫌い、二度と話しかけたりはしないだろう。
そう思っていた。

だが、彼は嗤った。

あんな女が良いのか。

そう言っただけで嗤ったのだ。

自分が妾にするような女を、お前は正妻にするのだな、と瓊俱は
言った。

実にお似合いだ、と大きく手を叩いて祝福の言葉をくれた。
あまりの怒りに吐き気を催した。

唇を噛みすぎてしまったのだろう。

血の混じった唾を吐く。

眼の奥が熱くなった。

焼ける。

悔しい。

悔しい。

悔しい。

彼が憎くて堪らない。

どす黒いものが峨瑛の胸を犯していく。

4 幼き刻 血が告げたもの 参

ふと、瞼を開いた。

眼に突き刺さってくる日射し。

頭が重い。

どうやら寝過ぎたようである。

峨瑛が目覚めたと察すると、女が一人寝室に入ってきた。

主の身支度を整えようとする女に向かって、峨瑛は片手を振った。

「後で良い。汐銚を呼べ」

女は声なく頷き、寝室を出ていった。

しばらくあって、厳つい顔が現れた。

5つ年上の従兄である。

薪塙。

字は汐銚。

彼は昼過ぎても尚、臥牀に腰掛けている峨瑛を見やり、眉間に皺を寄せた。

「皓煽。人を呼ぶ時は、せめて身支度を終えてからにするものだぞ」

皓煽とは、峨瑛の字である。

この従兄と自分は主従関係にあり、峨瑛が主であるのだが、彼には自分を字で呼び続けることを許していた。

祖父も父も亡い今、自分を戒めてくれる者が一人くらいあっても良いように思ったからだ。

峨瑛は自分を諭そうとする従兄に、恨めしげな眼を向けた。

「汐銚、不快な夢を見た」

「夢だと？」

「実に、忌々しい夢であった」

「それで？」

彼は臥牀の足下に腰を下ろし、峨瑛を見上げた。

悪夢如きで自分は呼び付けられたのかと、呆れたような顔をする。峨瑛は笑った。

「幼い頃、お前はいつも儂を助けに駆け付けてきてくれたが、一度だけ助けに来てくれなかったことがある。その一度で、儂はとんでもない思いをしたのだぞ。未だに夢に見てしまう程だ」

「そいつはすまないことをした。」

その話をお前から聞かされる度に、過去に戻って助けてやりたいとは思うが、

さすがの儂もどうすることもできん。

ならば、せめて、お前の夢に飛び込んで、助けに行つてやりたいとも思うが、夢の中のこと。

どうにもならん」

諦めてくれ、と彼も笑った。

峨瑛は眼を細め、話題を変えた。

「昨日、互幹国相から文が届いた」

「互幹国相？ 例のあの返事か？」

「そうだ」

「そうか。それで？」

膝を打ち、薪塙は身を乗り出した。

葵暦192年、春。

玕州霖国の峨瑛の元に、洲州互幹国から文が届いた。

互幹国相 蒼昏そうこんからの文である。

峨瑛は歡喜した。

彼は13年近くも、この文を心待ちにしていた。

蒼昏には娘が3人いる。

蒼彰、蒼潤、蒼麗である。

峨瑛は3人のうちいずれかを娶りたいと前々から申し出ていた。

だが、いくら文を出しても、蒼昏からの返事はない。

理由は容易に察することができた。

蒼昏は恙太后を恐れていたからだ。

蒼昏が皇太子であった時、彼には5人の男子がいたが、

蒼昏が失脚すると、これらの子達はすべて恙太后の企みで殺されている。

失脚後、雛夫人が男子を1人生んだ。

しかし、この子も、葵暦178年、5歳を迎えた時、何者かの手

によって暗殺されてしまった。

おそらく、恙太後の手の者の仕業だろう。

だが、証拠はなかった。

恙太后は蒼昏の存在を恐れていた。

彼が多くの人に期待された皇太子であったため、その子どもに期待する者が尽きなかったからだ。

蒼昏の元に男子が生まれては、礎帝の、そして自身の立場が脅かされると、

彼女は常に恐怖心を抱いていた。

彼女の恐怖は、蒼昏にとってもまた恐怖であった。

都から遠く離れた澗州互幹国にあっても、彼女の目の輝きを何よりも恐れ、

人との接触を避けるように生きている。

下手に人と接触をし、謀反を企んでいると思われるのは、命はない。

それは多くの者たちも同様だった。

皇族の血を引く娘ならば、本来、縁談は引く手あまたなものだろう。

だが、蒼昏と結んだと見られ、恙太后の不興を買っては、宮中では生き難くなる。

生き難くなるだけであるならば、まだ良い方だ。

蒼昏と共に謀反人に仕立てられては堪らない。

宮中では、口実はいくらでも作れるのだ。

峨瑛が蒼昏に文を出したのは、そんな中だった。

彼は恙太后を恐れはしなかった。

たかだか女1人。

永遠の命を持っているわけでもない。

ただの女だと、彼は見ていた。

恙太后の権威は脆い。

息子の礎帝が玉座に座っている間にしか保たれない力である。

いや、その前に時が彼女を殺すかもしれない。

いずれ状況は移る。

恙皇后が権威を失い、再び蒼昏の回りに光が当たるようになる。

そうなってからでは手遅れだった。

誰もが蒼昏の存在を無視しようとしているこの時だからこそ、

峨瑛などという大した家柄でもない男が、蒼昏に文を出せるのだから。

峨瑛が天下に号令を発するには、高貴な血が必要だった。

人は高貴な血に引かれてやってくる。

反呈夙連盟を結束し、豪傑晤貌に敗退したのは、昨年、葵暦190年のことである。

その時、連盟を作ろうと呼びかけたのは他の誰でもない、峨瑛だ。

だが、自分の下では誰もが納得しないだろうと、盟主は他の者に

頼んだ。

頼むしかなかった。

盟主には瓊俱が選ばれた。

瓊家は4代に渡って三公を輩出した名門だ。

誰もが納得して、彼を選んだ。

名門だというだけで兵が集まる。

瓊俱は5万の兵を擁していた。

対して、宦官の孫である峨瑛は5千である。

血がこれほどまで強いのか、と思った。

峨瑛の言葉では誰もが耳を貸してくれない。

それでも連盟を呼びかけられたのは、峨瑛の言葉がよほど巧みであつたからだ。

そして、呈夙の悪政に誰もが、腸を煮えくり返る思いをしていたからである。

高貴な血。

そんなもの、と思う。

だが、それは、自身の内にないからこそ思うのかもしれない。

持っていれば損をしない。

わずかだが、天に近くなる。

その程度のものなのだろうと思う。

それでも、今の自分には必要なものであった。

蒼家の血は、この世界で最も尊い血だ。

誰もがその血を欲しないと言っのならば、自分が手に入れてやる
う。蒼昏の娘を。

今が期だと、蒼昏に文を出した時、彼の娘はわずか2歳だった。

それから13年の歳月が過ぎ去り、恙太后が死んだ。

おそらく呈夙に暗殺されたのだらうと、蛾瑛は見ている。

思いがけず早く、そして、あっけなく死んだものである。

だが、同時に、そんなものだらうとも思った。

とにかく、恙太后は死んだ。

もはや蒼昏からの返事はないものだと言っていた。

しかし、文は届いた。

5 幼き刻 血が告げたもの 肆

峨瑛はすぐさま文面に目を通し、楚雀を呼んだ。

そしやく
楚雀。

字は檣抄しんせうという。

峨瑛の軍師の1人で、数いる軍師の中で彼ほど峨瑛の内々の相談にのった者はない。

やがて、涼やかな顔が現れると、峨瑛はその顔に向かって文を放った。

「互幹国相からの文だ。読んでみる」

「拝見します」

白く長い指が乱雑に扱われた物を拾い上げた。

彼が視線を落とすと、長い睫毛が目の下に影を作る。

色の白い顔だからこそ余計、その影が濃く目立ってしまうようだ。

彼が文字を追っている間、峨瑛は楚雀の整った顔をジッと眺めていた。

見る見るうちに、綺麗に整った眉が歪められていくのが分かった。そして、それだけで次に言わんとすることも知れた。

「殿を試しておられるようですね」

「お前もそう思うか」

「ええ。澗州は今や瓊俱の支配下にあります。洹幹国は澗州。

娘を娶りたければ、直々に貰いに来いとは、

殿が瓊俱をどのように思っているのか見ているようにも思えます」

反呈夙連盟が崩壊した後、それに参加していた者たちはそれぞれ拠点とする地を求めて散った。

峨瑛は郷里の珙州霖国を選んだ。

その地で2年間、ジツと世の動きを見守っている。

一方、瓊俱が選んだ地は澗州だった。

澗州ならば5万の兵を養うのに十分過ぎる程の土地がある。

そして、更に兵を募るためにも適した土地だった。

「瓊俱の兵は10万に達したとか。多くの将が彼に下ったからでし
よう。」

殿も瓊俱に下る気があるのかどうか、洹幹国相は見定めるつもり
でしよう」

うむ、と峨瑛は唸った。

おそらく蒼昏は、誰かの部将になる程度の男に娘を嫁がせたりはしないだろう。

瓊俱の部下となり、平然と澗州にやってくるような男ならば不要。そうかと言え、瓊俱を恐れ、澗州に足を踏み入れられないような男ならば問題外といったところか。

「今はまだ、はっきりと瓊俱と敵対しているわけではありませんが、殿に下る気がない限り、敵地に踏み込むようなものです。」

危険極まりないですが、ここは、行かないわけにはいかないでしょう。」

それに、と楚雀は続ける。

「澗州を支配下に置いたとは言え、まだ日が浅い。」

おそらく澗州全土に瓊俱の目が行き届いてはいないかと思えます。特に亘幹国は皇族に連なる者が相として治める地。瓊俱も容易には手を出せないかと。」

楚雀の滑らかな言葉が途切れると、峨瑛は薄く笑みを浮かべた。手を軽く振る。

「お前を呼んだのは、意見を聞くつもりだからではない。しばらく留守にすることを伝えようと思ったのだ。」

「そうでしたか。」

楚雀は眉を下げて、柔らかかに微笑んだ。

ならば自分が言うべき言葉は一つだと、その言葉のみを口にした。

「殿の留守は、この楚雀がしかとお守り致しましょう」

この従兄に対して、峨瑛はあまり言葉を必要としなかった。

常に、従兄に対して、言うべき事と言う必要のない事を峨瑛は併せ持っていたが、

従兄はそれら大半を、峨瑛の口から聞かずとも承知しているようであった。

彼曰く、眼の動きだけで分かるのだ、と。

そして、現状を考えれば自ずと、峨瑛が言いたがっている事も、隠そうとしている事も判るだと言つ。

故に、この従兄と話す時は簡単な単語の羅列で事が足りる。

この時も、蒼昏から文が来た、楚雀に留守を頼んだ、という二言で彼は全てを承知したようだった。

必然的に、話題が斉郡のことに移った。

斉郡は澗州の内にある。

瓊俱の支配下ではあるが、今、そこでちょっとした叛乱が起きていた。

瓊俱は乱鎮圧を斉郡の太守に命じようだが、その者が無能なのか、少しも治まる気配はない。

峨瑛は唾った。

瓊俱がどう動くか、見物だ。

「あの男が、儂の思っている通りの男であれば、近々使者が来るな。書状を携えて」

「来るだろうとも」

薪塙が頷く。

彼は、どういつ内容の書状なのかとは訊かなかった。それに満足して、峨瑛も頷いた。

「敵か、味方か。配下になるのか否か、そろそろはつきりとして
言ってくるだろう」

「お前は常に言っていたのだがな。なかなか伝わらなくて苦勞をし
た」

「まったくだ」

峨瑛は苦笑を漏らした。

瓊俱の下に付く日など、来るわけがなかった。

従うのか否かと問われれば、即答してやろう。否だ！

なぜ、もっと早くに問わなかったのだ、と罵ってやりたい。

幼い頃から答えは決まっていたのだ。

例え、命落とすようなことになっても、お前の下には付かない、
と。

「儂はいつか、あの男の上をいく。その為の血を手に入れる。あの
男の血に対抗できるだけの血を。」

そして、いつか、どちらも切り捨ててやる。

あの男の血も、あの男に匹敵するような血も、すべて根絶やしに
してやる。

高貴な血？ そんなもの無用だ。

血は血。万人が皆、赤い。高貴でも、腐ってもいない。皆、同じ
血だ。　　そうだろう？」「

そうだな、と従兄が微笑む。

蔵つい顔だ。

だが、その顔が笑うと、ホッとする。

とても安心するのだ。

その安堵感を得たくて、幼い頃、よく彼を昼夜問わず呼び付けたものだ。

そして、それは今も大して変わっていない。

臥牀の足下に腰を下ろしている薪塙を見やり、峨瑛は、ふっと眼を細めた。

6 出会いの刻 楽を奏でる 壱

涿州は都の遙か北西に位置する。

涿州には郡が3つ、国が5つ設けられており、五幹国はその内の一つである。

昔から、世界は郡国制を敷いている。

全土を州郡県に分かち、それぞれの長を皇帝が選任派遣するという仕組みである。

当初、州は13あり、1州の下に8つの郡が置かれ、1郡の下には10の県が設けられていた。

だが、時が流れ、王朝が乱れるに従い、新たな県が現れたり、併合されたりして、数に差が生じるようになっていった。

更に、皇族が封じられた郡は『国』とされ、これの長は『相』である。

郡の統治は郡太守が、県では県令が設けられ、これらを監視する役目として州刺史が置かれている。

州刺史は独自の軍隊を持たず、叛乱が起きても、鎮圧する力がない。

王朝末期に近づくにつれて各地で乱が起こるようになるが、打つ手がないのである。

そこで、朝廷は新に『州牧』という役職を設けた。

これは領内の民を組織して、独自の軍隊を作る権利を有していた。

乱を鎮めるために設けられたこの州牧が、やがて大きな力を得て、乱世を招いたとも言われている。

澗州互幹国は、馬の産出地として、知られている土地である。そして、それだけの土地であった。

互幹城周辺に広がった街並みは都のそれとは比べものならず、中央に通った大通り沿いこそ賑わっているが、何分、家々の間隔が広い。

どこか閑散とした雰囲気があった。

小さな城郭だ。峨瑛は馬を曳きながら、辺りを見回した。

男が家から出てきて、路を歩いてきた男に片手を上げた。

そして会話が始まるのかと思いきや、二人はすぐに己の仕事に戻ってしまった。

どうやら、軽い挨拶をしただけのようだ。

家から出てきた男は筋向かいの家に入っていく、路を歩いてきた男はまた別の男に挨拶をされながら、峨瑛の脇を通り抜け、去っていった。

この城郭では、出会す顔は皆、知った顔なのだろう。

それほどに城郭は小さい。仮にも皇族が収める土地であるのに、だ。

「お待ち下さいっ！」

不意に声が響いた。

若いというより、幼い声で、甲高く響いて聞こえた。

「早くしろ。翠恋が苦しんでいるんだぞ！」

続けて響いた声は、更に幼い。

峨瑛は振り返った。

少年が二人、駆けてくる。一人は15歳くらいだろうか。

もう一人はそれより2つか、3つ年下だろう。

言葉遣いから察するに、二人は主従関係にあり、おそらく年下の少年の方が主なのだろう。

だが、身形から見ると、それは逆転して見えた。

年下の少年の方が泥だらけで、縋れた褐衣を身に着けている。

少年達は旋風のように峨瑛のすぐ脇を駆け抜けていった。

旋風に一瞥もされなかったことで、峨瑛は妙に興味を抱いた。追って駆け出す。

そこは今にも崩れそうな厩だった。

古い。些細な風でガタガタと音を立てている。だが、この古さで尚も建っている。

よほど主柱がしっかりしているのだろう。

この地には、腕の良い建設技師がいるのかもしれない。ふと、そんなことを峨瑛は思った。

厩の入り口に人垣ができています。

何事かと、側に立つ男に問えば、馬がお産をしているのだという答えが返ってきた。

それは昨日から始まったが、その牝馬にとって初めてのお産であるため、ひどい難産だと言う。

どうやら、二人の少年は人垣の内側にいるようだった。

それにしても、と思う。

たかが、馬が仔を産むだけで、これだけの人が集まる必要があるだろうか。

思いが顔に出てしまっていたのだろう。不意に、男が振り返った。目尻の垂れた、中年の男だ。

彼は峨瑛をジロリと見やり、薄く笑った。

「あんだ、よそ者だな。あの牝馬は特別なのださ」

「ほう?」

「あの牝馬は翠恋って名で、媛さんの馬だからさ」

「媛?」

「あの方さ」

男は顎で厩の中を指した。

牝馬の尻から、枝のような脚が二本出ているのが見えた。体躯の良い男がその脚に綱を結びつけている。

綱を引いて、仔馬を引っ張り出そうというのだろう。

少年達はどこだろうか、と見渡せば、牝馬の首を懸命に撫でていた。

「どこに媛がいると?」

媛どころか、婢女も、女らしい姿など見当たらなかつた。

峨瑛が怪訝な顔を見ると、回りの男達はドツと笑い声を上げた。

男は腕を真つ直ぐに伸ばした。今度はきちんと指し示したのである。

「あちらの、一見、少年としか見えないような御方が我らの媛さん
さ」

「阿葵様だ」

「いや、もう幼名は使っちゃなんねえー」

「そうさ。天連様さ!」

その時、ドサリと何かが落ちた。

男達は息を呑んだ。それぞれに見やる。

又ル又ルとした黒いそれは、一度、ビクンと痙攣した。

「産まれた!」

少年が大声を上げた。あの、幼い方の少年である。

事もあるつか、男の指はその少年を指していた。

藁まみれ。

それだけなら、まだ良いだろう。

その少年は馬糞まみれの上、羊水を頭から被っていた。両手は母馬の血で汚れている。

この少年が媛？

本当に、少年ではなく、少女だということのか？

ふと、少年の瞳が峨瑛を映した。顔が強張る。

彼は慌てて汚れを払い落とそうとしたが、すぐに思い直して峨瑛の方に歩み寄ってきた。

汚い。

なんて、汚い餓鬼だ。

近くで見れば、衣服の汚れは壮絶なものがあつた。峨瑛は顔を顰める。

それに、ひどく臭つた。

馬糞の臭いなのだろうが、羊水やらあらゆる臭いも混ざっている。これでは、少女かどうかも疑わしい。

だが、男達が真実を言っており、本当にこの汚い餓鬼が媛だとすると、おそらく、蒼昏の娘の誰かなのだろう。

この地において、媛などと大層に呼ばれている者は他にいない。仮にも皇族に連なる娘が、こんな厩で、こんなにも汚らしくしているものなのだろうか。

可笑しさが込み上げてきた。

少年　いや、汚らしい少女は、峨瑛のすぐ側まで来ると、不快そうに眉を寄せた。

そして、言い放った。

「私は蒼潤。字は天連。蒼昏の娘だ」

なるほど、澄んだ高い声だ。少女のものだと思えば、当然だった。
峨瑛は眼を細めた。
これが蒼昏の娘、蒼潤なのか、と。

7 出会いの刻 楽を奏でる 式

蒼昏が峨瑛を歓迎して宴を開き、その席で蒼昏の娘達が楽を奏でた。

長女の蒼彰は琵琶を、次女の蒼潤は笛を、三女の蒼麗は琴を合奏した。

曲の途中、不快音が響き、峨瑛は蒼潤を見やった。

蒼彰も蒼彰も、ジロリと蒼潤を一瞥する。

すると、再び笛が外れた音を響かせた。薄く蒼潤が笑った。

峨瑛も自然と笑みを零した。

三姉妹の祖母である甄華は、大層美しい女だという。

直接見たわけではないので峨瑛は彼女を知らないが、聞くところによると、誰もがハツと息を呑む程の美女だと言う。

その祖母に似た蒼麗は、幼いながら美しい顔立ちをしていた。

身のこなしも柔らかで、色気を感じる。

育てば、かなりの美女となるだろう。

一方、蒼彰は固く、冷たい印象を持った少女だ。

賢いとの評判だが、目を伏せれば表情が消え、見つめられれば、心の奥底まで読まれそうな不安感と呼ぶ。

なるほど、確かに賢い。

少し言葉を交わせば、それはすぐに分かった。

峨瑛は笛に悪戦苦闘している蒼潤に目を向けた。

少女に見える。それも、なかなかの。

着飾れば、蒼麗ほどではないが、かなり美しいと分かり、峨瑛を驚かせた。

厩で出会った汚らしさが嘘のようであるのだ。

大きな瞳は少し潤みを帯び、華やかに結い上げられた黒髪は艶やかである。

浮いたように見える白い肌。

背丈は抱き締めた時に覆えてしまえる程で、手も脚も、躰のどの部分を見ても小柄な作りである。

蒼潤の細身の肢体を、峨瑛は細い眼で眺め続けた。

曲が終わり、三姉妹が場を下がると、蒼昏が口を開いた。
静かに言葉を吐く。

「我が娘たちはそれぞれ、智と勇、そして美に優れた娘でございます。皓燭殿はどれをお好みですかね？」
「そうですね」

峨瑛は唇の端を持ち上げるようにして、微笑んだ。

蒼昏も薄く微笑む。

「年を考えれば、彰がよろしいのでは？ 彰は15でございます。少々お待ちくださるとなれば、麗が良いでしょう。麗はまだ10ですが、あのように端麗な顔立ち。将来は、如何ほどの美女に成長することでしょう」

「では、天連殿は？」

「潤でございますか！？」

蒼昏の声が裏返った。峨瑛は眉を寄せた。

「潤はどうにも……。あれは女としての嗜みが何一つない娘でしてとてもとても嫁になど出せません」

「そうであるうか？ なかなかの笛の音でありましたが？」

「いいえ！ とんでもない！ かるうじて笛は何とかなっています。他の楽器は非道いものです。琵琶も琴も……。ああ、琴など平気で踏みつけるような娘でございます。裁縫よりも武芸を好み、絹や玉よりも馬を好む娘なのです」
「そのようですね」

峨瑛は、厩での蒼潤を思い出して、声を上げて笑った。皇族に連なる娘にも、ああいう娘がいるのだと、面白く思ったのだ。

もう一度、蒼潤に会いたい。

宴は3日続いたが、あの一度きりで、蒼潤はまったく姿を現さない。

蒼彰や蒼麗は幾度か酒を運んできた。舞いや唄を披露したりもした。

蒼潤はどうしたのかと訊けば、外に遊びに出ていると言う。

ならば、待ち伏せしてやろうと思ったが、門のところまでいくら待っても蒼潤は現れなかった。

峨瑛は不世を呼んだ。

不世は、峨瑛が使う間者だ。蒼潤の居場所を調べるように命じてある。

その不世の答えは明快だった。

蒼潤はここ数日間ずっと自室に籠もっているのだと言う。

「どづいつことだ?」

「何かを隠しているのでしょうか。亘幹国相殿は天連殿を手放したくない様子。単に可愛がっているということではなく、他に訳があるように思います」

「訳とは?」

「これは憶測でございますが、天連殿は男子なのでは?」

峨瑛は笑った。

「確かに儂も初め少年だと思ったが、着飾れば大したものだ。少女にしか見えん」

「しかし、あのような身なりをしていれば、少年にしか見えないことも事実」

あのような身なりとは、厩で会った時のなりだ。思い出して、峨瑛は眼を細めた。不世は続ける。

「命じて下されば、調べます」

「天連の性別をか?」

「はい」

「いいだろう。調べてみよ」

どうやら、蒼潤は男子であるらしい。

不確かなものだったが、その情報を不世が持ち帰ってきたのは、翌日のことだった。

その日、ついに蒼潤を捕まえて、共に狩りを楽しんだ。なるほど、確かに少女とは思えない勇ましさだった。

まるで馬と一体化しているかのように乗りこなし、己の手の如く弓を扱う。

兎を射るのに、迷いがなかった。

慣れているのだろう。馬も、弓も、生命を奪うことも。

少年だと聞けば、そうなのかもしれないと思い、少女だと聞けば、そうなのだろうと思う。

何としてでもハッキリさせたいと思った。

蒼潤を妻に。

少女であれば、問題はない。

少年であったのなら、その理由を問い、その上で妻にしよう。

峨瑛の心はすでに決していた。

あとは蒼潤の性別を確かめるだけだった。

どちらでも良い。だが、ハッキリさせたかった。

峨瑛は不世に、蒼潤の性別を確かめられる機会を作るようにと命じた。

8 出会いの刻 楽を奏でる 参

峨瑛は翌日も蒼潤と共に狩りに出た。

草むらから飛び出して来た鹿に狙いを定め、矢を放つ。

矢は大気を切り裂き、鹿の肉を貫いた。

鹿が鳴いた。鈍い音を響かせ、地に倒れる。

峨瑛は肩の力を抜いた。

鹿がビクビクと痙攣し、細い足で土を蹴っている。土埃が舞う。

鹿に向かつて真っ直ぐ伸ばしていた腕を降ろした。息を吐く。

やがて、鹿は静かになった。

「矢一本で鹿を仕留めるなんて」

蒼潤が呟いた。

昨日、蒼潤が兎を射てみせてくれた礼に、峨瑛は鹿を射たのだ。兎よりも速い鹿の動きを追うのは難しい。

それでも蒼潤にだって、命中させることくらいできるだろう。

だが、蒼潤の矢には力がない。腕力が足りないのだ。

「お見事です」

峨瑛を仰ぎ見て蒼潤が言った。峨瑛は眼を細めた。

「次は天連殿が射て見せて下さい」
「はい」

蒼潤は微笑んで、弓を握り締めた。

共の者は獲物を探して方々に散っていた。

声を出せばすぐに駆け付けてくる距離ではあるが、会話ができる距離にはいない。

峨瑛と蒼潤の二人きりだ。

しばらくして、獲物を見つけたという声が響いた。蒼潤が弓を構え直す。

耳をすませていると、不意に茂みがガサガサと揺れ動いた。

鹿か、兎か、と蒼潤は息を詰める。

不世。

峨瑛は気配を感じ、辺りに眼を光らせた。

その時だ。影が姿を露わにした。

鹿でも、兎でもない。人だ。

おそらく不世が雇った者たちだろう。

男が八人、二人の前に踊り出た。
呆気にとられた蒼潤の目に、剣先が光って見えた。
蒼潤はハッと我に返り、矢を放つ。

至近距離で放たれた矢は、男の額に突き刺さった。男は落馬した。

刺客か。

直ぐさま蒼潤は弓を投げ捨て、剣に持ち替えた。

「天連殿。ここは、わたしが。貴方は下がっていなさい」
「できません。私も」

蒼潤の性格を思えば、当然の答えだった。

そう答えると判っていた上で放った言葉だ。峨瑛は強い。ない。

異変に気が付いた共の者が駆け付けてくる。

何としてでも、その前にやっておきたいことがあった。

これは、不世が作って機会なのだ。蒼潤の性別をハッキリさせる
機会。

剣を交じらせ、相手をはね除けた。よろけたところを切り裂く。

一人を切り、素早く身を翻し、もう一人切る。

スツと剣先を滑らせるように切ると、フツと蒼潤の左肩に赤い線
が走った。

峨瑛は眼を細める。

蒼潤には気付かれていない。浅く、細い赤線だ。

八人すべてが地に伏せると、峨瑛は蒼潤に振り返った。

「無茶をなさる方だ」

剣に付いた血を払い落とす。

3人。蒼潤が殺った数だ。人も殺せるのか、と思った。

「怪我はないか？」

「ありません」

ないと言ったのだが、峨瑛は蒼潤を馬から降ろすと、確認するよ
うに上から下まで見回した。

ないはずがないのだ。自分が付けた傷があるはずだ。
腕をやや強く掴んだ。

「痛っ」

「傷が。すぐに手当を」

やはり傷は左肩にあった。

「擦り傷です」

「見せなさい」

「結構です！」

逃れようとする蒼潤を、峨瑛は許さない。

「峨瑛の力強さに蒼潤は顔を顰めた。」

「天連様！」

峨瑛は片眉を上げた。

「共の者たちが駆け付けてきたのだ。」

「……無事ですか」

甄此という蒼潤の従者が真っ先に駆け寄ってきて、蒼潤の傍らに膝を着いた。

甄此。字は？燕といい、甄華の弟の末子である。

つまり、蒼昏の従弟にあたる者だ。

年は蒼潤のわずか2つ上。そのため、蒼潤の良き遊び相手になっている。

あの日、既に見かけたもう一人の少年が、この甄此であった。

甄此の口から安堵の息が漏らされ、蒼潤もホッと表情を緩める。だが、峨瑛は声を張り上げた。

「まだ刺客が潜んでいるかもしれん。周辺を調べるのだ！」
「はっ」

峨瑛の部下は瞬時に身を翻し、散っていく。蒼潤の共も慌てたように、馬に跨る。

甄此だけが不安げに蒼潤を見つめていたが、峨瑛の眼力に負けたのだらう。身を翻した。

蹄の音が遠ざかっていく。

蒼潤が不安げな瞳を峨瑛に向けてきた。

黒い瞳が潤んでいる。そうと判ると、自然と手に力が入った。

蒼潤を掴んでいる部分が燃えるように熱い。

峨瑛は無言で蒼潤の襟に手を伸ばした。

「何を」

一瞬にして、衣類を剥ぎ取った。

蒼潤の顔が蒼白になる。

己の身にいったい何が起こっているのか、すぐには分からない様子だった。

「やっ」

逃れようと藻掻く。

蒼潤の手のひらが峨瑛の頬に当たり、小さな音を鳴らした。それでも峨瑛は己の腕の中から、その身体を逃さなかった。峨瑛の手が蒼潤の素肌に触れる。ビクリと全身が震えた。

「まだ幼いからなのか」

膨らみのない胸をなぞって、彼は呟いた。

熱い息が漏れる。

峨瑛の手は下へ、下へと伸びていった。

「あ」

思いもしない部分に触れられて、蒼潤は小さく悲鳴を上げた。峨瑛の口から息が漏れる。

「やはり」

そう言うと、峨瑛は腕から力を抜いた。

ようやく蒼潤に自由が戻り、飛び退くように峨瑛から離れていった。

胸の前を押さえ、赤らめた顔で彼を睨み上げている。

峨瑛は、フツと笑みを零した。

「やはり、男子であったか」

9 出会いの刻 楽を奏でる 肆

一気に血の気が引いた。ガクリと膝を折り、その場に尻を着いた。知られたという思いと、殺されるという思いが、瞬時に交差した。蒼潤は瞼を閉ざす。すべてを覚悟して。

不意に視界が陰った。

峨瑛が蒼潤を覗き込むようにして、地に膝を着いている。

「恐れなくて良い。わたしは貴方をどうするつもりもない」

「命、奪う気も？」

蒼潤の瞳が戸惑いの色で揺れ動く。

殺さない？ 本当に？

蒼潤は、自分の性別が人に知られれば、殺されると思っていた。そう言われ諭され、育てられたのだ。

峨瑛の声が静かに響く。

「わけも聞かまい。聞かずとも分かっている。

貴方の兄上は恙

太后に命奪われた。貴方が生まれた時、兄上の二の舞にはすまいと、女子として育てることを決められたのであろう」

違うかと問われ、違わないと蒼潤は頷いた。

まさにその通りだった。

恙太后は蒼昏の子を何よりも恐れていた。

時折、蒼昏の様子を知ろうと、人を送ってくる程だ。

恙太后は蒼昏に男子が生まれれば、その度に命を奪う気でいたのだらう。

だから、蒼潤は女子でなければならなかった。

蒼昏の娘としてでなければ、生き延びることができなかったのだ。

恙太后さえいなければ。

彼女さえこの世からいなくなれば、と蒼潤はどれほど願っただらう。

この乱世に男として生み落とされながらも、女として生きなければならぬ者の苦しみは、誰にも理解できない。

そのように生きると命じた父や祖母を恨んだりしない。

彼らは彼らなりに、蒼潤のことを想ってくれたのだから。

だが、胸の奥から湧き上がる想いを、この屈辱をどう扱えば良い？

峨瑛のような男を見ると、胸が苦しい。

同じ男なのに、と違ってしまふ。

蒼潤の髪を風が乱す。
ちっぽけな存在を嘲笑うかのように。

「貴方にどうする気もないのならば、何も言わずに互幹の地から去って欲しい。何もかも忘れ、何もかもなかったことに……」

「それはできない」

「なぜ？」

「わたしには蒼家の血が必要なのだ」

「ならば、姉か妹を娶り、早々に立ち去れ」

巖瑛は緩やかに頭を振った。大気が移動する。

彼の鋭い眼が蒼潤を貫いた。

「わたしは貴方が欲しい。貴方だ。潤」

「愚かな。私は男だ。貴方の妻にはなれない」

名を呼ばれ、その嫌悪感に、蒼潤の顔は引きつっていた。

「貴方の望みを叶えたいのだ」

「望み？ 私の望みが何であるかも知らぬくせに」

「では、それを教えて欲しい」

「知ってどうする？ 貴方に叶える力はない」

「聞かせて欲しい」

蒼潤は頭を左右に振った。

風が何かを叫びながら、駆け抜けていく。春の生暖かい風だった。息を吐き出す。胸の奥底から。

「私の望みは唯一つ。 玉座だ」

蒼潤は拳を作る。

「恙太后の世が終わったら、男として生まれ直そうと思っていた。胡帝の長子、蒼昏の子として名乗りを上げ、玉座を手に入れよう、と。 違う。奪い取るわけではない。返して貰うのだ。本来座るべき者が座るだけのこと。そうだ。あれは、本来、父が座るはずであつた椅子だ。そして、兄が座つただらう椅子。私は父と兄の無念を晴らしたい」

峨瑛は黙って蒼潤の言葉に耳を傾けていた。

「恙太后が死んだ。今が名乗りを上げる機だらうという時があつた。名乗りを上げるべきだと言う者が回りにいた。だが、同時に、機は熟していないと言う者もいた。姉上がそうだ。 姉上は賢い。姉上の言に従つて誤つたことがない。だから、私はもうしばらく時を待つことにしたんだ」

蒼潤は目を伏した。

「呈夙という男を私は知らないが、彼の行いは耳に入ってくる。

恙太后を殺害したのも呈夙だと聞いた。礎帝をも。礎帝の後、玉座に着いた者は蒼絃という者らしい。私の従弟に当たる者だ。奇しくも私と年が同じだとか」

自嘲の笑みを浮かべる。

年が同じというだけだが、蒼絃がもう一人の自分であるような気がしてならない。

蒼昏が失脚さえしなければ、今、蒼絃が手にしているすべては自分の物だった。

そのように思っている。

一つ何かが狂ってしまったただけだ。もしも、それが狂っていないかったならば、蒼絃は蒼潤だった。

「呈夙は、蒼絃の弟たちをも殺したらしい。帝位に近しい者から順に殺害したと聞く。弟たち、叔父、従兄弟……。今、都には帝位継承者はいないと聞いた。皇族は皆、地方に逃げた、と。逃げ出した皇族の中に帝位を望む者はなく、また血筋を見ても、皇帝から遠い」

蒼潤が人伝に聞いたという話は事実であり、峨瑛は頷いた。

「そこに、私が男子であると世に出れば、間違いなく皇太子として

祭り上げられることだろう。私以外に帝位継承者はいないのだから

だが、と蒼潤は続ける。己の手のひらを見下ろした。

10 出合いの刻 楽を奏でる 伍

「姉上が反対するのだ。まだ時ではない、と。私には呈夙に対抗できる力がない。軍を有していないから駄目だと、姉上は言うのだ。」

名さえ上げれば、人はいくらでも集まるものなのに。呈夙が帝位に近い皇族を殺害したのは、蒼絃の御代を保つためだ。彼の権威は蒼絃あつてのもの。皇帝の陰にいて、初めて生じる力だ。貴方は反呈夙連盟というものを結束させ、立ち向かおうとしたが、例え、それが正義だったとしても、

呈夙が皇帝を有している限り、それは反乱軍だ。呈夙の軍が国軍であり、民は彼を正義だと見るだろう。だから、人は彼に付く」

見つめていた手で何かを掴むように握り締め、今度は空を仰ぎ見る。

空はどこまでも蒼い。

「だが、もし、私が名乗りを上げ、連盟の中心になっていたとしたら？ 呈夙の政を快く思っている民は皆無だろう。皇帝になるべく人物が他にいると知れば、それを望む。しかも、私は蒼昏の子だ。父は期待を集めた皇子だった。人は私に付く。蒼絃は呈夙の暴政下で即位した偽りの皇帝だと主張し、私を帝位に着け、別王朝を建ててしまうこともできただろう」

まさに呈夙は、これを恐れたのだ。

恐れ、帝位継承者たちをことごとく葬った。

「私は生きている。帝位継承権を有して。その私が名乗りを上げれば、再び連盟を作ることができるだろう。呈夙に勝てる。青王朝を清く改めることができるのだ」

小さな間を作って、蒼潤は首を振った。

「姉上が言った。もしも、あの時、私が名を上げていたら、確かに今頃、私は玉座に座していただろう。だが、皇帝という名の傀儡となっていた、と。操り主は瓊俱だろうとも言っていた。例えば、呈夙を舞台から引きずり落とすことができたとしても、蒼絃が蒼潤に、呈夙が瓊俱に替わるだけだ、と」

澄んだ空を見つめ続けた瞳で、峨瑛を見据える。

「玉座は、己の力で得なければならぬ。他人の力に頼れば、その者の傀儡にされる。そんなこと、私は望まない」

峨瑛から目を離すことなく、握り締めた拳に更に力を込めた。

「力が欲しい。呈夙に対抗できる力が。武力が。軍が欲しい！」
「ならば、貴方に差し上げよう」

蒼潤は蛾瑛を見上げる。

瞳の奥に、何とも言い様のない強い炎が見えた気がした。

「貴方がわたしに貴方の血を下さるのなら、わたしは貴方に武力を差し上げよう」

「皓燼殿が？」

「貴方が持ち得ないものは、わたしが持っている。わたしが持ち得ないものを貴方が持っているように」

「この血が、それ程お望みか？」

「貴方が力を望む程に」

咽が鳴る。全身が震えだした。

「貴方の力には頼りたくない。貴方は私を傀儡にする」

「差し上げると申し上げている。わたしの力は貴方のものにもなるのだ。貴方に流れる血が、わたしのものとなれば」

蒼潤の作った拳に、蛾瑛の両手が添えられる。

包み込まれるように覆われ、泣きそうになった。

13の子どもの目から見て、蛾瑛は途轍もなく大きい。

少しでも気を許せば、その一瞬で呑み込まれてしまうようだ。

覆われ、押さえ付けられ、彼の内に取り込まれたら、もう二度と空は飛べない。逃れられない。

そんな気がしてならず、蒼潤の心は悲鳴を上げていた。

構わず、蛾瑛は言葉を続けた。

「わたしと貴方は比翼の鳥なのだ」
「ひよくのとり？」

比翼の鳥とは伝説上の鳥のことだ。
雌雄各一翼で、常に一体となって飛ぶ鳥なのだという。

「わたしたちは互いに翼を分け合って生きている。わたしの翼には武力が、貴方の翼には蒼家の血が。共に羽ばたかねば、この乱世の空を飛び行くことができない」

「なぜ、私を？ 貴方にとって私である必要はないはずだ。姉上でも、麗でも、私と等しい血を持っている」

「貴方が良い。わたしは貴方に互幹の外の地を見せて差し上げたいのだ。お教えしたいことも多くある」

「なぜ、私にそこまで？」

気を掛けてくれるのか、と蒼潤は揺れる瞳で彼を見つめる。

自分が哀れだからだろうか？

男でありながら、女として生きなければならない哀れな少年だろうか？

玉座を望みながらも、玉座から遠く離れた田舎で燻るしかない小さい存在だからだろうか？

巖瑛は緩やかに頭を振った。思いもしないことを口にする。

「天連という字が気に入ったのだ」

「字を？」

「天に連なる者という意味であろう？ 連なるとは、続く、並ぶ、という意味だ。天に続く者。天と並ぶ存在。それは天に一番近い存在という意味であろう。貴方がわたしの傍にいてくれれば、天に近付けるように思えるのだ。貴方がわたしのものになってくれれば、天を手に入れられる、又は、天そのものになれる気がした」

「大きいことを仰る」

蒼潤は笑った。悪くないと思った。

「皓燭殿。貴方は私を裏切らないと誓えるか？」

「貴方はわたしの片翼だ。自身の軀を傷付けたりはしない」

「私の望みは玉座だ。時が来たら、私の為、本当に軍を貸してくださいませんか？」

「差し上げる」

「貴方は玉座を望んでいないのか？ 私が玉座に着いた時、貴方はどうする？」

「その時は、天連殿の臣になろう。わたしは青王朝の玉座など望んではないのだから」

蒼潤は瞼を閉ざした。そして、ゆっくりと瞼を開いた。

峨瑛の顔を真っ直ぐに見つめる。

軀の震えは止まっていた。しっかりとした口調で言い放つ。

「貴方に、貴方が望むものを差し上げようと思う」

蒼潤は客室の前まで来ると、ピタリと足を止めた。
今、この客室は峨瑛が使用している。
気配を察したらしく、内から峨瑛の声が響いた。

「天連か？」

「そうだ。邪魔するよ」

返事を待たず蒼潤は戸を開けた。

「何か用か？」

「用なんてない」

「そうか」

短く会話を終えると、蒼潤は峨瑛の近くまで寄って、足を組んで座った。

女物の衣服を着ていながら胡座を掻いたので、峨瑛は何か物を言いたげな顔をしたが、蒼潤の頬を見て、別の言葉を言い放った。

「どうした？」

「ああ、これ？」

蒼潤は己の頬を指した。赤く腫れ上がっている。

「姉上にやられた」

「天幸殿が？」

「姉上は、俺が皓燭に嫁ぐことがお気に召さないらしい」

蒼潤は少し顔を俯かせた。

「考え直せと言われて、そういう訳にはいかないと答えたら、叩かれたんだ。思いつ切り……」

なるほど、と峨瑛は頷く。

蒼潤の赤くなった頬に触れると、柔らかな微笑みを浮かべた。

「姉君に言われたにも関わらず、貴方の決意が揺るがなかったこと、嬉しく思う」

「一度決めたことだ。すでに腹は括った。今はあんに従うよ」

蒼潤は、己の頬に触れる峨瑛の手をやんわりと押し戻した。

「あんたは俺を外に連れだしてくれるんだろ？ 亘幹国の外に。ずっと出てみたいと思っていたんだ。俺は男だから、屋敷の中に閉じ込められているのは好かない。外を駆けたい。知りたいんだ」

そうだ。知りたいのだ。

だから、この男に嫁ごうと思ったのだ。

この男に付いていく。この男が自分を外に連れだしてくれるはずだから。

間違つてはいない。そう、信じたい。

蒼潤は己よりも24歳年上の男を見上げた。

大きな男だ。体躯のことではない。その存在のことだ。これが乱世を生きる男なのだ。

男として生まれ、男として生きている姿なのだ。きつと自分も、いつか。

しゃらしゃらと、蒼潤の髪を飾る簪が揺れ、音を響かせた。

11 鳥羽ばたく刻 別れの地 壱

小さな城郭が移動するかのようだった。

峨瑛の兵が千。蒼潤の騎兵が二百と歩兵が五百。そして、数十名の女たちが長い列を作っている。

華やかな車が数台。その後ろを荷車が十数台続く。

荷は全て蒼潤の物であり、花嫁道具であった。

車を兵が囲んでいる。車を運ぶ馬は二頭で、並ぶようにして繋がれていた。

うち一台の馬車だけが四頭の馬に牽かれている。

他の物に比べて大きく、一段と華やかな車である。

そこには花嫁が乗ることになっているのだが、当の花嫁は馬車の前で立ち竦み、乗り込む気配がない。

峨瑛が眼を細めた。

「どうした？ この期に及んで、互幹の地の外へ出ることに怖じけたか？」

擲揄するように言われ、蒼潤は緩く頭を振った。 振り返る。

父、蒼昏の不安げな顔が蒼潤の眼に映った。

遠く、邸の方を見やれば、窓に影が移っている。母親のものだろ

うか。祖母かもしれない。

そうか。

蒼潤は拳を作った。これは自分だけの旅立ちではなかったのだ、と。

外を知りたいから、外へと飛び出すのではない。これは、父や母、祖母の無念を晴らすための一歩なのだ。

始まりの一步。

蒼潤は再び蒼昏に顔を向けた。

まだ中年と呼ばれる年齢だと言つのに、鬢は白く斑で、顔には深い皺が刻まれている。

目の下は窪んでおり、濃い隈を作っていた。骨と皮の躰である。都を追われてからの苦勞が見て取れた。

「父上」

蒼潤は細く小さな声を漏らす。

「もうしばらくの辛抱です。俺が必ず、皆を都にお呼びしますから」

いつか必ず、自分が玉座に座り、家族を都に呼び寄せる。

父や母、祖母に、再び皇城に戻る日を約束し、蒼潤は空を仰いだ。

空は果てしなく蒼い。

透けるようできて、深い蒼。

濃厚な色。

手が届きそうなほど近いように見えて、冷え冷えするほど遠い。

その蒼が広いほど、己が小さく思え、同時に、広さだけの可能性が小ささの中にあるように思えた。

俺は男だから。

蒼潤は馬車を見やり、思い直す。

皓燭に嫁すのは、彼を利用するためだ。このままずっと女として生きるわけではない！

女物を身に付け、女として馬車に乗るなど、できなかった。いつか玉座に着くのだ。

今、どれだけの苦汁を舐めようと、誇りだけは失いたくない。自分は、いつか必ず皇帝となる身なのだから。

「馬に乗る」

「何？」

「馬に乗りたいんだ」

馬車が女子どもの乗り物だというわけではない。

ただ、この馬車が女物。それも花嫁用の馬車であることが気に食わなかった。

第一、男が故郷を出る時に、馬車などに腰を落ちつかせて良いものだろうか。

何か固い決意を秘めて、故郷を捨てるように出て行くものだろう。

もう二度と帰って来られないかもしれない。

そう思い、目に映る限りの風景を、その目に焼き付けておくものではないだろうか。

「自分が知る世界が、如何に小さなものであつたかを、知っておきたい。亙幹の地を見納めておきたいんだ」

見上げるようにして峨瑛に言い放つと、彼は唇の端で笑い、頷いた。

「良いだろう。但し、儂の馬に乗れ」

「え？ なんで？ 一人で乗れる」

「その形でか？」

「うっ」

言われて気付くが、ヒラヒラ、ビラビラしている女物の着物では、確かに乗馬は難しい。

裾を広げて、眉を寄せる。

そうしていると、太い腕が伸びてきて、蒼潤の腹の下に廻されてしまう。

あっという間の出来事だった。

天地がグルリと回ったかと思えば、ふわりと足が空に浮いていた。

峨瑛の栗毛馬の上にいるのだと気が付くまでに、数秒を要した。

「わっ。何するんだ！」

「暴れるな。落ちる」

自らも馬上の人となると、峨瑛は笑った。

馬首と彼の間に、蒼潤の躰がある。横座りを強いられていたが、身を振り、馬を跨いだ。

峨瑛が声を張り上げた。出発の合図が鳴る。人の列はゆっくりと歩き出した。

「天連様、これを」

下から差し出してくる手があつて、見やれば、徐姥だった。

徐姥は蒼潤の乳母であり、芳詔の母親である。

芳詔は蒼潤と同じ年の乳姉弟であり、侍女でもある。

芳詔と徐姥の姓が異なるのは、女は婚姻後も姓を変えることなく、実父と同じ姓を生涯名乗り続けるからだ。

彼女は淡い色の薄絹を蒼潤に手渡すと、それで顔を隠すようにと言った。

身分ある女が、それも花嫁が下々の者たちの前で顔も隠さずに馬に乗っているなど、とんでもないことだと言うのだ。

蒼潤は渋々受け取り、頭から被った。

ついに峨瑛の栗毛馬が歩み出した。

蒼潤はハツとする。薄絹から甘い香りがしたのだ。

思い出して振り返ったが、すでに邸の窓に人影はなくなっていた。

姉上。

呟いて、薄絹を握り締める。

香りは蒼彰が常に纏っていた香と同じ匂いだった。

結局、蒼彰とは、頬を叩かれて以来、まともに話をしていなかった。

先程の人影は蒼彰だったのかもしれない。そう思うと、胸が熱い。せめて、一言、姿を見て、別れを言いたかった。

蒼潤が姉に逆らい、事を押し進めたのは、今回が初めてだった。

これまで、何でもかんでも姉に従い続けてきた。それが正しいと思っただからだ。

初めて自分自身で決断した。

誤ったかもしれない。

それでも、自身で決めたことを貫けた嬉しさがあった。

大丈夫だ。

蒼潤は握り締めた薄絹を見やり、呟いた。

きっと蒼彰ならば自分の気持ちを知ってくれる。

そして、もしも、この決断が誤りで、危機に陥ってしまったとしても、蒼潤を見捨てず、助けてくれるはずだ。

蒼潤は瞳を閉ざした。そして、二度と振り返ることはなかった。

12 鳥羽ばたく刻 別れの地 弐

長い長い人の列。

前に行く数百と、後ろに続く数百。

下を見やれば、緑が流れ、上を仰げば、蒼が溶けていた。

亙幹城が小さくなっていく。

民家の数も減り、人影もまばらになっていく。

行進する音だけが響くようになり、田が広がる地から、草原へと
移り変わった。

半日も進めば、緑さえもなくなる。

埃っぽい大地が横たわり、両脇に岩山が佇んでいる。

やがて薄暗くなってきて、日入りの頃、行進は止まった。

乾燥した土地に、白い花が咲くように、次々と天幕が張られてい
く。

蒼潤は峨瑛から離れて、その様子を馬車の中で見守っていた。

この車だけは、6畳ほどの広さがある。

簡単な床が用意され、食事も何も、蒼潤はこの中で済ました。

不自由ではあるが、天幕よりはいくらかマシだろう。

ほとんどの女たちが蒼潤のように車の中で床を確保し、地べたで
眠るのは兵ばかりである。

煌々と、かかり火が燃え上がる。

飛び散った火の粉は、生ある物のようで、パチパチと鳴いて、死んでいく。

声は天幕までは届かない。静まり返った天幕の中で、峨瑛は地図を見ていた。

そのすぐ横で薪葦が息を吐いた。指が地図の上を滑る。

「兄貴とは、斉郡に入る前　この辺りで合流できるはずだ。それで兵力は一万近くなる」

「勝てるな」

「お前が負けるわけがない」

薪葦は薪塙の弟で、峨瑛とは同じ年である。字は臥筈。

峨瑛の従兄には他に峨篤と峨峻という者たちがいて、彼ら4人を峨瑛は自分の四天王だと称していた。

4人のうち薪葦のみを亙幹国に伴い、峨篤と峨峻には、薪塢と共に齊郡への出陣準備を命じてある。

数日前、琲州霖国鄭県の実家から文が届いた。
留守を任せた楚雀からの文だった。

この時代、紙は貴重であり、竹簡や木簡などの方がまだまだ広く使用されている。

竹簡とは竹篋を薄く削り、紐で簾のように編み繋げたもの。

これを保管する際は、巻物のように丸めるといふ具合である。

竹篋ではなく、木篋を材料とすれば木簡となる。

楚雀は長く保管するような書には竹簡を使用し、戯れに物を書く時には木簡を使用していた。

彼が紙を使うのは、峨瑛宛ての文を書く時だ。

紙ならば万が一の時に始末しやすい。

文を託した者が敵の手に落ちた時、紙なら燃やすなり、呑み込むなりして、敵の目に触れさせないようにする可能性を大きくする。

文の内容は、齊郡から援軍の要請がきたというものであった。

齊郡は涑州内に位置し、今年の初めから農民叛乱が起きている。

この叛乱には宗教が絡んでいるらしく、組織された軍となっているから御し難いのである。

政治が乱れると宗教が起こる。

人は何かに縋りたいイキモノなのだろう。

政が清らかで、国が安定していれば、民はそれで満足する。

雨露を凌げる宿とその日の食べ物さえ確保できれば、とりあえず開く口はないのである。

だが、食に困れば不満とし、雨に濡れば不安になる。心が乱されれば、それを沈めようとするものだ。

そして、人は神に縋り付く。

何かを強く信じている者の力は凄まじい。恐怖さえ感じるほどの力となる。

彼らは信じるもののために、己の命さえ惜しまなかった。

命よりも大切なものを持った人の強さ。

それを知っている蛾瑛には、斉郡の叛乱がそう容易く鎮定できないものであることも判っていた。

そうなれば、近い内に援軍の要請がくるだろう。

澗州は瓊俱の支配下にある。もちろん斉郡もその内にある。

援軍を要請してきたのは斉郡の太守からであるが、これの影には瓊俱の思惑が露わになって見えていた。

要請に従うか否かには、同時に瓊俱に従う否かの意がある。

斉郡に援軍を出すことは、澗州牧の瓊俱を助けることに繋がり、人はこれを瓊俱と手を組んだのだと見るだろう。

そのまま蛾瑛は瓊俱の部将に収まるつもりなのだ、と見なされる。

人からどう思われようと構わない。

けして瓊俱の部将になるつもりはないのだから。

とりあえず瓊俱の懐に飛び込んで、喰い干切ってやるのも良いだろう。

斉郡の叛乱を鎮圧させれば、瓊俱は蛾瑛を斉郡太守に任じるだろう。

それくらい之恩賞は見込める。そして、そのまま飼い慣らすつもりなのだ。

だが、峨瑛が己の犬にはならないと知れば潰しにかかる。その策としては。

峨瑛は地図を見やり、指を滑らせた。薪葦がその指を眼で追う。

壬州。

指が辿り着いた地を見て、薪葦が零した。

壬州は澗州よりも西南に位置し、やはり叛乱が起きている。

それも齊郡とは比べものならないほどの大規模なもので、反乱軍の数は百万だと聞いている。

峨瑛の軍は1万を越えたところだ。徐々に人は集まってきているが、百万には遠く及ばない。

瓊俱はこれに自分を当てるだろう。

口で簡単に言葉を紡げばいいのだ。壬州の叛乱を鎮定しろ、と。勝てるわけがない。そうと思っているからこそ命じるのだ。

己の手に余る峨瑛に向かって。

これが瓊俱のやり方なのだ、と峨瑛は嗤った。

「齊郡のことは良い。問題は壬州だ」

「大丈夫だろ？ 何と言つても、お前は蒼家の娘を娶ったのだ。人はいくらでも集まる！」

「臥筈。お前は簡単で良いな」

「考えるのは苦手だ。だから、俺はお前に従うのさ。グダグダ考えるのは、お前に任せるよ、殿」

ニツと笑って口にする言葉は、いくらも主を敬ってはいない。
殿と呼ぶのは形ばかりだ。

「ところで、お前。この天幕で休むつもりなのか？」

「そのつもりだが……」

「馬鹿な。新婚だぞ。相手は13の餓鬼だが、嫁は嫁だ。花嫁を放つておくつもりか？ 男を疑われるぞ。昨夜だって、お前は独り寝をしたらしいではないか」

薪葦が両腕を大きく広げて、呆れたように言う。

つまり、体裁が悪いということなのだろう。

峨瑛は片手を振った。分かった、と言い、薪葦を下がらせた。

13 鳥羽ばたく刻 別れの地 参

峨瑛は蒼潤の馬車の前で足を止めた。

ここ数日で判ったことだが、蒼潤の口は悪い。

幼いころから城下を駆け回り、身分を問わず友人を作ってきたからだという。

更に、行儀も良いとは言えなかった。

ちゃんとしてると命じればするのだが、己の意志で正すことはない。女物の衣服を着ていても、平気で胡座をかく、馬を跨ぐ。

その上、真の性別を知っている相手の前では襟元を大きく崩すのである。

これで本当に皇族に連なる者かと呆れてしまう。

昼間は暖らしい姿をしていた蒼潤だが、己の車に入り、如何ほど気を緩めているのか知れない。

厩での姿までとは言わないが、乱れた姿をしているのだろうと思うと、足が進まなかった。

ふと、空を仰いだ。

黒。

そして、数々の星。

暗幕に穴が空いているかのように、光が見えた。

蒼潤の姉、蒼彰は聡明な少女である。少し話ただけでもそれは

判った。

打てば即座に響く鐘のような少女だと思う。

こちらが予期した通りの音を響かせ、的確な答を返した。

だが、その程度の女ならば、探せばいるものだ。

ところが、蒼彰はこちらが予期した音に、人には聞こえぬ音を重ねる。

鐘が自らの意志を持って鳴る。

そして、鐘を打った者が音に心奪われている間に、その者の真意を知ろうとする。

音で人を惑わし、操ろうとさえするのだ。

油断ならぬ少女だった。

彼女と話をする時、常に言い知れぬ緊張感が峨瑛を襲った。

蒼彰には判ってしまったのかもしれない。

峨瑛が蒼潤をどう思い、どう扱うつもりなのかを。

蒼潤を意のままにしようと思ったのなら、蒼彰は邪魔となるだろう。

蒼潤と蒼彰の絆は、峨瑛が思っている以上に強い。

蒼潤は姉を敬い、頼り過ぎる。

数日前、刺客を使い判ったことが二つある。

一つは蒼潤の性別だが、もう一つは彼の剣の腕であった。

蒼潤の剣には迷いが無い。人を殺したことがある剣だとすぐに判った。

恙太後の手の者は、度々蒼潤の元へ放たれるのだと聞いた。

数日前の刺客に彼が動じなかったのも、それで頷けた。

慣れているのだ。馬に乗ることも、弓を引くことも、剣で人を殺

すことも。

もしも蒼潤が娘らしく屋敷の奥で隠れるように育てていたら、恙太后が人を使うことはなかったのかも知れない。

蒼潤が外を駆け回るから、もしやと疑い、彼女は人を使うのだ。おとなしく暮らしていれば、蒼潤は平穏に生きられただろうに。

だが、そんな少年に玉座は望めない。

蒼昏を始めとする回りの者たちは、蒼潤に室内で隠れるように生きることを求めた。

だが、外を駆けるように勧めた者がいた。蒼彰だ。

今日の蒼潤に育てたのは他の誰でもない、蒼彰である。

蒼潤が少年としての心も、男としての誇りも失わずに育ったのは、蒼彰のおかげだった。

だからこそ、蒼潤の蒼彰への想いは強い。

二人の絆は固かった。

峨瑛は夜空を睨んだ。

蒼潤を懐深く取り込むためには、蒼彰から引き離す必要がある。できるだろうか？

いや、やるしかないだろう。

「誰だ！」

剣を手繰り寄せ、構える。すでに蒼潤は床にっていた。馬車の出入り口に垂らした御簾に人影が映っている。

刺客か？ こんなところまで？

だが、人影が声を発した。

「儂だ」

「皓煽？」

「そうだ。入るぞ」

御簾がゆっくりと上がる。

峨瑛は蒼潤を見て、ギョツとした表情を浮かべた。蒼潤は小首を傾げる。

「何だ？」

「そんな物を構えて、どうするつもりだ？」

「ああ、これか。刺客なら、切り捨ててやるつもりだったんだ」

蒼潤はわずかに剣を持ち上げて、笑った。

峨瑛が眼を細める。

「安心しろ。警固はしっかりとしている。寝ずの見張りも立てている」

「そうだな」

蒼潤は薄い夜着を一枚纏っているだけだった。

首の後ろに手を回し、背中を搔く。

その拍子に纏っていた夜着が剥がれ、白い肌が見えた。

大きく開かれた襟元からは、膨らみのない胸が覗け、乳首の桃色が見え隠れしていた。

片脚を立てている。うまいこと布で股間を隠しているが、太股あたりまでは丸見えである。

少年だ。

今の蒼潤は少年としか見えなかった。

峨瑛は息をついた。

「それで？」

「何の用だ？と、蒼潤は峨瑛を見上げた。

峨瑛は無言で、蒼潤のために用意された床にゴロリと横たわった。驚いたのは蒼潤だ。上から覗き込むようにして、峨瑛を見やる。

「お前、何しているんだ？」

「俺もここで休む」

「ここで？ 俺は？ それなら、俺はどこで眠るのだ？」

口の悪い蒼潤は、己のことを『俺』と言う。

少女の振りをしている時は『私』と言い、公式な場では『わたし』と言った。

眉を寄せる。

「共に寝ると？」

「冗談ではない！

自分は確かに峨瑛に嫁いだが、それは形ばかりであるはず。

どうして夜の相手までしななければならない？

第一、自分は男であるし、いくら女の振りをしているからと言って、夜の情事までも女のようにはいかないだろう。

だが、峨瑛は本気で蒼潤と共に休むつもりでいるらしい。

馬鹿な、と蒼潤は顔を青ざめた。

抱かれるのか？ 峨瑛に？

俺は男なのに、男に抱かれることになるなんて！

14 鳥羽ばたく刻 別れの地 肆

不意に、蛾瑛が嘔き出した。

ギクリとして見やると、彼は蒼潤の腕を引いて床に転がした。

「眠れ」

「え？」

蒼潤の心の内など、何もかもお見通しだとばかりに嗤う。

「安心しろ。何もせん。さすがの儂も、その薄っぺらい胸を前にすれば、萎える」

「なえる……？」

蒼潤は、己の胸に手をやった。

膨らみのない真っ平らな胸を自身の手で撫でると、何やら笑みが湧いた。

「だよなー。男相手にどうこうするわけないよな。こんな胸触っても、何とも感じないだろうしさ」

バカらしい。

ホッと真っ平らな胸を撫で下ろし、息を吐き出す。
だが、すぐに蛾瑛が言葉を放った。

「男相手でも、できんことはないぞ」

「へ？」

「教えてやるうか？」

ギリリと光った男の眼に、ざあーっと血の気が引いた。
蒼潤は首を引き千切る勢いで、ブルブルと振る。

「いらねえ！」

峨瑛が笑う。

「そうだな、止めておけ。お前はまだ幼い。どうしてもと言つのなら、あと1、2年は待て。今、試しても、苦痛なだけだ」

「苦痛？ 苦しいのか？」

「尻の穴にモノを突っ込むからな。慣れんと痛い」

「尻の穴！？ ナニを突っ込むって！？」

しばらく沈黙して、蒼潤は大声を上げた。

「無理だろう、それ！ ぜってえー入らねえって！ 無理、無理。あり得ない！」

「だあって、アレってこのくらいの大きさはあるだろ？ お前のはどうだか知らないけど……。」

「尻の穴って言ったら、こんぐらいじゃないか。これ、どうやって入れるんだよ？」

親指と人差し指を使って穴を作り、その穴に拳を通そうとする。手で作った穴は固く閉ざされ、どうあっても拳を通す気配はない。

峨瑛は笑った。

蒼潤の手を取り、彼が作った穴の縁を指先でなぞった。

「こうして、さすつたりするのだ。舐めても良い」

「尻の穴を舐めるのか！？ 舐めるって、舌で？」

「解れてきたら、指を入れる。少しずつ本数を増やして」

言いながら、峨瑛は指の頭を穴に差し入れた。

確かに手から力が抜け、穴が広がったように思う。

だが、相変わらず穴は小さい。とても拳が入るとは思えなかった。

怪訝な顔をしている蒼潤に、峨瑛は眼を細めた。

「口で言っても分からんのなら、実際に躰で試してみるか？」

「いい。俺には無理そうだ」

蒼潤は肩を竦めた。

床の上を膝で歩き、峨瑛とは反対の向つきに寝転ぶ。互いに足を向けて寝ている状態である。

甄此とは、よくこうして同じ牀で共に寝ている。

瞼を閉ざして、しばらく、不意に峨瑛が口をいた。

「明日、斉郡に入る」

「さいぐん？」

「斉郡城に寄る。鄭県に着くのはいつになるか、分からん」

鄭県は瑯州霖国の内にある。

峨瑛の故郷であり、父、峨威の邸宅がそこに在った。

この時点では、まだ決まった土地に屋敷を持たない峨瑛は、父の邸宅に身を寄せているのである。

蒼潤もしばらくの間、そこで暮らすよう言われていた。

一方、斉郡は涿州の内にある。

涿州と瑯州の間に挟まれるように併州があり、斉郡は涿州と併州の境近くにある郡だ。

「なぜだ？ 斉郡なんか寄って、どうするつもりだ？ 何かあるのか？」

上体を起こし、彼を見やる。彼は瞼を閉ざしていた。片手を振る。

「行けば分かることだ。明日も早い。寝ろ」

そう言うのと、それっきり口も閉ざしてしまった。

一行が斉郡に踏み入れる前に、玳州から来た峨瑛の兵が合流した。

率いてきたのは峨瑛の従兄であり、右腕でもある薪塢という將軍だった。

薪塢。字を汐銚。

強面だが、多くの部下に慕われている人物である。　峨瑛からの信頼も厚い。

斉郡に入ったのは夕刻。

太守から使わされたという迎えの者が、千の兵を連れて現れた。峨瑛の兵が千で、蒼潤の兵が七百。薪塢が連れてきた兵が八千。そして、迎えの兵が千。

一万を超える人の群れを、蒼潤は初めて目に映した。

四方どこを見ても、人、人、人。

大地を埋め尽くす勢いだ。熱気に溢れ、空気が薄くなったように

思う。

これだけの人数である。

敵の目から隠れようがないものだが、そこを隠れるように、齊郡には夜更けを過ぎてから進軍した。

そうして齊郡城に到着したのは、東の空が明るくなり始めた頃だった。

齊郡城で一息付いて初めて蒼潤は、この地で叛乱が起きていることを知った。

峨瑛に問い詰めようと、自分に与えられた室の出入り戸に手を触れさせて、ようやく閉じ込められていることを知る。

顔が青ざめた。信じられなかったのだ。

監禁されているとは思えないほどの見事な室だった。

室は幾つかに区切られており、奥の方が寝室となっている。

寝室の更に奥にもう一部屋あって、そこだけでも二十畳くらいの広さがあった。

眺めも良く、装飾品も高価な物ばかりだ。

だからこそ、気が付くのに時間を有したのだ。

峨瑛はすでに出陣した後で、齊郡城には影も形もなく、問い詰めようがなかった。

半月という月日が流れた。

どうやら、峨瑛が齊郡の叛乱を鎮定したらしい。

たった半月で……との声が高い。

このことは、彼が世に名を知らしめた出来事となった。

人々は囁く。

蒼昏の娘を妻に迎えた峨瑛が力を付けているらしい、と。

此度の戦で、齊郡太守は反乱軍に討たれてしまった。

そうして空になった齊郡太守の席を、瓊俱の任命で峨瑛が引き継ぐこととなった。

葵暦192年。峨瑛の兵は、1万5千を超えようとしていた。

15 光差す刻 衣脱ぎ捨てる 壱

鳥。

どこに潜んでいたのか、不意に姿を現し、青く澄んだ空へと駆け上っていく。

蒼潤は予感して、振り向いた。

「お前か」

「はい」

少し前ならば、見慣れない侍女だと思って終わりにしていただろう。

だが、いい加減慣れたものだ。この者が姿を現す時が何となく分かってきた。

「何だ？ おもしろいことでも起きたか？」

「皓燼様は壬州の乱の鎮定を命じられました」

「じんしゅう？」

「壬州では今、大規模な乱が起きています。100万をも越える反乱軍だとか」

ああ、と蒼潤は息を漏らす。

そういえば、少し前にも同じことをこの口から聞いていた。

「皓煽様の兵は、1万と5千」

「勝てるのか？」

「勝てねば、天連様もお終いです」

「ならば、勝たせるしかない」

「はい」

峨瑛が齊郡の太守となり、蒼潤は居室を齊郡城の中に与えられた。代々の太守正妻のために造られた屋だけあって、華やかな装飾品で溢れている。

窓からの眺めもそれなりに良く、中庭に広がる池には、大きな蓮の花が咲いていた。

秩序的に茂った草木。木々の向こうの方に、隠れるように塀が見える。

この部屋に移されてから、十ばかりの日数が過ぎ去っていた。

「そろそろ動き出したいものだ」

「天連様の兵は？燕様が毎日訓練させておられます。いつでも役に立ちましょう」

「そうか。？燕が」

甄此。字は？燕。

親戚筋にあたる少年で、蒼潤にとって幼馴染みのような存在である。

彼がついて来てくれて良かった、と蒼潤は人知れず笑みを浮かべた。

「問題は、皓煽様が何と仰せになるか」

「何か言っただろうか？」

「当然でございましょう。今や蒼潤様は、峨瑛皓燭の御正室。己の妻が人前に出て、物を言わぬ夫などおりません」

「だが、俺は男だぞ？」

「世間体には女君であられる」

「……」

蒼潤は舌打ちをすると、親指の爪に前歯をあてた。

数度、音を立ててぶつけてから、息を吐く。大きな動作で肩を竦めた。

「何とかする」

「さようですか。それから、一つ気になることが」

「何だ？」

「併州です」

「へいしゅつ？」

併州は涿州の南、瑋州の北に位置し、その二つの州に挟まれるように在る。

「現在、併州の刺史に力なく、牧は不在のため、太守たちに分割されている状況です。その内の一人、赴郡太守の動きに怪しげなどころがあるように思えます」

「ふぐん？」

名を聞くと、貞紘と答が返ってくる。

「赴郡は齊郡に近い」

「近いから？」

「皓燭様が壬州に向かわれる際、留守となった齊郡に攻め入るのではないか、と」

蒼潤は眉を寄せた。

「皓燭様は貞紘に文を送られた様子。壬州鎮定に協力を求める文です。壬州は併州の西北に位置し、赴郡は涿州にも壬州にも接する郡。壬州の乱を早めに抑えておかなければ、赴郡にまで飛び火することになるだろう……との文面でした」

「だから協力しろと？ まるで脅迫だな。だが、それで話がまとまっているのなら、問題ないのではないか？ 貞紘が皓燭に協力して壬州に向かって兵を挙げるといふのなら、齊郡に兵を向ける余力はないだろう」

「だと良いのですが」

不意に、芳詔の声が響く。

「天連様？」

声の方に振り向き、ハツとして再び顔を向ければ、すでに姿は消えていた。

雫石。 蒼潤が使う間者である。

蒼潤が6つの時に出会い、それ以後、ずっと仕えてくれている者だ。

本当の名前は知らない。年齢も。性別すら分からなかった。毎度、まるで異なった姿を現す。

今回は年若い女の姿をしていたが、先日は老人となって現れた。声音されも変えられるらしく、幾度も別人なのではないかと疑ったものだ。

すぐに芳詔がやって来て、首を傾げた。

「お一人ですか？ 話し声が聞こえたようでしたが」

「誰もいない。見た通りだ」

「……そうですか」

少しの間、芳詔は腑に落ちないという顔を見せていたが、次の瞬間には甲高い声を上げた。

「天連様。何とも情けないことが起こりました！ ああ、なんてお可愛そうな方でしょう！」

「は？」

芳詔は蒼潤を前にして、すくりと立ち上がり、遠くの方を見つめた。

「人伝に聞いた話です。お気を確かにお持ち下さいね。皓煽様がこの城に女を連れ込んだらしいのです」

「女？」

「ここ数日、めっきり訪れに思われなかつたかと思つていましたら、妾なんかをお困いなさつて」

なんだ、と蒼潤は嗤つた。

「妾の一人二人、十人二十人……。騒ぐことじゃないだろ？ 皓煽だつて、溜まるもんは溜まるんだ」

はははっ、と声を上げて笑えば、芳詔の眉が歪んだ。

「ですけどっ！」

「鄭県には片手の指では数え切れない数の側室がいて聞いている。妾ならば、その三倍はいるだろう」

「そんな。……天連様はそれで良いんですか？」

蒼潤は鼻で嗤つた。

「良いも悪いも、皓煽の性生活なんか、俺には関係ない。アイツの好きにすればいいのさ」

第一、男である自分に皓燭を縛り付けておく術はない。

もつとも、そのつもりもなかったが。

彼は自分を玉座に導いてくれる存在であって、それ以上でもそれ以下の存在でもないのだ。

夫の振りをしているだけ。妻の真似事をしているだけ。

蒼潤は彼の力を欲して、彼の手を取った。

彼は蒼潤の血を欲して、蒼潤に手を差し伸べた。

それ以上のものを求めるべきではない。彼も。自分も。

だが……と蒼潤はほくそ笑んだ。

「女を抱く暇が出てきたのか。なら、当然、俺の話を書く時間もあ
るはずだな」

すくつと立ち上がり、肩に引っ掛けるように着ていた上着を脱ぎ
捨てた。

「春蘭、着替えを。皓燭と話をしてくる」

16 光差す刻 衣脱ぎ捨てる 弐

久し振りの男装だった。

峨瑛に嫁いでは、初めてだ。

中庭に接した回廊を軽い足取りで歩いていく。

蒼潤に与えられた房室は、城の中でも最奥に位置している。

正室の居室の回りを囲うように側室の居室があつて、太守の居室は渡り廊下近くにある。

渡り廊下を通れば、政務室などが並ぶ場所に出る。

皓煽はそちらの方にいるだろうか？

まだ昼間だ。そこで仕事をしているかもしれない。

中央の役人は、午前中に朝議があり、午後は各々の役所で政務を行うことになっている。

地方役人の一日も似たようなものだ。午前は評議、午後は雑務。

勤勉な役人は皆無と言って良く、仕事は夕刻には打ち切られるのが常だった。

だが、まだ日は高い。

竹簡に囲まれている峨瑛の姿を思い浮かべ、蒼潤は渡り廊下に足を向けた。

ガタン、と背後で音が響いた。即座に振り返る。

戸が開き、甘い香りが漂ってきた。

ムツとするような、咽にへばり付いてくるような臭いだ。息苦しい。

「皓燭、お前……」

不快そうに顔を歪めると、彼は驚きの色を顔に浮かべる。

「なぜ、ここにいる？」

「あんたに話があるんだよ」

「話？　　なら、室に入れ」

「無理。あんたの房室、女臭い」

即答してやると、峨瑛は嗤った。

わざと戸を大きく開き、奥にいる裸体の女を蒼潤に見せる。

一人、二人……四人の姿が確認できた。もう一人くらいいるのか
もしれない。

「一人、お前にやろう」

「いらねえよ」

「儂のお下がりには不満か？　　なら、探させよう。好みを言え」

「だから、いらねえって。　　それより、俺の話を」

「分かった。あちらで聞こう」

渡り廊下の先を指す。政務室の方だ。蒼潤は頷いた。

女の香が着物にまで移っているらしく、峨瑛自身からも匂いが漂
ってくる。

蒼潤は顔を顰めて、数歩遅れて彼を追った。

蒼潤は香というものが好きではない。特に女の香は駄目だった。

入浴の習慣がない時代、香を炊くことは、人と接する上の礼儀であつた。

躰は汚れない限り洗われぬ。室内から出ることのない女性が汚れることは稀であり、入浴回数は少ない。

そこで使用されるのが香だ。

香は主に体臭を消すため、衣類などに染み入るよう炊かれる。

ところが、蒼潤は亘幹国にいる頃、毎日のように出歩き、

その都度泥だらけになるため、毎日のように躰を洗わなければならなかつた。

もちろん、毎日湯船に浸かるわけではないが、濡れた布で拭くくらしいのことはやっていた。

そのため、気にするほどの体臭があるわけがなく、それを隠すための香など不要だったのである。

峨瑛に嫁ぐにあたり、蒼潤の姥たちが香を使うよう薦めてきた。

それからだ。蒼潤が香を使うようになったのは。

徐姥と芳姥が練り合わせたという香で、春風のような香りである。

蒼潤の姥は4人。徐姥と芳姥、玖姥と呂姥である。

徐姥は蒼潤の乳姉弟である芳詔の母で、芳姥は芳詔の叔母だ。

峨瑛の四天王が、薪塙、薪葦、峨篤、峨峻の4将軍だということに対して、

蒼潤が冗談で自分の四天王は、徐姥、芳姥、玖姥、呂姥だと言つた程に、

彼女たちの発言力は大きいものがある。
更に冗談で、四天王同士で戦わせたらどうなるのかと言えば、
峨瑛は笑って、己の四天王は勝てないだろうと答えたという。

峨瑛が政務室の戸を開いた。

内を見やると、静かなのは空間の下 床には、竹簡や墨のつい

た筆が散乱していた。

足の踏み場もない。

戸を開いた姿勢で固まり、峨瑛が低い声を響かせた。

「檣抄を呼ぼう。片付けさせる」

下手に触ると分からなくなってしまうのだと付け加え、人を呼ぶ。

すぐに端正な顔が二人の前に現れた。

線の細い身体。色の白い青年で、性別を感じさせない雰囲気を持つている。

楚雀。字は檣抄。

峨瑛の筆頭軍師である。

しばらく鄭皇城の留守を任せていたが、斉郡を鎮定した後、呼び寄せてあった。

民政に関しては、彼無しでは立ち行かないところが多いからだ。

「何か？」

「房室を使いたい。片付けてくれ」

「殿が散らかしたのですよ」

「頼む」

仕方ないですね、と薄く微笑み、近くに落ちている竹簡から手を伸ばした。

慣れているのだろう。

あつと言う間に、室内が片付いてくる。

歩ける程になると、峨瑛は楚雀の脇を通り抜け、腰掛けに座った。

彼が手を招くので、蒼潤も彼と向き合う形で腰を下ろす。

「それで？」

話を促す峨瑛に蒼潤は唇を開きかけるが、すぐに固く結んだ。

房室の隅では、まだ楚雀が動いている。

いくら峨瑛の信頼が厚い軍師だとしても、できる限り、人には聞かれたく話だった。

言い難そうにしていると、楚雀が涼しげな声を発した。

「ところで、殿。その方は？ わたしの見覚えのない方ですね」

「ああ。こいつは蒼天連」

「蒼？ 蒼夫人の身内の方ですか？」

「……」
「……」

しばしの沈黙後、なるほど、と息を呑む。

峨瑛が蒼昏の娘を妻にしたということは誰もが知るところとなつたが、蒼昏の娘の名前を知るものは少ない。

まして、字など知りようがないのだ。

正室となつた女が、このような場所にウロウロしているはずもなく、こんなところに蒼昏の娘がいるはずない。

その上、今の蒼潤は男装をしており、どこからどう見ても少年である。

まさか峨瑛の正妻　蒼夫人本人だとは、誰も思わないだろう。面白い、と峨瑛は思った。彼は頬を緩める。

「そつだ。遠い親戚らしい」

「遠い？　遠くとも蒼の姓を名乗っているのなら、皇族にも連なる方ですよね？」

皇族に連なる者ならば、不確かな生まれの者ではないだろうと、詳しい説明を求める眼を向ける。

峨瑛は視線を泳がせた。それだけですぐに何かを察した楚雀は、細い眉を吊り上げた。

「正直に仰ってください。わたしに隠し事をしても為になりません

よ

「……」

峨瑛は、適わない、と両手を上げた。

「天連、名乗ってやれ」

言われるままに蒼潤は楚雀に向かって拳を作り、もう一方の手でそれを覆うように、手を合わせた。

「蒼昏の子、蒼潤。天連とお呼び下さい」

「わたしは楚雀。槓抄と……」

同じように礼を返した端正な顔が、不意に曇る。

「……そうこん？ 蒼昏の子と仰いましたか？ すると」

さあーっ、と血の気が引き、青くなった。

「蒼夫人」

信じられない。

いや、そんなはずはない、と彼は峨瑛と蒼潤の間で眼を行き来させる。

「ど、どうして、ここに蒼夫人が？ いや、それよりも、主君の細君を拝顔してしまったわたしは、処断されるのでしょうか？ その前に、殿は女性に男装させる趣味がおりだったのですか？ 存じ上げませんでした……」

「落ち着け。そんな趣味もなければ、お前を処断するつもりもない」
「では。なぜ、このような場所に、夫人が男装して、いらっしゃるのですか？」

「それは、天連に聞こう。天連、なぜだ？」

慌てふためいた顔と、峨瑛の飄々とした顔が同時に蒼潤に向けられる。

蒼潤は一瞬怯んだ後に、静かに口を開いた。

17 光差す刻 衣脱ぎ捨てる 参

一言だった。ごく短い。

峨瑛は、蒼潤が話を終えるか否かで、即答した。

「駄目だ」

「なぜ！」

ため息が漏らされる。

ジロリ、と眼を向けられて、蒼潤は唾を飲み込んだ。

「今、お前に死なれたら、元も子もない」

「俺は死なない！」

腕には自信があつた。剣も、弓も。馬だつて。

蒼潤が拳を握り締めて、身を乗り出すと、峨瑛は片手を振った。分かつている、と。

「だが、お前はまだ13だ。初陣には早すぎる」

「いいんだよ、早くて！俺にはそれで調度良いんだ！」

ダンツ、と床を拳で叩き、立ち上がる。

睨むように、峨瑛を見下ろした。

「俺は11の時に、字を貰った。初陣だって、人より早くとも構わないだろ！」

男子の場合、字は成人したと認められ、加冠の儀を済ませると貰えることになっている。

つまり、それをすでに持っていると言った蒼潤は、成人しているということになる。

だが、一般男子が加冠の儀を行うのは、20歳になってからである。

それを13とは、ずいぶんと早い。

皇族や王侯は例外的に早いとも聞く。早く成人する理由が、それなりにあるからだ。

蒼潤にもその理由があり、回りの者たちから追い立てられるように成人した。

葵暦190年。瓊俱を盟主とする反呈夙連盟が結束された時である。

蒼潤はその場に駆け付け、名乗りを上げるつもりだった。そのため、早くに成人したのだ。

子どもでは相手にされない。対等には扱って貰えないと思ったからである。

もっとも、蒼彰の言に従い、名乗りを上げることはなかったのだが。

「あの時に名乗りを上げていたら、俺は11で初陣するはずだった」

「馬鹿な」

峨瑛は頭を横に振った。

「何度も言うようだが、お前が死んだら元も子もない。瓊俱は、旗印となったであろうお前を戦場に放る程、愚者ではない。おそらく、お前は嚴重に守り固められた籠の中で、己の意志では指一本さえも動かせずに、見ていることしかできなかっただろう」

「今だって、同じだ。なんら変わらない！お前だって、瓊俱と同じではないか」

「何？」

「俺はここ一月、屋敷の外に一步も出ていない。馬にだって乗っていないんだ。剣を振るうことも、弓を引くこともなく、毎日毎日、部屋に籠もって過ごしてきた。もう限界なんだ」

ジロリ、と峨瑛の眼が蒼潤を見上げる。

よりもよつて瓊俱と自分を同一視されたことに、怒りを含ませている。

蒼潤が何か言う度に、峨瑛の顔が赤く染まっていく。

「あんたは俺に教えてくれるって言った。それなのに、先の戦にだって、あんた一人で行ってしまっし。王州にだって、俺を置いていくつもりなんだろう？俺はまだ、あんたに何も教わっちゃいないんだ。それに、俺は俺の手で玉座を掴みたい！ちゃんと戦って！

誰かに守られ、担がれて、用意された玉座なんていらない！

俺にとつて、安全で、不自由のない屋敷なんてもんは、いくら豪華

絢爛としていても、それは牢獄だ。ちっとも嬉しくない！苦しいだけだ」

こんななんだつたら、お前のもとになんか嫁ぐのではなかった。

そう言いかけた時、峨瑛がスクツと立ち上がった。

目線が逆転し、今度は彼が蒼潤を見下ろすようになる。

全面に怒気が滲み出、未だかつて記憶にない恐ろしい形相だった。

言いかけた言葉を呑み込んで、蒼潤は立ち尽くす。

「もしも、お前が戦場で命を落としたり、僕はどうなる？ 今、峨焔の元に人が集まってきているのは、潤、お前を峨焔が妻にしているからだ」

峨瑛の声は、表情に反して静かなものだった。

だが、名を呼ばれ、蒼潤は不快そうに眉を寄せる。すぐに答えを返した。

「蒼潤が焔の妻になったという事実は、すでに皆の知るところとなっている。そして、蒼潤は焔の妻であり続けるだろう。」

もしも、俺が戦場で死んでも、それは一人の少年が死んだに過ぎない。今はまだ名もない少年の死であって、蒼潤の死ではない。なぜなら、焔の妻が戦場にいるはずがないからだ」

「つまり」

不意に、それまで黙っていた楚雀が口を開いた。

「仮に、貴方が亡くなっても、その死を伏して、蒼夫人は生き続けていることにしろ、と?」

「そうだ。それなら、皓燭に損はないはずだ」

波のない湖のように控えていた彼に振り返り、言い放つと、彼は表情の読めない顔のまま頷いた。

「確かに殿の損害はない。それどころか、蒼夫人が連れてこられた互幹国の兵を動かせるようになりますね。彼らは蒼夫人の兵であることを誇りとし、けして殿の命には従わない、手駒にはならない、と頑なですから。あのままでは、彼らを養うだけの兵糧を浪費するだけ。戦では兵糧の確保も戦術のうちです。それも、極めて重要な無駄に使うことなど、絶対にできないのです」

戦わない兵に食わせる物はない、と言い切って、楚雀は柔らかく微笑んだ。

「今度の敵は100万。殿、今は一人でも多くの兵が必要な時ではないのですか?」

長い沈黙が流れた。

重たくのし掛かってくる空気。息が詰まりそうだ。

「潤」

低い声だった。

見上げるが、顔に影が落ち、表情は分からない。

だが、先程までの怒りは未だに収まっていないように感じられた。思わず、身を引く。

その一瞬後、己の判断が正しかったことを知る。

自分の方へ伸ばされていく手に、逃れる術なく、捕らえられた。襟元を掴み上げられ、足が空を蹴る。

「くっ」

咽を締め付けられ、苦しい息が漏れた。

彼と視線を同じにする程、高く持ち上げられる。

細めた目で見やれば、怒りで上気した彼の顔が、ごく近くで確認できた。

きつく食いしばった歯の奥で、舌打ちをする。

ドスン、と鈍い音を響かせ、小さな躰を床に叩き落とすと、苦々しく言葉を吐き出した。

「そんなに死にたくば、死んでしまえ！戦場で、朽ちれば良からう！」

ドスドス、と床を踏みならし、けたたましく戸を開く。
遠くで控えていた者が、何事かと駆け寄ってくる。
それを認め、大声を張り上げた。

「汐銚！汐銚を呼べ。すぐにだ！」

ガツガツと、戸に爪をあてる音が響いた。

倒れた蒼潤に手を差し出したのは楚雀で、彼は囁くように静かな
声を発した。

「今までの話から察するに、蒼夫人は 貴方は男子のですか？」

127

誤っていたら申し訳ございません、と先に頭を下げておきながら、
口調には確認の色が強く込められているようだった。

蒼潤は頷いた。

背が痛かった。床に打ち付けてしまったらしい。

ヒリヒリと痛むと思い、見やれば、肘をすりむいていた。薄く朱
が滲んでいる。

分かりました、と楚雀が言った。

何が？とは思ったが、聞き返すようなことはしなかった。

涼しげな顔は一人で納得してしまい、蒼潤に聞き返せるような雰
囲気など与えてくれなかったのだ。

ガリガリと、戸枠の木を削る音が響く。

見やれば、峨瑛が爪を立てていた。

蒼潤は黙ってそれを聞き、彼の背を見上げるように、見つめていた。

18 光差す刻 衣脱ぎ捨てる 肆

薪塙。字を汐銚。

峨瑛の従兄であり、右腕とも称される將軍である。

峨瑛の祖父、峨旦は、宦官である。

そのため、親戚筋に当たる薪家から養子を取った。峨瑛の父、峨威だ。

その峨威には兄がいて、その兄の息子が薪塙となる。

この5つ年上の従弟を、峨瑛は誰よりも深く信賴していた。

幼い頃は、実の兄のように慕っていたものだ。劍も、矢も、初めは彼から習った。

薪塙の方も峨瑛を実の弟達以上に可愛がり、彼の成長を誰よりも楽しみに見守っていた。

そして、峨瑛の成人後、彼の前で膝を折って見せたのである。

幼い頃から峨瑛の器を知り、その力を知り、見つめる物の大きさを知っていた薪塙だ。

自分の命や将来、すべてを彼に委ねようと、ずっと心に決めていたのである。

午前評議の後は、新兵たちを率いて城外に出、鍛錬をするのが、この頃の薪塙の日課となっていた。

この日も、斉郡城から数里離れた平地で兵達に指示を与えていた。

そこから、わずかなところにも兵の姿が確認でき、そこでは彼の副将が古兵を訓練させている。

人は元来、怠けものなのである。

どこかで律しなれば、楽な道へ、楽な道へ、と自ら選び、墮ちていくものだ。

そして、躰はすぐに衰える。常に鍛え続けなければ、すぐに鈍ってしまうものなのだ。

これが薪塙の持論であり、それに従って、彼は平時の時でも部下たちの訓練を怠らなかつた。

加えて、今は戦を目前に控えている時期だ。

古兵はもちろんのこと、新兵も、少しでも使い物になるように、気を込めた訓練を繰り返しているのである。

峨瑛が呼んでいるとの知らせを受けたのは、そんな時だった。

日はまだ高い。

ほんのわずかに、西方に傾いている程度だ。

薪塙は新兵達に休みを与えると、馬に跨った。

知らせた者の話では、峨瑛の様子がただ事ではなかつたようなのである。

とにかく急いで欲しい、と必死の形相で、薪塙に訴えていた。

齊郡城に戻ると、息を付く間もなく、即座に峨瑛の元へ駆け付ける。

いかにも不機嫌そうな顔に、薪塙は、グツと息を詰まらせた。低く咽を唸らせる。

「不幸を招きそうな顔をしているぞ。皓燭」

「……この顔は生まれつきだ」

揶揄して言えば、少し和らいだようである。

フツと笑みを零して、峨瑛は薪塙を部屋の中へと招き入れた。部屋の中に人影が二つ。

薪塙は、誰かいたのか、と躊躇する。

だが、すぐに、そのうちの一人が楚雀であると分かり、部屋の中に足を踏み入れた。

もう一人の少年は誰だろうか。見覚えのない顔だった。

それで？と床に腰を降ろしながら、峨瑛に向き直ると、彼は気怠そうに腕を伸ばした。

少年を指差す。

「こいつをお前の下に置く」

「この者は？」

「蒼昂だ」

「天連とお呼び下さい」

鈴の音のような、高い声だった。
少女のように甲高いが、耳障りではない。

12、13くらいだろうか。このくらいの年齢であれば、当然、
声変わりにはしていない。

格別、驚くこともなかった。

問題は、今にも折れそうな細い躰が礼をした後に、気付いたこと
だった。

「姓は蒼と言ったか？ 蒼夫人の身内の者か？」

「……そうだ」

「それで、この少年をどうしろと？」

「お前の配下に置けと言ったのだ」

「使えるのか？」

怪訝そうな響きに、峨瑛は苦笑を漏らした。

「本人曰く、剣も弓も、馬も、得意だそうだ」

「ほおー」

薪塙は目を細めて、低く長い息を吐き出す。少年をまじまじと見
つめた。

少年 蒼昂は、その値定めるような視線にジッと耐えていた。

蒼昂とは、蒼潤のことである。

この時代、女子の名はよほどのことがない限り、世間の耳には入

ってこないものである。

だが、蒼潤は皇族である。蒼昏の娘だ。

潤の名を知っている者があるかもしれない。

そこで偽名を使うことになった。名を決めたのは、峨瑛である。

峨瑛が薪塙を呼び付けたのは、彼を一番信頼しているからである。

勝手にしろ、と言ったものの、言葉通りに戦場に放り出すわけにはいかなかった。

まして、峨瑛軍の兵の一人となるのであれば、勝手な行動を取らせるわけにはいかない。

軍に加わるからには、軍に従って貰う必要があった。

軍の掌握は薪塙に任せていた。

薪塙の下に数人の将軍がいるが、彼らに蒼潤を任せる気はなかった。

頼むとなれば薪塙、唯一人だろう。

「蒼昂には、互幹から連れてきた兵を率いて貰う」

「騎兵二百、歩兵五百か？」

「そうだ」

「ついに、あの兵達を使うことになるのか」

「使えるものは、全て使う」

「……わかった」

深く頷き、ようやく薪塙は蒼潤から目を逸らした。

ゆっくりと腰を上げる。峨瑛を見、再び蒼潤を見やった。

「これからすぐに訓練に出られるか？」

「今日から加わっても良いのか？」

「いい。だが、まずは口の利き方を覚えて貰う必要があるかもしれないがな」

「すぐに支度をする！」

ダン、と床を叩くように手を着き、立ち上がると、蒼潤は薪塙の横を通り、戸を乱暴に押し開いた。

バタバタと廊下を駆けていく。薪塙は眉間に皺を作った。

「あの坊主、年はいくつだ？」

「13と聞いている」

「まだ幼い」

「本人は大人だと言っている」

「だがな、皓爛」

「使えるものは使っしかない。それが、現状だ」

敵は百万なのだ、と峨瑛は続ける。

それで薪塙は言葉を無くした。

蒼昂の腕は、さすがに自身で言うほどのものがあつた。薪塙は蒼昂と剣を交わらせながら、舌を巻く。

何と言つても、動きが速いのだ。躰が軽いからだろう。

その小さい躰が消えたと感じる時もある。

亙幹国から連れてきた兵を率いさせてみたが、これも見事に動かした。

訓練中の新兵を薪塙が率いて戦わせれば、蒼昂はこれを軽く撃ち払つた程だ。

千や二千の兵ならば自在に動かせるようだ。

だが、それ以上は無理だろうと、薪塙は見た。

将の器ではない、と。

将の器の有無を言えば、蒼昂の副将を務めている甄此の方が有ると言える。

陣の組み方にも唸らせるものがあり、時を見定めることもできるようだ。

負けそうだと思えば、直ぐさま引き、別の角度から再び攻め入る。また、その動きは、薪塙すら苦戦する程、執拗だった。

蒼昂は将の器ではない。

もしや帝王の器なのではないかと思つたのは、訓練を終えて、斉郡城の峨瑛の居室に寄つた時だった。

峨瑛は女に頭を揉ませていた。

彼は薪塙の姿を認めると、片手を振って、女を下がらせた。

「どうだ？」

「蒼昂のことか？」

「ああ。あれは使えるか？」

「予想以上に」

「そうか」

久しく峨瑛とは剣を交わらせていないが、あの剣は峨瑛と似ている。

ふと、蒼潤の剣を思い出して、そんなことを思った。

あれは、まだ幼かった峨瑛と似ている。

迷いのない剣。

己の力を十分に知っており、それを最大限に利用した動きをする。強いが、弱いかと言えば、けして強くはない。

だが、けして負けはしない。屈する事のない何かを秘めている。そして、それは、誰かを守る剣ではない。自身の志を貫く剣だ。

何故、という思いがあった。

何故、蒼昂は峨瑛の下にいるのだろうか、と。

峨瑛にしても、蒼昂にしても、こういった剣を持った者を服従させることは容易ではない。

事実、蒼昂には峨瑛に対する忠誠心がまるでないように思えた。

峨瑛がもし蒼昂を帰順させようと考えているのであれば、それは難しいことだろう。

どういった経由か、今の時点では、蒼昂は峨瑛の下にいる。

いつたい、いつまで、蒼潤がそれに甘んじていられるのだろう。空恐ろしいものを感じる。

厄介な餓鬼を押し付けおって。

薪塙は峨瑛に、呆れたような目を向けて、苦笑した。

「予想以上にできるもんでな、少し手荒く扱ってしまった。幾つか傷を作ったはずだ。これを、あの坊主に渡して置いてくれ」
「うむ」

薪塙が峨瑛に手渡したのは、茶色い小瓶だった。

中を覗くと、緑色の塗り薬が入っていた。緑と言うよりも茶色。黒に近い。

ツン、と鼻を刺激する臭いがして、峨瑛は頷く。
「誰でも使われているという傷薬だ。噂通りよく効くので、峨瑛も使用している。」

「直接渡してやろうと思ったのだが、調練が終わったとたん姿を消した。いつたいどこにいるのだ？ この邸内にいるのだろうか？」
「奥にいる」

峨瑛はそれ以上のことを言わずにおいた。

蒼昂に関する情報は少ない方が良かったろう。

あれが自分の正室だと、どこでどう知れるか、分からない。
薪塙は余計なことを聞かなかった。彼の美点である。
軽く礼を取って、下がっていった。

峨瑛が蒼潤の居室に出向くと、蒼潤は傷の手当てをしているところだった。

房室の入り口 扉から入ってすぐのところ、大人の背丈程の衝立が立っている。

房室は三間続きで、分厚い布で仕切つてある。

衝立の陰から姿を現した峨瑛は、布をたくし上げ、蒼潤の前までやって来ると、腰を下ろした。

蒼潤は、簡単に腰布を巻き、剥き出しの肩に薄い衣を一枚羽織っているだけで、

ひどく無防備な姿を晒していた。

「汐鏝は加減しなかったらしいな。良いことだ」

「おかげさまで、傷だらけだ。文句はないけどね」

蒼潤が口角を引き上げると、峨瑛は手を突き出す。

見せてみる、と言う。
蒼潤はわずかに身を引いた。

「もう手当は済んでいる」
「黙って見せる」

蒼潤が広げた距離だけ、峨瑛は膝を進める。
仕方なく、蒼潤は先程羽織ったばかりの布を滑り降ろした。
峨瑛が息を漏らした。

「ずいぶんとやられたものだ」

やや目を細め、懐から小瓶を取り出した。

「都の薬だ。これ以上に効くものはないだろう。使え」
「……ありがとう」

確認するように蓋を開けた蒼潤が顔を顰めた。
ツン、と鼻を刺激する臭いに対する嫌悪感そのまま顔に出てしまっただろう。

峨瑛は笑った。

「塗ってやるっ」

「いい。手当ては済んでいると言った」
「だが、お前はそのままそれをしまい込んでしまいそうだ」
「うっ」

蒼潤の考えなど、容易に分かる。

蒼潤は素直すぎるのだ。

彼は蒼潤の手から瓶を奪い返すと、中の物を指先ですくった。
蒼潤の腕を引く。躰を引き寄せると、肌一指を滑らせた。

「痛っ」

蒼潤の頬に赤が走った。息が殺す気配がする。
相当傷に染みたのだろう。

「っん」

わずかに肉の抉れた肩。

打たれ、青痣となっている背。

切り傷、擦り傷も全身に散っていて、それら全てに峨瑛は指を滑らせた。

峨瑛自身も経験ある痛みだ。如何ほどに染みるのかは、容易に想像付く。

おそらく、傷に針を突き刺しているような痛みだ。

蒼潤が痛みに顔を歪ませ、絶るように峨瑛の背に腕を廻し、肩に額を押し付けてきた。

「……あ。痛っ」

長時間の激しい乗馬の為、鞍で擦れた股にはうっすらと朱が滲んでいる。

峨瑛はそこにまで手を滑らせていた。

峨瑛の指の動きが止まった頃には、蒼潤の躰はグツタリと彼にもたれかかっていた。

苦痛に耐えたこともあったが、過度な運動で疲労した躰だ。仕方ないことだろう。

ふと、気配を感じて振り向くと、徐姥が家具の影のように控えていた。

いったいいつからそのようにしていたのだろうか。

徐姥は、峨瑛が薬を懐にしまったのを見て、静かに口を開いた。

「この時分のお越し。今夜はこちらでお休みですか？」

一瞬、峨瑛は驚いたような表情を浮かべた。

そうして、自分の腕の中を見やる。蒼潤が荒い息を繰り返していた。

「そうだな。そうしよう」

「では。そのように」

峨瑛が頷くと、徐姥は礼をし、奥の房室に行く。

しばらくして戻って来、支度が整ったことを告げた。

何か言いたげに蒼潤を見る。だが、蒼潤の方は、彼女を見返す余裕などなかった。

峨瑛の腕の中、指一本として動かす気力さえない。

抱き上げられ、寢室の方へと運ばれていく主を、徐姥は、じっと見守っていた。

20 剣振るう刻 空を駆けよ 壱

蒼潤が蒼昂として調練に加わるようになってから、半年が経った。あれから、峨瑛は毎晩蒼潤の部屋を訪れている。

蒼潤が絶えず新たな傷を拵えてくるからだ。

峨瑛はそれらに薬を塗り為に蒼潤のもとに通っている。

初めは己の保身のためだった。

蒼潤に何かあつては峨瑛が困るのだ。

峨瑛は傷で失った命を知っている。

些細な傷だと思つて侮つてしていると、取り返しの付かないことになることを、身に染みて知っていた。

蒼潤の方も当初、峨瑛に肌に触れられることを嫌がる様子を見せていたが、次第に慣れたのか、自ら衣を脱ぎ捨てるようになった。

薬の痛みにも慣れ、調練の厳しさにも慣れた頃から、寝室で語らうようになっていた。

蒼潤はこれを楽しみにしている様子で、傷の手当てが済んでも、

峨瑛は自室に戻れず、引き止められるままに彼の寝室で夜を過ごす。

蒼潤の寝台は3畳ほどの広さがある。

一人で寝る分には、両手両足を存分に伸ばしても、触れられる物などない程の広さである。

だが、今はすぐ隣に蒼潤がいる。

蒼潤は峨瑛とは逆向きに横たわっていた。お互いに足を向けて寝ている状態である。

目覚めた時、目の前に男の顔があるなど、とんでもないと言つのだ。

蒼潤は不意に口を開いた。

峨瑛が壬州鎮定の命を受けてから半月が経っている。だが、彼には一向に動く気配がないのである。蒼潤がその時期を問えば、彼は短く答えた。

「今は駄目だ」

「なぜ？」

「収穫がある。兵の大半が農民だ。農民は、田植えの時期と稲刈りの時期は、土地にいななければならない」

なるほど、と思う。季節は秋になっていた。

蒼潤は上体を起こし、峨瑛を見やった。

「では。稲刈りが終わったら、兵を進めるのか？ すぐに冬になってしまうのでは？ 壬州は斉郡よりも北だ。雪が降ったら、動けなくなる」

「そこが狙いだ」

「ん？」

少し考えてみるが、やはり分からない、と首を振った。

峨瑛は深く息を吐き出した。

「壬州で乱を起こしているのは農民だ。農民が田を耕さずに、武力を持つとしていた。鋤を、田を耕す道具としてではなく、武器として扱っているのだ。それで田はどうなる？」

「荒れる」

「米は採れまい。農民が田を耕さねば、食う物がなくなる。戦でもつとも重要なことは、兵糧の確保だ。彼らにはそれができまい」

「飢えさせる気か？」

「寒さは飢えを増す。だから、冬の到来は都合が良い」

「なるほど」

大きく頷くと、峨瑛は息を漏らした。

蒼潤から目を逸らし、天井を睨み付ける。

「天連。儂がこれから戦おうとしている者たちは、本当に敵か？」

「え？」

「敵というのは、瓊俱。奴のような者を指すのではないか？」

意味が分からないと、蒼潤は更に上体を起こし、寝台の上で胡座を掻いた。

峨瑛の顔を見やる。

その瞳に映るものを見ようとすが、蒼潤には何も見えなかった。

「お前の言っている意味が分からない」

悔しい。

蒼潤は唇を噛み締めた。拳を作る。

「……だけど、分かりたいと思う。俺は、言って貰わないと分からない。だから、説明が欲しいんだ」

ジロリ、と峨瑛が目を向けてきた。怯んでしまいそうになる程、鋭い光を放つ。

峨瑛は人に問われることを好まない。

あれこれ尋ねて、追い出された者を数人知っていた。ある者など、問うて首を跳ねられたのだと言う。

その者は軍師だった。

軍師とは先を読むものだ。

現在立てている策について、その意味を、あれこれ問うとは何事だ。

君主が軍師に問うことはあっても、軍師が君主に問うものではない。

よって、汝、軍師にあらず。

無用な存在だ。首を跳ねろ、ということになったと聞いている。

それでも、自分だけは、彼に問うことを許される気がした。

そもそも、天下を見せてやる、教えてやると言ったのは、彼自身なのだから。

しばらくの沈黙後、ようやく峨瑛は口を開いた。

「お前は、農民反乱を鎮定するとは、いったいどういう状態にすることを言うっ？」

「へ？」

「乱を起こしているのは農民だ。100万の農民を皆殺しにでもするつもりか？」

蒼潤は閉口した。

「壬州で乱を起こしているのは、壬州の民だ。民が無くて、国は成り立たん。国無くして、君主無し」

「壬州の反乱軍を皆殺しにしたら、壬州は滅ぶ？」

何となくだが、見えてきた気がした。

峨瑛は彼らを敵として扱わないつもりなのだ。闘う気がない。では、どうするつもりなのだろう？

不意に峨瑛の目が細められた。

「齊郡は今年、豊作だということだ」

そう、零すように呟いた。

風が吹いた。

肌を刺すような冷たい風だ。北から南へと吹き抜けていった。

軍議が開かれたのは、それから数日後のことだ。

蒼潤も後方に参列した。峨瑛の顔すら見えない位置である。

不満はなかった。参列できたことだけでも、蒼潤にとっては驚きだったからである。

よもや13という年齢で、この場に並んでいる者は他にあるまい。

そう思い、辺りを見渡す。
ふと視線を感じ、振り向いた。驚いた顔と目が合う。蒼潤も目を見開いた。

わずかに年上だろうか。同い年くらいの少年が蒼潤とは反対側の列に並んでいた。

しばし、互いに互いの若さに驚く。先に目を逸らしたのは向こうだ。

峨瑛の声が響き、蒼潤もそちらに振り返った。

いよいよ壬州に兵を向ける。

一人一人名を呼ばれ、任を与えられた。

先陣は薪塙。

ならば、その一端として蒼潤も組みすることになるのだろう。

そう思っていた時だった。

蒼昂の名が呼ばれる。自分のことだと気付くまで、時間を有した。

峨瑛の声が響いた。

「蒼昂。齊郡城で待機を命じる」

「はあ!?!」

思わず、声を上げた。耳を疑ったのだ。

楚雀と薪塙が、ほぼ同時に咳き込む。峨瑛がジロリと蒼潤を睨んだ。

その眼の鋭さに、反論の言葉を無くした。

「……御意に」

礼をし、引いた。
存分に睨んだ後、峨瑛は視線を蒼潤と対する位置にいる少年の方に移動させた。

「祇恵。齊郡城の守りを命じる」
「は」

即座に返答した少年は、どうやら祇恵という名らしい。
身に纏っている物から見て、文官のようだ。
続けて、峨瑛は言い放った。

「蒼昂は、城に待機している間、祇恵の下に置く」
「はあ!？」

再び耳を疑う。
今度は寸分違わず同時に、楚雀と薪塙が咳をした。
ギロリ、と峨瑛が睨む。
人々がざわめいた。あれは誰か、と囁く。

「蒼昂。祇恵に従え。良いな!」
「……」

蒼夫人の縁者らしい。そんな囁きの中、蒼潤は黙って頭を下げた。

21 剣振るう刻 空を駆けよ 弐

「なぜですか？ なぜ、わたしは待機なのですか？」

軍議の後である。

まさか峨瑛に噛みつくわけにはいかず、薪塙に食い付いた。彼の背を駆けるように追う。

「薪將軍！」

彼は蒼潤を振り返りもせず、回廊を進んでいく。

左手に庭が広がっている。大きな池があり、橋が架けられている。その橋を覆うように茂っていた草花はすでにない。直に冬が来る。枯れ葉がどこからともなく舞ってきて、蒼潤の頬を掠めた。

「薪將軍！」

「殿が決められたことだ。従え。お前はここで待機だ」

「そんな……」

薪塙は峨瑛の従兄であり、彼の臣ではあるが、字で呼び合う仲である。

だが、はじめを重んじる質で、人の前では峨瑛の臣下に徹しているため、字ではなく、殿と呼んでいた。

「お前はまだ幼い。伯陽もな。幼い故に守りを命じられた」

「はくよう?」

「祇恵だ」

「ていけい?」

ああ、と蒼潤は頷く。先程の少年のことだ。

年はわずかに自分より上で、体軀は細く頼り無げで、ひどく青白い顔をしていた。

蒼潤は薪塙を追って回廊の角を曲がった。その先を行けば邸の外に出てしまう。

自分の居邸に戻るつもりなのだろう。

「彼の年は?」

「14だ。賢い餓鬼でな。鮮郡の生まれだが、噂を聞きつけた殿が、陣営に加えるために、わざわざ出向いた程だ。伯陽が12の時だった。半ば強引に連れてきて、伯陽の父親に訴えられた」

思い出したのか、高らかに笑う。

「人攫いだ、と」

「人攫い?」

「話を聞けば、名を尋ね、祇恵だと答えたので、馬に担ぎ上げたら
しい」

「……」

「そのまま霖国に連れ帰ったとか」

「それは間違えなく、人攫いだ」

呆れた、と蒼潤は肩を竦めた。

薪塙も同じ思いらしく、苦笑する。

「今回の戦、伯陽を連れて行かないのは、今はまだ彼を失うわけにはいかないからだ。殿は先のことも考えている。伯陽を使うのは今ではない。もつと先だ」

薪塙は足を止め、蒼潤に振り返った。

意気を押さえ付けるように、肩に手を置く。

「お前も伯陽と同じだ。お前の働く場は今ではない。先にある」

「だけど……」

「加えて、お前は蒼夫人の縁者だ。殿は格別お前に目を掛けられている」

「それは……」

蒼夫人の縁者だからではなく、蒼夫人その人だからである。

峨瑛にとって、最も失うわけにはいかない存在だからだ。

それを薪塙に言うわけにもいかず、蒼潤は口を閉ざした。

薪塙は厳つい眉を吊り上げる。

「そう言えば、お前、名を昂と言ったな」

「……はい」

「殿の長子も昂という名だった」

「へえ。 だった？」

なぜ過去形なのかと、蒼潤は首を傾げる。

薪場は眉を寄せた。話すべきか否か、考えているようだった。しばらくあって、潜めた声で語り出した。

「殿の側室の一人に荀夫人という方がいてな。その方が殿の長子を生んだのだ」

「荀夫人……。今、その方は？」

「亡くなった。子を生んで、すぐに」

あ、と蒼潤は小さく声を漏らした。

薪場はチラリと彼を見やり、続けた。

「初の男児だったこと、夫人を亡くして得た子であることで、昂への殿の想いは、他の子に比べて深いものだった。ところが、今年に入ってすぐのことだ。昂は狩りに出掛け、どこからか飛んできた矢に射られた。 射られたと言っても、かすり傷だった。見た目はな」

「どういうことですか？」

「矢先に毒が塗ってあったのだ。その晩から昂は熱を出した。ひどい高熱だった。一向に下がる様子がない。三晩苦しんだ。意識もなくなり、食も取らない。水さえも。 みるみるうちに痩せ細り、顔は土色に。 生きているのか、すでに死んでいるのかさえ区別付かない

様だった」

声は静かで、痛々しい。

「殿は強い方だが、脆くもある。三晩、昂の側にいて、四日目の朝、自らの剣で昂の胸を突いた」

「己の子を殺したのか？」

「医師にも見捨てられていた」

「それでも……」

「三晩苦しんだ。これ以上の苦しみは必要か？ 苦しんだのは昂だけではない。あいつも、十分に……」

「だけど」

言いかけて、蒼潤は首を振った。

言つべき言葉など、見つからなかった。

「そう言えば、昂はお前と年が同じだ。13だったからな」
「同年？」

「お前のように腕白で、外を駆け回ってばかりいた。それでだろう。皓燭がお前に目を掛けるのは」

いつの間にか、辺りには誰もいなくなっていた。

皆、各自の居邸に戻り、出陣の準備をしているのだろう。

ざわざわと木々が鳴いている。

風に呼ばれる。フツと振り向き、後を追うように見やった。人気

のない廊下が長く続いている。

薪塙の呼吸を感じ、蒼潤は振り返った。

「分かりました。今回は殿の命に従い、この城で待機しております」

「ああ。そうしろ」

薪塙は背を向けて、片手を振った。

そのまま振り返ることなく、己の居邸へと去っていった。

薪塙の背を見送ってから、蒼潤は斉郡城内にある峨瑛の私邸の方へと身を翻した。

なぜ、峨瑛は蒼潤の偽名に『昂』という名を与えたのか。

その意図が分からなかった。

年が同じだから？

後から知ったことだが、峨瑛の長子が亡くなったのは、峨瑛が蒼潤と出会うほんの一月前のことだったらしい。

峨瑛が軍を率いて壬州に出発してしまうと、城内は耳が痛いほど静まり返ってしまった。

峨瑛邸から城門まで、誰一人として出会うことなく行き着くことができた程だ。

さすがに城門に来ると、門兵が立っている。

峨瑛の徹底した命で、城外に出ることは許されなかった。

斉郡に残った兵は、蒼潤が互幹国から連れてきた兵がほとんどで、騎兵が二百、歩兵が五百である。

祇恵も三百の兵を預かっているらしく、互幹鈍りのない兵を時折見かけた。

祇恵とは、峨瑛を見送ったその足で彼の居邸に赴き、会った。

今後の　　峨瑛が帰還する、もしくは蒼潤が戦場に呼び寄せられる時までのことを話し合うつもりであったが、お互い、すぐに言葉が尽きてしまい、半刻で蒼潤は席を立った。

年頃は同じであったが、蒼潤が外を駆け回って育ったのに対し、

祇恵は室内で読書をして育った具合だ。

合う話などなかったのである。

事は夜更けに起きた。蒼潤の寝室に雫石が現れた。

気配を感じ、蒼潤が寝台を降りると、雫石は老婆の姿をして、部屋の隅にひっそりと立っていた。

そのあまりの静けさに、初めは、壁のシミを見間違えたのかと思つた程だ。

亡霊のように声なく、立っている。

「……お前か」

「はい」

雫石は、蒼潤が言葉をかけてから、ようやく声を発した。

「お休みのところ申し訳ございません」

「何かあったか？」

峨瑛に何か、と思ったが、口にはしない。最低限なことだけを問うた。

スツと雫石が側まで歩み寄ってくる。足音は聞こえない。潜めた声で告げた。

「やはり赴郡の動きが気になります。皓燭様の要請通り、壬州に兵を向けたようなのですが、どうもその動向が……」

赴郡は併州の内にある。

併州は涿州の南、瑯州の北に位置し、その二つの州に挟まれるように存在する。

壬州は併州の西北に位置している。

赴郡は併州の北方に位置しているため、壬州にも涿州齊郡にも接していた。

赴郡の太守を貞紘といった。

雫石は前々から、貞紘の危険性について蒼潤に告げていた。

だが、その根拠が、赴郡が齊郡に近いからという不確かなものであったこと、そして、峨瑛が貞紘に対しそれなりの手を打っていたこともあって、さほど気に掛けていなかったのである。

「やはり、貞紘か？」

「はい。貞紘が壬州に向けた兵は5千。赴郡に3千もの余力を残しています」

「その3千が斉郡に差し向けられると？」

「おそらく。5千の兵の進みも妙に遅い。まるで赴郡から離れがたいかのような様子しております」

蒼潤が考え込む仕草を示したので、その言葉を最後に雫石は姿を消した。

まるで大気に溶けてしまったかのようなだ。瞬きの間に、もう姿がない。

不思議だと思つ。どうすれば、あのように気配を消せるのだろうか。

雫石が再び姿を現したのは、夜明け前のことだった。

珍しく慌てた様子で蒼潤を呼んだ。

蒼潤は瞼の開かないまま、赴郡軍が斉郡に向けられたことを聞いた。

22 剣振るう刻 空を駆けよ 参

祇恵を呼んだ。すでに日は昇り、辺りは明るい。

二人は向かい合うように座した。

「先程、こうせ……、殿に早馬をやった」

「それが殿に追いつくまでに、2日かかる。それからすぐに引き返したとして、殿が戻ってくるまでに、4日はかかるだろう」

「貞紘の軍は、あと2日もあれば、ここに辿り着く」

峨瑛は間に合わない。どう見ても、それは確かだった。

彼は今、休み無く馬を駆けさせて2日の距離にいる。

1万を超す軍を率いて移動すれば、4日かかる距離である。

対して、赴郡から斉郡に攻め寄せてくる3千の兵は、百二十里。

3千の兵が足並みそろえて2日で進める距離にあった。

加えて、赴郡から壬州に向かった5千の兵は、斉郡から百五十里の距離にいた。

その距離は次第に縮まっている。

「3千は、2日後の夕刻には姿を現すだろう。その翌日には5千が殿の到着は更に3日後となる」

「現在、斉郡には騎兵が2百。歩兵が8百。何とかなるか？」

「正面切つて闘えば負ける。壊滅するだろう。だが、この城は守りに適した城ではない。籠城することもできない」

「たかが4日も持たないか？」

「持たないだろう」

「蒼潤は親指の爪を噛んだ。」

手はないのか。何かできることは。

「柢恵の指先が床を突いた。数回。とんとんとん、と。軽い音が響く。」

つと、蒼潤を見やる。

静かな瞳だった。細められ、どこか冷ややかな光を放つ。

「何か手があるのか？」

「ここに蒼夫人がいらっしやらなければ」

「蒼夫人？」

「お守りする必要がある方がおられる限り、無用な策だ」

「いったいどんな？」

「言う意味がない。無用だから」

「蒼潤はガチツと歯を噛み合わせた。拳を作る。」

「自分の胸だけにしまっている策はもつと無意味だ。人に言わねば、意味をなさないのも当然だろう？ 無用か否かをお前だけで判断するな」

「……分かった」

祇恵は片手を振った。

それは、初めから、蒼潤が言っただろう事を予想していたかのような仕草だった。

蒼潤は舌打ちをした。

「それで？」

「城に火を放つんだ」

「火？」

「まず天連殿は貴方の兵を率いて城から出て頂く。そう、まるで恐れをなして逃げ出したかのように」

「逃げる？」

蒼潤は眉を寄せた。

「敵はこちらが逃げたと思い、油断し、斉郡城にやってくる。敵が入城したところを、わたしの兵三百が油を注ぎ、火を放つ。当然、敵は混乱するだろう。そこに逃げたと思わせた貴方の兵が後ろを突く。そうすれば、まず2日後にせめてくる3千の敵はどうにかなるだろう」

「次の5千はどうする？」

「先の3千の敵を壊滅させたら、すぐに城を出るんだ。今、赴郡には兵がない。3千は壊滅。5千は斉郡。赴郡を守る兵はいないだろう」

「つまり？」

「赴郡を攻める絶好の機会だ」

「なるほど」

蒼潤が祇恵を見やると、彼の目が鋭く輝いた気がした。

「齊郡は捨てることになるが、一時的なことだ。すぐに殿が兵を率いて戻ってきてくださる。奪還できる。それに、先の3千をやり過ぎすために火を放った城では、次の5千はどうすることもできない。守り難いものを守るよりも、無傷な赴郡城を手に入れる。その方が犠牲も少ない」

新たな領地も手に入る、と祇恵は笑った。
蒼潤は手を打った。

「よし。それで行こう」

「だから、駄目なんだ」

「駄目？」

「今の策は、蒼夫人がいらっしやらなければ使える策だと言っただろう？ 夫人がいらっしやるのに、屋敷に火を放てるか？ 城を捨てられるか？ お守りしなくては」

ああ、と蒼潤は低く声を発した。頭を掻く。

「夫人を危険な目に合わせるわけにはいかない。別の手を考えよう」

「別の手があるのか？」

「これから考える」

「……」

蒼潤は首を振った。祇恵を見やる。

「今、お前が言った策が最善だと思う。それで行こう。夫人に關しては俺が何とかする」

「何とか？」

「任せる。どうにでもなるんだ。俺には」

そう言つて蒼潤は席を立ち、ニツと笑つた。

どうにでもなる。

それはそうだろう。本人なのだから。

「出陣の支度をしてくる。伯陽殿も準備なされよ」

日が西に傾き始めていた。

遠くの方に土煙が上がっている。赴郡軍がそこまで来ているのだ。蒼潤は洵韓国から連れてきた兵を率いて、斉郡城を出発した。

馬を走らせ、大げさなほど土煙を立てる。慌ただしく逃げるように演じて見せた。

斉郡城からわずかに離れたところに、潜むのに都合の良い地形が広がっている。

岩場の影に姿を潜ませた。

斉郡城から火の手が上がったのは、それからわずか後だった。

夕日よりも赤く。華やかで、激しい。

祇恵が城に侵入してきた敵兵に、頭から油をぶちまけ、火を放った。

それで半数ばかりの敵兵が焼け死んだようだ。

混乱の中、蒼潤が背後から突く。

祇恵も潜ませて置いた兵で正面から打ち、挟まれた敵兵は二人の前に次々と倒れていった。

炎は、翌日の太陽が昇っても尚、燃え続けていた。

その炎も燻り始めた頃、ようやく敵兵は壊滅した。

額を拭くと、汗と共に血の赤や灰の黒が白い布を染めた。

だが、休む間などなかった。

5千の敵が迫っている。すぐに斉郡城を出発した。

今度は芳詔たち女官も引き連れて、本気で逃げる。

逃げる先は赴郡で、ついでに攻め落としてしまおうと言うのだ。

途中まで共に逃げ、そこから先は騎馬だけを集めた。

赴郡軍が斉郡城で、焼け死んだ仲間の甲いに足止めをくらっている間に、赴郡城を攻め落とさねばならなかった。

蒼潤は二百の騎兵だけを引き連れて、駆けた。

いつの間にか、日付が変わっていた。丸一日を馬上で過ごしたように思う。

難なく赴郡城は落ちた。味方は、たったの二百騎だった。

城内に潜り込んでいた隼石に城門を開けて貰い、後は無駄な血を流すことなく、攻め落とすことができた。

赴郡城に戦える兵はなく、女子ども、老人ばかりだった。

城を落とした翌日、祇恵が残りの兵と女達を率いて入城した。

赴郡軍が斉郡に攻め寄せてから、4度目の夜明けだった。

23 剣振るう刻 空を駆けよ 肆

土煙。視界を隠すかのように、巻き上がる。

風。大気が震える。

2千 いや、千と5百くらいだろう。赴郡城に向かって来る。あれが貞紘だろうか。大柄な男達に守られた小太りの男がいる。付きすぎた肉のせいで、目が細く見える。

その眼はどこともない場所を見据え、顔からはすっかり血の気が引いていた。

貞紘軍のすぐ後ろに1万の軍が迫っていた。

峨瑛だ。斉郡城を奪還し、貞紘を追っている。

彼の耳に、蒼潤が赴郡城を攻め落としたことは、聞こえているだろうか？

蒼潤は片手を天に伸ばした。城門が開く。

敵軍が迫ってくる。ジツと堪え、貞紘を探す。

見えた、と蒼潤は目を見開く。手を貞紘に向かって振るった。

「放て！」

号令で、弓兵隊が一斉に矢を放った。

まさか己の城がすでに敵の手に落ちていたとは知らない貞紘の軍は、その一撃で大きく乱れた。

峨瑛軍が貞紘軍に追い付く。

乱れた陣形では弓兵隊は使えない。蒼潤は手綱を取った。

「出る」

呟くように言ったのだが、すぐ脇で返事が戻ってきた。
甄此だった。

「どうぞお気を付けください」
「お前も」

甄此とは共に育ってきた。蒼潤が初陣ならば、彼も同じだろう。
馬の腹を蹴る。馬は駆けだした。

貞紘は逃げた。
よくぞあの状況でと感心する。1万以上の敵兵に取り囲まれていた。

赴郡に隣接した郡に、椎郡がある。貞紘はそこに逃げ込んだようである。

椎郡の太守は功郁という男だ。

貞紘とは親戚関係にある。貞紘の妻は功郁の妹だという。

「勝ちましたね」

甄此が言った。蒼潤はホッと息を付いた。

「そのようだな」

「伯陽殿の策のおかげですね」

「……そうだな」

確かに賢いのだろう。

自分より一つ年上だというだけだ。それなのに、あの策。

天才なのかもしれない。

蒼潤はハツとする。辺りを見回した。

「皓燭は？ あいつは、どこだ？」

「殿なら、あそこに」

甄此の指す方を見やれば、部将たちに囲まれている姿が見えた。いつの間にか祗恵もそこにいた。

何か話している。報告でもしているのだろうか。

不意に峨瑛がこちらを見やった。目が合う。彼は薄く唇を開いた。だが、言葉はなく、大股で近寄ってきた。

「何をしている？ こっちに来い。 怪我はないか？」

「……ない」

「見せてみる」

「ないって」

「見せてみる」

嫌がれば、相手だってムキになる。

力づくで己の思い通りにしようとする。

峨瑛の手が蒼潤の襟元に伸びた。蒼潤はギョツとした。

「待て。ここで脱がせる気か！」

戦場である。辺りには死体が転がっている。

それらが自分たちを恨めしそうに見つめている気がした。

「気が済むまで見せてやるから、とにかく今は嫌だ！」

こんなところで、とんでもない、と言えば、峨瑛はようやく納得したようだった。

ふっ、と蒼潤から手を放す。

「後で室に行く。好きな室を選んで良い。先に城内に行っている」

「でも。俺も後片付けを」

「お前は良い」

「でも……」

兵は皆、死体を片付ける等、戦の後始末をしている。

それは上将である新塙とて例外ではないのだから、一兵士である蒼昂が免れるわけにはいかないだろう。

祇恵だって、部下に指示を出している。

峨瑛が気怠そうに息を漏らした。

「さっさと行け。躰を清め、休んでいる」

片手を払う。蒼潤を追い払うかのように。

そして、蒼潤が何かを言い返す前に、新塙の方へと去ってしまった。

仕方なく、蒼潤は城門をくぐった。

蒼潤の気配が去っていくのを背中で見ると、峨瑛は彼を振り返った。

ドキツとするほど、血だらけである。

五体満足で元気にいる様子から、ほとんどが返り血なのだろうと分かってはいるが、

その血だらけの姿を自分の目に晒して欲しくなかった。

部下に指示を出している薪塙の横まで来ると、峨瑛は己の顎を撫でた。

薪塙が振り向きもせず言葉を発する。

「予想以上だな」

蒼潤のことを言っているのだ、とすぐに分かった。

峨瑛は頷かずに、遠くの方を見やった。

祗恵が傷の手当てを受けていた。 齊郡城に火を放った時に火傷をしたらしい。

「伯陽の策が良かったのだろう」

「それもある。だが、天連の武がなければ伯陽の策は意味を為さなかった」

その通りだと、峨瑛も思った。

まず齊郡城で敵を敗らねば次の策は意味を無くす。

齊郡城には千しか兵を残さなかった。その千で三千を敗ったのだ。

そして、その後、天連はたった二百騎で赴郡城を落としたのだという。

思った以上に、やる。

使える、と峨瑛は目を細めた。

峨瑛が蒼潤の房室にやって来た時、蒼潤はすでに牀の中だった。夜更け近い。もう来ないだろうと思っていた。

なんだ、来たのか、と言えば、彼は当然だと笑う。

「見せてみる」

手に例の薬を持っている。蒼潤は躊躇無く夜着を脱ぎ捨てた。

傷なんて無い。負った覚えなどないのだから。

そう思っていたが、知らないうちに付いている傷もあったようだ。

峨瑛はそれらを身体の隅々まで見やり、探し出す。

その執拗さに、蒼潤はため息を付いた。

「ただの掠り傷だ。大したこと無い。怪我という怪我はしていないはずだ」

「そのようだな……」

掠り傷に薬を塗り付けながら、峨瑛は言った。

伏せた目はどこか静かだ。

「だが、掠り傷を侮ってはならない。俺には掠り傷で死んだ息子がいる」

「……」

知っていると言いかけて、口を閉ざした。言うてはならない気がした。

例え、聞いた相手が新場だとしても、人伝に聞いてはならない話のような気がしたのだ。

だが、そんな蒼潤の一瞬の瞳の揺れで、彼はすべてを読み取ったらしい。

苦笑を漏らす。

「戦場に連れて行かなければ、こんな心配無用だと思っていたが、まさか連れて行かないことで、こんな思いをすとはな」

「勝手に戦陣を開いた。悪い」

「いや。あの場合はああするしかなかっただろう。伯陽の決断は正しい。お前も良くやった。だが、お前を連れて行けば良かったと後悔している」

「なら、二度と置いていくな。留守番は御免だ」
「……良いだろう」

今夜も共に休むつもりなのだろう。峨瑛が先に蒼潤の牀に横たわってしまふ。

黙って、蒼潤も寝転んだ。

瞼を閉じれば、赤が見えた。初めての戦に、休めた躰がいつまでも熱い。

ドクドク、と胸が高鳴っていた。

24 風薫る刻 春咲かぬ 壱

よお、と軽く手を上げたのは祇恵だった。

とつくに午前評議が始まっている時刻である。

お互いにいるべき場所ではないところで、バツタリ遭遇してしまったことに驚きながら、蒼潤も軽く手を上げた。

祇恵とは先の戦 対貞糺戦以来、お互いにその力を認め合い、親しくなっている。

蒼潤が見たところ、祇恵という少年は学問ばかりの頭でつかちかと思えば、そうではなく、馬にも乗り、弓も扱え、なかなか勇猛なところがあった。

ただし、体力が気力に付いていかないようで、少しの運動で顔が真っ青になってしまうのだ。

元々丈夫な方ではないのだろう。床に着くことが多く、咳き込んでばかりいる。

本人曰く、もはや咳は癖のようなものだし、頭痛も咽の痛みも、熱も、多少ある方が普通なのだそうだ。

そんな彼の好奇心旺盛なところ、悪戯好きなところ、また、型に填らない性格が蒼潤の好むところとなっていた。

「どこで何を？」

中庭である。すぐその建物で評議が行われているというのに、祇恵は内に入ろうとしない。

砂利で覆われた地べたに座り込み、大きな白い岩に背を預けている。

祇恵が手を招くので、蒼潤は歩み寄り、傍らに立った。

「おい。突っ立っていたら、見つかったらどうだろ」

「隠れているのか？」

「似たようなもんさ」

腕を引かれ、蒼潤も地べたに腰を下ろした。

不思議なもので、こうやって視線を低くすると、空は一層高く、世界は広く感じる。

なんて、自分は小さいのだろう、と。

葵暦1922年、峨瑛は壬州に兵を進めた。

相手は100万の反乱軍。

反乱軍と一戦を交え、己の力を知らしめた後、峨瑛は冬を待った。100万を飢えさせるつもりだった。

やがて冬が来、反乱軍が立て籠もった城から、黒い煙が上がるようになった。

黒い煙は、死体を燃やしていることを知らせた。

餓死者が出始めている。そうと知った彼は、使者を出した。

食料を分けてやる。降伏せよ。

こうして、峨瑛は壬州の乱を鎮定したのである。

この戦で峨瑛が失ったものはわずかであり、得たものは限りなく大きいものだった。

一つは自信であり、一つは名。そして、兵力である。

人々は彼の元に集まりつつあった。

蒼潤も蒼昂として、これに参戦したが、蒼潤が得たものは何もな

い。
ただ、蒼昂が峨瑛軍で少しばかり名が通るようになっただけである。

小さい。

蒼潤は無意識に握り締めていた拳をそっと開いて、再び空を仰いだ。

空の蒼に向かって、手を伸ばす。

どれくらいそうしていただろうか。ふと、二人の視野が陰った。そう思った次の瞬間、ぬっ、と太い腕が伸びて来た。

「こら、餓鬼ども、こんなところで何をしている！？ 評議を欠席する奴があるか。馬鹿者！」

2本の太い腕は、それぞれ蒼潤と柢恵の襟を摘み上げた。

足が空を蹴る。思わず、大声を上げた。

「うわっ。何すんだ！ふざけるな！……って、將軍!？」

いかにも楽しげな笑い声が聞こえてきて振り向けば、主は薪塙だった。

二人の躰を子犬みたいに持ち上げ、わざとらしく、ブラブラと揺する。

「やめてくださいよ、將軍。……おい、天連。お前のせいで見つかったしまったじゃないか」

「それで隠れていたんだな。言っておくが、俺はちゃんと出席するつもりだったんだ。あそこでお前に会わなければ、後ろからそっと潜り込んでだな……」

「あれだけ遅刻してりゃあ、もしうまく潜り込めたとしても、欠席と同じだっただろうさ。五十歩百歩という言葉を知っているか、天連？」

「何だと!？」

「いい加減にせんか、この糞餓鬼ども!」

薪塙は、評議を理由なく欠席した罰だと言い、更に大きく二人の躰を揺すった。

「伯陽、お前は昨日も欠席しただろう」

「將軍、昨日の欠席にはちゃんと理由があるんですよ。寝坊です」

「余計悪いわ」

薪塙は、二人の襟を掴んだまま、グルリと自ら回転する。
なぜか巻き添え喰らって、蒼潤の躰まで、空に振り回された。
ようやく二人の足を地に戻し、彼は言う。

「伯陽は槓抄のところへ。十分に覚悟してから行けよ。やるべきことがたんまりと溜まっているらしいからな。天連は練兵に加われ」

「はい」

「はい、將軍。天連、またな」

「おう」

祇恵は軽く手を上げて、外殿の中の方へと駆けていった。
蒼潤の肩に手がかかる。薪塙だった。

「いつの間に仲良くなった？」

「先の戦で」

「確かに、人を見直すだけの価値のある見事な策だった」

ともあれ、仲良くなることは良いことだ、と薪塙は蒼潤の頭に手を置いた。

まるで子どもを扱つかのように撫でる。

不意に、声が響いた。

「薪將軍。その子は、あんまりそういう扱いはしない方が貴方の為ですよ」

振り返ると、端正な顔がジッとこちらを見ていた。 楚雀だ。

「伯陽を見かけませんでしたか？」

「あいつなら、今さっき、お前のところに行かせたぞ」

「……そうですか」

それなら良いんです、と静かな声を響かせる。

響きに疲労が含まれているような気がした。

どうしたのか、と問えば、楚雀は息を漏らした。

「あの子の睡眠時間がそのままわたしの勤務時間になるのですよ。殿にあの子を推挙したのはわたしですから、文句言えた立場ではないのですが」

去り駆けた楚雀は、そうそう、と振り返った。

「殿の夫人方がお越しになります。薪將軍。練兵がてら、出迎えてくださると有り難いのですが」

峨瑛に寄る地がなかった頃、彼の家族は彼の父親の庇護の元にいた。

今回、斉郡に腰を据える事に決めた彼は家族を呼び寄せたのである。

それが今日この斉郡城に到着するのだという。

そう言えば、と蒼潤は思い出した。今朝方の事である。

男物に着替えようとした蒼潤を、玖姥たちが慌てて制止にかかってきた。

「今日は、おとなしくしててくださいね」

「なんと言つても、敵が攻め込んでくるんですから」

「敵？」

「そう。敵ですわ」

呂姥が人差し指を立てた。

「梨夫人と言えば、殿のご寵愛の深い方ですもの。その方がいらしたら、天連様、今まで通りにはいきませんわ」

「当然、殿はこの部屋から、足を遠のいてしまわれませぬ」

「それは、せいせいするな」

蒼潤があからさまに喜んでみせたので、呂姥はため息を付き、玖姥は頬を膨らませた。

それでこの話を終え、着替えを済ませる事ができたのだが、そうかと蒼潤は思った。

本当に峨瑛の他の妻たちが今日やってくるのだな。

そのことで、自分の身に、境遇に、何か変化があるのだろうか。

いや、あるわけがない。蒼潤は蒼潤である。

蒼潤は拳を作った。薪塙を、それから、楚雀に目をやった。

楚雀の話は、夫人たちの護衛は十分にいるが、斉郡の隣、赴郡には峨瑛の領地を狙う功郁や貞紘がいるため、護衛の数は多ければ多いほど良いだろうとのことだった。

「承知した」

薪塙の短い答を聞いて、楚雀は頷き、祇恵の姿を求め、去っていった。

その背を見送ってから、薪塙と蒼潤は幕舎に向かった。

楓莉は16歳の時、峨瑛に嫁いだ。

その時、峨瑛は32歳で、すでに正室も側室も幾人が持っていた。やるせなかつた。

正室の梨蓉はあまりにもできた女性で、どこにも付け入る隙がない。

正室の座を奪えないのならば、せめて世継ぎを生みたいと願うが、すでに嫡子がいて、峨瑛は長子 峨昂をこよなく愛していた。

更に悪いことに、峨昂はその誕生の時に母親を亡くしている。

荀夫人と呼ばれていたその女性の存在は、死してより一層、峨瑛の中で強く残っているようなのである。

とても適わなかった。

正室にもなれず、世継ぎも望めず、自分は第四夫人としてこのまま終わってしまうのだろうか。

そんな時だった。新たな女が現れた。

蒼潤。

皇族に連なる身分を持つて、梨蓉から正室の座を奪い、峨瑛に嫁いできた少女だ。

彼女の出現によって第五夫人に降格してしまったことも口惜しいが、そんなことよりも、非の打ち所のない梨蓉が正室だからこそ諦めていたことを、どうして己よりも幼い少女に許せるだろうか。

血がすべてだと言う。

だが、身分が上だからという理由で、後から突如として現れた餓鬼に、自分がどんなに欲し、手を伸ばしても届かなかった物を奪い去られてしまったのだ。

どうして、許せようか。

楓莉は御簾をわずかに開いて、流れゆく景色を憎らしげに見つめた。

直に斉郡城に着く。

壬州の乱を鎮定した峨瑛は、しばらく斉郡に腰を据えることにし、家族を呼び寄せたのである。

長い列。百を越す数の俵。

5人の夫人と、20人の妾妃。

そして、無位の女たち。

おそらく他人は列を見て言うだろう。峨瑛の女達、と。

そのように一括りにされるのは好まないが、事実、自分は大勢の中
の一人に過ぎない存在だった。

楓莉は御簾から身を引いて、瞳を閉ざした。

兵達に護られて、列は続いていく。

25 風薫る刻 春咲かぬ 式

カッと、顔が熱くなる。

怒りだった。腸煮えくり返るとは、こつこつことかと楓莉は思った。

「気分が思わしくありませんって？ 妾たちが長旅の疲れを癒す間もなく、礼を尽くすために室を訪れているというのに？」

なんていう無礼な。

いや、なんとという屈辱だ。

年若い蒼潤に完全に侮られている。そう、楓莉は感じたのである。

齊郡城、蒼潤の居室の前に立ち尽くした美女4人はそれぞれの表情で、もう一人の表情をそつと窺い見た。

もう一人 『美女』というよりも『麗人』という言葉が当てはまり、楓莉のような華やかな美しさはないが、柳のような静かな美しさを持った女性だ。

スツと伸びた細身の躰。それは、しなやかで美しい。

梨蓉。蒼潤が峨瑛に嫁いでくる以前の17年間、ずっと峨瑛の正室であり続けた女性である。

「大姐さま、どうなさいますか？」

燕朋が楓莉の怒りにオロオロとしながら、梨蓉を仰いだ。

燕朋は楓莉よりも幾つか年上だが、嫁したのが遅く、第六夫人の座に納まっている。

楓莉が第五夫人。第三夫人は楊霞、第四夫人は快欄という。

梨蓉とこの4人の側室たちは今日、斉郡城に到着した。

これからは正室と共にここで暮らすのである。

その挨拶にと4人揃って正室の居室に足を運んだのだが、気分が悪いと理由で、門前払いを喰らわせられてしまった。

後から嫁してきた側室ならばともかく、己よりも先に嫁していた女達に対する態度ではない。

それは明らかに、梨蓉達と親しくするつもりがないという態度である。

梨蓉は緩やかに頭を振った。

「みな、己の室に戻り、躰を休めなさい」

「けれど、大姐さま」

「仕方がないでしょう。挨拶はまた後日にすれば良いことです」

「仮病に決まっています。妾たちを嘲笑っているのです」

「楓夫人」

梨蓉は鋭い声を発した。だが、皆まで言わない。首を振るだけだ。

静かな動作で踵を返し、己の居室に去って行ってしまった。

残された4人の美女たちは、それぞれの顔を見合わせる。

楓莉が口を開く。

「楊夫人のお考えは？」

「言わずもがな、だわ」

「快夫人は？」

楓莉が快欄に振り向くと、彼女は袖口をギリギリと噛み締めていた。

楓莉は唇の端をニッと持ち上げた。

「妾に考えがあります。ご協力くださる気はおありかしら？」

「何ということでしょう！」

唐突過ぎる大声に蒼潤はビクリとして、玖姥に振り返った。

午後の調練が終わり、散々薪場に扱かれた躰を引きずるようにして居室に戻ると、徐姥と芳姥の未恐ろしい顔が待っていた。

今朝あれほど、今日だけは大人しく室にいてくれと言われていたのを無視して、外に飛び出してしまったことを怒っているの

だ。

徐姥から長々と説教をされていて、ようやく解放される時という時のその大声だった。

「何だ？　どうかしたか？」

「ええ。しましたとも……」

玖姥の手がブルブルと震えている。

「これもすべて、天連様がいけないのですよ。梨夫人が挨拶にいらした時、おとなしく部屋にいてくださらなかったから」

それはすでに徐姥から聞いていた内容だった。

梨蓉を初めとする峨瑛の妻たちが斉郡城にやって来た。

その挨拶に、彼女たちが正室である蒼潤の部屋まで訪れたらしいのだが、その時、蒼潤は男装して練兵に加わっていた。

まさか留守の理由をその通りに言うわけにもいかず、徐姥は彼女たちに、蒼潤の気分が思わしくないからと言い、断ったのだという。

「それではまるで、天連様が我が儘な方のように見えます。側室たちが気に入らないからと言って、挨拶を断ったかのように見えるではないですか」

「徐姥にも言われたけど、そこらへんは身から出た錆ってヤツだろう？　おとなしくしていると言われたのに、俺が勝手に出て行っちゃったわけだから」

仕方ないじゃん、と蒼潤は両手を広げ、肩を竦めて見せた。玖姥はしばし考えて、そうですわね、とため息をついた。

「天連様が悪く思われてしまったのは、仕方がないことかもしれませんが。天連様のせいで、天連様が悪く思われるのですから……。ですが、そんなことよりも、大変なことになってしまったのですよ」「へ？」

「先程、楓夫人から使いの者が来まして、明日、天連様の方から挨拶に来るように、と」

「なんですって！」

「それは本当ですか？」

蒼潤が玖姥の言葉を理解する前だった。

ガツ、と呂姥と芳姥が同時に立ち上がった。

「え？ 何？」

「天連様、呆けている場合ではございません。これは許し難い事態です」

普段冷静な芳姥まで熱くなっている。

「なぜ、正室が側室の部屋に挨拶に出向かなければならないのですか？ 側室は正室の許しを得られるまで、通い続けるものでしょう？ 身の程をわきまえるべきです。 玖姥、すぐに楓夫人に断りを」

「抜かりありませんわ。すでに断つてあります。とんでもないことですもの」

「天連様は蒼家の方。皇族に連なる方。時が時ならば、このような場所に収まっている方ではございませんわ」

「たかが側室が自室に呼び付けようとは。無礼にも程があります！」

そこまで言う程のことなのか？

生来、蒼潤は身分に頓着しない質である。

亙韓国では、男装をして城下の同い年の少年達と野を駆け回って遊んでいた程だ。

今だって、正体を隠して兵士をやっている。

身分どうのと拘っていたら、とてもじゃないが、多くが農民出の兵士たちの中、共に調練などやれはしない。

蒼潤は傷だらけになることも構わなければ、泥まみれになることも一向に頓着しない。

側室だの、正室だの、無礼だ何だと、周りが騒いでいることが不思議に思えた。

26 風薫る刻 春咲かぬ 参

大気を切り裂くような悲鳴で、蒼潤は目覚めた。

寝惚けた頭でも分かる。悲鳴の主は芳詔だ。

慌てて隣の室へと駆け込むと、そこで蒼潤は思わず言葉を失った。

辺り一面の朱。

室中に大量の血がぶち撒けられていた。

「これは？」

「天連様……」

「いつたい、どうしたんだ？」

へたり座っている芳詔に駆け寄ると、呆然と辺りを眺める。

床も壁も、家具も何も、血で汚れていた。

しばらくして芳姥たちがやって来て、蒼潤と同様呆然となった。

芳姥が地団駄を踏む。

「やられましたわ、天連様」

「やられた？ 誰の仕業か分かっているのか？」

「ええ。もちろんですわ」

「側室たちに決まっています！」

「側室たち？」

「天連様への再三の申し出を、ことごとく断っていたので、遂に業を煮やしたのでしょうか」

「実力行使で来ましたわね。それなら、こちらにも考えがございま

すわ」

「天連様、ここはどうぞ私たちにお任せください」

「……」

蒼潤は額を抑えた。

「ちよつと待て。再三の申し出つて何だ？」

「側室たちが、それぞれ自分の室に天連様を呼ばれているのです」

答えたのは芳詔だった。青ざめた顔のまま、蒼潤を見上げている。

「昨日も、その前日にも、楊夫人や快夫人、楓夫人、燕夫人からの使いがやって来ていたのです」

「なぜ報告しなかった？」

「天連様が気になさることではありませんので」

きつぱりと言い放った芳姥に蒼潤は閉口する。

とにかく室を片付けてくれと言って、寢室に戻った。

芳詔だけが付いてくる。彼女の手を借りて、男物に着替えると、再び血で汚れた室に戻った。

血は動物のものであったらしく、部屋の隅に鳥の死骸が転がっている。

もちろん、一羽二羽の数ではこれほどの大量の血は得られない。

数羽分の死骸を蒼潤は見下ろして、ふと、おもむろに掴み上げた。

「どつなさるのですか？」

「伯陽のところを持っていくのかと」

「持って行ってどうするのですか？」

「食べるに決まっていまするだろ？」

「食べるのですか！？」

腹いせに伯陽に対して嫌がらせをするのかと思った、と芳詔は言
うと、ホツとしたような複雑な表情を浮かべた。

そして、改めて本当に食べるのかと聞いてくる。 蒼潤は眉を寄
せた。

「食べなきゃ、鳥が可哀想だ。よく血抜きされているから、味は悪
くなっていないだろうし」

もったいないじゃないかと言わんばかりの蒼潤に、芳詔は呆れ半
分で頷いた。

蒼潤が柢恵の居邸を訪ねた時、柢恵はまだ牀の中にいた。無理矢理起こして、その寝惚けた顔の前に鳥の死体を突き付けた。

「喜べ、土産持参してきた」

「微妙に、ありがとう」

「微妙に？」

「眠い。寝かせてくれ。……と言うか、このまま永眠したい」

「永眠する前に、俺の話を聞いてくれ」

「やだ」

「聞いてくれたら、俺が直々に手を下してやるからさ」

「もっと、いやだ」

再び牀に倒れ込んでしまった柢恵を見下ろして、蒼潤は舌打ちをする。

彼の方を向いて、床に胡座を掻いた。

「なあ、伯陽。女って、面倒臭いイキモノだな。見ていると、ひどく疲れるんだ。どうして、たった一人の男の寵を得るために、そこまで躍起になるのかなあ。競い合って、争って、唾み合って…

…」

何の事だと、柢恵が半分閉じた目で蒼潤に振り向く。

蒼潤は苦笑した。

「蒼夫人の話だ」

「蒼夫人は、殿の他の女達と、うまくいつていないのか？」

「どうだろう？ 俺にはよく分からない。 だけど、側室達が挨拶をしに来た時、気分が悪いと言って、蒼夫人は彼女達に会わなかつたんだ」

「へえ」

「実はこの鳥。側室たちが蒼夫人の房室に投げ込んだ物らしいんだ。すごかつたんだぞ。室中、血だらけだった」

祇恵がギョツとした表情を浮かべた。上体を起こす。

「そんなもん持つてくるなよ。呪がかかっていそいで、とてもじゃない、食えないだろ」

「そうなのか？」

「なんつーもんを俺に食わせようって言うんだ？」

「……ごめん」

「いや、やっぱり食べるよ。女の、つまらない争いに巻き込まれ、殺された鳥が哀れだ」

蒼潤は笑う。彼ならばそう言ってくれらると思っていた。

「なんだかよく分からないけど、大変なんだな、お前。奥の権力争いに巻き込まれているのか。蒼夫人に側室たちを御せるだけの力量

があれば良いけど、なんせまだ幼いもんな」

「正室の力不足だから、争いが起こるのか？」

「そうしたことだな。上がしっかりしてりゃあ、下も何とかなるもんだぞ。その逆もあるけどな。つまり、どちらかがしっかりしてりゃあ良いんだ」

しっかりとしている誰かがいれば良い、とも柢恵は言い換えた。

蒼潤が嫁してくる以前は、それは梨蓉だった。

梨蓉がしっかりと側室達を束ねていたので、争いなど起こらなかつたのだ。

だが、蒼潤が嫁した後は彼に遠慮してか、梨蓉はすべてに置いて身を引いている状態にある。

他の女達の行いを知っているのか否かは定かではないが、ただただ沈黙している。

彼女のその沈黙が、楓莉たちを増長させているようなのである。

「梨夫人か……」

「おいおい。それはお前が考えることじゃない。女の争いは女に任せておけば良いんだ。男が出て行くと余計ややこしくなるもんだ」
「そうなのか。……そっか」

蒼潤は立ち上がった。帰るのか、という柢恵の目が追ってくる。

「帰る」

「おう」

短く答えると、祇恵はそのままゴロリと寝転んだ。
見送りに出るつもりはないらしい。帰るのならば、勝手に帰れと
いうことだ。

蒼潤はそんな友人をちらりと一瞥してから、踵を返した。

翌朝も芳詔の悲鳴で、蒼潤は目覚めた。

駆け付けると、猫の頭部が室内に転がっていた。

更に翌日も悲鳴で目覚め、数十匹の蛾が室内を飛び回っている様
子を目にした。

蛾くらいでは動じないと高を括っていると、室を出た瞬間に血の
気が引いた。

回廊に踏みだした足の下で、何かがぐにやりと音を立てた。

見やると、一面、泥で塗り込められていた。

泥　もしかしたら、泥ではなく、何か動物の糞だったのかもし
れない。

近ごろ、芳姥達は蒼潤を居室から追い出そうとする。

蒼潤には知らせたくないことがあるのだろう。

自分が留守をしている間のことを芳詔に聞けば、側室の侍女たち
が嫌味を言い訪ねて来るのだと言う。

蒼潤が知らないところでも嫌がらせを受けているらしく、また、
芳姥達も負けじとやり返しているらしい。

蒼潤は親指の爪を噛んだ。

正室の力量がないから、女達が争うのだ。

祇恵の言葉を思い出して、蒼潤は舌打ちをした。

巖瑛の正室とは、不本意ながら自分のことである。

自分の無力を批判されているようで、蒼潤は気に食わなかった。

女ではないのだから、女達を御しきれないのも仕方がないことなのかもしれない。

気に病む必要はないのだ。女のことには女が解決すべきことなのだから。

だが……。

イライラする。

余計なことに囚われている気がして仕方がなかった。

27 風薫る刻 春咲かぬ 肆

生来、悩むには向かない頭を持っている。

いつまでもぐずぐず考えているのは、苦手だ。

とにかくスッキリさせたかった。

目覚めてすぐに芳詔を呼ぶと、女物に着替えた。

どこからどう見ても少女に、そして、公主らしく見えるように着飾った。

徐姥を呼び、梨蓉の元へ使いに出した。これから伺う、と。しばらくして、芳姥たちがやって来た。ひどく青ざめている。

「天連様……」

「もはや、お前達に任せておくことはできない」

「ですが、天連様」

スツと立ち上がると、長い裾がその動作に従いサラリと流れた。

高く結い上げた髪の前で、しゃらしゃらと簪が鳴る。

言い淀む芳姥達を、つと、目尻に朱を入れた眼で一瞥すると、彼女たちはグツと言葉を呑んだ。

「これ以上の醜い争いは無用だ。見るに耐えられない。本来、私が詫びを入れれば済む話であったらるうに」

吐息を漏らす。サツと裾を引き、足を踏み出す。行く、と短く言い放つと、蒼潤は徐姥達を従えて梨蓉の居室へと向かった。

梨蓉の室に足を踏み入れると、中にいた女達が一斉に身動いた。ざわめく。ひそひそと何かを囁いているが、言葉として聞こえてこなかった。

蒼潤はそれらには目もくれず、真っ直ぐに上座に向かい、座した。すぐに上座と向かい合うようにして、女が座した。

年頃は中年を越した程だが、まだ十分に美しい女である。これが梨蓉かと、蒼潤は見やった。

梨蓉の後ろに華やかに着飾った女達がいる。側室たちだ。じつと息を潜めるようにして、蒼潤の様子を窺っている様子である。

しばらくして、侍女が茶を運んできた。

白い器の中で波打つそれを確認してから、蒼潤は梨蓉に目を向けた。

察して、梨蓉が手を打ち鳴らす。それを合図に侍女たちは皆、室

を出ていった。

そうしてから、ようやく蒼潤は朱を入れた唇を開いた。

「我が蒼昏の娘、蒼潤である」

凜とした声を響かせると、しばらくの間、沈黙が訪れた。

誰もが息を詰めたまま、何も言えなくなってしまったのだ。

ふと、金縛りから解かれたかのように梨蓉が気付き、腰を折った。

ゆっくりと、優雅に頭を下げる。

「第二夫人、梨蓉でございます。ずっとお会いしたく思っていました」

「先日はわざわざ訪ねて来られたのに、無礼申し上げた。許して頂きたい」

「いえ」

梨蓉が微笑んだので、蒼潤はわずかに顔を緩めた。

そして、彼女の後ろに控えている女達に目を向けた。

まず、楊霞が名乗り礼をし、次に快欄、楓莉、そして、燕朋が流れるような動作で蒼潤に向かって礼をした。

蒼潤はホッと息を付いた。大事を終えた心地だった。これで畦み合いは緩和されるだろう。

けして、なくなりはない。

それは一人の男に嫁いだ女達の性だ。仕方がない。

一人の男の寵だけを頼りに他の女たちと争い、奪い合う。
子を授かれれば、その子の将来を生き甲斐にする。
そういうものなのだ。

だが、そうだと行って、それらに自分までもが巻き込まれるなど、まっぴらだった。

自分は蛾瑛の正室だが、女ではない。

彼の力を利用するために、仮に正室として治まってやっているだけだ。

蒼潤は席を立った。しやらしやらと耳元で簪が鳴る。

「女という生き物は、実に、難儀だな」

だが、理解はできる、と続けて蒼潤は己の襟元に手を掛けた。

「今までのことは、すべて水に流そう。突然現れた私という存在に、戸惑い、不安だったのだろうから。想いのやり場が他になく、あのようにならざることをしか、発散する方法がなかった。違うか？

あなた方は皆、皓煽の妻として生きている。彼の寵を失えば、存在意義を失う。

だから、私を恐れた。私への嫌がらせも、不安の現れなのだろうか？
寵を失うかもしれない、生きている意味を失うかもしれない不安の……」

蒼潤は頭を左右に振った。簪が鳴る。うるさい、と思った。

男ならば、こんな物、着けたりはしない。そう男ならば。

自分は男なのだ。

蒼潤は襟に両手を添え、左右に開いた。
バサリ、と衣が落ちると、息を呑む音が響いた。

「俺を恐れる必要なんて、ない」

「……蒼夫人？」

梨蓉が、色を失った顔で蒼潤を見上げている。
他の女たちも言葉なく、蒼潤を見上げている。

「俺はお前達と、皓煽の寵を争う気はない。俺は、男だから」

「蒼夫人……」

「天連で良い。天連、と。字で呼んで貰いたいんだ。
俺は形ばかりの皓煽の妻で、真実、俺は一度たりともあいつの女になつたつもりはない。
俺は男だし、いつか玉座に着く者だから」

梨蓉から話を聞いた峨瑛の心中は、複雑なものであった。傍らで眠る梨蓉を見やり、息を付く。

蒼潤はけしてこのように峨瑛の傍らで眠るようなことはしない。共に同じ牀を使うことはあっても、必ずお互い足を向けるようにして眠る。

形ばかりの妻にはなるが、それ以上の存在にはならないと蒼潤が頑なに拒んでいるのである。

峨瑛の方も強制はせず、それで良いと思っっている。

ただ、このままではいずれ袂を分かつ時が来る。

蒼潤はけして峨瑛の下には付かないだろう。彼は玉座を望んでいる。

そして、峨瑛も、誰の下にも付くつもりはない。己の手に入り得るすべてのものを望んでいる。

負ける気はしなかった。

蒼潤はあまりにも幼く、弱い。浅はかで、己を知らな過ぎる

蒼彰の智さえ蒼潤から遠ざけていれば容易に蒼潤を切り捨てることができらるだろう。

蒼彰さえも、蒼潤の武がなければ問題にもならず、武があったとしても、数年後の自分であればどうにかなるだろうと、峨瑛は踏んでいた。

故に、例え蒼潤が人に自身の野望を口にしようと、叶わぬことだと思えば、峨瑛の気にする事ではなかった。

捨て置けば良い。

そうなのだ。皇族の血と名さえくれるのであれば、蒼潤がどこで何をしようと、峨瑛は構わない。

捨て置けば良いのである。

では、いったい何が自分の心を乱すのか？
複雑なものとしてしまうのか？

答えに、傍らに眠る梨蓉を見下ろして、気付く。

蒼潤にも梨蓉のように自分の傍らで眠って欲しいのだ。

はたして、蒼潤は、己の手に入り得るものの一つとなるだろうか？

峨瑛は梨蓉を一人牀に残して、寢室を出た。

ふと見やると、東の空が明らみ始めていた。

28 独り想う刻 真昼の月 壱

15になっていた。

年齢の事である。実感はないが、峨瑛に嫁してから二年という月日が過ぎ去っていた。

形ばかりの妻に徹していた。

そのことを梨蓉はよく理解してくれ、奥の事は彼女がすべて取り仕切ってくれている。

側室達との確執はなくなり、擦れ違えば挨拶を交わし、時には互いの室を行き来する程になっていた。

梨蓉に至っては、蒼潤を己の子のように扱う。

評議を終え、訓練を終えると、蒼潤は時間を持て余す。

すると、梨蓉は峨瑛の子らと遊ぶようにと言うのだ。

遊び場は大抵、邸の奥にある庭 梨蓉の居室の前で、蒼潤は共に遊ぶというよりも男子に剣術を教えていた。

男子とは言うが、相手は峨旋に限っていた。

峨瑛の男子で一番の年長者は7歳の峨旋であり、次は2歳だ。

2歳の峨軒はまだ梨蓉の傍から離れようとしない。

蒼潤は身軽に地を蹴ると、振り向きざまに峨旋の手を払った。

剣術の練習用に拵えた木の棒が空を舞う。それは軽い音を立てて、遠くの方で転がった。

できる限りの手加減はしている。8歳もの差があるのだ。

だが、時々無性に力を込めたくなった。打ち殺してしまいたくない。

ウズウズと胸が騒いだ。

手を鳴らす音が聞こえ振り向くと、峨琳が蒼潤に向かって拍手をしていた。

蒼潤は額を拭った。汗など流れていなかった。

「天連様はすごいわ」

「旋が弱すぎるんだ」

峨旋が悔しそうに下唇を噛み締めているのを見やり、慌てて、まだ幼いから仕方がないのだと言い加えた。

峨琳は楊霞が生んだ峨瑛の娘だ。

峨瑛には娘が数人いる。すでに嫁いでいる者もいれば、蒼潤と年の近い者もいる。

峨琳は蒼潤よりも一つ年下で、14歳。

ちよつと前までは幼い子らと共に泥だらけになるまで遊んでいた彼女だが、近ごろは室内にすることが多い。

なぜ、と問えば、そういう年齢に達したのだと言われ、蒼潤は複雑な表情を返した。

峨琳は庭から回廊に上がる石段に座っていた。蒼潤もその隣に腰を下ろす。

甘い香り。峨琳から漂ってくるようだ。

香が苦手な蒼潤だが、彼女の香りに嫌悪感はなかった。

峨旋が弾かれた棒を探しに駆けていった。その小さい躰を目で追いながら、峨琳が口を開く。

「天連様、琴は？」

「専ら聞く専門だな」

「笛はお上手でしょう？」

「片手ほどの曲数しか吹けない」

しかも、どの曲も完璧とは言い難かった。

蒼潤が眉を寄せると、峨琳が振り向き、笑う。

「近ごろ琴の練習ばかりしているのよ。私、下手だから。もう

すぐ嫁ぐことになりそうなの」

「相手は？」

「分からない」

「……」

決まっていないうことなのか、彼女が相手を知らないということなのか、蒼潤には計りかねた。

もっとも後者だとしたら、この時代にはよくあることだ。

峨旋が戻ってきたのを目で確認し、蒼潤は腰を上げた。

空を仰ぐ。赤みを帯びた空だ。ならば、峨瑛は執務を終えて、居室にいるだろう。

蒼潤は峨瑛の居室へと足を向けた。

蒼潤が峨瑛の元へ行くと、楚雀が峨瑛の前に座していた。

彼は蒼潤に気付き席を譲った。
蒼潤が腰を下ろすのを待って、峨瑛が口を開く。

「天連か。良いところに来た」

「何？」

「貞紉のことだ」

「ていきゅう？」

すぐに、小太りの男を思いだした。

付きすぎた肉のせいで細く見える眼は、どこともない場所を見据え、顔からはすっかり血の気を引かせていた。

貞紉　二年前、壬州の乱を鎮めに峨瑛が兵を出した時、留守となった齊郡に兵を向けた赴郡太守である。

もっとも彼の野望は、蒼潤と祗恵によって、逆に赴郡を奪われる形で破られ、現在は、妻の兄にあたる椎郡太守功郁の元に身を寄せている。

「貞紉がどうした？」

食客の身である。何か事を起こすだけの力を持っているとは思えない。

それでも何か、やらかしてくれたのだろうか？

考えが顔に出してしまったのだらう。峨瑛が無言で頭を左右に振った。

代わりに楚雀が言葉を発する。

「功郁が降伏を申し出て来たのです」

「何だつて？」

「功郁は、貞紘を匿ったことで我々と敵対することとなったわけですが、殿の圧力に屈して、降伏を申し出たいとのことです。椎郡城を明け渡し、尚かつ、貞紘をも差し出すと言つてきています」

「ふ〜ん。攻め落とす手間が省けて、良かったな。なのに、なんでそんな深刻そうな顔をしているんだ？」

峨瑛は、胡座を掻いている蒼潤を見やり、重く息を漏らした。

「今、斉郡を離れるのは難しい。瓊俱の動きが気になるからな」

「けいぐ……。瓊奔帷が、か？」

「澗州の大半を制し、敖州、和州に勢力を伸ばしている。もつとも、和州には杜鄭がいる。争えば、容易には決着はつかないだろう」

「なら、何を不安に思う？ 瓊奔帷が和州に手間取っている間に、皓煥は己の力を蓄えれば良いではないか」

「もつともだが、瓊俱という男は、己の事に集中する前に、周りを意識するような男なのだ」

「それは、和州に向かう前に、皓煥に対して何かしてくるとい意味か？」

「そうだ」

蒼潤は親指の爪を前歯に当てて、視線を横にずらした。

自分は瓊俱という男を知らない。会う予定はあったが、結果的にそれは止めたのだ。

もし反呈夙連盟が結成された時、皇子として出会っていたら、自分を傀儡にしたかももしれない存在。

そう思うと、瓊俱に対して、複雑な想いが湧く。

峨瑛は瓊俱を良く思っていないらしく、峨瑛の言葉で聞いた瓊俱像はひどく醜い者のように聞こえる。

ただ分らないのは、彼は名門出であり、それを何よりも己の誇りとしているのだと、峨瑛は軽蔑の意を込めて言うが、己の家を誇りに思っただけが悪いのだろうか。

なんら能力もないくせに家柄が良いというだけで人の上に立っている、と峨瑛は言う。

なぜそのようなことを敢えて口にするのか、蒼潤には分からなかった。

僻みなのだろうか？

峨瑛は、己の生まれの卑しさから瓊俱を恨めしく思っているのだろうか。

家柄が良い者は、それだけ人の上に立つ教育を受けて育っている。

蒼潤だって、いつの日か玉座に着くために、5つの時から帝王学を学んでいる。

このことについて、峨瑛に問う事は避けた。

二人の考え方の違いはここにあるように思えたからだ。

突き詰めれば、袂を分かつことになりかねない。

蒼潤は想いを吹き払うように、頭を左右に振った。そうしてから、
ゆっくり峨瑛を見上げた。

峨瑛の瞳は静かに、蒼潤を見下ろしていた。

29 独り想う刻 真昼の月 式

呈夙が死んだ。

親子の契りを結んだ晤獏に裏切られたという。

瓊俱はその知らせを涿州の州城で聞いた。

晤獏は呈夙の他の配下に追われ、併州に去ったという。

併州で力を付けようというのだろうか。だが、併州には峨瑛がいる。

峨瑛は涿州齊郡の乱を鎮定し、壬州までも鎮め、更に併州赴郡を手に入れている。

瓊俱にとつても目障りな存在になってきたが、晤獏とぶつかり、共につぶし合うことになるかもしれない。

峨瑛と晤獏が手を結ぶ可能性は低い。双方とも飼えない獣のようなものだ。

あの呈夙でさえ晤獏を飼えきれず殺され、この自分でさえ峨瑛を飼えきれず、業を煮やしている。

飼えない獣は殺すのみだ。殺される前に手を下さねばならない。呈夙は晤獏の扱いを間違えたのだ。だが、自分は決して誤ったりはしない。

ただ誤算が一つあった。峨瑛が蒼昏の娘を娶ったことだ。

これが意外なほど人心を集めているようだ。

峨瑛もようやく血の尊さが分かってきたということか。

反呈夙連盟を結成した時のことを思い出して、瓊俱は嗤った。

人は血を見る。家柄の善し悪しで人を判断するものだ。

名門出である自分の元に集まってきた兵に比べ、峨瑛の元に集まってきた兵の少なさ。

それこそが、血が示した決定的な差である。

瓊俱と峨瑛の差。
生まれの差。そして、力の差である。

青王朝は終焉を迎えつつある。蒼家の時代はもはや終わりだ。
蒼昏の娘の血に絶る峨瑛など、自分の敵ではないだろう。
次の世は瓊家の血が作り上げるのだ。

峨皓燭。今だけだ。

お互いに幼少の時から知っている。頑なな奴だったという覚えがある。

どんなに瓊俱が手を差し伸べてやっても、峨瑛はけしてその手を取るうとはしなかったのだ。

だが、皆がそうであるように、最後には必ず自分の足下に屈するはずだと思っていた。

そうはならない、と分かった今、潰すしかない。

あれは、敵だ。

瓊俱は晤貌宛てに、そして、併州椎郡太守宛てに書状を届けるよう命じた。

晤貌が併州に流れてきた。併州の端、？郡に落ち着いたようだ。これでますます動き辛くなった、と峨瑛は卓に広げた地図を睨んだ。

蒼潤が居室にやって来た。珍しく浮かぬ表情をしていて、無言で文を峨瑛に突き付けた。

「何だ？」

「姉上からだ。お前に」

「天幸殿が？」

蒼潤の姉は蒼彰という。字は天幸だ。

蒼潤と蒼彰の仲は並の姉弟の仲ではなく、強い絆で結ばれていた。

嫁いできた後も文のやり取りをしているらしいことは、蒼潤の元に放つてある間者から聞いている。

蒼潤が余計なことを蒼彰に吹き込んだのだろう。

蒼潤にその気がなくとも、蒼彰には蒼潤の他愛もない言葉から峨瑛の現状を知ることができるとある。

蒼彰とはそういう少女だ。聡明で、実に小賢しい。

峨瑛は苦々しく思いながら、蒼潤から文を受け取った。

文面に目を通し、すぐに楚雀を呼ぶ。それから、蒼潤に振り返った。

「お前の妹は幾つになった？」

「麗のことか？ 12だ」
「12……」

以前会った時は10歳の童女だった。
だが、妙に色気があった。これは、と思わせる美しさを持っていた。

「姉上はなんて？」

「天？殿を晤貌にやれ、と」

「何だと!？」

蒼潤は足を鳴らして立ち上がった。

「麗はまだ12だ。年端もいかない妹を、よりによって晤貌などにやれるものかっ!」

もつともな反応だった。蒼彰も蒼潤の拒絶を予想して、対応策を文に記している。

峨瑛は蒼潤に向かって文を投げつけた。

「天連、座れ。天幸殿にはきちんとした考えがあるようだ」
「考え？」

「天？殿の幼さを理由に輿入れの約束だけをし、同盟を結ぶこと。ただし、この同盟は一時的なものであって、椎郡を手に入れた後は

これを破棄する」

「つまり、実際には、麗は嫁がないってことか？」

頷くと、蒼潤は安心したように再び腰を下ろした。

「だけど、それは騙すことにならないか？」

「そうだな。それに儂は同盟というものが好かん」

「好く、好かないという問題でしょうか？」

不意に声がして振り向けば、楚雀が障子戸の後ろに膝を折っていた。

入室の許可を出すと、ゆっくりとした動作で御辞儀をする。

彼が座すのを待って、峨瑛は口を開いた。

「天幸殿は儂の質を承知のようだ。晤獏との交渉は自身がやると言ってきた」

「任せても良いものでしょうか？」

「良いだろう。これで椎郡に移れるぞ。瓊俱もどうやらしばらくは和州にかかりつきりで動きそつにもないからな」

「椎郡に移るのか？」

「和州は瓊俱の影響下にある。斉郡を手放す気はないが、このまま和州内に留まり、斉郡を拠点にすることはできない。それより、併州を手に入れ、壬州、瑛州と合わせる。更に栖州、雅州をも合わせる」

「雅州……」

雅州には都、葵陽がある。

峨瑛には蒼潤を都まで連れて行ってくれる気があるのだろうか？
都にたどり着いたら、自分はどうするのだろうか？

胸がざわついた。

不安を押し込めるように、蒼潤は胸を押しさえ付ける。

視線を感じて峨瑛に振り向いたが、彼は蒼潤など見てはいなかった。

194年、春。

峨瑛は居を椎郡城へと移した。

椎郡に移り、数ヶ月が経った。季節は夏の終わりである。

事は斉郡で起きた。晤獏が動いたのだ。

晤獏が斉郡に向けて兵を挙げたという知らせを受けて、峨瑛はすぐに軍を編成した。

そこに新たな報が入った。

降伏したはずの功郁と貞紘が赴郡で兵を挙げたという。

晤獏に関しては予測の範囲にあった。

斉郡は峨瑛に、赴郡は薪葦に任せ、晤獏に対する戦準備をさせていた。

晤獏が攻め入るとしたら斉郡か赴郡だろうと読み、どちらに攻め入ってきて、もう一方がすぐに援軍を出すように命じてあった。

それが功郁と貞紘に付け入られる隙を作ってしまった。

薪葦が斉郡に向かい、空になった赴郡城を功郁と貞紘が占拠したのだという。

峨瑛は軍議を開き、蒼潤と柢恵に赴郡に向かうよう命じた。

己は斉郡に向かわなければならぬ。豪傑と言われる晤獏が相手なのだ。

他の者では勝てないだろう。峨瑛自ら軍を率いても、勝てるかどうか分からない程だ。

蒼潤の武と柢恵の策で、一度貞紘を破っている。再び二人が力を合わせれば赴郡の方はどうにかなるだろう。

軍議を終えて居室に戻ると、すぐに蒼潤がやってきた。

何の用かと問えば、ないと答える。

峨瑛の方が蒼潤に用があるのかと思ったから来たのだと、蒼潤は言った。

峨瑛は眉を寄せた。

「お前に用などないぞ」

「そうか」

「いや、待て」

室を出て行こうとする蒼潤の腕を引いて止め、その頬に手を添える。

蒼潤の瞳に怪訝そうな色が浮かんだ。

「何？」

「死ぬなよ」

「お前も。　　晤貌という男は無双の豪傑だと聞いた。赴郡に兵を割かねばならないのが痛いだろう。赴郡が片づいたら、すぐに俺も祇恵と駆け付ける。それまで耐える。俺もお前に死なれると、困るんだ」

峨瑛は眼を細め、引き止めていた腕を放した。

蒼潤は峨瑛に背を向けて、己の居室に戻っていった。

峨瑛軍が椎郡城を出てから数刻後、蒼潤と祇恵も赴郡に向かつて進軍した。

蒼潤は騎兵二百と歩兵五百を、祇恵は峨瑛から預かった騎兵五百と歩兵八百を率いていた。

副将である甄此に歩兵を任せ、騎兵を直屬部隊とした。

これら兵は皆、亘幹国から連れてきた者たちばかりで、気心が知れていた。

己の躰の一部分のように隊列を動かすことができる。

赴郡城が遠目で見える距離までやってきた。

ここいらで陣を敷こうと祇恵が言った。異論はなかった。

こういうことは祇恵の判断に任せて置いた方が間違いはない。

彼の力を知って、蒼潤は彼に任せる時をも知ったのである。

実際の戦となれば、祇恵は口を閉ざす。

戦場のその場その場の判断は、武將に任せて置いた方が良いのである。

一々軍師に尋ねていては、一瞬の時を逃してしまふ。

日が落ちた後、蒼潤が己の天幕で一人休んでいると、不意に涼しげ風が吹き込んできた。

予感がして振り返ると、少年兵がそこに立っていた。

「お前か？」

「はい」

栗石だった。

この者は常に自分の側にいてくれるが、姿を現すことはめつたにない。

姿を現す時、それはこれからよくないことが起きるといつ知らせをもたらす時である。

蒼潤の顔から血の気が引く。

「まさか、皓燭に何か……」

「皓燭様は晤貌には勝てないでしょう」

「負けるのか!? 皓燭はどうなる? 死ぬのか!？」

「……」

栗石は状況を正確に読み、先を予測するが、占い師ではない。

現状を伝えることはできても、未来を伝えることはできないのだ。

蒼潤は浮いてしまった尻を腰掛けに戻し、深く息を付いた。

栗石は黙って蒼潤を見上げている。命令を待っているのだろう。

「皓燭を死なせるな」

「では、吾の手の者を五人程送ります」

「五人で大丈夫なのか？」

「最善を尽くしさせます。ですが、吾らが最優先すべきものは貴方の命です。貴方を何よりも優先致します」

仕方がないことだ。雫石は元々蒼彰が使っていた間者だった。蒼彰が蒼潤を守るために蒼潤に与えたのだ。蒼潤は頷いた。

「それと、天連様。気になる事が」

「なんだ？」

「赴郡城の周辺を見回って見たのですが、人の気配が少ないように思っています」

「少ない？」

蒼潤は眉を寄せ、席を立った。天幕の外に出て、赴郡城の方を見やった。

城壁に赤々と松明の炎が見える。それは一つ二つではない。数えられない程多く、守兵の多さをも表していた。

功郁と貞紘は赴郡城に籠もるつもりなのだろう。

赴郡城の兵糧はほとんど薪葦が斉郡へと持ち運んだはずだ。

時をかければ、かけるほど、敵兵の飢えが味方し、城攻めは易くなるだろう。

だが、斉郡の戦のことを思えば、時はかけたくない。

蒼潤は天幕の中に振り返った。すでにそこには雫石の姿はなかった。

翌朝、柢恵に呼ばれ、蒼潤は簡易に立てられた櫓の上に登った。柢恵が赴郡城の城壁を指し示した。その方を見やると、見張りの兵の影が幾人分が見えた。

振り向くと、柢恵が親指の腹で唇をなぞっていた。

「おかしいと思わないか？」

「おかしい？」

「さつきから人影が動かないんだ。身じろぎもしない」

言われてみると、その通りのようだ。蒼潤は眉を寄せた。

「人数が少ない。」

昨夜、栗石の言葉を思い出し、踵を返した。

櫓から降りると、甄此を呼んだ。歩兵五百をもって、城攻めの指揮を執らせた。

五百が城門の前まで来ると、城壁から矢が飛んできた。

その数がどうも少ない。城壁に見える人影に比べて少ないのである。

蒼潤は舌打ちをした。

「やられた!」

「ああ」

柢恵も状況を理解し、己の兵に指示を出した。

柢恵の副官が軍を率いて甄此の加勢に回る。

城門はすぐに打ち破られた。

中を守る敵兵の数は呆れる程わずかで、城はあっけなく落ちた。人影は藁で作られた人形であり、当然ながら、功郁の姿はない。貞糺もない。

彼らは蒼潤たちが軍を率いてくる前に城を去っていたのである。

31 独り想う刻 真昼の月 肆

北の空を見やる。斉郡 峨瑛のいる方角である。だが、すぐに南西の方角に振り返った。そちらには椎郡がある。

蒼潤は功郁の顔を思い出していた。

貞紘は小男だったが、功郁は大男だった。

ただし、大男と言っても新塙のようではない。

肩幅はあっても、武人ではないので、無駄な肉が付いている。淀んだ瞳をしていた。

蒼潤はハツと胸を押さえた。椎郡に向かって、馬首を返す。

「椎郡だ。急いで、椎郡城に戻ろう」

「功郁が斉郡に向かった可能性は？」

功郁が赴郡城に立て籠もっても勝機はない。

斉郡で峨瑛と戦っている晤貌に味方し、峨瑛を討った後に赴郡を奪った方が賢いというものだろう。

だが。

「伯陽自身はどう思うんだ？」

「天連と同じ考えだ。椎郡城に戻ろう」

功郁は淀んだ瞳をしていた。

あの瞳は己の野望しか考えていない者の瞳だ。

貪欲だが、狭く、暗い。

功郁は椎郡の太守だった。己の城を取り戻す事を第一に考え、動くだろう。

祇恵が乗馬するのを待つて、蒼潤は馬を走らせた。

騎兵だけを連れていた。歩兵は甄此に任せ、赴郡の後始末のために残した。

祇恵も騎兵だけを率いて追ってくる。

一日で150里を移動した。

ほとんど休まずに駆けさせたので、数頭の馬が潰れた。兵も減っている。

蒼潤も二度馬を変え、ひどく息を切らせている。

椎郡に入ると、すぐに斥候から功郁軍の動向について情報が入った。

やはり功郁は椎郡に攻め入っていた。城を取り囲んでいると言う。

蒼潤は銅鑼を鳴らさせた。

城門に向かって真っ直ぐに駆け抜ける。

道を妨げようとする敵兵を打ち払いながら、味方が開いてくれた門から城内へと駆け込んだ。

返り血を浴びていた。いくつか傷も負っているはずだ。

手当を進めてくる徐姥たちの手を払い、蒼潤は梨蓉の元へ急いだ。

梨蓉の室に行くと、他の側室たちも集まっていた。

蒼潤は具足を付けたままであることを先に謝り、彼女たちの上座に腰を下ろした。

「逃げてください」

「覚悟はできています」

「覚悟？」

「妾たちが逃げる余裕はもはやありませんまい。天連殿は旋と軒だけでも連れて行って下さい」

「妾たちは足手まといになります」

逃げ遅れた妻子が敵に捕まれば、殺されるのが乱世の常だ。

殺されるだけならば、まだ良い。美しい女は凌辱される。

蒼潤は頭を左右に振った。

そうだと知って、彼女たちを切り捨てることなど、蒼潤にはできなかった。

「側室が逃げずにいるものを、正室が一人で逃げ出せるものかつ。功郁はお前達に尋ねるだろう。峨皓煽の正室は誰か、と。その時は何と答える？」

「その時は、恐れながら春蘭を身代わりに」「春蘭を！？」

答えたのは徐姥だった。蒼潤は怒りに顔を赤らめる。

「そんなこと、許さないっ！」

「ですが、天連様」

「旋と軒は伯陽に任せる。二人は伯陽に逃がして貰う。そして、俺はここに残る！」

峨瑛の正室が蒼昏の娘　蒼潤だということは広く知られるようになっていく。

知らぬ功郁ではないだろう。

皇室に連なる娘が手に入るとなれば、まず会おうと思うもの。

会うとなれば、顔を付き合わせるだけで済むはずがない。

功郁の女にされるのだ。寝室に侍らされ、凌辱される。

蒼潤の身代わりに芳詔が功郁に凌辱されるのかと思うと、蒼潤の全身の血が沸きだった。

ぐっと唇を結んで、蒼潤は席を立った。

峨旋と峨軒を連れて城門に向かうと、祇恵が峨瑛の妻子が乗るための輿を用意させていた。

蒼潤が幼子しか連れていないのを見て、祇恵は慌てて駆け寄っていた。

「輿はいらない。二人を抱えて馬に乗るんだ」

「乗馬が得意な者を選び、お二人を任せよう。それより、奥方様たちは？」

「ここに残られるそうだ。足手まといにはなりたくない、と」

「確かに、輿を率いては逃げ延びられるかどうか。だが、それでは……」

「俺がここに残って、最後まで抵抗を続けてみる」

「それなら、俺も」

蒼潤は首を横に振った。祇恵の手に彼の馬の手綱を持たせる。

「お前には若君たちを任せる。今は俺がお前しかいない。お前が残るよりも、俺が残った方が抵抗も様になるだろう。もしかすると、援軍が来るまで守り抜けるかもしれない」

「……」

「伯陽？」

俯いた柢恵を、蒼潤が不安げに覗き込むと、彼は顔を上げてニッと笑う。

バシン、と蒼潤の背を叩き、深く頷いた。

「お前を信じる」

柢恵たちを逃すために、蒼潤は城壁の上から指示を出して、矢を射させた。

蒼潤の部下をも柢恵は率いていったので、雨のような矢とまではいかない。

柢恵が自らの力で敵の囲いを突き破り、逃げ延びるしかないのだ。

蒼潤たちの3倍以上の軍勢。

これだけの兵をどこに隠していたのだろうか？

峨瑛に降伏した際、功郁はその兵力を峨瑛軍に吸収されているはずだ。

これだけの兵力を持っているはずがないのだ。

救いは、功郁軍には統一性がなく、動きにもどこか甘さがあるところだった。

柢恵が逃げていく様子確かめ、蒼潤はその場を甄此に任せた。栗石を呼ぶ。すぐに声が返ってきた。

「功郁の背後に誰がいるのか？」

「おそらく」

「その者が功郁に兵を貸し出した。何のためだ？」

蒼潤は峨瑛邸に向かった。居室で具足を脱ぎ、女物を身に着けるつもりだった。

「今回の功郁の動きは、晤貌に連動したものだ。裏で糸を引いている者は、誰だと思う？」

「皓煽様を邪魔に思う者」

「瓊奔帷か？」

「……」

栗石の気配が消えた。芳詔が駆け付けてきたからだ。

祗恵と共に逃げなかったことを責められながら、蒼潤は具足を脱ぎ捨てた。

32 君唄う刻 死を運ぶ船 壱

齊郡でのことを、峨瑛は戦場で知った。

翌日、椎郡からも早馬が届いた。

峨瑛は南の空に上体だけで振り返る。そして、再び前方を睨み付けた。

晤獏の黒い軍勢が見えた。

晤獏軍の具足は皆すべて黒一色であり、特に騎馬隊は青毛馬に乗り、その鞍も鐙も黒い。

統一が取れており、まるで一匹獣のように動く。大きな黒い獣である。

駆け抜けて行った後には、何も残らない。

血の海と屍の山。獣が食い散らかした後に残るものは、そればかりだ。

どう見ても、戦況は思わしくなかった。

まだ完全には負けていない。

だが、それでさえ、峨瑛を誘き寄せさせるための晤獏の策のような気がしてならない。

晤獏の勝ちが決定的と見れば、峨瑛軍は逃げ出すだろう。それは峨瑛の首は取れない。

峨瑛が逃げないように、わざと隙を見せている。そう、峨瑛には感じられた。

嫌な空気である。不吉な流れに乗ってしまったようだ。

峨瑛は兜を取ると、天幕の内に入った。

薪塙がやって来た。

峨瑛の顔を見やり、不幸を呼びそうな顔をしていると苦笑し、大げさな程のため息を付いた。

「兵を引こう」

「まだ負けてはいない」

「このままでは負ける。ただでさえ負けそうな戦況だ。

その上、夫人たちのことで、お前は心が乱れている」

「女などに左右されるものか」

「だが事実、お前は南の空ばかりを見つめている。そんなに梨

夫人が心配か？」

「蓉が？」

思いがけない名前に峨瑛は驚く。

梨蓉のことなど、今の今まで忘れていたくらいだ。

蒼潤は斉郡城を攻め落とし、椎郡に駆け戻り、祇恵たちを逃したのだと聞く。

そのまま共に自身も逃れれば良かったものを、なぜか蒼潤は椎郡城に残ったというから、峨瑛は頭が痛い。

そうか、椎郡城には梨蓉がいるのか。梨蓉ならば、蒼潤をうまく隠してくれるかもしれない。

功郁はまず蒼潤に会おうとするだろう。

峨瑛に嫁いだ蒼昏の娘がどれ程のものなのか、誰だろうと興味あることだ。

功郁が蒼潤を殺す心配はない。

問題は、蒼潤が男子だと知った功郁が彼をどう扱うかだ。

血を重んじる時代である。

もつとも高貴とされる蒼家の血を利用しないはずがない。

蒼家、特に蒼潤の血は、使いようによっては玉璽にも等しい価値を持つ。

瓊俱もしくは晤獮、または他の何者かと手を結ぶ際の交渉材料にするつもりだろうか。

功郁に野心があるならば、蒼潤の血を頼りに玉座を手に入れようとするかもしれない。

蒼潤を玉座へと押し上げ、その後見人になるという手もある。

その時、蒼潤はどう動くだろうか？

峨瑛は拳を作り、それをギシギシと音を立てて握り締めた。

蒼潤と峨瑛は、お互いの利害で結ばれた関係に過ぎない。

初めはそれで構わないと思っていたが、近ごろでは時々、それが堪らなく虚しいもののように思っていた。

もしも、蒼潤が瓊俱と出会い、言葉を交わしたのならば、蒼潤は峨瑛を捨て、瓊俱の元へ行くかもしれない。

蒼潤と峨瑛とではどこか相容れない部分があるが、瓊俱とならば蒼潤は案外考えを同じにしているのかもしれない。

いや、それよりも、蒼潤は思うだろうか。功郁の方が峨瑛よりも扱い易い、と。

このまま峨瑛の元にしても峨瑛の力を強めるだけで、それどころか、いつか峨瑛が己の巨大な敵となるだけだ。

峨瑛は蒼家の血の何かを知り、その利用法を十分に知っている。蒼潤は功郁という男をまだよくは知らないが、おそらく峨瑛よりは小物だと思ふことだろう。

扱いやすい相手だと。

例え一時力を与えることとなっても、いつでも打ち負かすことのできる相手だと、蒼潤なら判るはずだ。

天連が儂を捨てるか。

手のひらの痛みに顔を顰め、峨瑛は己の手を目の前にかざした。

爪の痕に薄く血が滲んでいた。

梨蓉や他の女達、子どもらなことなど頭になかった。

ただ、蒼潤だけのことか峨瑛の胸の内を乱していた。

蒼潤が自分ではない他の男の元にいる。

それは、やっとの思いで人慣れさせた獣を横取りされたような気持ちに似ていた。

あれは自分のモノだ、という思いで胸が溢れていた。

奪い返さねば！

峨瑛は薪塙に背を向け、あらゆる感情を押し殺したような声で、退却の指示を出した。

椎郡城はあつけなく落ちた。

蒼潤が邸の奥に引っ込んでから数刻後のことだった。

地響きがして、城門が押し開けられたことを知った。

女達を蒼潤の室に集めた。

五人の側室、妾妃と呼ばれる二十人、そして、無位の女達とそれらの仕える侍女たち。

峨瑛の娘たちもいる。

皆、悲痛な顔をしている。

彼女たちの不安を和らげるように、蒼潤は毅然として上座に立った。

「お前達は必ず俺が皓燭の元へ返してやる。梨夫人、身籠もっている者はいるか？」

「二人ほど」

「隠せ。それから、娘たちもだ」

真っ先に殺されるのは、子ども。そして、子を腹に宿している女である。

蒼潤の指示で、二人の女と峨瑛の娘たちが衣装箱の中に隠された。

峨琳と目が合った時、蒼潤はフツと笑みを漏らした。

彼女の瞳の輝きは、どこことなく峨瑛に似ている。

皓焔は晤貌を撃ち払っただろうか？

彼のことを一瞬だけ想った。

33 君唄う刻 死を運ぶ船 弐

足音が近づいてくる。

ドツドツドツドツ。もはや足音とは言い難く、地響きだ。

音から人数を知るのとは不可能である。数が多すぎる。

揺れる。建物全体が揺れ動かされているようだ。

何かが迫ってくる。人の群れ。それは、途轍もなく大きな恐怖だ。

バンツ。

目の前で手を打たれたような衝撃があった。

扉を蹴り破られたのだと気付くまで、間を必要とした。

ムツと鼻を付く臭気。

血を大量に浴びた男達がズカズカと蒼潤の居室の中に踏み込んできた。

女達の声なき悲鳴を聞いて、蒼潤は立ち上がる。

「誰だ？」

男達の先頭に功郁がいた。大男なので、すぐに目に付く。

功郁だと知りながら、蒼潤は敢えて彼に名を尋ねた。

彼は嗤った。女達をぐるりと見回す。

「貴女が、峨瑛の妻、蒼夫人であられるか？」

「いかにも。我は蒼昏の娘、蒼潤。ここは私の居室。そなた達はそうと知っていて尚も踏み込んだのか。無礼者っ！」

いかなる状況でも青王朝下においては蒼家の血と名は絶対である。

功郁は蒼潤の言葉に圧倒されたようだったが、すぐにグツと咽を鳴らし、厭らしい笑みを浮かべた。

「峨瑛の妻に言い渡す。この城は功郁の手に落ちた。よって、城内にあるものすべては功郁の支配下にあるとする」

功郁はチラリと背後に控えた部下達を見やった。

「身重の女を殺せ。峨瑛の娘たちをも。蒼夫人には手を出してはならん。瓊奔帷殿への貢ぎ物だ。見目の良い女を数人選び、儂の寝室に寄こせ。あとはお前達の好きにして良い」

男達から歓声が上がリ、女達は青ざめる。

やはり、と蒼潤は舌打ちをした。功郁の後ろには瓊俱がいたのだ。

おそらく、功郁に兵を貸す代わりに、峨瑛から蒼潤を奪ってこいと命じられたに違いない。

蒼潤は傍らに置いておいた剣を握った。

素早く鞘を抜く。その気配で今にも去ろうとしていた功郁が振り

返った。

「何を？」

「取引だ。ここにいる女達には指一本触れてはならない。その代わり、わたしに流れる蒼家の血はお前のものだ」

「そんな取引など……」

「承諾できないとあれば、この首、己の手で、かつ切る！」

「何！？」

功郁は蒼潤を殺せない。瓊俱が蒼潤を望んでいるからだ。それほど、自分の内に流れる血は人の欲望を惹き付ける。

蒼彰に諭され、峨瑛に出会い、蒼潤はそのことを身に染みて知った。

血が何よりも強い力を持っている。

人は高貴な血を求め、争い、奪い合う。

だが、そうすることを許された者もまた、高貴な血を持つ者に限られていた。

血こそが力。 血こそが権利。

だから、峨瑛は蒼潤を欲し、瓊俱もまた蒼潤が欲しいのだろう。

峨瑛と出会ってから蒼潤は、自分に対して、その内に流れる血のみを求めてくる者の考えを、少しだけ知った。

そういう者には、血で対抗するしかない。己の身をもって脅すのである。

青ざめた顔が蒼潤の元へ、フラリフラリと近づいてきた。
蒼潤はキツと彼を睨み上げた。

「この女達に、貴女が我が身に代えてまで守る価値あると思われるのか？」

「同じ男に嫁いだ姉妹だと、ここにいる梨夫人に諭されたことがある」

「馬鹿なっ」

「女達を皓燭の元へ返すのならば、わたしは大人しくお前に従おう」

言い放つと、梨蓉が蒼潤の袖を引いた。彼女は黙って、首を横に振る。

大丈夫だと蒼潤は微笑んだ。

功郁がずいっと蒼潤に顔を寄せた。ジツと見入るように蒼潤の顔を眺めている。

「貴女の祖母、甄皇后は大層美しい方だったと聞く。なるほど、貴女も美しい」

「なんだと？」

「瓊俱などにくれてやるのが惜しくなった」

「兵を借りておいて、約束を違える気か？」

「献上しろとは言われていない。峨瑛から貴女を奪えとだけ言われた。峨瑛の元に貴女がないのならば、それで良いのだ」

功郁の太い指が蒼潤の頬に触れそうになり、蒼潤はそれを叩き払った。

「女達の代わりに貴女が手に入ると、今先程聞いた覚えがありますか？」

下卑た笑みだ。吐き気がする。蒼潤は拳を振るわせた。

寝台の上で功郁に衣を剥ぎ取られ、素肌を晒す自分が見えたような気がした。

男の身だと知って、功郁は仰天するだろう。

その顔を想像して滑稽に思ふ半面、知られた自分自身が情けなくもある。

本来ならば皇子であるはずの自分が女装して、男に嫁しているのだから、笑い話である。

蒼潤が男だと知った功郁はどうするだろうか？

蒼潤に対する己の征服力を満たすために、構わず、蒼潤の躰を犯すだろうか？

男同士でもできるのだということは、峨瑛に聞いている。

峨瑛は、自分にはそういう趣味はないからやらないのだと言っていたが、そういう趣味はなくともできる、とも言っていた。

試してみるか、と何度か尋ねられたことはあるが、蒼潤は否と答え続けている。

好奇心はあったが、どう考えても男同士の行為には意味がないような気がしてならなかった。

男同士では、その行為から子が成されないからだ。

峨瑛は度々蒼潤に向かって女を抱くことの重要性を説く。

王者にしる、覇者にしる、人の上に立つ者の第一の使命は、子を

残すことである、と。

その者が急死した時、後を継ぐ者がなければ下にいる者は迷い、争いを始めるのだという。

そう言つて、彼は蒼潤に女を薦めてくるが、これに対しても蒼潤は否と答えている。

男として生きられていない現状を考えれば、当然の事だった。子を成すことが大切だということは分かる。

すると余計に、男同士の行為は無意味なものでしかないとハッキリする。

それだけの労力があるのならば、女に対して行えとさえ思う。

だが、今、功郁が蒼潤に対して行うかもしれない行為には、蒼潤を征服するという意味では十分に意味がある行為であり、間違えなく、蒼潤は功郁に抗う気を失うだろう。

膝が震え出す。怒りが恐怖へと転じた。

こんな奴に。

功郁に屈するくらいならば首を切った方がましだった。

だが、自分が死んだ後の梨蓉たちを思うと、それはできない。

蒼潤は剣から手を放した。カラン、と軽い音が響く。

剣は峨瑛に頼んで、軽い物を選んで買って貰っていた。

功郁の指が蒼潤の顎をなぞる。ゾクツと悪寒が走った。

気持ちが悪い。吐き気がする。

今すぐにでも彼を殴り飛ばしたくて、全身がウズウズと疼いた。

太い指が蒼潤の胸の合わせに伸びた時だった。

不意に、その指を横から取った者がいた。

「蒼夫人はまだ幼く、胸も真つ平らなんですよ。ほら、お触りくださいな。まるで板のよう。比べて、妾の胸の豊かなこと。ね？」

「……楓夫人？」

「幼子が好みかと嗤われますわよ、峨皓煽のように」

楓莉だった。真つ赤に塗った唇を緩く横に引き、クスクスと笑う。彼女は蒼潤を押し退け、功郁の胸に飛び込むと、甘く何かを彼に囁いた。

功郁は大きく笑い声を響かせる。

「そうか。そうか。峨瑛は胸のない幼子が好みであるか」

「貴方様はどのような胸の女がお好みでございますか？ 妾のような胸は如何でしょうか？」

止める間などなかった。楓莉はスツと胸元を開いて、白く綺麗な胸を晒した。

その零れ落ちるばかりの豊満な胸は大きな瓜のようで、だが、とても柔らかさそうである。

蒼潤でさえ見れば、触れなくなる魅力的な肌だ。功郁が何も思わないはずがない。

ゴクリ、と唾を飲み込む音が聞こえた。

彼は楓莉を見つめる幾つもの男の眼に気が付いて、大声を張り上げ、散らした。

惜しそくに、恨めしそくに、男達は各々の持ち場に去っていった。功郁の血走った眼が蒼潤を見やり、そして、楓莉を見やった。

「蒼夫人を抱いても、板を抱くようなもの。代わりに妾がお相手致しますわ。その代わり、他の女には手出しは無用。妾は嫉妬深いのです。他の女に触れた手で妾に触れることは、許しません！」
「……いいだろう。ただし、存分に楽しませて貰う」

ふふふつ、と楓莉が笑い声を漏らした。

彼女は蒼潤の方を見ようとはしない。

梨蓉の方も、そして、他のどの女達の方も。

「楓夫人。……楓莉っ！」

止める、と叫びたかった。

彼女が自分の身代わりになろうとしているというのに、声が出なかった。

助けない、と思うのに。

守りたいと思ったから、ここに残ったのに、逆に守られている。なんて、情けない。

梨蓉が蒼潤の袖を引いた。蒼潤は膝を折り、その場に尻を着いた。

功郁が楓莉の肩を抱いて、寝室の方へと入っていくのが見えた。目の前が真っ白になった。

34 君唄う刻 死を運ぶ船 参

気持ち悪い。

気持ち悪い。

気持ち悪い。

耐え難い吐き気に、口を袖で覆う。

梨蓉が背中をさすってくれた。

徐姥が水を運んできてくれたが、飲めなかった。

吐き気が迫ってきて、唾を飲み込み、何とか耐えた。

気持ち悪い。

気持ち悪い。

気持ち悪い。

全身が耳になってしまったかのように、隣室の音を拾ってしまふ。
聞きたくないのに！

喘ぎ声。

女の悲鳴に、男の歓喜の音が混ざって聞こえてくる。

喘ぎ声。

そして、寝台が軋む音。

楓莉の声だとは思えなかった。

人間から発せられた声だとさえ思えなかった。

だが、その喘ぎ声は楓莉のものであり、彼女は時々悲鳴をも上げる。

何度、剣の柄に手を伸ばしただろう。

その度に、その手を梨蓉に押さえ付けられた。

見上げると、彼女は悲しげな瞳で頭を左右に振る。

蒼潤は唇を噛み締めた。口の中に鉄の味が広がる。

梨蓉に唇を拭かれて、薄皮を噛み千切っていたことを知った。

寝室が静かになったかと思ったら、再び、寝台が軋む音が響いた。

ギシギシ、と。

寝台ではなく、楓莉の躰なのではないかと思い、血の気が引く。

肉と肉がぶつかり合う音。

楓莉の悲鳴。

喘ぎ。

悲鳴。

悲鳴。

悲鳴。

守りたいと思っていたのに。

峨瑛の側室の中では、楓莉が一番蒼潤と年が近い。

そのせいか、蒼潤が嫁いできた時、楓莉が一番蒼潤に対して、對抗心を燃やしたようだった。

率先して嫌がらせをしてきたのは彼女だ。

意志が強い彼女は頑固でもあり、一度決めた態度をなかなか変えようとはしなかった。

他の側室達とは和解できた後でも、楓莉とだけはうまく付き合えない時期が続いた。

だが、そんなある日、彼女はふらりと蒼潤の居室にやって来て、偶々手に入ったからと言い、蒼潤の手に馬の額飾りを押し付けてきた。

馬具である。女が偶々手に入ったと言うには、些か無理がある品のような気がした。

すぐに蒼潤のために取り寄せたのだと知って、これが彼女の謝罪だと悟った。

謝罪を受け入れる意味を込めて、馬具を遠慮無く貰い受けると、彼女は満足そうに笑った。

不機嫌そうな顔。仮面を付けているかのような無表情。

笑うと言っても、冷ややかな笑みしか見せなかった彼女が初めて蒼潤に見せた笑顔だった。

あの笑顔が、あの美しい顔が、今、苦痛で歪んでいるのだと思うと、堪らなかつた。

胸が痛い。

苦しくて、苦しくて、痛いのだ。

吐き気。

吐きたい。
血も、内臓も、何もかも、吐き出してしまいたい。
そうすれば、ラクになれる気がした。

白い光が薄く戸の隙間から差し込んできた。
朝か、と誰かが呟いた。

寝室を見やる。いつの間にか声がしなくなっている。
身動きをしている気配も感じられない。

功郁は眠ったのだろうか。楓莉は？

寝室の内を覗きたいとは思うが、その勇氣はなかった。

予感がした。蒼潤は辺りを見渡す。
すると、そのまま、と囁きが聞こえた。

「皓燭様が椎郡に向かつております」

栗石だった。蒼潤にしか聞き取れないような小声で話しかけてくる。

姿は見えない。探しても無駄だろうと思ひ、蒼潤は振り向かず、頷いた。

「晤貌との戦を捨てて、兵を急がせてこちらに。すでに20里のところまでおいでです」

「まさか！」

思わず声を出してしまい、しまったと思う。慌てて口を閉ざしたが、今更だった。

栗石の気配は消えてしまった。

去ってしまったのだと気付いて、蒼潤は舌打ちをした。

信じられなかった。峨瑛が晤貌との戦を捨てるだなんて。

女がそれほどに大切なのか？ それとも、椎郡か？

「皓燭が来る」

どちらでも良い。

それほど大事にしている女のためだろうと、椎郡という土地の利を捨てられなかったのだろうと。

蒼潤にとっては、どうでも良いことだ。

そんなことよりも、彼が来る、助けが来るという事実の方が大きかった。

ホツと暖かいものが胸の中に広がった。

功郁の従者が大慌てで駆け込んできた。
女達を一瞥して、寢室の方へと向かう。

「殿、峨瑛軍が」

寢室から、鼻にかかったようなぐもった声が返事をした。
しばらくあつて、簡単に衣類を身に着けた功郁が姿を現し、やはり女達を一瞥して廊下へと駆けていった。

その足音が完全に遠のいてから、梨蓉が席を立った。寢室へと駆け込む。

蒼潤も楓莉のことが気になったが、ここは梨蓉に任せることにした。

耳を澄ませると、悲鳴のような声が聞こえ、それから小さな話し声が聞こえた。

楊霞と快欄、燕朋らが腰を上げたのを見て、蒼潤は楊霞の腕を掴んだ。

「皓焮がもうじき助けに来る。そう、楓莉に伝えてくれ」

「殿が？ 本当ですか？」

「本当だ。だから、もう心配はない、と」

「分かりました」

彼女たちの表情がパツと輝き、女達は皆、安堵の声を上げた。だが、その安堵感は一瞬のものに過ぎなかった。寢室から、けたたましい物音が聞こえ、蒼潤は剣を握り締めた。徐姥の制止も聞かず、寢室に駆け込んだ。

「どうした？ 何をしている？」

「天連様っ」

「楓夫人をお止めください」

見やると、楓莉が己の首元に短剣を突き付けている。

なぜ、彼女がそんなことをしているのか、蒼潤にはまったく理解できない。

やっと助けが来るというのに。

楓莉の顔をジツと見据えた。

殴られたのだろうか。顔に青く痣ができている。肩には歯形が痛々しく、腕や胸、そこら中に鬱血した痕が見えた。脚を見やり、思わずギョツとする。長く、白濁した線が伝っていた。

それが何であるか分かり、蒼潤の顔が青ざめる。

汚い。

ふとそんな思いが湧いてしまった。

楓莉が笑った。蒼潤の気持ちなどすべてお見通しだというばかりに。

「この穢れた躰を、殿にはお見せしたくない。皓煽様に見て欲しく

ない！」

何も言えなかった。

言いたい言葉はたくさんある。彼女を死なせたくなかった。

生きていて欲しいと思う。どんな形でもいい。生きていさえすれば。

昨夜、守れなかった代わりにこれから先はどんなことでも自分が守ってやりたいと思う。

だけど、蒼潤は思ってしまったのだ。例えそれが一瞬だったとしても、思ってしまった。

汚い、と。

一晩中思う様に功郁に犯され続けた躰を見て、汚らわしいと思っ
てしまった。

気持ち悪い。

功郁の行為が許せないと同時に、その功郁に犯された楓莉がひどく醜いものになってしまったかのように思えたのだ。

吐き気。耐え難い。

止めたい。だけど、何もできなかった。

ただ己の剣を握り締めて、楓莉が自身の咽を突く様を見守っていた。

35 君唄う刻 死を運ぶ船 肆

ざわめきは遠い。

それは外の世界での出来事だ。

我に返ると、蒼潤は己が泣いていることに気付いた。
涙が止まらなかった。

彼女を殺したのは、誰でもない。自分だ。
自分がこうなるべきだった。

こうなるべきだった自分の代わりに、楓莉が死んだのだ。

泣いて許されるはずがない。
だが、涙は止まらない。

彼女の亡骸に駆け寄って、カ一杯に抱き締めた。
しだいに、彼女は冷たくなっていった。

峨瑛が蒼潤の元へ駆け付けた時、蒼潤は楓莉を抱き締めた格好のまま放心していた。

彼に気付き、蒼潤は、見るな、と叫んだ。

死んだ楓莉を、彼だけには見せたくなかった。

梨蓉が己の上着を脱いで、楓莉に被せてくれた。楊霞も快欄も、燕朋もそれに習う。

四人分の上着で楓莉をくるみ、そのまま抱き上げた。

男子にしても、女子にしても、小柄な蒼潤だ。

楓莉の躰は蒼潤の腕から大きくはみ出していた。

重い。命を失った軀は重く、そして、その重さは蒼潤の罪意識と後悔の重さでもあった。

「どこに運ぶ気だ？」

「お前の眼に、けして触れないようなところだ」
「……」

峨瑛は何も言わなかった。

ただ、甄此に蒼潤の手伝いをするように命じたただけだ。

蒼潤は中庭に出て、ぐるりと辺りを見渡した。

どこか、綺麗で静かなところに葬ってやりたい。

誰の目にも触れないようなところに。

心配がして、雫石がそつと蒼潤の耳元で囁いた。

適当な場所があると言う。
その場所を見て、蒼潤も頷いた。

功郁が生きたまま捕らえられたと聞いて、蒼潤は峨瑛に彼の処刑を望んだ。

生きたまま全身の皮を剥ぎ、剥き出しになった皮膚に塩水をかけて欲しい、と言った。

峨瑛は承知し、功郁が死ぬまでその身に塩水を浴びせ続けさせた。功郁が死ぬと、蒼潤は、その首を切り落とし、頭部は城壁に晒し、腹を裂き、獣に喰わせるようにと、峨瑛に頼んだ。

これには峨瑛は眉を寄せたが、結局、蒼潤の思うように命じてくれない。

夜、蒼潤は峨瑛の寝室を訪ねた。

自身の寝室は蒼潤の命で、甄此が打ち壊した。

そこで功郁が楓莉を犯したのだと思うと、休もうという気分には

なれなかったのだ。

打ち壊し、一から建て直すことを命じた。

これに対しても峨瑛は呆れたが、やはり何も言わなかった。

蒼潤が寢室を覗き込むと、峨瑛は寝台に腰を下ろし、書物を読んでいた。

すぐに蒼潤に気付き、眼を細める。

「寝る場所がない」

「壊したりなどするからだ」

「……」

「……怪我はないか？」

「ない」

「見せてみる」

峨瑛は蒼潤を手招いた。

大人しく従い、蒼潤は彼の大きく開かれた膝の間に立った。

峨瑛の手が蒼潤の夜着を開き、肌の上を滑っていく。

ぞくり、として、蒼潤は彼の手を止めた。

「お前は？」

「ん？」

「怪我、ないのか？」

「ないことは、ないな」

「そうか」

それつきり黙ってしまった蒼潤に、峨瑛は眉を寄せた。

蒼潤は小首を傾げる。

「それだけか？ 手当をしてやろうという気にはならんのか？」

「俺はそんなこと、したことがない。それにお前が自分でやった方が、きつと上手くできるだろう」

「うむ」

そんなことより、と蒼潤は峨瑛の肩に己の額をぶつけた。

「……楓莉を死なせてしまった」

「……」

「すまない。お前の女を殺してしまった。お前が戦を捨ててまで助け出そうとしていた女を」

「天連、それは」

蒼潤は頭を左右に振った。

振った頭がやたら重いのは、未だに髪を結び上げているからだ。

髪型ばかりは女で、晒した身体は少年のものだという、不自然な姿をしていた。

峨瑛の言葉など、聞きたくはなかった。

誰でも良かったのだ。峨瑛である必要なんてない。ただ誰かに自分の罪を告白したかっただけだ。

そして、それに対する許しが欲しかったのだ。
聞いて欲しかっただけ。
言葉なんていらぬ。慰めなんて。

「楓莉を殺してしまった！」

ああああああああ、と叫んで、泣いた。

峨瑛が見ていることなどお構えなしに泣き叫んだ。

恥ずかしげもなく、赤子のように泣いて、泣き続けた。

彼女を失ってしまったことが悲しくて、悔しくて。

自分が情けなくて、辛くて、どうしようもなかった。

ただ、泣きたかった。

やり場のない思いを発散する方法が泣くしかなかったのだろう。

涙は止まらない。

峨瑛が背に手を回し、抱き寄せてくれたが、その温もりだって、本来ならば自分ではなく楓莉のものだったかもしれないと思うと切なくなつた。

そうして、泣くしかない自分が、ひどく腹ただしかった。

36 夢馳せる刻 青嵐の都 壱

瞼を開くと、目の前に蒼潤の顔があった。

蒼潤の祖母は、擦れ違った誰もが振り返ったと言われる程の美しさを持っていたという。

そして、蒼潤の同母妹の蒼麗は、幼いながらもハツとする美貌を持っている。

峨瑛は傍らに横たわる蒼潤の寝顔を覗き込んだ。

艶やかな黒髪。肌は白く、滑らかだ。

蒼潤の眼には強い輝きがある。どこか反逆的で、野心的な、決して服従しない獣のような眼だ。

それが唯一の蒼潤の男子らしさであると言える。

その眼が閉ざされている今、蒼潤は少女にしか見えぬ、峨瑛の思い通りになる女のようなのである。

楓莉が死んでから半月が経っていた。それ以前は互いに足を向けるようにして休んでいた。

楓莉の死に、泣きじゃくる蒼潤を抱き締めて眠った日を境に、同じ方向に頭を向けて眠るようになった。

何かが、峨瑛の中で変わったようだ。そして、蒼潤の中でも何かが変わった。

互いの、相手の位置が変わった。

峨瑛は蒼潤を胸に抱いて眠ることができるようになったし、蒼潤も峨瑛の前でしばしの間だけ獣の眼を閉ざすようになった。

それがどういう意味を成しているのか、まだ分からない。

蒼潤がこのまま獣の眼を閉ざしているというのなら、峨瑛も彼を胸に抱き続けるだろう。

だが、蒼潤が自分に牙を剥くと言うのなら。

おそらく、このままというわけには、いかないだろう。

峨瑛は功郁を討った後、併州を平定した。椎郡城を併州城と改め、しばらくの間の拠点とした。

齊郡を奪った晤貌はその地を瓊俱に譲り、壬州へと流れた。

壬州にはある男がいる。

蒼邦。字は哩址という。

同じ蒼姓を名乗っているが、邦という名を蒼潤は未だかつて聞いたことがなかった。

栗石に調べさせたところ、数代遡った帝の子孫にあたる者だという。

遠い親戚もいどころで、本当に同じ血が流れているのかも疑わしい。

確かな証となるものもなく、『得体が知れない者』というのが、その者の存在を知った時の蒼潤の率直な感想だった。

晤貌が壬州に入り、そこを乗っ取ると、蒼邦は峨瑛を頼って併州に流れてきた。

晤貌を敵としている点で、峨瑛は自分を拒まないだろうと踏んだのだ。

併州城に客将として招かれてしばらく経った後、蒼邦は蒼潤と話がしたいと言い出した。

同姓の誼だと言ったが、蒼潤は彼に会わなかった。気が向かなかったのだ。

楓莉の死に顔が脳裏に焼き付き、離れない。

そうしているうちは新しいことを始めようという気にはなれなかった。

当然、新たな者と知り合う気分にもなれない。

面倒臭い。煩わしい。

何かと真剣に向き合わなければならぬという事態を避けたかった。

調練に参加したり、峨旋に武術を教えたり、それこそは楓莉を失う前と変わらぬことを行い、過ごしていた。

変わらない。どこも変わっていないと思うのは己だけで、覇気がないと人には見られていたようだ。

ないと言われれば、ないのだろう。何もかもが煩わしいのだから。

芳詔には心配され、甄此には気を遣われる。

薪塢には怒鳴られ、祗恵には肩を竦められた。

あげく、峨瑛である。絹を手に入れたと言っては姿を現し、櫛だ、

簪だ、と言って蒼潤に寄こした。

礼を言うのも億劫になってきた頃になると、馬を贈って寄こすようになった。

馬は嬉しい。だが、それだけのことだった。気は晴れない。

楓莉の死は、何か取り返しの付かないモノの損失で、それは、女というものの生が犠牲と隣り合わせだということを知らされた衝撃を含んでいた。

男が戦を起こす。女はその戦に翻弄される。

どうして楓莉は死ななければならなかったのだろうか？

疑問が湧き、それは彼女が女だったからだという結論に至る。

男が憎く、汚らわしい存在に思える。

だが、その一方で、非力な女に身を変えている自分に嫌悪し、一刻も早く男に戻りたいと願っている。

結局、自分はどうしたいのだろうか？

峨瑛に呼ばれて、彼の居室に向かった。

蒼潤が彼の居室に行くと、峨瑛は床に広げた地図に見入っていた。

蒼潤に気付いて、視線をわずかに上げた。

「来たか」

「来たぞ」

「そこに座れ」

そこは言うが、特には指定していない。その証拠に、峨瑛は再び地図に目を落としている。

蒼潤は適当な場所に腰を下ろした。

「座ったぞ」

報告するように言うと、峨瑛は、ああ、と答えた。
ようやく地図から眼を離し、真っ直ぐに蒼潤を見つめた。

「馬をやるう」

「馬？」

またか、とは言わなかった。蒼潤は身動く。

「良い馬が手に入ったのか？」

「確かに、良い馬だ。そして、お前には掛け替えのない馬だ」

「俺にとつて？」

「来い。外に曳かせてある」

そう言つて、峨瑛が居室を出て行くので、蒼潤も慌てて後を追う。

回廊を進み、庭へと降りた。馬の声。黒い影が見えて、まさかと思つた。

「てんろう？」

馬が答えて啼く。蒼潤はその青毛馬に駆け寄つて、馬の鼻先に手をかざした。

鼻息が手にかかる。馬が首を大きく振つた。

「天狼！」

堪らず長い首に抱き付いた。

天狼だった。あの、三年前に互幹国で産まれた仔馬だ。

翠恋という牝馬が産んだ仔馬。翠恋は蒼潤が初めて騎乗した馬だ。

「どうして、ここに天狼が？」

「お前が喜ぶと思つて、連れてこさせた。どうだ？　嬉しいか？」
「……嬉しい」

振り返ると、満足げな峨瑛の顔と眼が合った。思わず、眼を逸らす。何だか気恥ずかしかった。

天狼の額に手を滑らせる。

天狼は、闇のように真つ黒い牡馬だ。だが、額にだけ白い毛が混ざり、そのカタチは綺麗な十字をしている。

夜空の星のようだと思つた。故に、名を『天狼』と付けた。

全天で最も明るい星の名前である。

乗ってみる、と峨瑛が言つた。

「遠乗りに行くか？」

「行く」

素直に答えると、峨瑛は笑つたようである。蒼潤は天狼に跨つた。

峨瑛と出会つた時に産まれた馬だ。

この馬の年の数だけ、蒼潤は峨瑛と過ごしていることになる。

だから何だということはない。

ただ、この馬が前に見た時よりも大きく逞しくなっているのが、不思議なような気がした。

彼に振り返ると、峨瑛は自分を見上げていた。彼が眼を細める。

「都に上ることにした。お前も来るか？」

都　　葵陽。

呈夙が散々荒らし、呈夙が晤貌に殺された後は、呈夙の部下たちがその後釜を争っているという。

葵陽には従弟がいる。蒼絃という名の従弟で、同じ胡帝の孫である。

礎帝の子で、呈夙によって、わずか10歳で玉座に座らされた従弟だ。

同い年の従弟。

もしも蒼昏が皇太子であり続けていて、礎帝ではなく、蒼昏が帝位を継いでいたら、今の蒼絃の地位は蒼潤のものだったかもしれない。

父、蒼昏は礎帝のように愚かではない。

呈夙になど殺されず、今も玉座にあり続けていたかもしれない。

そうしていたら、今のように青王朝は揺らいでいず、乱世を招いてはいなかったかもしれない。

蒼潤は宮中で皇子として育ち、兄の蒼空を支えながら生きたかもしれない。

平穩に。そして、幸福に。

取り返してやる。

蒼絃が手にしているすべてを奪い取ってやる。

蒼潤は馬首を返し、峨瑛に振り返った。

峨瑛も曳かせてきた自分の馬に跨っている。

馬体の大きな栗毛馬。それを見やり、蒼潤は言い放った。

「行くよ、一緒に。都、葵陽へ」

37 夢馳せる刻 青嵐の都 貳

ザワザワと木々が騒いだ。予感がして、振り返る。雫石だった。男とも、女とも、判断しがたい黒い衣を着ていた。

「お気を付け下さい」

響くことのない低い声だ。

「都は人々の思惑の交わる処。けして、吞まれることのないように」
それだけを言い残し、雫石は姿を消した。呼び止める暇さえなかった。

青の都 葵陽。

雅州内にある。雅州は併州の南西で、琲州の北東に位置する。そこでは、呈夙の遺臣が帝という大義を争って戦を重ねていた。峨瑛はまず、その争いから帝を救い出すという名目で雅州に兵を入れた。

呈夙の遺臣達を次々に討ち滅ぼし、雅州を平定してから、葵陽に入った。

帝 蒼絃との謁見を果たし、峨瑛は司空という地位に着いた。司空は、官制における最高位である三公の一つで、土木建設を管轄にしている。

呈夙、そして、その遺臣が荒らした都を建て直すのに忙しいのだらう。

司空の地位を得てからしばらく、峨瑛は蒼潤の前に姿を見せなくなっていた。

寂しいという思いはなかった。そう思う暇さえなかった。

蒼潤は家族を葵陽に呼んだ。峨瑛が帝に掛け合ってくれたおかげで、蒼昏に帰都の許しが出たのだ。

父、蒼昏は現帝である蒼絃に、伯父として謁見し、大公という地位を得た。

以後、『幹大公』又は『幹公』と呼ばれるようになる。

帝位継承権は失われたままだが、この事で、ほぼ地位を取り戻せたとに等しい。

彼は屋敷を峨瑛邸から、わずかな距離に構えた。

その屋敷は、沍幹に居た時とは異なり連日客人で賑わい、過去の栄華を再現しているかのように見えた。

だが、蒼彰が言うのだ。

これしきのことでは満足してはならない、と。

蒼潤の姉　蒼彰は毎日のように峨瑛邸にやってきた。蒼潤に会いにくるのだ。

彼女の話は、他愛もない挨拶から始まって、最後にはいつも同じ話にたどり着いた。

今が時だ、と。

峨瑛に、天子奉戴を進言したのは、楚雀だった。

楚雀。字は楨抄。峨瑛の軍師の一人であり、彼が文官の中で一番信頼を寄せた人物である。

楚雀が天子奉戴を進言したのは、峨瑛に、諸侯に号令する大義名

分を握らせるためであった。

その行動に制約が生じることや、朝廷内の煩わしさを抱えることになるが、帝の後見人という立場から得る効果は、それらを差し引いても大きなものであった。

だからこそ、呈鳳が、そして彼の遺臣達がその立場を争い、奪い合ったのだろう。

都。

峨瑛が自分を葵陽に連れてきてくれるという点では、蒼潤にとって喜ばしいことだった。

洵幹国で過ごした幼い頃、空を仰ぐように、都に対して夢を抱いていた。

いつか、きつと、上り詰める場所と思っていた。

だが、ここで峨瑛との間に亀裂が起きる。

峨瑛が皇帝蒼絃を懐に入れたということは、蒼潤の場所がなくなるということなのである。

元々、峨瑛は蒼家の名の力を得たくて蒼潤を娶った。

蒼家の娘を妻としていて、人心を得ようと考えていたのである。

それは、蒼絃を手に入れれば、より絶大に効果を得られるもの。

帝を擁立した峨瑛にとって、蒼潤の存在は意味を為さないものとなってしまうのだ。

都に上ることにした。お前も来るか？

峨瑛が言い放ったその問いの意味は、こういうことだったのだろう。

それでも都についてくるのか、と。

今が時。

峨瑛にとって蒼潤の価値が皆無となった今、峨瑛が蒼潤のために動くとは思えない。

だが、ここは都。葵陽である。

父、蒼昏は帰都を許され、復位した。政敵はいない。

蒼絃には、未だ子がない。蒼潤さえ皇子だと認められれば、蒼潤が唯一人の帝位後継者なのだ。

いずれ玉座は手に入れるとして、葵陽の兵を掻き集めれば、峨瑛を都から追い払うだけの力くらいになるかもしれない。

皇帝の立場から見れば、峨瑛は有害だった。政を意のままにしようとしている。

皇帝が親政を望むのであれば、峨瑛を遠ざける必要があった。

力はある。蒼彰は言った。

有力な指導者さえいれば、兵は集まる。ここは都なのだから。

指導者になれ。名乗りを上げさえすれば、自然にそうなるだろう。

峨瑛を切り捨て、玉座に座り、天下を手に入れるのだ。

可能性は十分にある、と蒼彰は続けた。蒼潤もそう思う。

特に姉に言われると、そうであるような気がしてくる。だが

。

蒼潤はなかなか蒼彰の言葉に頷けなかった。

峨瑛に勝てる。そう言われ、勝てるという気になっても、何

かが蒼潤の決断を妨げていた。

確かに、今なら峨瑛に勝てるだろう。

名乗りを上げ、蒼潤が帝位後継者として、峨瑛逆臣を宣言する。

峨瑛を皇帝の敵とし、葵陽で兵を募り、討つ。

できない話ではなかった。

だが、何かが蒼潤の胸の内で疼くのだ。

蒼潤が居室から出ようとすると、その廊下で梨蓉と鉢合わせした。梨蓉の背後に楊霞と燕朋がいる。

目が合うと、三人は軽く会釈した。そして、蒼潤が出ようとしていた室に、再び入るよう促した。

蒼潤は黙って従い、上座に座した。

「何だ？」

三人が向かい合うように座したのを確認して、蒼潤は口を開いた。

梨蓉が答える。

「今日はお出掛けになられないように」

近ごろ、蒼彰を避けて、蒼潤は外を出歩いてばかりいる。

天狼に乗り、野を駆ける。

天狼は、人を背に乗せることを嫌がる様子を見せるところがある。

気高い馬なのだと、甄此が言っていた。天狼が好んで背に載せ

るのは蒼潤だけだ、とも言っていた。

己が誕生した時のことを覚えているのだろうか。

天狼にとって蒼潤は、生を受けて初めて目にした人間だ。

そのため、気性の荒い馬だが、蒼潤には従順なのである。

今日も天狼に乗ろうとしていた蒼潤は、梨蓉の言葉に眉を寄せた。

「何か、あつたの？」

「これから、あるのですよ。本日、殿の新しい側室が来られます」

「側室？ 新しい？」

「はい」

「孔？姚さんとおっしゃる方だそうですね」

楊霞が言った。どこか面白くなさそうな響きだ。

その響きに、付け加えるように、燕朋がポツリと言った。

「孔司徒の御息女です」

司徒とは、司空や太尉と共に、三公の一つである官位だ。

そして、孔司徒と呼ばれる者は、蒼絃の生母である孔皇后の兄である。

蒼潤にだって、分かる。この婚姻には、誰かの思惑がありそうだ。

「そういうわけですから、お出掛けになられぬように」

「それから、思いつ切り着飾って下さいね」

「天連殿が御正室なのでから」

言つと、楊霞が侍女を呼び、受け取った着物をおもむろに広げた。思わず顔を顰めると、楊霞が手を打ち鳴らした。それが合図だった。

どこに控えていたのか、わらわらと侍女たちが室に入ってきて、蒼潤を取り囲んだ。

「妾にお任せ下さい。例え孔？姚がどのような女性であろうと、天

連殿を見て、気後れするようにして差し上げますわ」

キラリ、と楊霞の目が輝いたように見えた。

気配がして振り返ると、玖姥が怖いほどの笑みを浮かべていた。

楊霞に着付けを頼んだのは玖姥かもしれない。

蒼潤は数歩後退り、それから、両手を上げた。

「孔瑚。字は？姚でございます」

深々と頭を下げた少女に、蒼潤は息を呑んだ。そして、そのまま言葉を失う。

楓莉、と胸の内では呟いた。目を伏せる。

孔瑚は、そう蒼潤と変わらない年齢の少女だった。いや、わずかに年上だろうか。

そう思い、問えば、19歳だという。では、2つ年上ということだ。

楓莉は23歳で死んだ。

楓莉よりも幼く、柔らかな作りだが、よく似た顔立ちをしていると思った。

これが峨瑛の好みなのだ。

はたして、峨瑛の好みに合わせて孔司徒は孔瑚を選び、側室に送ってきたのか、峨瑛が好みそのままに孔司徒の娘の中から孔瑚を選び、娶ったのかは分からない。

だが、峨瑛好みである孔瑚が、彼の側室であった楓莉に似ていても、なんらおかしな事ではないように思えた。

それにしても。

蒼潤はゾツとした。再び、孔瑚を見やった。凜と顔を上げた孔瑚と目が合う。

似ている。似過ぎている。目が離せなくなる。

胸が騒いだ。泣きたくなる。どうしようもない感情が湧き上がった。

梨蓉が蒼潤の方に振り返った。目を細める。

蒼潤の顔色の变化を訝しく思ったようだ。だが、すぐに孔瑚の方へ目を戻した。

「こちらが第一夫人の蒼天連殿です。妾は梨蓉。この屋敷のことで、分からぬことは妾に聞かれよ」

孔瑚が再び頭を下げた。蒼潤は無言で、その仕草を見守っていた。

孔瑚の室は、蒼潤の室の西に位置していた。距離はそれほど離れていない。

今夜、峨瑛はその室で眠るのだろうか。初夜なのだ。当然そうするだろう。

関係ない。蒼潤には関係ないことだ。そう思い、蒼潤は瞳を閉ざした。

不意に蒼彰の言葉を思い出す。

時は今。峨瑛を討つ。

できない話ではなかった。

玉座を手に入れること。それが唯一の蒼潤の望みだ。

手を伸ばせば届く時にあるというのに、何を躊躇する必要があるのだろうか。

手を伸ばせ。今がその時だ。

蒼潤は手を見下ろす。それを一度大きく開き、力強く握った。

数日ぶりに峨瑛に会った。

わざわざ彼の居そうな場所に出向いたのだ。それも数力所を巡り歩いた。

これで姿を見つけれなければ、諦めようと思っていた矢先だった。

蒼潤の姿を認め、峨瑛は目を細めた。薄く笑みを浮かべた。

「久しいな。何をしていた？」

「天狼に乗って、野を駆けていた」

「城門の外に出る時は、共を連れて行け。一人二人ではないぞ。20は連れて行け」

「多いと邪魔だ。？燕が一人いれば十分だ」

「甄？燕か。お前の身内の者だな。 たった二人で出掛けているのか？ 認めんぞ。門番に言っておく。20以上の共なしでは、決して外には出さんように、と」

蒼潤は舌打ちをした。言うのではなかった。

だが、すぐに気を取り直す。淡く微笑み、峨瑛を上目遣いに見やっただ。

「何だ？」

蒼潤の笑みに予感がしたのだろう。峨瑛はわずかに顔を顰めた。

だが、機嫌は悪くはない。言うのであれば今だろう。蒼潤は思いきって言葉を放った。

「皇帝に会いたい」

「何だと？」

「従弟に会いたいと言っている」

「従弟だと？」

峨瑛は明らかに顔色を変えた。ここで怯んではいけないと、蒼潤は拳を作った。

「俺にとつては従弟だ。絃に会いたい」

恐れ多くも皇帝の名を呼んだ蒼潤に、峨瑛は眉間に皺を寄せる。

「会つて、話をしたい」

「話だと？ いったい何の話だ？」

「他愛もない話だよ。従弟なら誰でもするような。皓煥が薪將軍と
するような話だ。するだろ？ 話……」

薪將軍 薪塢。

字を汐銚。峨瑛の5つ年上の従兄である。

蒼潤が蒼昂となった時の直属上司でもあった。

「従弟と話をして何が悪い？ もしも、どうしてもダメだと言
うのなら、せめて一目。一目姿を見るだけでも。会ってみたいんだ。
血の繋がった従弟だから」

峨瑛の眼を、じつと見つめ、逸らさなかった。

これは静かな戦だ。蒼潤と峨瑛との。

ここで負ければ先はない。そう思い、峨瑛の眼を見つめ続けた。
しばらくの間があり、峨瑛が息を吐き出した。静かに言い放つ。

「 良いだろう」

「 本当に？」

「 ただし、蒼姓を名乗ることは許さん。峨昂として謁見しろ」

「 え？」

峨昂とは、峨瑛の死んだ息子のことだ。普段、彼から名を借りて、蒼潤は『蒼昂』と名乗っている。

蒼潤は小首を傾げた。

「すると、つまり……。俺、皓煽の息子として謁見すんの？」

「そうだ。女、それも人妻である蒼天連が人前に姿を出すわけにはいかんだろう」

「それもそうか……」

昔からの決まり事で、臣の妻と帝が見えること、またその逆は固く禁じられていた。争い事の元となるからだ。

皇帝が臣下の妻を見初め、己の後宮に入りたいとその臣から奪った過去があるのだ。

そうして、その臣は謀反を起こしたのだという。

蒼潤はとりあえず納得した様子で、頷き返した。

峨瑛が重々しく息を付く。蒼潤は上目遣いで見やった。

「宮中に連れて行ってくれる？」

「……今度だ。明日すぐにといいわけにはいかん。それから、お前は口を開く事を禁じる。話は許さん」

「なぜ？」

「近ごろ、お前の声が低くなったように思う」

「低い？」

蒼潤は驚いて、己の咽に手を当てた。

17である。とつくに声変わりをしてもおかしくない年齢である。

声変わりしたのだろうか？

だが、男にしては高い声だ。自分では分からないことだが、芳詔などがそう言っていた。

峨瑛も頭を横に振った。

「まだ、女で通る。だが、そのうちは……。お前の顔にも髭が生えてくるのだろうか」

フツと、峨瑛が眼を細めて笑った。蒼潤は眉を寄せる。

「髭が生えるようになったら、さすがに女装はしたくないな」

「剃れば良いことだ」

「簡単に言っなよ」

顔を顰めた蒼潤に、峨瑛は更に笑う。

その笑いも、今のうちかもしれない。そう思うと、複雑な気分だった。

蒼絃に謁見したら、その場で彼に、そして皆に、名を告げるつもりだった。

蒼潤を皇子として認めて貰うつもりだ。そうして、兵を募り、

機を見て、峨瑛と手を切る。

皇帝に謁見することは、玉座を手に入れる第一歩だ。

その一歩を手に入れた、と蒼潤は思った。

39 夢馳せる刻 青嵐の都 肆

空が蒼い。

澄み渡った空は、どこまでも広がった。

蒼潤は峨瑛の後ろに控えていた。

玉座は遠い。その玉座に座る者こそが、皇帝である従弟 蒼絃だ。

まず峨瑛が言葉を交わし、蒼潤を紹介する。

蒼絃は気がなさそうに聞いていた。小さい頷きが、蒼潤の耳にまで届いた。

許しを得て、蒼潤は顔を上げる。遠く、蒼絃が見えた。

ああ、と言葉を吐く。彼が己の従弟なのだ、と。

不思議な感覚だった。

今の彼の立場も、玉座も、本来ならば自分のものだった。そう思うと、何か不思議だ。

自分がいるべき場に、別の何者かがいる。

そう思うと、それが何か気味が悪いもののように思える。彼が憎い。彼が恨めしい。

返してくれ。それは自分のものだ。

蒼絃が手にしているものすべて、本当ならば蒼潤のものだ。返せ。返してくれ。

あともう少しだ。玉座から、もう少しの距離に自分はいら。胸が高鳴った。押さえ付けるように、蒼潤は胸を押さえる。唾を

呑み、大きく息を吸い込んだ。

「わたしは蒼潤。胡帝の孫、幹公の子」

謁見の大広間だ。静まり返っていたそこに蒼潤の張り上げ声が響いた。

峨瑛の表情を確かめる余裕がなかった。

余裕？ いや、違う。彼の表情を知るのが恐ろしかった。

広間には帝の廷臣が大勢いた。耳はそれ程に多くあるのだ。

すでに吐いてしまった言葉を再び腹に戻すことは、不可能だ。

ゴクリ、と蒼潤の咽が鳴る。

遠く、玉座を見上げると、ようやく蒼絃が蒼潤に焦点を合わせたようだった。すくつと立ち上がる。

「今、何と？」

「幹公の子、と」

玉座の傍らに控えた廷臣の一人が蒼絃の問いに答えた。蒼絃がたたらを踏んだ。蒼潤を呼ぶ。

「近くに」

「はっ」

峨瑛の方には目を向けなかった。彼の背を追い越して、前へと足を進める。

遠かった玉座がわずかに近くなった。

蒼潤は、蒼絃が立ち上がった後の空の玉座をジッと見つめた。

ここまで来た。やっと、ここまで。あと、もう少し。

蒼絃の命で蒼昏が直ちに呼び付けられ、皆の前で蒼潤が自分の息子であることを証言した。

母親は蒼昏が皇太子だった頃からの妃で、嫡流の子であること。

故に蒼潤には帝位継承権があることを主張した。

実は、今まで、蒼昏や亘幹国の民などは、蒼潤や蒼彰、蒼麗のことを『公主』として扱っていたが、正しくは『公主』とは皇帝の娘のことであるから、廃太子された蒼昏の娘である三人は本来ならば『公主』とは言わない。

だが、蒼絃が陰謀の末に廃された蒼昏の無念を想い、その過去を取り消し、一度帝位を着いた後に退位し、幹公に報じられたということにしたため、改めて蒼彰たちは公主という身分になり、世間にも認められるようになったのである。

そして、蒼潤だ。蒼彰と蒼麗が公主であるならば、蒼潤は『皇子』である。

これを認めないわけにはいかず、蒼絃は蒼潤を青王朝の皇子だと認めた。

蒼絃に皇子はなく、他に帝位を継承する意志のある皇族がないため、ここに蒼潤が第一帝位継承者となったのだ。

我に返ると、床に蒼潤の躰が倒れていた。峨瑛は己の拳を見下ろし、息を付いた。

血が頭に上っていた。裏切られたという思いよりも、ただ、ただ、腹ただしかつた。

蒼潤が帝の前で名乗りを上げた。そうして、皇子として公認されたのだ。

峨瑛は蒼絃から、潤皇子を保護し、その後見人としての役目を担っていたことを感謝された。

感謝だと。

腸が煮えくり返る思いだった。

怒りに任せて思わず殴り飛ばしてしまった蒼潤を横目に人と呼んだ。

彼を室に運ばせると、峨瑛は次に楚雀を呼んだ。

飼い犬に噛まれたという気はあったが、気を落ち着かせてみれば、それほどの大事に陥ったというわけではない。

おかげで、蒼潤の後見人という新たな目で見られるようになり、

宮中における峨瑛の立場は良くなりそうな気配だ。

風当たりも良いものになってくるだろう。

それにこれは、なるべくしてなったことだ。

いずれ蒼潤と争うことになることは、前々から分かっていたことだった。

だからこそ、峨瑛は蒼潤に問うたのだ。

都に上ることにした。お前も来るか？

都に上るということは、天子奉戴を暗に意味していた。

そうなった時、峨瑛における蒼潤の価値がどうなるのか、考えればすぐに分かるはずだ。

蒼潤よりも、皇帝である蒼絃を取ったのだ。

あの時、もしも蒼潤が、都には行かないと答えていたのならば、峨瑛も都には入らなかつたかもしれない。

帝を擁することは、楚雀が強く主張していたことだが、峨瑛はそのために起きる制約を考えれば、

どちらでも良いことのように考えていた。

蒼潤が都に行くと言った。

彼の都への想いを知らない峨瑛ではない。それは野心だ。蒼潤の中の男としての野心。

蒼潤が野心を捨てていないというのならば、峨瑛はそれに立ち向かうしかないだろう。

都。葵陽に入ると決めた時から、蒼潤との対立は決まっていたことだった。

楚雀がやってきた。彼も大したことではないという顔をしていた。

まず、峨瑛が言った。蒼潤は死なせたくない、と。

楚雀は綺麗に整った眉を歪める。

「もう役には立ちませんぞ」

「あれを眺めていると、うれしいのだ。儂の玩具だと思って、捨てずにおいて欲しい」

「ならば、一つ条件があります」

「なんだ？と峨瑛は楚雀に目をやった。

「帝位継承権を放棄すること。それができなければ、いらぬ企てを立てる者がありません。その時に果たして助けられるかどうか」

蒼潤が峨瑛を裏切った時、その時は切り捨てるしかない、と楚雀答えた。

彼は、今回のことはまだ裏切りのうちには入らないと考えているようだ。

帝を擁した今、蒼潤に利用価値などない。

むしろ今回のことから、この先の峨瑛の禍となる可能性が高いのだから、すぐに切り捨ててしまった方が良いに決まっている。

それでも、峨瑛が生かすことを望むのであれば、その道を考える。そして、まだその余地はあった。

牙も爪も剥ぎ取ってしまえば良いのだ。

分かった、と峨瑛は頷く。牙や爪を剥ぎ取れなかった時は、切り捨てるという意味を込めて。

半年ばかりが過ぎ去った。

峨瑛も、蒼潤も、それぞれに忙しく外を出歩いていた。

特に蒼

潤は、帰ってこない日もあるほどだ。

三日を空けず宮中に足を運び、帝に謁見しているようだ。時には蒼絃と二人だけで会うこともあるらしい。

そのまま夜更けまで話し込み、泊まってしまうこともあるようで、皇居内に室を賜ったらしいとの噂もある。

それらを確かめようという気に、峨瑛はなれなかった。

本人に直接聞けば済むことだったが、その本人がなかなか捕まらないのである。

人を使い、調べようと思えば、できないことではなかった。だが、そうするだけの気力もない。

放っておくことにした。

姉の蒼彰ともよく会っているようだ。

蒼彰がおかしな動きをしている。人を度々屋敷に呼ぶようになった。

蒼邦に蒼彰が嫁したのも、つい数ヶ月前のことだ。

これは蒼潤にとって、予期せぬ事態だったらしい。動揺し、峨瑛の室に駆け込んできた。

何とかして二人の婚姻を取りやめにさせてくれ、と訴えてきたが、聞いたところによると、蒼潤自身が勝負に負けて、それを認めると約束したのだという。

それを峨瑛がどうこうできるわけがなかった。

それよりも、蒼邦という男に峨瑛は興味を抱いていた。

蒼邦は元々敖州で百姓をしていたのだが、己が皇室に連なる身分だという誇りから、

叛乱が相次ぐのを見て義勇軍を募り、立ち上がったという。

壬州にたどり着き、しばらくそこを治めていたが、晤貌によって奪い取られ、峨瑛の元へ逃げてきたのが、昨年のことである。

だが、ずっと以前から徳の將軍だという噂を耳にした事があった。

実際に会って、なるほど、と思った。

蒼姓を名乗っているばかりで集めた兵ではない。

民の支持もあり、それに見合うだけの戦いをこなしてきていると
感じたのである。

この男を手に入れられたら、と思った。 何とか幕僚に迎えたい、
と。

そんな時のこの縁談である。都合が良いと言えば、良かった。

妻の姉の夫であれば、親戚と言えよう。下せる可能性も十分にあ
る。

これは蒼彰との戦だった。

目立って動いているのは蒼潤だが、彼の後ろには蒼彰がいる。

蒼邦を夫に選んだのも、彼が実戦を知っている部将であるからだ。

そして、民からの人気を持っているから。

なかなか小賢しい。本気で自分を排除するつもりなのだろう。

蒼潤と蒼彰の仲を引き裂いてやるべきだった、とも思わくはない。

だが。

峨瑛は笑みを浮かべた。冷やかな笑みだ。

やれるものなら、やってみろ、とも思っていた。

負ける気はしない。

むしろ利用してやるつもりでいた。

これを機に、自分に反抗する力を根こそぎ切り捨ててやるつもり
だった。

40 夜忍ぶ刻 赤い雨が降る 壱

皇居の一室で蒼絃を待つていた。

豪華絢爛。いくら落ち目であるとは言え、建てられたのは数百年前だ。

青王朝の最盛期に建てられた宮殿内は、外の世界とはまるで別世界。

世の乱れなど感じさせない、 いや、忘れさせてしまう程の見事な造りである。

幻想的な庭。池には波一つ立っていない。

耳障りなことなく、音楽が流れている。

楽士の姿を探すと、室の隅の方にひっそりと琴を弾いていた。

楽園だ、と蒼潤は思った。

自分が育った場所に比べたら、ここは夢のような世界だ。

蒼絃はずっとこんなところで育ったのだなと、しみじみ思う。

従兄弟なのだ、自分と蒼絃は。

従弟なのに。

片や皇居で人々から傳かれて育ち、もう一方は生まれ落ちた瞬間に命を狙われる身となった。

蒼潤は隠れるように、ひっそりと、女として育てられたのだ。

あれもダメ、これもダメ、と。

あらゆることを禁じられながら、苦汁を呑んで、生きてきた。

男の身で男に嫁ぐという、この上ない辱めも受けた。

すべて、この乱世で生き抜き、玉座を手にするためにしてきたことだった。

蒼絃が羨ましい。妬ましい。

この宮殿で、思うがまま、望み通りに生きてきた彼が羨ましい。そうやって生きるはずだったのは、彼ではなく、自分だったはず

だ。

どうして、なぜ？

自分がいるべき場所に彼がいるのだろうか？

もう少しだ。もう少しで、彼の持つすべてが蒼潤のものとなる。

取り返すことができる。本来の自分の姿を。

本来の身分。本来の地位。

本来、生まれながらにして与えられるべき幸福を、ようやくこの手に取り戻すことができるのだ。

蒼潤は手の平を広げ、グッと天高く伸ばすと、何かを掴み取るように拳を作った。

てつきり蒼絃が現れるものだと思っていた。だが、姿を現したのは孔司徒だった。

孔瑚の父親である。

「立太子の儀、準備は進んでおりますか？」

聞き取りやすい澄んだ声だった。

あっさりとした顔立ち。皇叔にしては、存在感のない。目立ち過ぎない人物だった。

彼に対する好印象を得て、蒼潤は柔らかく微笑んだ。ちなみに、『皇叔』とは、その字の如く、皇帝の叔父のことである。

孔司徒は『皇叔殿』とも呼ばれていた。

立太子の儀が済めば、公式に蒼潤は皇太子として認められる。

名声、名目共に、第一帝位後継者なのだ。

そうなってから、峨瑛に剣を向けようと考えていた。

人は集まっている。兵も。いつでも動かせる。

そうと分かっている。どこか煮えきれない想いがあった。

だが、それも、儀式さえ済めば、どうにか吹っ切れるだろうと考えていた。

儀式が良いきっかけとなるだろう、と。

これを、と孔司徒が何かを差し出してきた。

蒼潤はすぐには受け取らなかった。

「何ですか？」

「誓約書でございます。潤皇子が峨司空を討つ時に、共に立つ者の名が連ねられております」

見ると、いくつも名前が書かれている。

名前の下には指の跡。血盤というものだろう。

蒼潤はそれをチラリと見て、すぐに瞼を閉ざした。

「勝手なことを……」

「公主様に頼まりました故」

孔司徒の言う公主とは、蒼彰のことだ。彼は蒼彰を『公主』、蒼潤を『皇子』と呼んでいた。

彼以外でも、宮中では皆、そのように呼んでくれる。蒼潤にとって、それは嬉しいことだった。

蒼潤は再び連署のなされた誓約書に目を落とした。
名を順繰りに見やる。そうしてから、孔司徒に振り返った。

「貴方の名が最初にある」

「はい。その通りでございます」

「貴方の娘は、峨皓煥の側室だろうか？」

「はい。ですから、潤皇子。一つ頼み事があります」

「頼みだと？」

蒼潤が聞き返すと、彼は深々と頷いた。

「低く、小さく声を響かせる。」

「潤皇子に、峨司空から娘を奪って頂きたいのです」

41 夜忍ぶ刻 赤い雨が降る 弐

久し振りに峨瑛邸に戻ってきた。

昨日は皇居に泊まったことだし、一昨日は蒼昏邸に泊まった。

更に、その前日は皇居で、その前は蒼昏邸。

人に招待されることもあって、そのままその者の邸に泊まることもあったが、

しばらくは皇居と蒼昏邸で休む日々が続いていたのだ。

居室に入り、芳詔の顔を見つけると、その顔が懐かしく思えた。

芳詔の方もそう感じるのか、しきりに話をしたがっていたが、蒼潤は人払いをした。

独りになりたかった。

頭がクラクラする。孔司徒の言葉が幾度も繰り返し、響いてくるようだった。

娘を貴方の妃に。

彼はそう言ったのだ。とんでもないことだ、と思った。

一度、他の者に嫁いだ女などいらぬ、と突っぱねるくらいではなかった。

だが、できなかった。言葉が口から出てこなかったのだ。

よりによって峨瑛の側室だった女だ。

それを自分の妃に？

寒気がした。鳥肌が立つ。だが。

孔瑚の顔が脳裏に浮かんだ。楓莉に似ている、と思うと、動悸が

起こった。

目が離せなくなる。ずっと、見つめていたいと思った。触れたい。声が聞きたい。もっと、傍に近付いてみたい。どうすることもできない想いが、胸を騒がせた。

蒼潤は頭を左右に振った。

貴方が望めば、手に入りますものを。

孔司徒の声が聞こえた。

峨司空の側室であるよりも、潤皇子の妃である方が、娘にとって何倍も幸せなことです。

声は頭に直接響いた。どこか、甘い。痺れるような響きだった。

娘に訊ねてみたところ、娘も貴方を好いております。わたしの目から見ても、お二人はお似合い。

潤皇子、皇子は娘をどうお思いですか？

夜。雨が降り始めたようだった。

その音で、蒼潤は目が覚めてしまった。

目だけを動かして、室内を見渡した。遠くの方に明かりがあるため、辺りは薄ぼんやりとしている。

音は雨音だけではなかった。布の擦れる音が小さく紛れている。芳詔かと思つたが、香りが違った。徐姥たちとも異なる。

では、誰だろう？

女であることには間違いないようだ。男が使う香ではない。

蒼潤は上体を起こした。足を牀から降ろす。足音は蒼潤の寝室の前で止まっていた。

「誰だ？」

静かに声を放つ。気配は息を詰めたようだ。

曲者ではないだろうと、戸を開けてやった。

孔瑚だった。室内に入れてやる。彼女の肩は、雨で濡れていた。

「どうなされた？ こんな夜更けに……」

「雨音が恐ろしくて」

「人を呼べばいい。侍女なら、いくらでもお持ちでしょう」

「……」

黙ってしまった彼女を見て、雨音が恐ろしいなど嘘だと分かった。恐ろしい中、ここまで忍んで来られるわけがない。

第一、忍んでくる足取りが恐ろしがつている者のものではない。つた。

では、いったい、なんのために彼女は蒼潤の元へやって来たのだろうか？

答えはすぐに出た。

「父君に何か頼まれたか？」

「……」
「ご自分の室に戻られよ。このようなこと、なさって良いはずがない」

夜這い。そんな言葉が蒼潤の頭に浮かんだ。馬鹿な、と思う。

孔司徒の考えも、彼の命に従った孔瑚も。

そして、彼女の肩に付いた雫を拭ってやりたいと思っている自分に対して、なんて愚かなことを、と呆れてしまう。

言葉なく、じっと彼女を見つめていると、不意に彼女は左右に頭を振った。

真っ直ぐに蒼潤を見つめる。

「いいえ。違うのです。わたくしが、わたしくの判断で、潤皇子にお会いしたくて、忍んできてしまったのです」

父は関係ない、と孔瑚は続けた。彼女は蒼潤の手を取る。

「初めてお会いした時から、お慕い申し上げておりました。貴方が公主ではなく、皇子だと知って、どれほど嬉しく思ったことが……。そして、同時に胸が裂ける想いでした。幾夜も枕を涙で濡らし、皇子のことを想ったか」

「何を……」

何を言っているのだ、と蒼潤は己の手を引いた。

初めて会った時からなどと、そんなはずはないのだ。

父親は関係ないなどと、そんなはずはない。

嘘だ。偽りだ、と孔瑚の言葉を否定する。

だが、彼女の手はしつとりと蒼潤の手に馴染み、吸い寄せられるかのようにだった。

眼が見つめ合ったまま、逸らすことができない。

声が甘く、思考を麻痺させる。

「潤皇子は、わたくしがお嫌いですか？」

嫌いなはずがない。

楓莉とよく似た女なのだ。あの楓莉と。

死なせたくなかったのに、殺してしまった女だ。

もう一度やり直せたらと望み、生きかえって欲しいと願った。

そうして、孔瑚が目の前に現れた。

嫌いなはずがない。

声にしたつもりだった。だが、ちゃんと言葉として響いたかどうかは確かではない。

それでも、彼女には通じたようだ。孔瑚は淡く微笑んだ。

「では、わたくしを潤皇子の妃にしてください」

頭がクラクラする。香りのせいだ、と思う。

いや、孔瑚のせいだと思った。

どつとでもなれ、と。

蒼潤は孔瑚を己の寢室に招き入れ、その身に自分の躰を重ねた。

42 夜忍ぶ刻 赤い雨が降る 陸

夢だったのかもしれない。

目覚めた時、孔瑚の姿がどこにも見つけることができなくて、蒼潤はそんな風に思った。

頭が、ぼーっとする。霞がかかっているようだ。

甘い匂いが鼻について離れない。孔瑚の香だ。

彼女の香りが移ってしまったのだろうか。匂いの元は、自分自身のような気がしてきた。

香りが離れない。甘く、気怠い。

眠い。ひどく眠気に襲われて、蒼潤は再び瞼を閉ざした。

芳詔に揺さぶられて、半ば牀から引きずり落とされるように起こされた。

いくら呼んでもちっとも起きない、と芳詔が両手を腰に置き、頬を膨らませた。

よほど疲れていたのだろう、と呂姥が苦笑して、

立太子の儀の準備で忙しいのは分かるが、体調には気を付けて欲しいと、徐姥が言った。

疲れていた。ひどく躰が重い。

宮中から参内命令が出ていた。皇帝が会いたがっている、と。

だが、蒼潤は昼過ぎまで居室に籠もっていた。何もする気が起こらない。不拔けた気分だ。

日が傾き始めた頃、祇恵の居邸に足を向けた。

突如として現れた新たな皇子の存在を、今、都で知らない者はない。

当然、祇恵も親友の蒼昂が実は蒼潤であり、

峨瑛の正室で、青王朝の皇子であるということを知っているはずだった。

だが、祇恵は変わらず、蒼潤が訪ねてきても平気で寝台に横たわっていた。

蒼潤は寝台の脇に腰を下ろすと、天井を見上げながら、静かに言葉をつきだした。

「伯陽、聞いて欲しい話がある」

「聞いているから、勝手に話せよ」

「伯陽は女を知っているか？」

「それは質問か？ 答えは是だ。13の時、初めて女を抱いた。どんな女だったかは、覚えていないな。うっすらとしか顔を思い出せない」

「13で……」

寝台に仰向けで寝転んでいる祇恵も天井を見上げている。

その天井に向かって、言葉を発する。

「好いた女でもできたのか？」

「良かったな、と言いたいところ」

だが、まず相手は誰かと問うておこう。誰だ？」

「楓莉に……。楓夫人にすごく似ているんだ」

「楓夫人？ 殿の夫人か」

「彼女のことをどう想っていたのか、今となってはよく分からない。ただ、彼女の死は、重しみたいなもので、忘れようにも忘れられない過去だ。彼女は、俺の後悔であり、苦しみであり、悲しみだ。だけど、過去。……。過去だと思っていたものが、再び目の前に現れた」

「天連？」

「やり直せるのだとしたら、やり直したい。もう二度と彼女を失いたくないんだ」

祇恵が上体を起こした。蒼潤の方へと顔を向け、そうして、訝しげに眉を寄せた。

「香を変えたのか？ いつもと違う香りがする」

「分からない」

「分からない？ お前、どうしたんだ？ どこか変だぞ」

「事情が変わったんだ。今までとは、違う。もう隠れている必要もなくなった。手に入れようと思えば、何でも手に入れられるんだ。地位も、権力も、女も……。奪い取れるだけの力、今の俺は持っているんだ」

頭が痛い。なんてひどい頭痛だ。

割れる。砕ける。

いっそう、砕いてしまった方がラクになるのではないかと思う。銅鑼の音が耳の奥、頭の中で、ガンガンと鳴り響いている。

助けを求めるように手を伸ばすと、祇恵がしっかりと手を握ってくれた。

「その女は駄目だ、天連。やめておけ。お前のためには、きっとならない。何か嫌な予感がする」

「欲しいんだ。今なら、奪い取れる。例え皓燭からだって」

「ま、まさか、殿の女なのか!？」

「孔?姚だ。孔司徒の娘の」

「駄目だ!駄目だ!孔司徒は見た目通りの人物ではない。腹に何かを隠している。ドス黒い何かを、だ。そんな男の娘には関わらない方がいい。利用されるだけだ。陰謀に巻き込まれるぞ。唯でさえ……」

祇恵はハツとして、言葉を切った。その先の言葉を、蒼潤は予測もできない。

唯でさえ?

表情が変わる様子を、その奥に隠された想いを読み取るうと、ジツと見据えていたが、

祇恵の胸の内は計れなかった。

「とにかく、駄目だ。天連、その女はやめてくれ。それだけは」

違和感があった。

親友が去った後、彼が座っていた場所を見つめながら、祗恵は思った。

蒼昂の様子が変だ。蒼昂 いや、あれは、蒼潤だ。

胡帝の孫で、胡帝の長子である蒼昏の子だ。

皇子である。青王朝の唯一人の皇子だ。

「あいつ……」

誰もいない室内で、一人言葉を零す。

言葉は思いの外大きく響き、祗恵を驚かせた。唇を固く結んで、瞼も閉ざす。

天連、どうするつもりだ？

蒼潤の立太子の儀が近づいている。皇太子となってしまうえば、峨瑛の正室ではいられない。

もっとも今でさえ、都では峨瑛の正室であるとは誰もが思っていない。

峨瑛は蒼潤の後見人である。そう、皆が思っている。

孔司徒との娘を蒼潤が娶るといふのなら、孔司徒が新たな後ろ盾となる。

彼にはそうなるだけの権威と、またそうだと皆が認めるだけの力

があつた。

天連は殿を切り捨てるつもりか。

蒼潤が皇太子になることは構わない。峨瑛が蒼潤の後見人である限りは。

峨瑛は現皇帝、そして、次の皇帝を手中に入れることになるのだ。それは、むしろ喜ばしいことだった。

だが、蒼潤が峨瑛と対立するようになってもなつたら？

祗恵は指先で数度、床を突いた。コツン、コツン、コツン、と爪が音を立てる。

次第にその音が耳障りに思えてきて、もう片方の手で指を押さえ付け、止めた。

43 夜忍ぶ刻 赤い雨が降る 肆

雨。降り注ぐそれは、まるで天から細い糸が垂らされているように見えた。

水は流れ、流れた先で溜まる。

雨が降れば振るほど、楚雀の胸の内にも何か暗く溜まっていつているように思えた。

祇恵を呼んだ。葵陽の民政をやらせてみるつもりだった。

まだ若い彼は、戸籍を整理したり、市場を監視したりなどといった地道な仕事を好まない。

政より戦、民の暮らしを考えるよりも、いかなる戦局でどのように兵を動かすのか考える方を好んでいた。

戦時はそれでいい。だが、それだけでは駄目な時が来る。

峨瑛の領地が広がれば、自分一人では目が行き届かない場所が出てくる。

その時、祇恵にはもう一つの自分の目になって貰わねばならないのだ。

祇恵がやって来ると、楚雀はまず彼を自分の前に座らせた。

寝起きのままやって来たのか、髪がひどく乱れている。

いつものことなので、いつものように小言を言いながら結び直してやった。

だが、ふと、違和感を感じる。

いつもならば、髪を梳いてやると気持ちよさそうに瞼を閉ざし、時にはそのまま居眠りをし出す祇恵が、ジッとどこか空を睨んでいる。

伯陽、と名を呼ぶが気付かず、髪を結び終えた後もなかなか身動きを取らなかつた。

楚雀は彼の肩を少し強めに揺さぶつた。

「伯陽？ 何かあつたのですか？ 体調が悪いのであれば、帰って休みなさい」

「いえ。そういうわけでは……」

「では、何が？」

「天連が。 や、違う！ な、なんでもないですよ。 さあ、檣抄殿、仕事をしましょう。 仕事！ 仕事！」

誤魔化すように、へろへろと笑みを浮かべて、祇恵は竹簡の山に手を伸ばした。

手が震えたのか、竹簡に触れた瞬間、その山はガタガタと音を立てて崩れた。

楚雀は細い眉を吊り上げた。

「伯陽、わたしを誤魔化せると思っっているんですか？ 言って、つきりとしてしまいなさい」

「言えませんが、こんなこと。 俺、少なくとも俺は、あいつのこと親友だと思っていますから」
「……」

言っているようなものだった。 蒼潤のことなのだろう、と楚雀には分かつてしまった。

そして、おそらく、蒼潤が何かをしでかす、もしくは、しでかし

ているということなのだろう」と。

殿は間に合わないのか。

蒼潤に帝位継承権を放棄させると峨瑛は言っていた。

それならば、生かしておいても良いだろうと、自分は答えた。

要は、蒼潤に流れる血を利用した陰謀が起ころなければ良いのだ。蒼潤が峨瑛の妻として、女としての生涯を送ってくれるというのなら、益はないが、害もない。

峨瑛の臣として楚雀は、蒼潤が生きていようがどうしようが構わないというところだ。

主君に害があると判断した時は、それが何であろうと、排除する覚悟が楚雀にはあった。

自分が蒼潤を峨瑛の害だと判断するのが早いか、峨瑛が蒼潤を女にしてしまうのが早いか。

一種の賭のようなどころがある。

賭は蒼潤の動き次第で決まる。

そして、今、蒼潤が動いた。

次の一手は、おそらく峨瑛の番だ。これがいかなる手であるのかを見てから、自分は動くつもりである。

できれば、峨瑛には立太子の儀までに手を打って欲しいものだ。

でなければ、峨瑛の前に自分が蒼潤をどうにかしなければならないだろう。

気分が悪いと言い出したので、祇恵を自邸に帰らせた。

祇恵とは同郷であり、彼が幼い頃から彼を見てきたつもりだ。

峨瑛に彼を推挙したのも自分であれば、彼に仕事を教えたのも自分だ。

弟子のようなものだ。もしくは年の離れた弟。息子という程は離れてはいない。

やはり、弟という想いが強いようだ。どうしても甘やかしてしま

う。何だかんだ小言は垂れるが、結局のところ、仕方がない子だと思

い、許してしまう。

伯陽には前もって蒼夫人のことを伝えておくべきではなかつたのか？

蒼潤との友情、そして、峨瑛への忠誠心。それらに挟まれた祇恵の心の乱れを感じていた。

蒼潤が親友でさえなければ、祇恵は、事が起きたと感じればすぐに楚雀や峨瑛の耳に入れようとしただろうに。

だが、祇恵にとって蒼昂　蒼潤は親友であり、けして裏切れない存在だ。

言っておくべきだった。蒼昂は蒼潤であり、いずれ峨瑛とは袂を

分かつ存在になり得る者だ、と。

そうしておけば、柢恵は蒼潤とはこれほどまでの友情を築かなかつたはずだ。

痛む心などなく、蒼潤の行動をつぶさに報告していたはずなのである。

楚雀は外を眺めた。雨はまだ降り続いていた。湿った空気が重い。

雨。振れば振るほど、黒く淀んだ胸の内は、更に重たくなっていくようである。

しばらく眺めた後、楚雀は峨瑛の居室に向かった。

峨瑛は手にした何かを虚ろな瞳で眺めていたが、楚雀に気づき、それを投げ寄こした。

「これは？」

「誓約書かな？」

天連が玉座に着くためのあらゆる援助をする

とある」

「孔司徒の名がありますね」

「天連は……」

峨瑛が言いにくそうに、そして、まるで独り言のように言葉を零した。

「あの女を抱いたのだろうか？」

おそらく、とだけ楚雀は答えた。柢恵の様子からして、そうなの

だろうと思っていた。

祇恵は、蒼潤が孔司徒と手を結び、峨瑛の元を去ることを恐れていた。

事はそれほど易くはない。

例え、今回、孔司徒と手を結ばなくとも、第二、第三の孔司徒はいくらでも現れるものだ。

祇恵は蒼潤に甘い。

それでも、祇恵が恐れを抱いているということは、それだけのことが起きたということだ。

つまり、蒼潤が孔司徒と手を組みつつあるということ。

楚雀は綺麗な動作で、峨瑛に向かって頭を下げた。

「まずは殿のお手並みを拝見致しく思います」

雨が続いていった。雨が降ると、孔瑚が蒼潤の室に忍んでくる。

もう幾日も雨が降り続いていった。

孔瑚のことを、好きか、嫌いか、と問われれば、迷い無く答えるだろう。

好きだ。おそらく、愛している。

彼女を抱いている時は、彼女のすべてを自分のものにする
ことしか考えられなかった。

抱いて、翌朝に目覚めた後もそう思う。

峨瑛を討ち、彼女を妻にする。帝位に着き、彼女を皇后にする。
それしか、考えられなくなっていた。

彼女が好きだ。ずっと傍にいたい。妻にしたい。己だけのもの
にしたい。

もう少しだ。もう少しで、それも叶う。

立太子の儀が近付いていた。立太子の儀さえ済めば、自分の皇
子としての立場は完全なものとなる。

男子として生まれ直すことができるのだ。

もはや、峨瑛の妻である必要などない。峨瑛の妻に甘んじていた
自分を惨めに思う。

男なのに、なぜ同じ男に嫁がねばならなかったのだ？

今更ながら、己の境遇が哀れで、また、悔しくて涙が出そうにな
った。

自分は男子なのだ。孔瑚を愛することは、蒼潤が男である証拠で
ある気がしていた。

男として女を愛している。男であれば、女を愛する事は普通であ
り、当然なことだ。

男として当然なことをしているという思いは、蒼潤の胸を焦がし
た。

まさに、恋する己に恋する状態だったとも言えよう。

だが、それで構わなかった。孔瑚を愛していることに、変わり
はない。

雨の音に紛れて、布の擦れる音が聞こえてきた。

甘い香りがする。孔瑚が来た、と蒼潤は牀から足を降ろした。

戸を開けてやる。孔瑚の艶めいた顔を見て、すぐにその身体を抱き締めた。

寝室に誘う。交わす言葉など、なかった。ただ、彼女だけを求めて、抱き締める。

唇を吸う。甘い。頭がクラクラした。

その後はいつも、何も考えられなくなる。ひたすらに求める。

闇に白い肌が浮いて見えた。目が眩む。

触れてみる。しつとりと、肌が手に吸い付いた。

44 夜忍ぶ刻 赤い雨が降る 伍

雷。

いや、違う。

蒼潤はハツとして、背後を振り返った。息を呑む。躰が急激に冷えた。

「……う、ごうせん」

汗が流れた。頬を伝い、ポタリと顎から牀に落ちた。

雷に打たれたような衝撃があった。彼の気配には、それだけの力がある。

強烈な存在感。

違う。この衝撃は、今の自分にやましいところがあるからだ。

自分は、彼の側室を寝取ったのだ。

己の下にある女の肌を感じながら、蒼潤は為すすべなく、唯、峨瑛を見上げた。

峨瑛は、蒼潤と孔瑚にゆっくりと歩み寄った。

表情は分からない。闇が濃すぎる。

雨音が遠ざかっていく。雨音だけではない。この世のすべての音が蒼潤には遠い。

キラリ、と何かが輝いた。

それが何であるか、確かめる時間などなかった。輝きが一瞬の線

を描いた直後、孔瑚の悲鳴が聞こえた。

蒼潤は振り返る。

眼を見開いた彼女の顔が、しだいに悲しげに、そして、醜く歪んでいく。

血が。赤いものが胸から勢いよく噴き出した。躰が傾く。

抱き留めようとして、蒼潤は腕を伸ばした。だが、届かなかった。

音を響かせて、孔瑚の軀が床に倒れた。

それはひどくゆっくりと目に映った。

ゆっくりだと感じたにも関わらず、彼女が倒れてからしばらくは何も理解することができなかった。

蒼潤は信じられないものを見るかのように、孔瑚であった亡骸を見下ろしていた。

「……………れ、？姚」

ひゅう、と咽が鳴る。汗。冷たい汗が流れた。

影が近づいてくるのを感じて振り返ると、峨瑛の手が自分に向かって伸ばされていた。

切られる！

反射的に退いた。ポタリ、と汗が落ちる。

最初の一太刀だ。一太刀目さえ避けられれば、良い。

刀を振り下ろした後、次の行動に移るには誰しも一時の間を必要とする。

その隙に外へと逃げ、蒼昏の屋敷に駆け込む。それしかない。

そう思い、蒼潤は闇の中で目を見張り、峨瑛の動きを読もうとした。

峨瑛は動かない。彼の方も蒼潤の様子を窺っているようだ。

ふと、孔瑚に目をやった。その死が信じられなかった。本当に、彼女は死んでしまったのだろうか？ もしかしたら、生きているかもしれない。

確かめようとして、一瞬、峨瑛から意識が離れた。その隙を彼が見逃すはずがなく、蒼潤はグツと襟を掴まれた。しまった、と思うが、すでに遅い。逃げる期を逃した躰が持ち上がる。

足が空に浮いた。苦しさに、呻き声を漏らした。そして、次の瞬間、大気を切り裂くほどの音が響いた。

ダンツ、という振動が伝わってきて、死んだ、自分も孔瑚のように死んだのだと思った。

こんな風に自分は死ぬ定めだったのか。情けない。玉座にも着けず、奪った女の夫に殺されるのか。

死という理不尽な力が訪れるのを待っていた。だが、それは一向にやってこなかった。

訝しげに薄く眼を開くと、それで自分を切り裂くのだろうと思っていた刀を、峨瑛が床に突き立てていた。

死んでいない？ 生きている！

峨瑛の行動は分からなかったが、彼は自分を殺さなかった。生きている。今はそれだけで十分だ。

逃れようと、空を蹴る。今は逃げるしかなかった。

逃げ延びることができれば、峨瑛を討つことができる。自分は玉座に着くことができるのだ。

彼の腕から逃れようと暴れたが、峨瑛は蒼潤の躰の自由を封じて、

己の方に引き寄せた。

唇に感触があった。口付けを受けたのだと気が付くまでに、間を必要とした。

「んっ。はぁ」

驚愕し、目を見開く。逃れようと身を擦った。だが、適わない。

峨瑛の腕が蒼潤の動きの全てを封じていた。

呼吸さえ、思っようにならない。息苦しさに、喘ぐ。

床に身体を叩き付けられた。鈍い音がする。背を打った痛みに、顔を歪めた。

視界の端に、孔瑚であった骸が見えた。

眼が合う。虚ろな瞳。その目はどこも映していない。死んだ者の眼だった。

だが、それと目が合ったような気がした。

死んでいるはずの孔瑚が、犯されていく自分を見つめているように思えた。

「嫌だ！やめてくれっ！」

身を擦る。すぐに、峨瑛の躰が蒼潤に押し掛かってきた。

体重で押さえ付けられ、動きを封じられる。肺を圧迫され、息苦しい。

「くっ。はあっ」

意識が朦朧としてきた。

それでも必死に抵抗を続けると、両腕を頭の上で一つにまとめられ、更に固く封じられる。

蒼潤の細腕など、峨瑛にとって、片手で十分だった。

どんなに振り解こうと腕に力を込めても、どうにもならない。

蹴り飛ばしてやろうかと、足をバタつかせるが、それも無駄である。

逆に股を開くような格好を強いられてしまった。

ビリッ。悲鳴を上げたのは、蒼潤の夜着だった。 峨瑛の片手が

乱暴に衣を剥ぐ。

すつと、風が通った。肌を晒される。

「お願いだ。許してくれ！ い、嫌だ！」

わあああああああああ、と声を張り上げた。

声を聞きつけて、徐姥達が室にやってくるかもしれない。助けを求めて、叫ぶ。

手も足も封じられているのだ。叫ぶしか、術がなかった。

ガッン。鈍い音が響いた。血の味が口の中で広がる。殴られたのだと気付く。

一瞬、意識を失った。だが、ここで気絶するわけにはいかなかった。

負けない。負けてたまるかっ！

再び大声を張り上げた。咽が裂けるほどの悲鳴だ。
熱い。焼ける。咽が裂ける。

外は、雨が降っていた。

雨音が蒼潤の悲鳴を打ち消す。

4 4 夜忍ぶ刻 赤い雨が降る 陸

峨瑛が顔を近付けてきた。黙れ、と低く声を落とす。その響きの冷たさに、蒼潤の躰が震えた。

「お前が陰で動いていることは、すべてお見通しだ」
心を凍り付かせるような響きだった。

「もう少し泳がせておくつもりだったが、そろそろ我慢ならなくなってきたな」

「な、なんの……」

何の話だ、と聞き返した口に、峨瑛が唇を合わせてきた。目が霞む。意識が朦朧となった。顔を背ける。

「嫌だ！」

再び腕に力を込めた。頭突きを喰らわそうと、わずかに上体を起こした。

無駄だった。舌打ちをして、睨み上げる。

「ふざけるな！無礼者！」

自分は皇子なのだ。誇り高き蒼家の男子だ。屈してなるものか！呼吸を忘れた。ぐっ、と力を込めて、自分を押さえ付けている男を睨んだ。

「退けっ！わたしは蒼潤。青王朝の皇子である。」

お前は青王朝の臣であり、いずれ、わたしの臣となる身。身の程を知れ、無礼者！」

峨瑛は嗤った。くくくっ、と咽の奥で嗤う。

蒼潤は目を見開いた。怒りで、顔が赤く染まる。

「何が可笑しい？　そうやって、笑っていられるのも今のうちだ！」

なんとかかして、この場を逃れ、蒼昏の屋敷に駆け込む。後は姉がうまくやってくれるだろう。

朝になったら一番で参内しよう。予定していた時期よりも早い、峨瑛に逆臣の名を与える。

そうすれば、すぐに兵が上がる手筈になっている。孔司徒がそのようにしてくれているはずだ。

彼が用意してくれた誓約書。あれによると、かなりの人が賛同してくれている。

峨瑛を討てる。自分が負けるはずがなかった。

逃れようと、身を擦る。

足をバタつかせる。腕に力を込めた。

「わたしは、俺は、お前を討ち、玉座を手に入れる！」

グツと歯を食いしばった。

峨瑛が嗤う。わずかに蒼潤から躰を離し、己の懐に手を差し入れた。何かを取り出す。

「これが何か、分かるか？」

「何？」

片足を蒼潤の腹に乗せ、その身を押さえ付けると、峨瑛は上体を起こした。

そうして、彼はそれを蒼潤の顔に突き付けた。

息を呑んだ。まさか、と思う。

「これは」

「お前の室で見つけた」

ゴクリ、と蒼潤の咽が鳴った。

誓約書だった。

孔司徒がくれた物。蒼潤に賛同する者の名が連署されている。

「お前のやっていることは、すべてお見通しだと言った」

見通しているだけではない。峨瑛ならば、見通している事に関する対処も完璧だろう。

すでにあらゆる手を回しているに違いない。

背筋が冷えた。

闇が。

果てのない暗闇が蒼潤を襲った。

何かが壊れた。そして、粉々に散った。

それは心の奥にあったものだった。

終わりだ。もう、お終いだ。

ガクリ、と力を失い、蒼潤は肢体を床に投げ出し、寝転んだ。負けた。そう、自分は負けたのだ。峨瑛という男に、負けた。言葉などなかった。相手を見返す気力もない。

次第に、蒼潤の瞳から輝きが失われていく。蒼潤の肌を、峨瑛の手が滑る。

どうにでもすれば良い。

犯して、殺す。それも良いだろう。自分は負けたのだから。諦めの想いが、蒼潤の心を支配していった。

剥かれた衣が、孔瑚から流れ出た血溜まりに浸かり、赤く染まっ
ていく様子が見えた。

ビクリ、と蒼潤の躰が痙攣した。

「あああああああああああああ」

苦しくて、切なくて。ひどく心が痛んだ。叫んで、叫んで、泣き
叫んだ。

心が死ぬ瞬間だったのかもしれない。

闇が広がった。

それは、じわり、じわり、と更に広がっていく。

赤い。血の臭いが鼻を付く。

なんて惨い。

心を殺して、肉体まで殺そうというのか。

これ以上にない痛みを与え、墮ちるところまで落とし、殺すというのか。

これ程の苦しみを強いられる自分はいったい何者だろうか？
自分が誰であるか、分からなくなる。

苦しい。痛い。死にたい。

絶望の闇。何も見えない。

足掻いても、足掻いても、救われることはない。

死。死ぬのだ。

犯され、十分に辱められた後、殺されるのだ。

雨が降り続けている。雨音が響く。だが、それは遠い。
意識が薄らいでいく。

孔瑚の死体は、すぐ傍らに横たわっている。

そこから流れてくる血が、蒼潤の躰を暖め、冷やした。
瞼を閉ざす。朱で溢れていた。

46 朝を臨む刻 音に聞く 壺

蒼潤という人間は二人いるようであった。そして、その二人の蒼潤が、彼の中で争っていた。

峨瑛の妻としての蒼潤 蒼夫人。
これは、女である。偽りの女だが、確かに峨瑛の妻で、それは男ではあり得ない。

彼の為に何かできればと願っている。
前に戦で功を上げた時、峨瑛が誉めてくれたことがある。嬉しかった。

自分を認めて貰えたようで、とても嬉しかったのだ。もっともつと彼に認めて貰いたかった。

峨瑛は時々、蒼潤に物事を教えてくれる。

それは戦のやり方だったり、民政についてだったりするが、大きいことを言えば、人の有り様、道について、教えてくれる。

峨瑛の話聞く時間は、楽しい時だった。もっと彼と話をしたいと思うし、構って貰いたかった。

剣を見てくれたり、遠乗りをしたり、時々だが、構ってくれる。

忙しい身なのだから、仕方がないことだとは思うが、もっともつと共に時間を過ごしたいと願ってしまう。

そんな自分も確かにいた。

彼を慕い、彼に憧れていた蒼夫人は、今の自分を見て叫いた。

峨瑛に刃向かおうとするから、このような目に合うのだ。これは当然の報いだ。

彼に勝てる道理がなかった。敵に回すには、あまりにも大きすぎる存在だった。

もう一人の蒼潤は、潤皇子としての蒼潤だ。近ごろはこれが強かった。

そして、これは完全な男子であり、野心を抱いていた。

峨瑛を討ち、帝位に着いた後、親政を行うという野心だ。

戦乱の世では、討ち取った敵の妻を己のものにして良いと聞いた。ならば、峨瑛を討ち取った後に、孔瑚を己の妃にしても、何ら問題あることではないのだろう。

孔瑚を妃に。男である蒼潤は、そう願っていた。

彼は叫んだ。

運がなかったのだ。勝てたはずだ。力はあった。義も自分に

あった。

ただ、運だけがなかったのだ。

潤皇子は、尚も泣き叫ぶ。

男に犯されてまで生きていられるか。企みが峨瑛に露見したのだ。

所詮、自分はそれまでの者だった。そう思って、死のう。

蒼夫人にせよ、潤皇子にせよ、双方共に、もはや峨瑛に対して抵抗の意志を持っていなかった。

軀を犯され、殺されることを甘んじて受け入れようとする蒼夫人。

そして、躰を犯されたことを恥じて、死ぬことを望んでいる潤皇子。

死。

死しか、道はなかった。

峨瑛は自分を殺すだろう。彼に抱かれながら蒼潤は、そう思っていた。

朝が来た。もう二度と見ることもないだろうと思っていた朝日だ。信じられなかった。まだ、生きている。

起き上がろうとして、蒼潤は呻いた。躰がひどく軋んだ。倒れるように、身を横たえた。

牀の上だと気付く。峨瑛が運んだのだろうか。

床を見やる。孔瑚の骸は無くなっていた。血溜まりも綺麗に拭き消されている。

一瞬、夢だったのではないか、と思った。だが、躰の軋みがそうではないことを物語っていた。

孔瑚は死んだのだ。峨瑛に切られた。そして、自分は彼に躰を犯された。

蹂躪され、心のどこかで何かが死ぬ音を聞いた。

それはおそらく、今の蒼潤ではない、もう一人の方の蒼潤だ。彼は死ぬ事を覚悟していた。死ぬしかなかったのだろう。男に辱められた。真の男であれば、生き続けられるわけがなかった。

そうか、死んだのか。

蒼潤は再び瞼を閉ざした。

意識が沈んでいく。ひどく疲れていた。

「何か口にして下さらないと」

芳詔の声だった。泣きそうだと感じた。だが、答える気にはなれなかった。

牀から起きる気分にもなれない。

このまま静かに死んでいけたら、と思う。

宮中から参内を促す使者が幾度も来ていた。

体調が悪いことを理由に、峨瑛が追い返しているという。

それを孔司徒は、峨瑛が蒼潤を屋敷に閉じ込めているのだと考えたらしい。

孔司徒直筆の文が密かに届いた。

蒼彰もそう考えたらしく、会いにやってきたが、蒼潤は会わな

った。

会えるわけがなかった。会いたくもない。

ハツとして、芳詔に振り返った。声を忍ばせて泣いている。

急に、申し訳ないような気分になった。わずかに腕を上げ、彼女を呼んだ。

「春欄、水を」

芳詔はすぐに蜂蜜を溶かした湯を運んできた。蒼潤は苦笑して、それを口に含んだ。

それで芳詔の涙は止んだようだった。ホッと息を付く。

死んでしまった自分は、皇子であった自分だ。

では、今、生きている自分は何者だろう？

蒼夫人としての自分だろうか？

峨瑛はまだ自分を妻として扱ってくれるのだろうか？

いや、それ以前に、自分は峨瑛の妻として生き続ける力を持っているのだろうか？

もう男じゃない。死んでしまった自分は、男としての自分では、今の自分は誰だ？ 男か？ 女か？

これから、どう生きていけば良いのか分からない。いつそう、男であった蒼潤と共に死んでしまえば良かったのに。

涙が零れ落ちた。頬を流れ、枕を濡らす。

己の中に残されたモノを探してみた。空虚。胸の中に穴が空いているような心地だった。

峨瑛に弄ばれた記憶を思い出して、吐き気を催す。

うつ伏せになり、吐けるだけ吐いた。

物など出て来ない。胃液だけがダラダラと口元を汚すだけだった。

数日が過ぎ去った。もう躰は軋まない。

無理に抱かれ、傷付いた躰は跡形もなく治っていた。

あとは心だけだ。だが、心の半分は死んだ。幾日経っても、治るはず道理がなかった。

更に半月が過ぎた。

蒼潤は自室から一步も外に出ようとはしなかった。牀からも起

き上がろうとしない。

峨瑛が訪ねてきたが、固く戸を閉め、けして開けないよう徐嬢に命じた。

峨瑛どころか、彼女たち以外、誰とも会わないようにしていた。

蒼彰や孔司徒から幾度も文が届いた。目すら通さずに捨てさせた。

梨蓉が見舞いに来た。峨瑛から何か頼まれているのかもしれないと思うと、会えなかった。

祇恵が来た。よくぞ峨瑛に許しを得て、奥までやって来られたものだと思っただが、会わなかった。

彼にこそ、峨瑛が何かを頼んだかもしれない。

峨瑛が馬を贈ってきた。さばいて、部下達で食べるよう甄此に命じた。

絹や宝玉を送ってきた。目にもすることもなく、捨てるよう徐姥に命じた。

他にも様々な物を送ってきたが、その始末はすべて徐姥に任せることを命じた。

贈り物が止むと、今度は夜中に室を訪れて来るようになった。

もちろん、内には入ってこない。

蒼潤が戸を固く閉ざし、入れてやらないからだ。

月明かりを受けて、障子戸に彼の影が映る。

柱に寄り掛かり、じつと室の内の様子を探ろうとしていた。

それが数日続くと、そのことに退屈を感じたのだろう。笛を持つてくるようになった。

静かな音色を響かせるのである。

なんて愚かな男だ。

蒼潤は思った。

自分など、切り捨ててしまえば良い。彼になら容易なことだろうに、なぜそれをしない。

面倒にも機嫌を取ろうというのか。

それほどまでして生かす価値が、自分にはあるのだろうか？

自分自身、生きる意味を見失っているというのに……。

47 朝を臨む刻 音に聞く 式

巖瑛が理解できなかった。

思い起こせば、彼を理解できたと思ったことなど、未だかつて一度たりともない。

彼の妻になつて四年も経つというのに、彼のことなど、まったく分からなかった。

知ろつとも考えなかったように思う。

自分ばかりが、自分を伝えようとしていたように思える。

自分の望みを言い、希望や願いを言い、そうしてくれ、叶えてくれ、と言いつけていたように思うのだ。

そのツケが今、回ってきたというのだろうか。

音が止んだ。 いや、違う。 蒼潤が眠りに落ちたのだ。

静かな闇が広がった。

笛の音が続いていた。 あれから毎晩である。

そうして、幾日が過ぎたことだろうか？
もはや月日を数える気力もなくなっていた。

蒼潤の躰はガリガリに痩せ細っていた。

悲しいほど肉が削げ、一人で立つことさえままならない。腕を上げること、辛かった。

それでも、まだ生きている。

時折、すでに死んでいるのではないのかと、自身で疑いたくなる時もあったが、まだ生きていた。

物を食す気力はないが、水だけは欲していたおかげだろう。

徐姥たちは水の中に栄養あるものを溶かしてくれる。

舌に苦い水を運んでくる時もあったが、それらに文句を言う力などなかった。

ここ数日間、蒼潤は口を開いていない。言葉を発する力もなくなっていた。

死にたい。

そう思うと同じくらいに、生きたいと思う。

二度と、蛾瑛になど会いたくない。

そう思うと同じくらい強く、彼に会いたいと願ってしまう。

彼のことを、もっともっと、知りたかった。

笛の音は、静かだ。闇夜に溶け込む。

涼しげな風がどこもなく吹き抜けていった。

戸など、一つも開けていないというのに。

風。いったいどこからどこへ旅行くのだろう？

ずっと考えていた。自分はこれからどう生きるのだろうか、と。

男である自分は死んだ。残されたのは、蛾瑛の妻としての自分だ。

これから先、ずっと女として生きると言うのだろうか？

そんなこと、できるわけがない！

だが、他に生き方が思い付かない。分からないのだ。

何のために生きれば良いのか、分からない。

涙が流れた。泣くつもりなど、なかった。ただ涙は、乾いた眼を潤すために溢れたようだ。

瞼を閉じた。

音が止んだ。

ハツとして、蒼潤は目を見開いた。笛の音が止んでいる。いつもならば、自分が眠る時まで流れていた音だというのに。障子戸に目を向けた。月夜らしい。月明かりで、峨瑛の影が障子に映っている。

影が揺らいだ。立ち去ろうとしている。

「……っ」

声が出なかった。数日ぶりに口を開いたのだ。当然だった。血の味が口の中に広がる。開いた拍子に唇が切れたようだ。だが、今はそれどころではない。

腕に力を込めた。牀から、転がり落ちる。ゴトン、と鈍い音が響いた。

音は峨瑛の足を止めた。影が一瞬、こちらに手を伸ばし、思い止まったように離れていった。

涙。蒼潤の頬を伝う。

腕を伸ばす。月明かりに向かって。

「……待つ……て……」

ひどく掠れた声だった。だが、確かに音は大気に響いた。影が揺らぐ。

「天連？」

こちらの声も掠れている。ひどく静かで、低い響きだ。ガタン、

と戸が鳴いた。

峨瑛の姿が見えた。幾日ぶりだろうか？
以前とはどこか違って見える。

ひどく、愛おしい。

峨瑛が室の中に入ってくる。蒼潤の躰を抱き起こした。

「天連？」

「……お……おいて行かないで……く……れ……」

死にたくない。

涙が流れた。彼に置いて行かれると思ったら、無性に悲しくなっ
た。

死ぬ。きつと、彼に見捨てられたら、今度こそ本当に自分は死ん
でしまう。

生きている意味がない。死ぬしかなくなるのだ。

もはや、彼の妻として生きるしか道はないのだから。

峨瑛の腕に力が込められる。

口付け。目に受け、頬に、顎に、唇に。蒼潤はそれら全てを
受け入れた。

「泣くな」

「……いくら、考えても、お前の傍以外に、俺の、生きる道は、な
い」

泣きながら放った言葉は弱々しく、切れ切れなものだった。

口付けを受ける。

「僕の傍にいれば良い」

「死にたい。……だが、生きたい」

「ああ」

「……玉座が欲しい」

峨瑛が息を呑んだ。

「儂の座る玉座で我慢しろ。青王朝の古ぼけた玉座よりよほど良いぞ。儂が座る様を、誰よりも近くで眺めさせてやる」

瞼に口付けを受ける。いつの間にか、涙は枯れていた。「いつだったか言ったはずだ。儂とお前は比翼の鳥なのだ、と」

比翼の鳥とは伝説上の鳥のことだ。雌雄各一翼で、常に一体となつて飛ぶ鳥なのだという。

「儂とお前は、互いに翼を分け合つて生きている。共に羽ばたかねば、この乱世の空を飛び行くことは適わない」

「ひよくのとり……」

「ああ。そうだ。お前は儂の片翼だ」

「もう、俺の翼は、役には立たぬ。それでもか？」

蒼潤に流れる蒼家の血など、もはや峨瑛には不要だろう、と言つ。自分には何も無い。彼に差し出せるものなど、何も無いのだ。峨瑛は頷いた。

「お前はただ、風を受けていれば良い。空を飛べさえできれば良いのだ」

「片翼だけで羽ばたけば、旋回するだけだぞ。先には進めぬ」

「この国だけを見つめていれば良い。この国を抜け、どこに進むという？ より大きく旋回すれば済むことだ」

「……面白いことを、言う。初めて、会った時からだ」

蒼潤はわずかに微笑んだ。ホッと、峨瑛が息を付く。

「お前が、憎い」

蒼潤は言葉を吐き捨てた。

「お前が妬ましい。この身が、実に、口惜しい。運がなかった。生まれも、生まれた時も。お前になど、出会わなければ良かった。お前の妻になど、ならなければ良かった」

峨瑛が眼を細める。

「そうすれば、お前とは、ただ敵として出会い、戦っただろうに……」。

それでも、俺はお前には勝てなかったかもしれない。だが、無念だとだけ思い、散ったことだろう。

こんなにも心は痛まなかった。悔しい。なぜ、俺は皇子になど生まれてきたのだろう。

「いっそう本当に女の身であれば、良かった」

「そうだ。適わぬ野心など、初めから持たねば良かった。

蒼潤は峨瑛を睨め付けた。

「お前が憎い。己の野心を叶えるだけの力を持つ、お前が妬ましい。

俺は、そんなお前に媚びるしか生きる道はないのか。悔しい。

だが、死にたくない。生きたい。生きる道は、一つ。お前の元にし

かない」

「ならば、どうする？」

「お前が俺を殺すまで、お前の傍にいる」

再び口付けを受けた。自分からも求めて、彼の背に手を回した。だが、腕に力が入らない。すぐに腕を下に降ろしてしまった。人形になったような気分で、すべてを彼の前に投げ出す。彼に任せることにした。己の命を。
これから先の、生も死も。

涙が流れた。

48 朝を臨む刻 音に聞く 参

ふっ、と瞼が開いた。気怠い。ひどく躰が重かった。

「起きたか」

頭上から降ってきた峨瑛の声に、蒼潤は無言で頷き、答えた。

気付くと、頭の下に太く逞しい腕がある。どうやら、峨瑛の腕を枕にしていたらしい。

ふと、蒼潤は意外な言葉を口にした。

「……うま」

「何？」

「馬は？」

ひどく掠れた声だった。

急激に覚醒したらしい蒼潤は、ガバツと起き上がると、峨瑛に掴みかかった。

「お前がくれた馬は？ 俺が？ 燕に、さばいて食えって命じた馬だよ。馬鹿だった。俺が馬鹿だった。ああ、なんてことを！」

それは幾日前のことだっただろうか？

蒼潤の機嫌取りに峨瑛が送った馬があった。今頃、それを思い出したのだ。

峨瑛は笑った。

「その馬なら、甄？燕が返しに来たぞ。そうか、こつこつことか」「何だよ？」

「必ずお前が後悔するだろうから馬を返しに来たと、あの者が言ったのだ。一度贈った物を収められるか、と言ったのだが、どうにも譲らない。仕方がなく、返して貰った。甄？燕はお前ことになる」と、一歩も譲らない。お前に忠実だな」

蒼潤はわずかに微笑んで頷いた。その通りだと思った。

甄此はいつだって自分の一番の味方でいてくれる。

それが蒼潤の為になると分かれば、どんなことでもやってくれるし、蒼潤の為にならないと知れば、例え蒼潤自身の命でも動かかなかった。

そついう男なのだ。甄此という幼馴染みは。

それなら、と蒼潤は続けて問うた。

「今、お前の厩にいるのか？ どんな馬だ？」

「気になるか？」

「もし良かったら、もう一度俺に出来ないか？」

「良いだろう」

「……ありがとう」

「ああ」

峨瑛が眼を細めた。ポンポン、と蒼潤の頭を軽く叩く。

「早く元気になれ」

穏やかな声だった。蒼潤の腕を取る。その細すぎる腕を、慈しむように何度も擦った。

「そんな躰では、何もできんからな」

蒼潤は苦笑した。

「痩せている女、好きだろう？」

「痩せすぎは駄目だ。体力のないのもな。すぐに気を失い、無理に抱けば、死ぬ」

「お前、どういう抱き方してんだ？」

「興味あるか？　ならば、しっかり食って、力を付ける。力が戻ったら、抱いてやる」

「んー。……もう一頭、馬くれたら、良いよ。心の準備くらいしといてやる」

「そうか」

フツ、と峨瑛は笑った。つられるようにして、蒼潤も笑う。

そして、久し振りに牀から足を降ろした。

孔司徒の首が城門に晒された。共に数名の首も並んでいる。

どの顔も、蒼潤の知る顔だった。連署に名が記されていた者たち

である。

中には、屋敷に招かれ、杯を交わしたことがある者もいた。彼らの縁者もことごとく殺され、三百以上もの屍体が生み出された。

だが、峨瑛が一番望んだ亡骸は、その三百の中にはなかった。蒼彰だ。

彼女は弟からの文の返事がないことで全てを察し、その夜のうちに家族を連れて都から逃げ出していた。

蒼昏の屋敷はもぬけの殻である。家具はそのままであるのに、人は一人としていなかった。

小賢しい。峨瑛は思った。

やはり始末できる時にするべき者だった、と。

蒼潤は手の内にある。だが、蒼邦は蒼彰に取られた。

蒼邦の下には、魏王と莫尚という部将がいる。

これが羨ましいほどの豪傑で、蒼邦を手に入れば、この二人も取り込めると目論んでいた。

だが、蒼彰だ。

彼女のせいで、峨瑛の目論みなど、泡となって消えた。

三百の屍体で満足するべきなのだろうが、それらと差し替えても、蒼彰を逃してしまったことは大きかった。

蒼潤の体調が戻り、室から出歩くようになったのは、峨瑛がすべて事を済ませてしまった後だった。

孔司徒の軀さえ、すでに片付けられている。

蒼潤は峨瑛の居室に足を向けた。断りもなく戸を開くと、祇恵がいた。

彼は初めて目にする蒼潤の女装に驚いたようである。口をポカリと開けて、言葉を失った。蒼潤は笑う。

「伯陽ではないか。久しいな」

「天連、まずは夫である儂に挨拶せい。他の男に声をかけるな」
「伯陽は親友だ」

放心している祇恵を置いて、蒼潤は上座に座る峨瑛の元へ歩み寄った。

政務中なのだろう。書簡やら筆やらが散乱している。それらを足で追いやって、峨瑛の脇に胡座をかいた。峨瑛が目を細める。

「それで何だ？ 儂は忙しいぞ」

「宮中に参内してくる」

「何？」

「予定通りだと、三日後に俺の立太子の儀がある。俺はそれを取り止めにしようと思う」

「……」

峨瑛はチラリと祇恵を見やった。蒼潤の膝を叩く。

「その格好で足を開くな。中が見える」

「良いだろ？ ここにはお前と伯陽しかいない」

「伯陽がいるだろうが」

「だから、伯陽は俺の親友だと言っている！ ああ、うるせえ。

この格好で駄目なら、脱いでやる」

「脱いだら、この場で抱くぞ」

「……」

蒼潤は襟に掛けた手を止め、柢恵に振り返った。

彼はようやく我に返ったようである。

「蒼昂が蒼潤で、蒼夫人で、実は、蒼夫人は皇子だったというのは、驚いたけれど、それでも何とか頭で理解できた。理解したつもりだったけれど、実際、天連のその姿を見ると、驚くよな。天連って、本当に殿の正室だったんだな。でも、男なんだよな。でも、女の格好をしていて……」

柢恵とは、蒼昂として出会った。男子として出会い、友になったのだ。

柢恵から見れば、親友は実は主の妻で、だけど、男だという、訳の分からない状況だろう。

「で？ 立太子しないということは、このまま殿の妻として生きるつもりなのか？」

「それしか生きる道がない」

「そうか」

「なあ、伯陽。俺はこんなんだけど、それでも今まで通り親友でい

てくれるか？」

「当たり前だろ。どんな姿をしても、どんな生き方を選んだとしても、お前はお前であることに変わりはない。今までと、何も変わらない」

ニツと祇恵が笑ったので、蒼潤も笑い返す。再び、峨瑛に振り向いた。

「そういうわけで、参内したいんだけど？」

「少し待っている。僕も共に行く」

「いらねえー。俺、一人で行く。絃とも差して話をしたいし」

峨瑛が息を吐き出した。諦めに近いたため息だった。

「もう少し言葉遣いをどうにかできんのか」

「やればできる。だけど、良いだろ？ お前が相手なんだから」

蒼潤は立ち上がると、ヒラヒラと片手を振った。

行ってくる、と言い残し、峨瑛の居室を出た。

49 朝を臨む刻 音に聞く 肆

静寂が恐ろしい程である。

人の気配が遠い。目に映る距離に、人の姿などなかった。

しばらく待って、蒼絃がやって来た。玉座に座す。

片手を上げ、従者を下がらせると、再び静寂が戻ってきた。蒼潤は彼を見上げた。

彼が恨めしかった。

彼の持つすべて、立場も、玉座も、本来ならば自分のものだったと信じていた。

玉座が欲しかった。

いつか必ず玉座に着こう望んだから、あらゆる苦汁を呑む決意もできた。

だが、どうしたと言っのだろうか？

もはや、それに座りたいとは思わない。

玉座。自分は本当に玉座に座りたかったのだろうか？

過去を懐かしむ祖母が、父が、哀れだった。

祖母を慰めたくて、彼女を訪れた。すると、彼女は言っのだ。

玉座を手に入れてくれ。

妾の無念を晴らしておくれ、と。

父が繰り返す。

あれはわたしが座るべき椅子だった。そして、お前が座るべき椅子だ。

取り返せ。奪い返せ。

蒼彰がない。自分を置いて都を去っていった。

逃げなければ蛾瑛に殺されていただろう。逃げて良いのだ。逃げてくれたことを幾度も安堵した。

だが、自分は置いて行かれたのだ。姉に捨てられた。

蒼彰は蒼邦を夫に選び、自分を捨てたのだ。

蒼彰がない。祖母の想いも、父の想いも、今の蒼潤には何も手の内に残っていないかった。

何もない。自分を縛るものはない。それは、自由だということだ。

翼は蛾瑛によって、折られた。

だが、彼は自分を解き放ってくれた。蒼家の翼を折ることで。

蒼潤は蒼絃の前で膝を折ると、頭を垂れた。

もはや自分は皇子ではない。公主でさえなくても構わない。

唯、蛾瑛の傍にあり続けたい。彼が自分に、生きる意味を与えてくれるだろうから。

そうして、蒼天連は、生きていく。

峨瑛邸。

蒼潤は真つ直ぐに峨瑛の居室に足を向け、断りもなく戸を開いた。

「戻ったか」

書簡から目を離すことなく、彼は言った。

こちらを見ていないことを承知で、蒼潤は黙って頷いた。

峨瑛の元へ歩み寄る。すぐ傍に腰を下ろした。

「なあ」

「なんだ？」

峨瑛は顔を上げない。

「玉座が欲しい」

「……」

「それは、別に、俺が座る椅子でなくても構わないんだ。古ぼけた玉座に変わる、新しく、強い力のある椅子が欲しいんだ」

峨瑛は、いずれ自分が玉座に着くと言っていたが、その玉座とは蒼潤が望んだ玉座とはどう異なるのだろうか？

彼の想いを知りたかった。彼の望みとはなんだろうか？

彼の眼に映っている未来を、この国の行き着く先を、同じように見つめたい。

「お前の望みを聞きたい。お前がこの国をどうするつもりなのか、聞いておきたい」

チラリと、峨瑛が蒼潤を見やった。

「乱世の平定か？ それとも、乱世に乗じて、国を乗っ取るつもりか？」

今の蒼潤ならば、何を聞かされても驚かない。

少し前ならば、国を篡奪するつもりだと聞かされれば激怒したところだろう。

だが、青王朝には、もはや乱世を平定する力はない。

平穩を望む民には新たな力が必要なのだ。新たな王朝が。

ようやく峨瑛が蒼潤に振り向いた。

「初めてお前と出会った時、お前は民と一緒にあって馬のお産に立ち合っていた。羊水でドロドロだったな。なんて汚らしい餓鬼だと驚いたものだ。だが、その餓鬼が皇子だと言っ。皇族のくせに、民に混じり、遊び、野を駆ける」

蒼潤は小首を傾げた。自分の問いとの関係が掴めないでいた。峨瑛は笑う。淡く微笑むような笑い方だった。

「僕は宦官の孫だということ、腐った血だと後ろ指を指されて育ってきた。皇子であるお前にはわからんことかも知れんが、その悔しさは今でも度々思い出し、腸が煮えくり返る」

家柄が何だと言う？

名門だから何だと言うのだ？

ただ単に、その家に生まれてきたというだけではないか。

祖先の栄光を鼻に掛け、己自身には何の力もないくせに威張り散らす。

「血が何だというのだ？ その血が高貴だといった誰が決めたと言っただ？ 身分など……」

ギリリツ、と唇を噛み締める。顔が赤い。怒りの色だ。

「皓燻？」

「身分など関係ない。実力を重視した国だ。高貴な血など不要。力だ。力なのだ」

「……それが、皓燻の望む国か？」

それが正しい国の有り様なのかは、分からない。

ただ分かることは、もはや青王朝では駄目だということ。

峨瑛が新しい王朝を立ち上げてくれる。国を新しくしてくれる。彼にはそれを為せるだけの力がある。

自分はそれに賭けてみたい！

「分かった。やはり俺はお前の妻に収まる気はない」

「何？」

「お前の右腕になる！共に乱世を羽ばたきたい！」

蒼家の血など、峨瑛には不要かもしれない。

だったら、己自身の力で彼を支えるまでだ。

剣だ。弓もある。蒼潤には騎馬隊だってあるのだ。

もっと己を磨き、峨瑛の力になろう。彼の望む国と、その国に住まう民の為に。

「新しい世に、蒼家の血は必要ない。身分もいらぬ。その者の実力が物を言う。そんな世、国をつくっていこう。皓燭、俺はお前の片翼なのだろう？ ならば、俺も羽ばたかなければならぬ。そうだろう？ もしもお前が許してくれるのなら、俺はお前の妻ではなく、臣になりたい！」

言つべきことを言い終えると、グツと唇を閉じ、彼を見上げた。

彼は目を細める。まるで、眩しいものを見るかのように、蒼潤を見つめた。

「お前の好きにするが良い」

ごく短い答えだった。

だが、穏やかで優しい。胸に染み入るような響きだった。

50 花が囁く刻 想いを抱く 壱

「往生際が悪いぞ、潤々？」

「潤々、言つな！」

春を迎え、葵暦197年、蒼潤は18歳となっていた。

相変わらず峨瑛邸に暮らし、彼の妻たちと妻同然の扱いを受けて過ごしていた。

お前の臣になりたい、と蒼潤が言い、峨瑛もそれを認めたのは、すでに数ヶ月前のこと。

認めてくれたはずだったのだが、それはそれ、などと峨瑛が言い始めたから、蒼潤は慌てた。

妻同然に共に暮らしているのだから、妻同然のこととして貰おうではないか、と言い出したのだ。

すなわち、夜のことである。

イヤだ、と拒絶し、ならば邸を出ていくと言えば、許さんと怒鳴られ、無理矢理に押し倒された。

ふざけるな、と散々暴れて抵抗すれば、そうしただけ自由が奪われていった。

「天連」

「っん」

唇を塞がれ、その感覚に目眩を覚える。

嫌だと思いつつも、腕が自然に、彼を縋って、彼の背に回ってしまつ。

舌が絡み合い、淫らな音を立てる。
「耳を塞ぎたい。だが、腕は彼の背にしがみついたまま。こちらは
こちらで、離れたくなかった。」

「潤々」

また、と彼を潤んだ瞳で睨んだ。

近ごろ峨瑛は蒼潤を『潤』を重ねて『潤々』と呼ぶ。

もちろん、人前では呼ばない。この呼び方は、男が女と二人きりの時に女を呼ぶ、呼び方だからだ。

完全に女扱いをされていることも腹ただしいが、峨瑛が満面に笑みを浮かべながら呼ぶので、馬鹿にされているような気持ちになる。これなら、まだ『潤』と呼び捨てにされた方がマシだ。

355

峨瑛の手が蒼潤の肌を滑っていく。胸、腹、尻。
快感を与えられているのか、苦痛を強いられているのか、判断しがたい。

自分が声を漏らすと峨瑛は喜ぶが、苦しくて、痛くて、どうしようもなく喘いでいる場合がほとんどだった。

この苦痛から逃れるためには、苦痛を与えている当人に縋るしか術がない。

できるだけ楽に苦痛を受け入れられまいかと思案し、結局は、彼にすべてを委ねるしかないのだと悟る。

苦痛。快感。苦痛。苦痛。苦痛。

耐えているうちに、何も考えられなくなる。何がなんだか分からなくなるのだ。

頭の中が真っ白になり、気が付くと、自ら夢中で腰を振っていたりする。

散々抱いた後で、峨瑛は蒼潤の髪を手で梳きながら、結局は自ら求めるようになるのだから、最初から抵抗などするな、と嗤った。そのことを指摘されると、蒼潤は青ざめるしかなかった。

「怠い。腰、いてえー」

恨みがましく言い放つと、祇恵は本気で困ったように眉を顰めた。

「俺に言うなよ、そういうこと。俺のせいじゃない。殿に言え、殿に！」

「もう嫌だ！どうにかしてくれよ！あいつがあんなに絶倫だったなんて、俺、聞いてねえーよ！」

これでも皇室に連なる者なのかと疑いたくなるような言葉遣いで、大声を出す蒼潤。

その親友は思わず、両耳を塞いだ。

主の陰口ならば聞きたくないし、できることならば、親友の夜の事情など聞きたくはない。

しかも、この親友は男でありながら男に抱かれているのだ。具体的な話をされればされるだけ、したくもない想像が頭を巡ってしまふ。

「やめてくれ、天連」

「やめて欲しいのは、この俺の方だ！」

背後から吹き出す音が聞こえてきて、二人は叫んだままの口で固まった。

太い腕がにゅっと伸びてきて、二人の襟首を鷲掴みにし、臍を軽々と持ち上げた。

空を蹴りながら、頭だけで振り返ると、薪塙が堪らないとばかりに大笑いしていた。

「殿はそんなに絶倫か、天連？ 親友の情事など聞きたくないものだよな、伯陽？」

「薪將軍」

「やめてくださいよ。俺たちは、猫の子ではないんですよ」

嫌そうに言った祇恵を、さも可笑しそうに見やって、薪塙は二人を地面に降ろした。

「二人とも、殿が呼んでいる。急いで行け」

「皓煽が？」

「榊州のことかもな」

「ゆう州？ 戦か？」

「まだ分からない。榊州には帷緒がいる。そいつの出方しだいだ」

早く行け、と薪塙が二人を払うように手を振るので、蒼潤と祇恵は峨瑛の居室に足を向けた。

榊州の部というところに、帷緒という男がいる。

広く知られた名前ではない。むしろ、彼の妻の方が知られていた。吟氏という。美貌の持ち主として知られている。

今の世で、美しい女と言えば、蒼麗がまず上がる。

蒼潤より三つ年下の彼女は15歳となっていた。未だ幼いが、目を見張るほどの美しさを持っている。

そして、哥氏。彼女は瓊俱の側室だ。

ただ、哥氏は峨瑛の好みではないらしく、彼女を指して、『あの豚』と言っていた。

それから、吟氏であるが、彼女は先の二人に比べて、怪しげな魅力を持つとされている。

顔は先の二人には劣るが、肌は白く、透き通るよう。そして、男の手によく馴染むらしい。

つまり、閨房術に長じているとして知られているのである。

吟氏の話を祇恵から聞いて、蒼潤は、それだと思わず手を打った。

「絶倫の皓燦には調度良いじゃないか。吟氏が皓燦のもとに来れば、俺の負担が減る。」

「そうだ。そうだよ。そうしよう」

「天連……」

親友が何を考えているかなど、祇恵には聞かなくとも分かった。呆れて物も言えず、ただ、肩を竦めた。

51 花が囁く刻 想いを抱く 弐

帷緒を討つ。その決定に異を唱える者はなかった。

檣州に向かつて兵が移動する。その中に祇恵の姿はない。

今回、彼は葵陽で楚雀の補佐を命じられている。しばらくは民政をやるようにとのことだ。

峨瑛と共に出陣できる蒼潤をひどく羨んでいた彼だが、それを命じられていた時に、峨瑛の脇で楚雀が冷ややかに微笑んでいて、否とは言えなかつたらしい。

ある意味、祇恵にとって楚雀は、峨瑛より恐ろしい存在なのか。

郇城まで40里というところで、陣を敷いた。

帷緒は郇城にいるが、煤山に侯霸がいる。

侯霸は帷緒と同盟を組んでいる。帷緒を攻めるのを、侯霸がじつと静観しているはずがない。

煤山は60里の距離にある。ここに陣を張ったのは、郇城に対するにあたって、煤山の動きを警戒したからである。

夜更け。予定外の軍議が開かれた。放っていた間者の報告によると、帷緒が郇城から逃げ出したというのだ。

峨瑛はすぐ脇に座る蒼潤を一瞥してから、薪塢に問うた。

「どう思う？」

「一戦も交えず、無傷。城を囲まれたわけでもなく、負けを見たわ

けでもない。少々、不気味です」

「帷緒はどこへ逃げたと思う？」

「おそらく煤山へ」

「候覇と兵を合わせて向かってくるか」

そうすれば、両軍の、数の上での兵力差は縮まる。

峨瑛軍は5万。帷緒軍と候覇軍は、それぞれ2万という計算だ。

蒼潤が居心地悪そうに、身動ぐ。峨瑛は目を細めて、その様子を横目で見やった。

蒼潤は都での一件以来、蒼昂という名を捨て、本来の蒼潤という名で軍にいる。

邸では今まで通り峨瑛の正室として扱われているが、皇子なのだ、軍においては今までのように校尉扱いはできなかった。

薪塙でさえ、蒼潤を部下に持つことを嫌がったからだ。

皇子を自分の下に置くなど、とんでもないことだと言って譲らなかつた。

しばらく考えて、当然のことなのだろうと、峨瑛は納得した。

皇子を己の正室扱いしている自分は、蒼潤に対して呆れるほど不敬罪を重ねているため、少々そのあたりが麻痺していたようだ。

だが、そうは言っても、蒼潤を將軍にするつもりはない。

才や器の問題もあったが、とにかく峨瑛は蒼潤を目の届く場所に置いておきたかつたのだ。

蒼潤の地位は曖昧のままにし、軍はどこにも属さず、遊軍扱いすることを決めた。

軍議は、帷緒が薮城に置いていった兵糧を回収するために兵を分けることを決めて、終わった。

半数はこのままこの陣に残るが、峨瑛が率いる半数は明日薮城へ

向かう。

それから、それぞれの方面から煤山を囲むことになったのである。

蒼潤を残し、皆が退出すると、峨瑛は蒼潤の肩を引き寄せた。

当然のように蒼潤は嫌がり、身を掠ったが、それを無理矢理思い通りにするのが、近ごろ楽しい。

峨瑛は、男子にしては細い躰を力で封じて、己の膝の上に乗せた。ようやく諦めたのか、そこまでされて蒼潤はため息を漏らした。

「俺はここに残るからな。薨城に行っても敵はいないし、この方が煤山に近い。誰よりも先に攻めて、手柄を立ててやる」

「勇ましいことだな」

峨瑛は蒼潤の首筋に唇を押し当てた。そこには、数日前の情事の痕が未だ残っていた。

残りやすく、消えにくい肌の質なのだろう。

自然すぎる控えめな香はすぐに相手の香に打ち消され、少しの間共にいるだけで、蒼潤からは自分の香りしか感じられなくなる。

他人の手にあってもこも染まりやすいのかと思えば不安になるが、すっかり自分の色に染まっている彼を感じると、愛おしくなってくる。

これは自分のものなのだ。

蒼潤の身が功郁の手の内にあると知った時に芽生えた想いは、今も変わらない。

都での一件で、蒼潤に野心を捨てさせてからは、更に強く深くなつた程だ。

「待て。脱がすな。自分で着られないんだ」

戦場である。蒼潤も具足を付けていた。

峨瑛は鼻で軽く笑った。

「儂が着せてやろう」

「だけど……。っん。あ」

口吻を深いものにしていくと、蒼潤の躰から力が失われていく。そのまま、後ろへと押し倒した。

どうやら帷緒は己の妻を置いて逃げたらしい。

薮城に入つてすぐに、吟氏を捕らえたとの報告を蛾瑛は受けた。

白い。吟氏を見て、まずはそう思った。吸い寄せられるような白い肌だ。

好みの顔ではなかった。

自分の好みは、蒼麗のようなハツと目覚めさせられるような美しさであつて、季節で例えるのならば、春の美しさだ。

目鼻はハッキリと、分かりやすくコロコロと変わる表情。相手に真つ直ぐと向かつてくる美しさなのである。

梨蓉も楓莉も、他の側室たちも皆そうであるように、春の暖かさ、そして、花の儂さを持ちながら、芯の通つた強さのある女性が蛾瑛の好みなのだ。

だが、どうしてだろうか。

吟氏の妖しげな美しさに目が離せなくなつてしまった。

不健全な美貌。

長く切れた目尻と薄い唇にはわずかな笑みが浮かんでいた。

何か巨大な力に操られているかのように彼女に引き寄せられ、そうして気が付けば、肌を合わせていた。

そう言えば、と吟氏の体内に精を放つた後に不意に思い出した。

彼女のことを蒼潤がしきりに気にしていたのだ。

できることなら殺さず、お前が気に入つたのなら、側室に加

えたらいい。

そんなことを言っていた。

加えてもいい。殊の外、吟氏の身体が峨瑛は気に入った。愉しめるだけ、この女体に溺れたいと思い始めていた。

叫び声が聞こえた。

突然のことではない。先程から何度も物音が響いて聞こえていたのだ。

だが、峨瑛は気にしないようにしていた。

吟氏が自分の躰の下で喘いでいる。その声がまた、耳に愉しい。肌が吸い付いてくる。溶けていくようだ。

熱。溶けていく身体がひどく熱い。

また、叫び声。

眩しい。異様な眩しさに、ふと峨瑛は外を見やった。

赤い。熱は情事の激しさからきたものではなく、その赤が原因だと気付いた。

炎。燃えている。

ハツとして、峨瑛は吟氏から躰を離れた。剣を手にし、裸のまま寝台に座った。

誰か、と大声を上げるが誰も来ない。その異常な事態に躰は一気に冷え上がった。

振り返ると、吟氏が嘲るような笑みを薄い唇に浮かべているのが見えた。

52 花が囁く刻 想いを抱く 参

薮城の上空が赤い。

報告を受けて、蒼潤は慌てて天幕から飛び出した。

赤い。空が燃えているようだ。

その恐ろしげな色を見て、峨瑛は、と瞬時に思った。

峨瑛は半数の兵を連れて薮城に向かったが、その半数の中には蒼潤もいなければ、薪塙でさえ含まれていなかった。

すぐに薪塙の元へ駆けけると、彼はすでに兵をまとめて薮城に向かう準備を整えていた。

「どういうことだ？」

「帷緒だ。帷緒軍が薮城を囲っている。候覇軍も薮城に向かっていくとのことだ」

「帷緒は煤山に向かったのではなかったのか？」

「そう思っていた。皆も、殿もだ。だが、現に薮城は帷緒軍に囲まれている」

話している時間も惜しいと、薪塙は馬腹を蹴った。

続いて、彼の部下の騎馬数百が土煙を上げて駆けていく。

蒼潤は土煙が静まるまで瞼を閉ざし耐え、己の馬の元へと駆けた。天狼は6歳になっていた。

軍馬としてはまだ若く、戦は今回が初めてだが、蒼潤は迷わず天狼を選び、その背に跨った。

薪塙を追って駆けている途中で予感がした。

速度を緩めずにチラリと後ろを振り返ると、青年が馬に乗って追いかけて来ていた。雫石だ。

「帷緒と候霸の後ろには瓊俱がいたようです」

「なるほど。援助を受けていたから、2万もの兵が揃えられたんだな。それに、この知略だ」

「おそらく瓊俱が授けたものでしょう」

「皓煽は無事だろうか？」

「帷緒の女に迷い、判断が鈍っておられるように見えましたので、幾人が吾の手の者を置いてきました」

グツと唇を結んだ。

帷緒が葭城を兵糧ごと捨てたと聞けば、峨瑛は葭城に足を踏み入れるだろう。

そして、そこに妖艶な女がいれば、大抵の男は迷うもの。

その間に、逃げたと見せかけた帷緒が葭城を囲い、峨瑛を討つ。

峨瑛軍の残党は、煤山から打って出てきた候霸軍が片付ける手筈になっているのだろう。

蒼潤の数里先で薪塙軍と候霸軍がぶつかっていると、雫石が告げた。

「薪將軍は間に合わない。皓煽には自力で葭城から脱出して貰わないと」

「しかし、帷緒の追っ手は2万です。逃げ切れるかどうか」

「逃げなければ、胴から首が離れるだけだ」

ふと雫石が気配を消した。甄此が蒼潤の軍を率いて追って来たのだ。

甄此の馬が並んだのを確認してから、蒼潤は声を張り上げた。

「この先を迂回する」

薪塙軍と候覇軍の戦いに巻き込まれ、時間を取られなくなかった。見上げれば、赤い空に細い影が映って見えた。影は幾万もの矢だ。悲鳴とも断末魔とも区別つかない叫びが、蒼潤の胸にまで響いてきた。

空を染める赤は炎ではなく、人の血なのではないかと思う。

歓声が遠くの方で上がり、ハツと胸を突かれる。誰かが討たれた。死んだ。いや、殺されたのだ。

峨瑛ではないだろうか、不安が過ぎる。だが、すぐにまさかと思った。

峨瑛は、蒼潤にとって、死ぬはずのない者だった。あまりにも大きく、絶対的な存在だ。

裏切ろうと何度も思ったことだし、実際に、裏切ったこともある。だけど、彼は蒼潤を許してくれた。

殺さずにいてくれたのだ。

だから決めたのだ。彼のために生きよう。彼が描く世界のために自分の力を出し切ろう、と。

その彼がいなくなってしまうたら、自分はどうなる？

生きている意味がない。生きていく望みがない。

彼が死ぬはずがないのだ。そう思うのに、空はあまりにも赤くて、胸が騒ぐ。

「俺が、吟氏を側室にしろだなんて、余計なことを言ったから」
「天連様？」

「吟氏など気に留めなければ、皓燭がこんな失態をすることなどなかった。俺が余計なことを言ったから、皓燭は吟氏に気を向けてしまったんだ」

彼にもし、何かあったら。

考えたくない。だけど、考えずにはいられなかった。

彼がもし死んでしまったら、俺は生きていけない！

比翼の鳥。

峨瑛が蒼潤に向かって言った言葉である。自分と蒼潤は比翼の鳥なのだ、と。

まさにそうだと蒼潤は思った。

半身だ。彼は自分の半身なのだ。引き千切られそうになって、ようやく気が付いた。

痛い。心が痛い。

その痛みがそのことを気が付かせてくれた。

「こんなところで、皓燭を失うわけにはいかない。彼の死は、このわたし、蒼天連の死と等しい！」

側室に吟氏など、いらない。

彼の愛が重いからと言って、他の者に押し付けたりせず、すべて受け入れよう。彼がそれを望む限り。

彼は己自身の半身であり、彼を愛することは己を愛することに等しい。

自分は、もっと自分を想って生きても良いのではないだろうか？
自分の夢は何？
自分が本当に欲しいものは何？

それは本当に青王朝の玉座だったのだろうか？

違う。玉座を欲しがっていたのは、父であり、祖母であり、そして、姉であった。

彼らがそれを望んだから、自分も望まなければならなかった。
それが、蒼昏の子として生まれた自分が生きる術だったのだ。
玉座を望むように育てられ、野心を抱くように教えられた。

もしも蒼昏の子として生まれなかったら、もしも男子ではなく女子として生まれていたら、自分は蒼昏や蒼彰のように、都に夢を描いたであろうか？

赤い風。葭城から火花を連れて、蒼潤の元まで駆け抜けてきた。
濛々と黒い煙が上がっている。人間の焼ける匂いがかすかに漂ってくる。

汗が流れた。嫌な汗だ。暑さから来たものではなく、不安や恐怖から来たものだった。

恐怖。　そう、彼を失うことは恐怖にも近い。

影が見えた。それは煙の中でわずかに揺らいで、こちらに近づいてくる。

馬。人がその背にしがみついている。

「殿！」

誰かが叫んだ。すぐには分からなかった。だが、それは紛れもなく、峨瑛だった。

蒼潤は峨瑛の背後を見て、ハツとする。すぐ後ろに帷緒軍が迫っていたのだ。

甄此に振り返る。彼にはそれだけで十分だった。

甄此の指示で蒼潤の騎馬兵が峨瑛の後方へと駆け抜けていく。

「皓煥！」

峨瑛の姿は次第にハッキリと見えるようになり、距離もだいたい縮まった。

蒼潤は馬首を返し、峨瑛が追い付くのを待って、共に駆け出した。

甄此が時間を稼いでくれているうちに彼を守って少しでも遠くに逃げなくてはならなかった。

峨瑛の馬が潰れかけている。口の端に泡が浮いているのが見えた。

潰れる。馬なしでは逃げ切れない。

そう思った次の瞬間、まるで条件反射のように、蒼潤は峨瑛に向かって腕を伸ばしていた。

「皓燭、こっちの馬に移れ！その馬はもうダメだ！」

「二人で乗れば、その馬が潰れるぞ」

「天狼は大丈夫だ。それに俺は軽い。今の、具足も何も付けていないお前ならば、大丈夫だろう」

峨瑛が頷いて、自分の馬を天狼の横に並べてきた。蒼潤の手を取る。

ズンツと、一瞬、天狼が沈んだ気がした。

命の重さだと思った。峨瑛は生きている。それだけで、涙が滲み出てきた。

視界がぼやけてきたので、手綱を後ろに跨った峨瑛の手に押し付けた。

彼は前屈みになって、天狼を駆けさせた。

その旋風のような速さに息苦しさを感じたが、峨瑛は生きている、それだけで今は他に何も考えられなかった。

53 花が囁く刻 想いを抱く 肆

琲州近くまで逃げて、薪葦が琲州城から率いてきた軍に助けられた。

薪葦は薪塙の弟であり、峨瑛とは同い年である。

この兄弟の違いは、薪葦には峨瑛に対して、血縁だという甘えがあるということである。

傷だらけの峨瑛を見やり、彼は大笑いしたのだ。女に迷ったせいで負けたのだ、と。

その通りなので峨瑛は何も言わなかったが、ひどく青ざめていた。

併州からも峨篤が兵を率いてきていた。彼も峨瑛の従兄である。

薪葦と峨篤は、峨瑛を保護し、琲州へと見送ると、薪葦は候覇軍と戦っている薪塙の加勢に、峨篤は帷緒軍への報復に、それぞれ出陣した。

峨瑛が琲州城に入ってから数日後、候覇が討たれたとの知らせが届いた。

更に数日経ち、今度は帷緒の首が届いた。

本来ならば、こうして易く勝てる相手なのだ。吟氏さえ いや、自分が余計なことを言わなければ。

蒼潤が峨瑛の居室を訪れると、彼は侍医に怪我の治療させていた。火傷から、矢傷。全身あらゆるところに傷を受けていて、数日前まで高熱でうなされていた。

熱が下がったと聞いたから来たのだが、まだ顔は赤かった。目も

充血している。

蒼潤の姿を認め、彼は片手を振って侍医を下がらせた。ふっと眼を細める。

「やっと来たな」

「お前の具合が悪いと思って遠慮していたんだ」

「そういう時こそ傍にいるものではないのか？」

「いたところで、やってやれるものはないし、邪魔になるだけだ」

「そんなことはない」

「俺が、じつと見ていることに耐えられないんだよ。お前を失わなくて、本当に良かった」

「……」

峨瑛が手を招いたので、それに引き寄せられるように蒼潤は彼の腕の中に己の躰を収めた。

顎を掴まれて、口付けを与えられた。

少しの間で離れていくその唇が惜しくなって、捕まえるために自分からも口付けた。

峨瑛は驚いたようだった。だが、構わない。もっと、もっと、と彼の首に両腕を絡ませる。

背中を支えられながら、ゆっくりと後ろに倒された。

潤み始めた瞳で彼を見上げれば、峨瑛は薄い笑みを浮かべていた。

「しばらくは、女はいらぬな」

「俺もお前がいれば、いい。他に何もいらないし、他に何も望まない。……お前だけだ」

心から望むものが、もしも自分にあるとしたら、それは玉座ではない。峨皓煽だ。

彼が見つめているものを、自分も見つめていたい。

彼と共に歩んでいくために。

杜鄭が首だけの姿で空を睨んでいる。

だが、そこには何も無い。少なくとも杜鄭の眼には何も映っていないはずだ。

瓊俱は和州を手にした。

杜鄭の必死の抵抗に遭ったが、さほど犠牲もなく、むしろ兵力を更に蓄えた形で和州を落とした。

これで、涿州、敖州、和州の北方三州が瓊俱の勢力下となった。

檣州に放っていた間者が戻って来た。檣州は峨瑛の手に落ちたという。

併州、珙州、雅州、そして、檣州を峨瑛は支配下に置いたことになる。

この四州は、北方の三州に比べて、面積的にも狭く、その上、土地が痩せていた。

特に雅州は呈夙やその遺臣たちがひどく荒らしたと聞く。

都だからこそ人口は多いが、産業があるわけでもなく、収穫も多くを望めない地だ。

それは併州も同様で、峨瑛は併州に向けて兵を挙げたようだが、例え併州を手にしたとしても、北方三州の富みには適わないだろう。

兵を動かすにも、兵糧に苦労しているはずだ。

調べさせたところ、やはり南の方から大量に兵糧を購入していることが分かった。

南 瑞州だという。

瑞州には蒼閭という男がいる。数代遡れば皇帝へと繋がる血を持っている男だ。

瑞州が都から遠く、目が届きにくいことを良いことに、己の土地でまるで皇帝のように好き勝って振る舞っていると聞いている。

その蒼閭の客将に、蒼邦という男がいる。

蒼閭同様に、数代遡れば皇帝へと繋がる血を持っているらしい。

だが、これは、生まれながらにして瑞州の主を約束されていた蒼

閤と異なり、敖州の鍾山国の片田舎で生まれ、長く農民として暮らしてきたような男だ。

眞実、皇室に連なる血が流れているのかどうかは疑わしい。

蒼閤は蒼邦を、同姓の誼で瑞州に迎え入れたようだ。だが、それだけではない。

蒼邦は蒼昏の娘を娶っている。蒼彰という。

蒼閤は蒼邦よりも、蒼彰や蒼昏との縁を考えたようだった。

蒼昏には娘が三人いた。蒼彰、蒼潤、蒼麗の三人である。

蒼彰は智に優れ、蒼潤は勇を有し、そして、蒼麗は天下に並ぶ者などない程の美貌を持つとされている。

皇太子時代に廃された蒼昏は昨年復権したため、その娘達の行く先に一時、世間の注目が寄せられた。

だが、蒼彰は蒼邦に、蒼潤は峨瑛に、すでに嫁している。

蒼麗は一度晤貌と婚約したが、これは破棄されて、今は蒼昏と共に蒼邦の世話になっているようだ。

瓊俱は自身に流れる血が、蒼家に匹敵する高貴なものだと自負している。

瓊家は四代に渡って参考を輩出した青王朝きつての名門なのだ。

故に、瓊俱は蒼家の娘を必要としていなかった。 どうでもいい、とさえ思う。

だが。

峨瑛が蒼潤を娶ってから、力を付けてきている。ひどく目障りだ

った。

功郁を使つて、蒼潤を峨瑛から取り上げればどうにかなるかと思つたが、これは失敗した。

一度しくじると、そのことはどうでもいいことのように思えてくる。しばらく放つて置いた。

すると、都から驚くべき知らせがもたらされた。蒼潤が皇子だつたというのだ。

峨瑛の祖父は宦官だ。

男性器を切り取つたイキモノで、男としては無能で、女ではありえないイキモノだつた。

その孫である峨瑛が娶つた妻が男だつたという。笑いが止まらなかつた。

宦官の孫が男を妻にした！

至極お似合いで、実に相応しい。滑稽で、だが、自然なことのように思えたのだ。

武を好む蒼昏の娘、蒼潤。

男子でありながら、女子として育ち、男である峨瑛に嫁いだ。はたして、どのような者なのだろうか？

峨瑛の力が己に近づいてくる程に、その助力をした蒼潤の存在が瓊俱に関心を抱き始めていた。

54 生を歩む刻 不変の者達 壱

嫌な咳をする、と思った。

峨瑛が檣州に兵を向けている間、祇恵は葵陽で騎兵に対する策を考えていたらしい。

そのことを蒼潤は葵陽に戻ってから聞いた。

調練に付き合っただけと言われ、祇恵が率いている軍と自軍を戦わせたのである。

その時はまだ何も聞かされていず、地面から突如として生えた拒馬槍にひどく驚かされた。

怒りさえ感じた程である。

拒馬槍とは、丸太に槍を通して斜めに立たせたものことである。事前に地面に埋伏させておき、敵の騎馬隊が突っ込んで来るのを見計らって、縄で引き起こすのだ。

すると、勢いよく駆けてきた馬は槍に傷付けられる。

あるいは、槍を恐れ竿立ちになり、乗り手を落とすという仕組みになっている。

拒馬槍だと分かった瞬間、蒼潤は全身に嫌な汗が流れるのを感じた。

ぞくりと冷たいものが背筋を通ったのである。

大慌てで騎馬隊を返させた。

逃げて、後ろを振り返るように確認すると、半数以上が射落とされており、更に残った者も祇恵自身の騎馬隊から手ひどくやられ、最終的に蒼潤の側には数十騎しか残されていなかった。

甄此が歩兵を率いて逃げ道を確保してくれなかったら、もっと散々なことになっていただろう。

蒼潤は天狼から降りると、まずは天狼の腹を、そして、首、蹄を確かめた。

幸い無傷だった。だが、他の多くの馬たちの負傷報告を受け、蒼潤は全身を震わせる。

再び天狼に跨り、一目散に祇恵の元へ駆けた。

彼は当然蒼潤の反応を予測していたのだろう。降参だと、両手を天高く上げて見せた。

「天連、ついに晤獮を討つ時が来たんだ。この調練は、晤獮が有している最強騎馬を封じる策の、最終仕上げをするためのものだった」

「そんなことは分かっている」

「なら、怒るなよ」

「馬が……可哀想だ。俺の馬のことじゃない。晤獮軍の馬のことだ」

「敵の馬のことだろ？」

「馬は馬だ。敵じゃない。偶々敵に所有されているだけだ。俺が手にしたら、俺の馬になる」

「それでも、拒馬槍しか晤獮に勝つ策がない。晤獮の騎馬隊を封じなければ」

「分かっている。だけど」

蒼潤は頭を左右に振った。この話はやめよう、と。

馬が可哀想だなんて、祇恵に話しても無意味なことだった。そして、誰に話しても意味がない。

これは峨瑛が決めたことなのだ。

馬がどうなるかと、戦は勝たなければならぬ。

拒馬槍を使わなければ、暗獫に勝てないというのなら、峨瑛は蒼潤がどんなに止めたって使うだろう。

話題を変えようと、芳詔のことを持ち出した。

芳詔は蒼潤の侍女であるが、乳母である徐姥の実の娘であるから、乳姉弟とも呼べる存在だ。

この秋、芳詔は祇恵に嫁すことが決まっている。

これは数ヶ月前のこと。

徐姥から、どうやら芳詔が祇恵に想いを寄せているらしい、と聞かされた。

寝耳に水で、蒼潤はひどく驚いた。

何でも芳詔本人に詳しく聞いたところ、蒼潤が芳詔を祇恵の邸へ使いに出した際、祇恵本人と話をする機会があったのだという。

そう言えば近ごろ、芳詔はしきりに祇恵の邸に行きたがる。

祇恵に用があるのではないかと聞いてくるのだ。

ない、と言えば暗い顔をし、ある、と言えば喜々としていたように思う。

春蘭は伯陽を好んでいるのか。

シミジミと思うと、少し寂しいような気がした。

実の姉妹たち以上に共に育ち、常に一緒にいた存在なのだ。

彼女が自分以外の者を想っていると感じると、ふと、胸に穴が空いてしまったような気持ちになる。

だが、同時に、彼女には幸せになつて欲しいと強く願っている。

すぐに祇恵に嫁を娶る気はないかと話を持ちかけた。

「悪いが、ないな」

柢恵の答えはごく短いものだった。あっけない程である。蒼潤はすぐに次の言葉を言えず、目を泳がせた。

「ずっとか？ 一生独りでいるつもりか？ それとも、他に想う女が？」

「一生独りでいるつもりなのさ」

なぜ？と蒼潤が怪訝な顔を見ると、柢恵は小さく咳をして、苦笑した。

「……あまり、長く生きられないんだ」

何を言われたのか、よく分からなかった。蒼潤は怪訝な顔をする。「生まれてすぐに、この子は大人にはなれないだろう、と言われたんだ。それでも、この体は二十年生き続けた。騙し騙し生きてきたんだ」

「誰にそんなことを言われたのか知らないが……」

「そいつは、名医だと評判だった。そいつに診て貰いたくて、患者がわざわざ遠くからやって来る程にな」

「……」

柢恵は笑った。

「明日にでも死ぬかも知れない男に嫁はいらないだろう。嫁にされた女が不憫だ」

静かに言い放たれた言葉に、すぐには応えることができなかった。蒼潤は空を仰ぐ。蒼い。度々そうしているように、二人は朝議に出ず、中庭の砂利の上に並んで腰を下ろしていた。蒼潤は小石を一つ摘んで、軽く投げた。それは音もなくどこかに消えた。

「今は乱世だ。明日にでも死ぬかも知れないのは、皆同じだ。俺も明日、突然起こった戦で、死ぬかもしれない。同じだよ」

「……」
「春蘭という。俺の侍女だ。だが、姉弟のような存在だ」

「しゅんらん？」
「彼女を通じて、伯陽ともっと親しくなりたかった」

「……そうか」
「側室の一人としてでも良い」
「……」

その時はそれっきりだった。

朝議が終わり、毎度のことのように薪塙に見付かり、柢恵は楚雀の元へ追ひ払われていった。

ところが、その数日後、柢恵が文を寄こしてきた。芳詔を娶るといふ。

どういふ気持ちの変化か分からなかった。だが、蒼潤は喜んで柢恵に礼を言った。

柢恵は淡く笑った。

「春蘭はお前にとって姉妹のような存在なんだろう？ 側室になどするものか。他に妻を娶る気もない。大切にするよ」

そう言つて、彼は咳き込んだのだ。

聞き慣れた柢恵の咳。

聞き慣れたもののはずなのに、彼が死ぬかもしれないと知ると、嫌な響きに聞こえる。

不安が過ぎつた。本当に芳詔は柢恵に嫁いで幸せになれるのだろうか？

柢恵はいつまで生きられるのか？

死とは？

死ぬとはいっただういふことなのだろうか？

55 生を歩む刻 不変の者達 弐

ハツと我に返ると、再び柢恵が咳き込んでいた。嫌な咳だ。蒼潤は顔を顰めた。

視線に気付いたのだらう。柢恵が唇を拭いながら、蒼潤に振り向いた。薄く笑う。

「まだ大丈夫だ」

「心配なんか、していない」

「だよな」。する程のことじゃないからな

「……」

訓練終了の合図を出して、柢恵は己の馬に跨った。

蒼潤が甄此の方へ目を向けると、蒼潤の軍をまとめて城内へ引き返す準備を整えていた。

柢恵の馬がゆっくりと歩き出した。蒼潤も天狼の腹を蹴る。

「伯陽」

「ん？」

「死ぬって、どういうことだらう？ 死ぬと人はどうなってしまうんだ？」

「……そうだな。軀は埋葬されるだらうな」

「からだは？」

聞き返すと、柢恵は口元を緩めた。

「天連。お前、結構ひどいヤツだな。そんなこと俺に聞いてどうしようって言うんだ?」

「死ぬのは怖いか、伯陽?」

「怖いさ」

祇恵は唇を結んで真っ直ぐ前を見据えた。

同じものを見ようと、蒼潤も真っ直ぐに前を見つめたが、草原の青と空の蒼が互いにせめぎ合うように広がっているのが見えただけだった。

ふと目を横に移動させると、葵陽の城壁が見えた。

城門に向かって、甄此の指揮で蒼潤の軍が帰っていく。

しばらく眺めていたが、兵士たちはなかなか城門に辿り着けずにいる。いた。

それどころか、馬を駆けさせている兵士でさえ、城門までの距離をまったく縮めていないように見えるのだ。

葵陽の回りは平地である。城壁までの距離が遠目では短いものに見えるのもそのためだった。

蒼潤が祇恵の顔を窺うと、彼はふっと顔を緩めた。へらへらと笑う。

「おもしろい話がある。これはずっと東の方の宗教の教えなんだ」

「東の方の?」

自分たちが『国』と呼ぶ土地よりもずっと東の地のことだ。

そこにもまた別の『国』があるらしい。

目が青く、髪が黄金色の人間がいるのだとか、いろいろと噂は聞く。

だが、自分たちの国とその国との間には砂漠が広がっているため行き来は非常に難しく、偶に東からやってくる者がいて、稀に東へ向かう者がいる……という程度の交流しかない。

祇恵は話を続ける。

「その教えによると、人は死ぬと軀から魂が抜け出て、次の新しい軀に宿るらしい」

「たましい、つて？」

「意識みたいなものかな？ 俺にもよく分からない。ともかく、死んでも、また新しい軀を与えられて生きられるってわけだ」

「どういうことだ？」

「だから、この軀が死んでしまっても、新しい軀で生きられるってことだよ。例えば、衣を脱ぐみたいに。もう着られなくなった物を脱ぎ捨てて、新しい物を着るんだ」

「ふん」

「だけど、軀は衣とは違う。新しい軀は、前の軀とは違う人間のものであって、同じ人間ではあり得ないんだ。要するに、別の人間として、一から生き直すってことらしい」

「はあ？」

「だからさー。死んだら、また赤ん坊に戻るのさ。赤ん坊から人生をやり直すんだ。」

それが生まれ直すってことだ」

蒼潤には祇恵の話がさっぱり分からなかった。

だが、祇恵は蒼潤相手に話をしていくわけではなく、自分自身に言い聞かせているのだと察して、蒼潤は黙って頷いてやることにした。

「生は死の始まり。だが、死は生の始まりでもある。 そんな風に考えるとさ、なんだ、死ぬのも生き続ける過程の一つなのかなあ、って思うわけだ」

死ぬことは大したことじゃない、と言って、 柢恵は唇の端を軽く持ち上げ、笑う。

「もし今の俺の躰が死んでも、俺は新しい躰に生まれ変わる。そして、またお前や殿、榎抄殿、妻や子、愛しい者すべてに会える。そう、思えば、死は一時の別れに他ならない。怖くない。 きっと死を怖いと思うのは、もう二度と愛しい者に会えないと思うからだ」

「そうなのかもしれない」

「そうさ。そう、俺は信じたい」

二人の馬が並んで歩いている。

そうか、と蒼潤は改めて思った。

柢恵の言う宗教の教えはサツパリ分からなかったが、柢恵の芳詔への想いの変化の原因はそれだったのだと気付く。

自分は明日にでも病死するかもしれない。

死んだ後、妻を一人残してしまうのは心苦しい。

そう、柢恵は言っていた。 だから、妻はいららない、と。

だが、死んでもまた会うことができるのだとしたら？

死は、一時の別れ。また会える。そう、柢恵は悟ったから、芳詔を娶る決意をしたのだ。

蒼潤は祇恵に向かって強く頷いた。

「俺もそう信じている。お前が信じたものを、俺は信じる」

「生まれ変わっても、またお前とこうして話をしたい」

「しよう。きつと、できる。そう、信じている」

そう言って蒼潤が笑うと、祇恵も淡く微笑んだ。

調練を終え、居室に戻ってきて、蒼潤は絶句した。

室中に並べられた装飾品。

よく見ると、絹などもあり、更によく見ると、剣などの武具もあった。

櫛やら簪やらには目もくれず、まず剣を手にする。軽く、蒼潤の

手によく馴染んだ。

自分の居室にあったものだし、どう見ても自分のために用意されたものと思えなかった。

蒼潤は眉を寄せた。

「これ、どうしたんだ？」

「すべて殿からですわ」

「皓燭から？　なんで？」

ますます顔を顰めると、呂姥は顔を険しくする。

「燕夫人がご懐妊なされたからですわ」

「ご懐妊？　……へえ」

自分とは縁遠い言葉に、一瞬、何のことかとその意味を理解できなかった。

だが、すぐに、めでたいことだと喜んで手を鳴らした。

「　　だけど、なんで？　燕夫人が懐妊すると、俺んどこにこんな物が送られてくるんだ？　祝いの品なら、俺の方が燕夫人に送らなければならぬだろう？」

「天連さま、これは殿のご機嫌伺いです」

ぴしゃりと言い放ったのは玖姥だった。蒼潤は小首を傾げる。

「なんで？」

「燕夫人は殿の御子を懐妊されたのですよ？」

「当然じゃないか。皓燼の子じゃなかったら、問題だぞ」

そこまで言つて、蒼潤は、あー、と低く唸つた。

ようやく玖姥たちが言わんとしていることが分かったのだ。

そして、峨瑛の想いも。

「俺が燕夫人の懐妊に気分を害するとしても？ 馬鹿馬鹿しい。なんで、俺が？ 第一、今更じゃないか。皓燼にはもうすでに子がたくさんいる。もう一人くらい増えたつて、俺は何とも思わない」

両手を広げて、肩を竦める。滑稽だと言わんばかりに笑つた。

そうしてから、彼女たちに背を向ける。

「どちらへ？」

「皓燼のところ」

「贈り物を返されるのですか？」

「まさか。貰える物は貰つておくよ。いくつか気に入った物もあったから」

そう言つて、先程の剣を片手で掴む。

ぐるりと振り回して、軽く笑つた。

56 生を歩む刻 不変の者達 参

蒼麗が範珪に嫁した。

檣州の南、瑞州の西、海に接した州を豫州という。

豫州には豪族が数多存在し、それらの長に範遜という者が立っていた。

ところが、この範遜が瑞州の蒼閭に戦を挑み、思わぬ奇襲に敗れ、死んだ。

範遜には二人の息子がいて、名を範珪と範匡という。

範珪が兄だが、範匡が後を継ぎ、現在、豫州を治めているらしい。

涑州にいる瓊俱にしてみれば、豫州は遠い南の地のことだ。

情報を得がたく、目も行き届きにくい。

想いを馳せるにも遠すぎる。

だが、峨瑛と戦を始めるのならば、豫州の動きを把握しておく必要があった。

もしも、範匡が檣州に兵を向けてくれれば、おそらく峨瑛は涑州の自分と豫州の範匡に挟まれて、容易にその首級を差し出すだろう。

そのように画策して、範匡に宛てて同盟の使者を送っていたが。

そうして、知らされた蒼麗と範珪の縁談である。

瓊俱は忌々しいとばかりに、刀を振り回した。

刀は空を切る。

自分は物に当たる性分ではなかった。当たったところで仕方がないことをよく知っていた。

だが、この口惜しさをどこへ向ければ良いのか分からなかった。人を呼び、街から老人を連れてこさせた。家もなく、身寄りもない老人だ。

汚らしい格好をし、その破けた衣からあばら骨が見えた。聞けば、何日も食事らしい食事をしていないのだという。好きなだけ食べさせてやった。

そうして、満足したかと問い、是と応えたので、殺した。刀に血が滴る。

それを見て、ようやく気が静まった。

蒼麗は蒼昏の娘であり、蒼潤の妹である。

確か、歳は16。

絶世の美を持っているという噂は、幼い頃から尽きない少女だ。

蒼潤は峨瑛の妻であり、その妹である蒼麗が範珪に嫁いだとなれば、範匡が峨瑛と手を組んだということなのだろう。

豫州が楮州を攻めてくれれば、という期待はできなくなった。他に何か、と瓊俱は地図を広げた。

瑞州に蒼閣がいる。

蒼閣が北上し、雅州なり瑋州なりを攻めてくれたなら。だが、瑞州には蒼彰がいる。

蒼彰は蒼潤の姉。

瑞州が北上することはないだろう。

また蒼潤か、と思った。

蒼家は四百年続いた青王朝の皇室である。
今更皇室など、という思いがある。

青王朝は落ちるところまで落ちている。その証が、この乱世だ。

未だに青王朝に望みを抱いている民も皆無だろう。

ならば、蒼家に代わり瓊家が新しい王朝を築いてやる。自分こそが玉座に相応しい。

自分には力がある。高貴な血も持っている。

資格があるのだ。天下を望む資格が。

峨瑛にはそれがあるのか？

いや、ない。

宦官の祖父を持ち、その体内には腐った血が流れている。

だから、蒼潤などを妻にしたのだ。だからこそ、皇帝を擁立した。己の劣っている点を補うためだ。

峨瑛は劣っている。その流れる血において、自分よりも数段劣っているのだ。

瓊俱は拳を床に叩き付けた。そして、嗤う。

数段劣っている峨瑛に、自分が負けるはずがない。

例え、範匡や蒼閻が北上しなくとも、負けるはずがないのだ。生まれが違う。育ちが違う。

そうだ、自分と峨瑛は比べる意義もない程、違っているのだ。負けるはずがない。

瓊俱は人を呼び、先程斬り殺した老人を丁重に葬るよう命じた。

併州瑇城が晤獏最期の地となった。

葵暦198年、冬のことである。

瑇城から数里離れた城　胡城から峨瑛軍が瑇城に向かって兵を進め、瑇城近辺の平野で一戦交えた。

そこで柢恵の拒馬槍が用いられ、晤獏最大の武である騎馬隊は破れたのである。

晤獏は瑇城に立て籠もり、瓊俱からの支援を待ったが、瓊俱は動かなかった。

動けなかつたのである。

薪葦軍が壬州と澗州との境に布陣し、それが何者であっても、通行を許さなかつた。

年明け間近、籠城に堪えられなくなったのだろう。
晤獯軍の兵は次々と降伏し、城から逃げ出てきた。

そうして、ついに城内で叛乱が起こった。麾下の者たちが晤獯に
剣を向けたのだ。

縄に縛られた状態で晤獯は城から出てきた。

峨瑛の前に連れ出された晤獯は、峨瑛をギロリと睨み上げ、薄く
嗤った。

唇の端から、ゆっくりと血が流れ、彼が舌を噛んだのだと知る。

峨瑛は晤獯の軀が地に沈む前に、首を刎ねさせ、城壁に晒すよう
命じた。

これが晤獯の最期である。

あつけない、と蒼潤は思った。

恙釜という男がいて、彼の死をきっかけに兵が皇城に踏み入った
のが乱世の始まりだったと蒼潤は考えている。

だが、もし。
恙釜は大將軍だった。

彼の死後、彼の副将だった瓊俱が順当に後を引き継いでいれば乱
世は起こらず、青王朝は瓊俱に乗っ取られる形で静かに滅んだのか
もしれない。

乱世が起こったのは、ここで呈夙という男が現れたからだ。

呈夙は皇帝の権威を思うままにし、悪政でもって世を乱した。

そのため乱世になったというのであれば、呈夙という男が乱世の
種だったのかもしれない。

その呈夙を討つたのは、晤獯だ。
そして、今、晤獯が死んだ。

あつけない。

あつけなく死んだと思うのは、蒼潤に活躍する場がなかったせいなのかもしれない。

祗恵の拒馬槍がすごかった。その印象しか残らない戦いだっただ。

不思議だ。

乱世を起こした呈夙も、呈夙を殺した晤獯も死んだというのに、乱世は未だに続いている。

峨瑛の目はもう次の地に向いているし、人々の目も次の戦へ向いている。

次はいよいよ瓊俱との戦である。それは情勢をみれば、誰にでも分かることだった。

瓊俱。

彼もまた蒼潤に感慨深い人物の一人である。

一つ道を選び違えていたら、自分は峨瑛ではなく瓊俱の元にあつたかもしれない、と思う。

彼が反呈夙連盟盟主だった頃、蒼潤は彼の元へ参ずることを悩んだ。

結果、蒼潤は瓊俱よりも峨瑛を選んだのだ。そして、今も彼の元にいる。

選んだ者と選ばなかった者が戦う。

その勝敗が、自分の選択の正否を示してくれるように思う。

57 生を歩む刻 不変の者達 肆

貰う一方で、人に物を贈るなど、初めてのことだった。

何を贈れば良いのか分からず、品選びは玖姥に任せてしまった。玖姥は香をいくつか取り寄せたようだ。心が安らぐ香だという。産後の女にも、赤子にも、これが一番良いのだと言うのだ。

燕朋が子を生んだ。

燕朋は峨瑛の側室の一人で、燕夫人と呼ばれている。

蒼潤が嫁す前から、峨瑛には子が幾人かいて、嫁した後にも幾人か生まれた。

だが、それらは皆、妾が生んだ子で、しかも女子ばかりだった。

燕夫人が生んだ子は、男子。

正室として、祝いの品の一つや二つ贈らなければならぬだろう。そう思い、品を持って燕朋の居室に向かうと、すでに他の側室たちも集まっているようで、甘い香りが混ざり合って漂ってくる。

峨瑛の声も聞こえる。

赤子の泣き声。そして、皆の笑い声。

中に入りにくくしていると、梨蓉が気付き、蒼潤の名を呼んだ。

皆も気付き、蒼潤のために峨瑛の隣に席を作ってくれたが、蒼潤はまず燕朋の元へ歩み寄り膝を折った。

燕朋はわずかに目を見開き、蒼潤より更に腰を低くした。

「燕夫人、此度は良き御子を生んでくれた。これは俺からの祝いの品だ。気に入ってくれると嬉しい」

「まあ。天連殿からこのような物を頂けるとは」

徐姥が選んだ香炉に、玖姥が取り寄せた香が入っている。香にも香炉にも明るくない蒼潤だが、香炉は青銅器で作られているらしいことは分かった。

正面は麒麟、裏面には鶴の図が描かれている。

透かし窓は4つ。蓋には獅子の装飾がくっついている。

そして、4つの足は獣のようになっている。

大きさは両手に乗るくらい。持つと、両手にズッシリと重みが伝わる。

香の正体は知らないが、こちらの香炉は良い物に違いない。

だが、それを何でもない物のように、燕朋に差し出した。

峨瑛が低く唸る。

「天連、儂に何かくれたことはあったか？　なぜ、儂には何もくれないのだ？」

「くれてやる理由がない」

「天連」

こちらに来いと、峨瑛は己の隣を叩いたが、蒼潤は聞こえない振りをして、燕朋の腕に抱かれている赤子を覗き込んだ。

生まれて間もない赤子の顔は皺だらけで、触らずとも柔らかいと見て分かる肌をしている。

時々、目を薄く開くが、どこを見ているというわけでもない。

喘ぎなのか、欠伸なのか、小さな声を漏らす。

小さい。

手も、足も、すべてが小さいのだ。

蒼潤は人差し指をそっと伸ばして、その小さい手に触れた。やはり柔らかい。

「天連殿、この子の名は梶といいます」

「では、峨梶だな」

「はい」

峨梶。

そう名付けられた子を見つめながら、燕朋は微笑む。

その時、蒼潤に複雑な想いが湧いた。

不意に胸が苦しくなる。心臓を鷲掴みにされたような痛み。

蒼潤は顔を顰めた。

燕朋の腕の中でぬくぬくと生きているイキモノが急に憎たらしくなり、また、それを愛おしげに抱いている燕朋をも憎く思えてきた。

蒼潤は頭を左右に振った。しゅらしゅらと簪が音を立てて揺れた。

今日は「蒼夫人」として燕朋の元へ出向いた。故に女装をしている。

その女物の衣類が急にズッシリと重たくなった。

「天連殿、顔色が」

蒼潤の異変に気付いて、梨蓉が駆け寄ってきた。蒼潤は片手を振る。

立ち上がると、スツと血が頭から背中、腰、足の方へと落ちていった。

貧血。そう思った瞬間には、目が眩み、再び膝を床に着いていた。

「潤！」

峨瑛が駆け寄ってくる気配がした。瞼を閉ざしているので定かではない。

だが、肩を抱いてくれた腕の強さは、他の誰のものでもない、峨瑛のものだ。

ホッと息を付き、瞼を開く。
とたんに目頭が熱くなった。

「潤？」

「……あ」

ポタリと雫が床に落ちて、自分が泣いているのだと気付いた。

だが、なぜ？

泣くほどの理由が自分にはない。

ない、はずだ。

それなのに、どうして？

「潤、どうした？ いったい何が？」

オロオロする峨瑛の声が耳元で聞こえ、蒼潤は頭を左右に振る。

「分からない。急に梶が憎くなって。燕夫人が恨めしくなって。そんな風に思う自分が嫌で、許せなくて。信じられない。お前の子が何人生まれようと、俺は構わないと思っている。お前がどれほ

どの女を抱こうと、俺は一向に構わないと思っている。それなのに、泣くだなんて。こんな風に泣いている自分が信じられない」

峨瑛を見上げると、彼は驚いたような顔をし、それから破願する。グツと抱き締められた。

「嫉妬か？ 嬉しいぞ、天連」

「違っ！ そ、そんなんじゃないやねえー、馬鹿！」

そんな単純な言葉に置き換えられたことを悔しく思い、彼の腕から逃れようと藻掻く。

だが、力では適わない。

蒼潤は悔しさを少しでも鬱憤させようと、両手で拳を作って、峨瑛の胸を叩いた。

悔しい。そう、悔しくて堪らない。

「そっだよ、俺は悔しいんだよ。なんで俺はお前の妻なんだよ。なんで、俺がお前の正室なんだよ。なんで、俺は男なんだよ！」

梨蓉には息子が二人もいて、娘も何人が生んでいる。

楊霞にも快欄にも娘がいて、更に今回、燕朋が峨瑛の息子を生んだ。

皆、峨瑛の妻だから、峨瑛の子を生んでいるのだ。

なのに、自分は？

いつだったか前に峨瑛が教えてくれたことがある。

君主の最大の役目は、跡継ぎを残すことである、と。

跡継ぎさえ残せば、君主の大方な役目は果たしたことになる。

君主が跡継ぎを残さず家を断絶させた例や、跡継ぎを指名せずに死に、いらぬ抗争を招いた例が過去には数多あるという。

だから、君主は己の死後の平穩をも考え、世継ぎを残すことが大事なのだ、と。

後宮に多くの女がいるのもそのためだ。

側室が少ない男は、甲斐性がないと言われる。

世継ぎを考えなくて良いという男は、後世に残すものが何も無いということだからだ。

女は、世継ぎを求める男にとって、子を産む道具であり、子を産まぬ女を妻にしても仕方がない。

子を産めぬ女。

女ですらないが、まさに蒼潤はそれだ。それなのだ。

俺は、皓燭の妻として意味がない。

そんなこと、疾うに分かっていたはずだった。

どう足掻いたって、自分は女にはなれないのだから。

峨瑛だってそのことを承知して、蒼潤に妻で居続けると言ったのだ。

何も気にすることは無いのだ。

自分が子を産めなくとも、それは当然のことで、気に病むことはない。

だけどっ。

58 生を歩む刻 不変の者達 伍

「俺、なんで男なんだろう？ お前のために、妻として何もしてやれない」

峨瑛の正室であり続けようと思った時から、男として生きる望みは捨てている。

とは言っても、やはり捨てきれないところがあって、剣を持ち、戦場を駆けている。

中途半端なのだ。

だけど、完全に男を捨てたとしても、本物の女になれるわけではない。

自分は中途半端にしか生きられないのだ。

峨瑛の正室だ。

だが、子は産めない。

妻としての、女としての最大の役目は果たせない。

それでも、彼の正室に納まり続けるだろう自分が不甲斐なく、悔しい。

「女に生まれれば良かったんだ。男として生きられないのなら、最初から、男に生まれなければ良かった。女になりたい。女になって、皓燭のために皓燭の子を生みたい。　　なんで、俺は」

男なんだろう、と堪らず言葉を呑み込む。

結局、自分は何の為に生まれてきたんだろうか？

皇子として生まれたのに玉座には着けず、峨瑛の妻として生きていと望んでいるのに、彼の子を生むこともできない。

何のために生きているのだろうか？

峨瑛の役に立ちたいと思っっているのに、何の役にも立たない。

梨蓉のように奥の女たちや子どもらを取り仕切ることもし、他の女たちのように峨瑛の身の回りの世話もできない。

繕い物は苦手だし、料理などやったこともない。琴や琵琶などにも興味はない。

夫が心安らげるようにと努力する者もいるらしいが、それがいったいどのような努力なのか、蒼潤には皆目見当もつかない。やれることは何もない。峨瑛のためにしてやれることは。

「気分が悪い」

蒼潤は峨瑛の胸を押しやって、自室に戻ると告げた。

峨瑛がついて来ようとする仕草を見せたので、蒼潤は片手でそれを制した。

燕朋は子を産んだばかりなのだ。きつと峨瑛に、傍に居て欲しいと思っっているに違いない。

一人で去ろうとした時だった。燕朋が駆け寄ってきた。

その慌てぶりは、抱いている赤子を落とすのではないかと蒼潤の方が焦った程である。

「天連殿。この子は、梶は天連殿の御子でございます。天連殿の子を、妾が天連殿の代わりに産んだのです。妾は天連殿に腹をお貸し

しただけのこと。本来ならば、梶は天連殿の腹から生まれ出てくるべき子でありました」

一瞬、何を言われているのか分からなかった。

だが、赤子を胸に押し付けられて、ハツとする。

燕朋の腕の中へと返そうとするが、赤子の躰の柔らかさに恐ろしさを覚えて、無理矢理押し返すことができなかった。

燕朋はグイグイと蒼潤に赤子を押し付け、強引にも抱かせてしまった。

柔らかい。

腕の中に収まった小さな躰はあまりにも柔らかく、グニャグニャとしている。

そして、暖かい。

両腕から、胸、心までもが赤子の体温で暖められていくようである。

「首を支えてください。そうです。そのようにお抱きになってください」

「燕夫人」

「はい。確かに蒼夫人に御子をお返し致しましたよ。殿と蒼夫人の御子です。大切にお育てくださいね」

「違っ！……困る」

抱いた赤子を見、燕夫人を見、蒼潤は戸惑う。

赤子は小さいのに、とても重い。

生きているのだ。

このまま赤子を、物のように貰い受けるわけにはいかなかった。

それにこれではまるで自分が駄々をこねて、赤子を燕夫人から取り上げたようではないか。

蒼潤は縋るような眼で燕夫人を見やった。貰うわけにはいかない、と。

すると、彼女はコロコロと笑った。

「天連殿、ここだけの話ですわ」

燕朋はそつと蒼潤の耳に唇を寄せて、潜めた声で言った。

「側室の末席にある妾の子として育つよりも、正室である天連殿の子として育った方が、この子の将来は明るいものとなるのですよ」「え?」

とても普段おっとりとしている彼女の言葉とは思えず、驚いて顔を見上げると、燕方はフツツと笑った。

蒼潤はハツと気付いて、再び赤子を見、曖昧に頷いた。

これは、そういうしたたかさも自分にはあるのだと思わせて、蒼潤が気兼ねなく峨梶を我が子とできるようにという燕朋の配慮なのだろう。

だが。

蒼潤は峨梶を抱き直すと、燕朋の腕に返した。そして、微笑む。

「そういうことならば、もうしばらく預かっていて欲しい」

「天連殿?」

「あいにく、俺は乳が出ない。梶が乳離れするまで燕夫人が世話してやって欲しいんだ」

「……」

燕朋は峨梶を抱き締め、柔らかな笑みを浮かべ、頷いた。

「承知致しました。この子はいずれ必ず天連殿にお返し致しますわ」
「ありがとうございます」

燕朋のその気持ちだけで十分だった。

蒼潤は峨梶の小さな拳を指先で突いて笑い、ゆっくりと立ち上がった。

峨瑛に振り返る。淡く微笑みかけると、峨瑛が歩み寄ってきた。

彼だけに聞こえる声で、蒼潤は静かに言葉を零す。

「以前、伯陽と死後の話をしたことがあるんだ。東の方の宗教では、生まれ変わりとかいう教えがあるらしい」

「ああ」

「知っているのか？」

「人は転生するという教えのことだろうか？ それらに関する書物を伯陽に貸したのは儂だ」

「そうだったのか。それで？ 皓燭はその『転生』ってヤツを信じる？」

「実に興味深いとは思うが……」

「俺は信じることにしたんだ」

峨瑛はあまり信じていないのだろうか。

だが、信じていないなどという言葉を彼の口から聞きたくはなかった。

彼が次の言葉を発する前に、蒼潤は彼を見上げながら言葉を続けた。

「俺、次に生まれる時は、女に生まれたい。女として生まれて、もう一度お前と出会って、次こそ自分の腹で蛾梶を生んでやるんだ。蛾梶だけじゃない。何人でもお前のために生んでやる」

「天連」

「だから、次は、女に生まれ変わりたい。　　嗤う？」

「いや」

「嗤えよ。信じていないんだろ？　変なことを言っていると思っているんだろ？　嗤えよ。俺と伯陽は信じているんだ。死んでも、また会えるって」

蛾瑛にも信じて欲しい。お互いに信じていれば、本当に生まれ変われるような気がする。

そして、再び会えるような気がする。

生まれ変わった蛾瑛と生まれ変わった自分が再び出会い、愛し合えたならば、それほど素晴らしいことはないのに。

蒼潤が蛾瑛から眼を逸らすと、今度は蛾瑛の方が蒼潤の腕を掴み、顎を持ち上げて、蒼潤の顔を己の方へと向かせる。

軽く唇が触れ合う。

見ている目があるというのに……。

赤らんだ顔で抗議すると、彼は眼を細めた。

「潤」

「なんだよ？」

「俺も信じることにする」

「……」
「来世でも再び巡り会おうぞ」

この生を現世と言うならば、生まれ変わった後の生を来世と言うのだということ、蒼潤は後で知った。

峨瑛にきつく抱き締められて、蒼潤はフツと全身の力を抜いた。体重を預け、ゆっくりと瞼を閉ざした。

59 心叫ぶ刻 共にある光と影 壱

コツン、コツン、コツン。

小石が石畳の上を弾みながら去っていく。

額に痛みを感じ、やがて痛みは熱を帯びてきた。

またか。

峨瑛は思う。また夢を見ているのだ、と。

幼い頃は一人で城郭を歩いていると決まって年長の少年達に絡まれたものだ。

腐った血。

彼らは口々にそう言い吐いた。峨瑛の祖父が宦官だからだ。

当時は、宦官などの養子になった父親を恨んだものだ。

宦官の家に生まれてきた己自身も恨めしかった。

だが、峨瑛は祖父が好きだった。

祖父の生き方が好きだったのだ。

けして今の己に満足しない生き方が。

上へ上へと手を伸ばしていくような生き方だった。

手を伸ばす、空へ。

空はどこまでも蒼い。

見上げる蒼の眩しさに目が眩み、瞼を閉ざし、再び開くと、少年達の姿は消えていた。

代わりに現れたのは瓊俱だ。

少年の姿をした瓊俱。

次第に彼は大きく成長していった。

成人した瓊俱が、幼い少年の姿をした峨瑛を見下ろして嗤う。

お前はわたしには勝てん、と瓊俱は言い、峨瑛の頭を片手で押さえ付けてきた。

その力の強いこと。

峨瑛は必死で頭を持ち上げようとしたが、瓊俱の力にどうしても勝てず、ガクンと膝を折った。

地に両手を着く。土下座をするような格好を強いられ、峨瑛の頬に汗が伝う。

勝てない！

上目遣いで瓊俱を見、峨瑛は思った。

勝とうとするにはでかすぎる相手だ。瓊俱には勝てない！

ガクン、と肘が折れる。顔が地に着く。

まるで、人間に踏みつけられた蛙のような格好だ。己の姿を思い、峨瑛は思った。

悔しい。

だが、瓊俱には適わない。どうすることもできないのだ。

頭痛がする。耐え難い痛みだ。

割れるようであり、いつそう壁に頭をぶつけて割ってしまった方がらくになれるような気さえする。

助けてくれ！

いつも助けてくれる従兄を求めて手を伸ばす。
手は空を掴んだ。

「……うせん？ 皓爛？」

「……」

「おい、大丈夫かよ？ うなされていたぞ？」

瞼を開くと、すぐ目の前に蒼潤の顔があった。彼は訝しげに自分を覗き込んでいる。

引き寄せて、口付けをする。

そうしてから、自分がひどく汗をかいていることに気が付いた。

「すぐに徐姥を呼ぶ。躰を拭かせよう」

「お前が拭いてくれないのか？」

「なんで俺が？」

心底疑問に思っているらしく、蒼潤は眉を寄せる。

峨瑛は笑って片手を振った。

「徐姥を呼んでくれ」

蒼潤が寢室から出ていくのを見守ってから、峨瑛は躰を起し、寢台の上で胡座を掻いた。

久々に嫌な夢を見た。

昔ならば、こういう朝は従兄を呼び付けたものだが、今朝はその必要はないようだ。

蒼潤が戻ってきた。後ろに徐姥と数人の女達が桶を持って続く。女達に躰を拭いて貰って、峨瑛は蒼潤を寝台に座らせた。

徐姥達を下がらせると、蒼潤の夜着を脱がした。

昨晚の情事の痕が散っている。

濡らした手拭いで清めてやったが、赤く鬱血した痕は消えそうになかった。

消えなくていい。消えなければいいとも思う。

先日買え与えてやった絹で作られた女物の衣を着せて、以前買ってやった装飾品を付けさせる。

20歳にもなるというのに、こういう格好をさせれば、相変わらず蒼潤は女にしか見えない。

自分が20歳の時、どうだっただろうか？

葵暦175年のことだから、葵陽の北部尉に就任した頃だ。

成人し、職に就くような年齢なのだ。20歳とは。

「まもなく朝議の時刻だな」

「俺は？」

「今日一日、お前はその格好をしている」

何か言いたげな顔をしたが、結局、蒼潤は頷いた。

「怠いし、腰痛いし。今日は寝ていることにする」

「ああ。大人しくしている」

峨瑛は目を細めて、蒼潤の頭を軽く叩くと、彼の寢室を出た。

朝議後、峨瑛は楚雀と薪塢、祗恵を居室に呼んだ。

三人が自分に対面するように座ったのを見て、峨瑛は床に地図を広げた。

和州、涿州、敖州は、瓊俱の支配下にある。

壬州、併州、雅州、檣州、玳州は峨瑛の支配下にある。

州の数と土地の広さならば峨瑛が勝っているようだが、接する他州がないだけに瓊俱には敵がいない、有利だと言える。

峨瑛は、豫州の範匡、瑞州の蒼閭、帷州には凌州をも制した柁泰を敵としなければならぬのだ。

豫州の範匡には、兄の範珪の元に蒼潤の妹の蒼麗を嫁がせて、とりあえず動きを封じている。

瑞州の蒼閭の元には、蒼潤の姉の蒼彰がいて、よもや彼女が蒼潤の不利になるようなことはしまい。

残るは柁泰だ。

自分が瓊俱と戦っている間に、柁泰が雅州に攻め込んできたら、今のところ打つ手がなかった。

「雅州の守兵は削れません」

「豫州と瑞州も完全に安心できるといふ状況ではないでしょう」
「すると、瓊俱に割ける兵は……6万といふところか」

峨瑛が言つと、薪塢と楚雀が無言で頷いた。

「瓊俱の兵は？」

「涿州から併州に向けて、35万の兵が南下してくるとのことです」

薪塢が低く唸つた。峨瑛は目を伏せ、地図を探るよつに見つめた。

「戦場はどこになる？ 利杜か？ いや、猩瑯にしよう」

「しようるつ？」

併州の東、数里行けばすぐに雅州に入るよつな土地である。

利杜はそれより西北に位置する。涿州と併州の境にある土地だ。

「初め利杜に陣を敷き、後、猩瑯まで撤退する。下がるのは猩瑯までだ。後はないと思え。そこで負ければ終わりだ」

「しかし、なぜ猩瑯のですか？ すぐに葵陽ではないですか」

現在、峨瑛の本拠地は併州城である。

葵陽には青王朝の皇城と帝が形ばかりに存在するだけだ。

瓊俱ならばそんな形ばかりのものよりも峨瑛の本拠地に攻め込んでくる、と考えるのが普通だ。

峨瑛には併州城に攻め込んで欲しくない理由があるかと、楚雀は

怪訝に思ったのだろう。

祇恵が分かったと手を打った。

「その方が死に物狂いになれるってことですよね？ それに、敵は戦線が伸びることになります。戦線が伸びれば伸びただけ、兵糧を輸送することに苦労します」

「なるほど」

「兵糧と言えば、先日、足りないと申し上げましたが、蒼夫人の姉君おかげで、瑞州の商人から易く買い入れることができそうです」

「天幸殿にはあまり借りを作りたくなかったが……」

「致し方ありません。もしや、併州城を戦から避けるのは、蒼夫人のためですか？」

峨瑛は思わず楚雀の顔に目を向けた。しまったと思ったが、すでに遅い。

楚雀はやはりと頷く。

「此度は、天連は併州に置いていく」

「天連は怒りますよ？」

「勝てる見込みの薄い戦だ。もしも儂が破れたら、瑞州に逃す」

瑞州の蒼彰の元へ。

そのためにも、蒼潤のいる併州城はできる限り戦から遠ざけたい。

祇恵が頭を左右に振った。何かと問えば、わずかに眉を吊り上げ

て言う。

「負けた後のことを考えているとは、殿らしくないです。それに、自分だけを逃されても、天連は喜びませんよ。天連に剣を持たせてやってください。あいつは漢なんですから」

葵暦200年、瓊俱軍が併州に向かって南下して来た。

向かい討つ為に峨瑛軍は利杜に陣を弾いたが、結局、その中に蒼潤の姿はどこにも見当たらなかった。

60 心叫ぶ刻 共にある光と影 貳

利杜で勝った。

一戦交えて、その結果、峨瑛軍が利杜の陣を放棄したのだ。

追って、併州に入った。

峨瑛軍は併州の猩瑯まで撤退した。あとわずかで雅州という土地だ。

瓊俱の陣には、このまま都に攻め上ろうという声が大きくなった。

だが、瓊俱の心中を言えば、葵陽よりも併州を制圧したいところだ。

都と謂えども、ほとんど機能しておらず、虚しいばかりの土地だ。それに接する帷州には柁泰がいる。

峨瑛以外の敵を無闇に増やすこともないだろう。

それより併州を取り、壬州を取る。そして、檣州、琲州と取れば、自ずと雅州も物にできるはずだ。

併州を先に制圧した方が良い。瓊俱と同じ意見を述べる者も幕僚の中にいたが、ごく少数だった。

結局、瓊俱は峨瑛軍と対峙するように猩瑯の地に陣を敷き、都を目指すことを決めた。

「苦しいな」

「侍医を呼びましょうか？」

「頭痛のせいではない」

「頭痛もひどいのでしょうか？」

「ひどいが、戦況に比べればまだましな方だ」

「そうですね。兵糧も尽きてきましたし」

だいたい瑞州から購入したが、何を買うにも資金が必要なのである。金がなければ、いくら瑞州に物があっても、買えないのだ。

頭痛。

ここ数年、ひどく頭が痛む。

侍医の話では、首の後ろが凝っているのだという。針を打つ治療をすると言うので、度々させている。

だが、別の医師に見せれば、頭の中に血溜まりができているのだと言う。

頭を切り、その血を抜かなければ直らないと言うのだ。

頭を切れば人は死ぬ。つまり、死ななければ直らないということ。峨瑛は腹を立てて、その医師の首を刎ねた。

「瓊俱軍の兵糧庫を襲うか？」

「それは無謀ですね」

「なら、輜重隊を襲う」

「輸送路が分かりかねます」

しっかりしてください、とばかりに楚雀は首を横に振った。

瓊俱軍は35万。

大量に兵糧を必要としているはずで、現に連日澗州や敖州から輸送されてきている。

どうやら兵站の方は上手くいっているようだった。

だが、数度、兵糧が敵陣に届かないようにすれば、35万の兵だ、すぐに兵糧は尽きてくるだろう。

兵糧庫の守りは堅い。楚雀の言うように、そこを襲うのは無謀というものだろう。

ならば、輜重隊が輸送している兵糧を狙えば良い。

そう思い、一度襲ってからというもの、瓊俱は輸送の度に道を変えているようだった。

澗州から併州への道はいくつかあり、そのうちのどの道を使用するかは、予測さえ付かない状況である。

薪塙がやって来た。具足を身に付けている。

峨瑛の側までやって来ると、兜だけは取った。

「偶には外に出て兵士たちに顔を見せてやってください」

その通りだと楚雀も頷く。

ここ数日間、峨瑛は猩瑯城の居室に籠もっている。現場の指揮は薪塙に任せつきりである。

薪塙の報告では、戦局はまったく動いていないらしい。

戦局が膠着して、すでに二ヶ月が過ぎている。

その間、動きがあったと言えるのは、瓊俱が築いた土塁ばかりだ。

瓊俱は猩瑯城に対するように陣を敷き、土塁を築き、櫓を建てている。

もはやそれは陣というより砦であり、街のようでもあった。櫓からは絶えず矢が放たれてくる。

矢は雨のようで、矢を射ている間に、土塁の前に、更に土塁を築く。

そうして、徐々に猩瑯城に向かって前進してくるのだ。

すでに土塁は三重にもなっていた。

瓊俱が猩瑯に近付けば近付くほど、峨瑛軍の受ける威圧感は増し、戦わずして負けに近付いているようである。

時間が経てば経つだけ、弱っていくのだ。

「籠もつてばかりいるから、気が滅入るのです」

「滅入っているように見えるか？」

「不幸を呼び寄せそうな顔をしておいでです」

峨瑛はわずかに笑った。

二人きりの時、薪塙は峨瑛に対して従兄らしい口調で話すが、今は楚雀がいるため敬語を使って話している。

そのことを寂しく思う時もあり、誇らしく思う時もあった。そして、今は後者だ。

彼ほどの者を麾下に置いている。そう思うと、胸が暖かくなる。

「お前達と話して、少し気が楽になったぞ。

だが、勝機が見え

ん。苦しいな」

六倍近い兵力を持って瓊俱が押し寄せてきているのだ。
じわり、じわり、と峨瑛という自分を犯されていくようである。
膝を屈しそうになる。

楽になれるのだろうか。屈してしまえば。

奴の足下に平伏して、許しを請えば、どんなにか楽になれるだろう。

頭痛。

雨のように矢が射られる度、土塁が前進する度に、そんなことを考えてしまう。

そして、ひどく頭が痛むのだ。

「やはり」

楚雀が静かに言い放った。

「蒼夫人をお呼びしましょう」

「それがいい」

薪塙も大きく手を打って頷く。峨瑛は眉を顰めた。

「必要ない。呼ぶな」

「しかし、殿。殿は弱気になっておられる」

「あいつは儂が弱気になっているからと言って、慰めてはくれんぞ」

「それは殿が蒼夫人の前では弱音を吐かれないからです」

なるほど、と峨瑛は低く唸った。

「あれは此度の戦で儂が負けるかもしれんなど、微塵も考えておら

ん

「わたしもですよ？」

「馬鹿な。儂にも負ける時があるということをお前は知っているだろう、槓抄？」

「ええ。けれど、蒼夫人もご存じだと思います。殿は女に迷って命を危なくしたことがありますから」

吟氏のことを言っているのだ。

「それでも蒼夫人は殿のことを信じておられる。殿が瓊俱などに負けるはずがない、と」

「よもや、そこまで信じられている蒼夫人の前で弱音など吐けられまい。これは良い、蒼夫人をお呼びしよう」

「殿も元気になられ、兵達の指揮も上がるというものですよ」

勝手に決めて、楚雀は筆を取った。蒼潤に文を書くつもりだろう。峨瑛は諦めて卓に頬杖を付いた。

臉を閉ざす。蒼潤の声が聞こえたような気がした。

61 心叫ぶ刻 共にある光と影 参

峨旋は13歳になっていた。

やはり峨瑛に似ている。目の鋭さなどを見ると、親子なのだと思
い知った。

峨軒は8歳になっている。この子が生まれた年に、峨瑛と自分は
出会ったのだ。

そう考えると、峨瑛に嫁いだから八年の歳月が経ったとい
ことになる。

峨軒は蒼潤に剣の稽古をつけてくれとせがむようになった。

暇ができる、蒼潤が峨旋の稽古をつけていることを知っている
のだ。

それで、自分もと思ったのだろう。

だが、そんな弟を峨旋は疎ましく思っているようで、峨軒が蒼潤
に近付こうとすると、中に割って入ってくるのだ。

割って入ってくるというだけならば、まだ可愛いものだ。

ある時など、何がそんなに峨旋の気に障ったのか、竹刀で峨軒を
ひどく打ち付けていた。

蒼潤が止めに入らなかつたら、峨軒は死んでいたかもしれぬ。

蒼潤のことがなくとも、同じ腹から生まれた兄弟なのに……と梨
蓉が常々零しているように、二人はあまり仲の良い兄弟とは言えな
かった。

蒼潤が峨旋に稽古をつけていると、呂姥がやって来た。

よほど急ぎの用なのだろう。駆けてくる。

蒼潤は峨旋に片手を上げて合図をすると、呂姥の方へ足を向けた。

「何だ？」

「猩瑯から文です」

「猩瑯から？」

文を受け取って素早く目を通す。どうやら楚雀の文字らしい。

「……猩瑯に行くことになった」

「大変。すぐにお支度を整えます」

呂姥は一礼し、元来た方へ再び駆けていった。蒼潤は峨旋に振り返った。

峨旋の後ろの方を見やると、岩に隠れるようにして峨軒がこちらを見ている。

それ以上近付くと、峨旋に打たれるのだ。

蒼潤はどちらへともなく微笑んだ。

「戦況が思わしくないらしい。そのせいで、皓燭が弱気になってるんだとか。弱気な皓燭、おもしろそうじゃないか。行って見てくることにする」

「いつ戻られますか？」

「さあ、分からない」

「どうかご無事で。もしも貴女に何かあれば、きっとわたしは貴女に傷を付けた者を一生かけて許せないと思うのです」

「旋？」

「地の果てまで追って、追い詰めて、切り刻んでやりたくなる」

蒼潤は笑って、峨旋の肩を軽く叩いた。

「擦り傷一つしないで帰ってくることを誓うよ」

猩瑯にやって来た蒼潤を迎え出たのは、楚雀と祇恵だった。
瓊俱軍は猩瑯城の北方を扇状に取り囲んでいる。
そちらの空が黒い。絶えず矢が降り注いでいるからだ。

「それは、つまり……。1人が6人殺せばいいってことだよな？」
「……」
「……」

堪らないと真っ先に笑い出したのは、祇恵だった。

「天連、単純すぎつ。そうかもしれないけれど、そうではないだろうが」
「なんでだ？　そういうことだろう？　　だって、6倍の兵力があるんだろう、瓊俱には」

蒼潤はまず二人から両軍の兵力差を聞かされた。
峨瑛軍は6万。対して、瓊俱軍は35万である。

そして、大まかに6倍だと柢恵が言ったものだから、先の言葉を蒼潤が放つに至った。

「皓煥は、そんなに弱気になっているのか？」

「薪將軍の言葉を借りますと、負け戦を呼び寄せそんな顔をしていらっしやいます」

「へえ」

峨瑛の居室まで来て、蒼潤は断りもなく戸を押し開いた。奥に座している彼を見やって、蒼潤はわずかに笑った。

「来たぞ」

「来るなと言ったがな」

「来てやった」

後ろを振り返ると、楚雀と柢恵はいつの間にか去っていた。室には峨瑛と蒼潤の二人きりである。

「誰が弱気になっているって？」

「そんな者はおらん」

「へー」

じとりと見やると、峨瑛は目を細めた。手を招く。

言われるままに彼の膝元まで行くと、抱き寄せられる。されるままになってやった。

「……兵力差が6倍ともなると、勝てないと思うものなのか？ お

前は以前、壬州の乱を制圧しただろうか？ あの時、100万だった。

味方は1万と5千しかいなかったのに、だ」

「あれは農民叛乱だった。策もない。統率もない。ただの烏合の衆だった」

「それでも、お前は100倍の兵力差に勝った。そんなに瓊俱が怖いか？ 瓊家は名門と云うが、その点で競うのならば、蒼家は適わない。

お前は蒼家の娘を妻にしているのだぞ。俺に流れる血はお前のものなのに」

潜在的にある瓊俱への敗北感を、峨瑛の中に見つける。

そもそも彼が蒼家の娘を妻にしようと考えたことだって、瓊俱の血に対抗しようとしたからだ。

生まれや親から受け継いだ財とは関係なく、その者個人の能力で、生き方を切り開けるような国を作りたいと語っていたのは、峨瑛自身だと言つのに。

国を望む気持ちは真実に違いない。

だが、瓊俱への劣等感が、度々彼の正常な思考を妨げる。血を意識させるのだ。

「関係ないって言えよ。血なんて関係ないことだって。力で切り開くものなんだろう？ 生まれじゃない。実力を重視した国を作りたいんだらう？ それなら、瓊俱に言つてやれよ。お前が誇つてゐる血など、自分との戦には通じないんだって」

それでも、峨瑛が血でも瓊俱に勝ちたいと言つのであれば、その

時は、蒼潤に流れる血を利用すればいい。

蒼潤は峨瑛の首に両腕を回した。

「俺に流れる血は、この世でもっとも尊いと、あいつらは思っている。お前はそれを好きに使って良いんだ。お前のものなのだから。」

血で勝負したいと言うのなら、俺を利用しろよ。だけど、俺はお前には血以外のものでも瓊俱に勝って欲しい。勝てるはずだと思っっているから」

62 両雄並び立つ刻 交わる詩 巻

灰斗に兵糧が集まってきた。

澗州だけでは足りず、敖州からも兵糧を運ぶようになっていた。敖州から運ばれてきた兵糧は一度灰斗に留まり、澗州から運ばれてきた物と合わせて、猩瑯の本陣まで運ばれてくる。

峨瑛は動かない。このまま土壘を進めていくだけで勝てる戦になっ

てきている。

峨瑛もつまらない戦を始めてしまったものだ。勝てるはずのない相手を敵としてしまった彼を哀れに思う。同情さえしまうくらいだ

「峨瑛に少しは希望を見せてやるべきかな？」

陣の防御は完璧だった。具足を付ける必要がないと思える程だ。連日、勝利の前祝いと、祝宴ばかりが続いている。

その席でふと零した瓊俱の言葉に、麾下の1人が歪んだ笑みを浮かべた。

「確かに、確かに。このまま勝ってしまったても面白くないですな」
戦い足りないのだろう。他の者たちも大きく頷く。

「我らの兵糧が灰斗に集まっていることを教えてやったらいかがですか？ 敵は兵糧が苦しいはずですから、飢えた獣のように飛び付いてきますよ」

「そこは罠を張っておくべきでしょうな。このままでも十分に勝てますが、勝敗は早く決するに越したことがないでしょう。ノコノコ

と城から出てきた峨瑛の首を打ち払ってみせます」
「それはいい。わたしもその策に賛同します」

なるほど、と瓊俱は唸る。

このままでも勝てるが、まだ数ヶ月かかるだろう。
猩瑯に籠もってしまった峨瑛を誘き出して討てば、その時点で終
わる。

戦は早く終わるに越したことはない。

瓊俱は立ち上がり、剣を抜いた。高く掲げる。

「峨瑛を灰斗に誘き出す！」

「罪ですぬ」

楚雀は短く言い放った。薪塙も頷く。

昨晚、瓊俱軍から下ってきたという者が灰斗に瓊俱軍の兵糧が集まっていることを告げてきた。

明らかに、瓊俱がわざと峨瑛に知らせた情報だと、峨瑛自身も分かっていた。

第一、優勢である瓊俱軍から下ってくる者が疑わしくないはずがない。

どう考えても罠だとしか思えないのだ。

「……でも、このままだと勝てませんよ？ 罠でも罠だと分かっていたら、避けられます」

祇恵が峨瑛の前に広げられた地図に指を滑らせた。灰斗の位置を指す。

「一軍を残して、大軍で灰斗を目指します。まさか、兵糧を奪いに大軍を出すとは、瓊俱は思わないでしょう。それだけでも、安易な罠は破れます。敵の予測範囲を超えることが一番なのですから。」

「ここは本気で灰斗の兵糧を奪うことにします。奪えなくとも、焼き払ってください。瓊俱軍は35万。いくら今まで兵站がうまくいっていたとしても、大軍の兵糧は尽きるのが早い。すぐに困難になっってくることでしょう。撤退せざる負えなくなるかと」

挑むように祇恵は峨瑛を見やった。峨瑛が頷く。

「それで、ここに残る者は？」

「天連が良いかと」

「天連を？」

「殿が天連を連れ回したいと仰せなら、他の者を考えますが？
いつそう俺でも良いですし」

「天連がここに残るのは構わないが、天連だけなのか？」

「十分ですよ。ただ、瓊俱には猩瑯城に少なくとも5万の兵が残っていると思わせなければなりません。天連の兵5千で、です」

「……」

峨瑛が眉を寄せると、柢恵は笑った。

「そんなに天連が心配なら、さっさと灰斗を落としてしまえばいいんです。そうすれば、早く天連の元に帰れますよ？」

「まさかそれを狙って、天連を残すのではないだろうな？」

「そのまさかですよ」

ケラケラと、憎たらしく笑う柢恵に峨瑛は顔を顰める。

それを見やり、楚雀が柢恵の後頭部を叩いた。

そうして、ようやく柢恵の笑いは止まった。

夜更け。

皓々と照る松明を手にした者があちらこちらに立っている。

峨瑛が馬に跨った時、蒼潤が峨瑛の元へやって来た。

「決定されていることを今更言うものではないが、灰斗攻撃はお前が直々に指揮するの？ 灰斗はお前を誘き出す罠だぞ？」

「分かっている」

「それなら……」

「罠だろうと、罠だろうと、関係ないことだ。何もできない状況から脱することができた。 儂は今まで臆していたようだ」

「瓊俱が6倍もの兵力で押し寄せてきているから？」

「そうだ。だが、それだけだ。兵力以外で儂が瓊俱に劣っている点などない」

「皓燼……」

「第一に、儂は運が良い。麾下にも恵まれたし、良い妻にも恵まれた。第二に儂は瓊俱よりも決断力がある。時を見分ける眼を持っている。第三に」

「もういい。分かった。だいたい、そういうことを自分で言うなよ」「最後だ。言わせる。第三に、儂にはお前がいるということだ」

馬上の彼を思わず見上げる。

「幹公に問われた、智か勇か美かと。どれを望むか問われて、儂は

勇と答えて、お前を貰った」

幹公とは蒼潤の父、蒼昏のことである。

「お前で良かった」

「皓燭。猩瑯城で俺が待っていることを忘れるなよ。さっさと戻ってこい。俺はどんなことになっても逃げないからな。ここで死ぬか、お前が戻ってきて、共に生き残るかのとちらかだ」
「分かった」

不意に峨瑛の顔つきが変わった。蒼潤の肩を軽く押しやる。

「蒼天連、お前に猩瑯の防衛を任せる。儂が戻ってくるまで保たせる。例え、灰斗攻撃が成功しても、猩瑯が落ちていれば戻る場所がない」

蒼潤が頷くのを確かめ、次に薪葦に目を向ける。

「薪臥筈、一万を率いて十里ほど西へ行け。合図でいつでも灰斗に攻め込める準備をしておけよ。ただし、猩瑯にも戻れるように。志深と喬阻は南から灰斗を目指せ。できる限り、灰斗攻撃隊が大軍であることを悟られたくない」

峨篤と峨峻は頷いた。二人とも峨瑛の従兄である。

「二人にはそれぞれ二万ずつ率いて貰う。汐銚は儂と共に」

薪葦、峨篤、峨峻がそれぞれ軍を率いて城から出発して行った。

すぐに峨瑛も出発することになっている。

蒼潤は峨瑛の馬の鼻頭を撫でていた。ふと、その手を峨瑛が掴む。

手の甲に唇を押し付けられ、更に腕を引き上げられた。口付けを受ける。

「皓煥。必ず」

わずかに峨瑛が蒼潤を見やって、目を細めた。

63 両雄並び立つ刻 交わる詩 弐

峨瑛が出てきたとの知らせを受けて、瓊俱は幕僚の前に姿を現した。

命じて、具足を付けさせる。

「峨瑛が五千の兵を率いて灰斗に向かっている」

「我らの策に乗ってきましたな」

「灰斗の守りは？」

「三万はおります」

「更に、一万差し向けましょう」

卓乾だった。

以前、都よりも併州を先に攻めるべきだと主張したのも、この卓乾だった。

「いえ、一万では少ないくらいです。騎兵を三万、わたしにお任せ下さい」

だが、瓊俱は頭を左右に振った。

「無用だ」

峨瑛軍が五千であれば、三万の守兵で十分なはずである。

それよりも、峨瑛自身が灰斗を目指しているのであれば、猩瑯城の防備は緩んでいるはず。

「敵本営を攻める。城壁を打ち壊すのだ！」

瓊俱軍が自ら建てた土塁を越えて、直接城壁を取り囲んだのは、

それから数刻後のことだった。

瓊俱は櫓の上に昇り、猩瑯城を眺める。

いつの間にか土塁は城壁まで、三里の距離まで近付いていた。

櫓から城壁がよく見える。その上を移動している人の姿が確認できくらいだ。

ふと気付いて、瓊俱は側の者を呼んだ。

「なぜあそこを射ないのだ？」

絶えず、矢を城壁に向けて射させている。夜も昼も関係なく、である。

矢は雨のように猩瑯城に降り注いでいるのだが、なぜか一カ所だけ、まったく矢が届いていない場所があるのだ。

その場所を指して、瓊俱は低く唸った。

まるで兵達はその場所を避けて矢を射ているように見える。

従者が目を細めて、そちらを見やった。そしてすぐに、ああ、と頷いた。

「潤皇子がいらっしやいます。それで皆、矢を射られないのですよ」
「う」

「潤皇子だと？」

蒼潤のことだとすぐに分かる。

蒼昏の娘として育てられ、峨瑛の正妻にまでなっているが、実は男子であり、青王朝の皇子なのだ。

「なぜあんなところにいる？」

いや、なぜ、兵たちは射られな

「いんだ？」

「青王朝は四百年も続いた王朝です。その皇子である潤皇子を射られるわけがありませんでしょう。皆、王室に剣を向けることを恐れています。四百年はそれ程まで重いもの。どんな盾よりも堅固な盾だと言えます」

「さすが蒼家よ。蒼家の血には勝てぬか」

瓊俱は顎髭を軽く扱いた。そして、真っ直ぐに蒼潤を見やる。

蒼潤は具足を付け、兵達に指示を下していた。

「よく見えんが、皇子の容姿は如何ほどか？」

「容姿ですか？　皇子の妹君は絶世の美女と知られています。」

父も母も同じとあれば、皇子も」

「そうだろう。峨瑛が女として扱っているくらいだ。よほど見目麗しい方なのだろうな。近くで、お顔を拝見してみたいものだ」

「殿？」

「潤皇子を我が陣に迎える。城を落とす、潤皇子をわたしの元へお連れするのだ！」

どうやら灰斗の守りは、三万のようだ。

峨瑛は五万五千を率いて行った。

勝てる。蒼潤は拳を握った。あとは自分が猩瑯城を守り抜けばいいだけだ。

蒼潤に与えられた兵は五千のみだ。

もちろん、蒼潤が亘幹国から連れてきた兵達であり、手足のように動かせる軍だ。

甄此が城壁を昇ってきた。蒼潤と並んで瓊俱の陣を眺め下ろす。

「あそこに瓊俱がいます。あの櫓の上です。こちらを窺っているようですね」

「あれが瓊俱か」

遠すぎて、指先で摘めるくらいの大きさにしか見えない。

あれが、今、自分が敵としている相手なのかと思うと、不思議な気持ちになってくる。

甄此が薄く笑みを漏らした。

「どうやら、あちらの兵士たちは天連様を射ることができないらしい。こちらには矢がまったく届いていません」

「瓊俱軍は血の尊さを身に染み込まされているのかもしれないな。」

だが、峨瑛軍は違うということを教えてやろう。峨瑛は瓊家の血を討つことができる。血など通用しないからだ。蒼家の血に、気で負けている瓊俱が峨瑛に勝てるわけがない。蒼家の血も瓊家の血も、峨家の血も同じだ。そこの者、民も皆、同じ血が流れている」

蒼潤は踵を返して、城壁から離れた。

瓊俱が陣から出てきたとの知らせを受けたのだ。

地響きが鳴る。瓊俱軍の重装備の攻城部隊が雲梯を城壁に掛けようとしているのだ。

それを城壁の上から、矢を射て妨げる。

矢はいくらでもあった。連日、瓊俱軍が射ていたものを集めてあったからだ。

敵陣からも矢を射られているので、射られた者は城壁から、バタバタと落ちつつ行っている。

城壁の下は、次第に死体が溢れていった。

五千しかない。蒼潤は落ちていった兵士を想った。

自軍の兵士が落ちていく度に、もはや五千を切り、どんどん五千から遠ざかっていっている。

このままでは城が落ちる。時間の問題だった。

それならば、と蒼潤は三百の騎馬隊を率いて城外に出た。

攻城部隊を攪乱し、危うくなる前に城内に逃げ込む。

これは意外な程、効いたようだった。

敵の攻城部隊の動きが格段に悪くなったのだ。

「天狼、もう一度行ってみようか」

そう言って、蒼潤は愛馬の脇腹を蹴った。

天狼が駆け出す。戦場を引き回すように。

素早く駆け抜け、城外に逃げ込むことを幾度か繰り返しているうちに、蒼潤は瓊俱の姿をその眼で捉えた。

一瞬だったが、一里もない距離だった。

風のように騎馬隊が過ぎ去っていく。
瓊俱は思わず身を乗り出した。

「あれが潤皇子か」

美しいという言葉では言い尽くせない。
女が持つ『美しさ』とは全く異なる美しさだったからだ。
手が届かないと思わせるような、気高さ。
神々しいと言っても過言ではない。
気付くと瓊俱は大声を張り上げていた。

「欲しい！手に入りたい！潤皇子を捉えるのだ！」

その時、注進が入った。

「灰斗の兵糧がすべて焼かれました」

「戦死者は数が知れません」

「灰斗から峨瑛軍四万五千が猩瑯に戻ってきます」

「西から一万の敵が。側面から攻撃してきます」

次々に注進が入る。

灰斗へ向かった峨瑛軍は五千ではなかったのか、と聞き返す余裕はなかった。

それ以上に、注進をまともに聞き入れられる精神状態ですらなかった。

瓊俱は蒼潤を目指して単独で陣を飛び出していた。

慌てて数百騎の部下たちが追ってくる。

「潤皇子を」

潤皇子を手に入れれば、どのような戦でも勝てる。

あの神々しさを自分のものに！

城内へと逃げる蒼潤に向かって、瓊俱は馬を駆けさせた。もはや、蒼潤の背しか、彼には見えていなかった。

64 臭仰ぐ刻 君の蒼い翼

縄を掛けられた瓊俱が恨めしそうに峨瑛を見上げている。

『峨』の旗を掲げた騎馬隊が猩瑯城に向かって駆けてくる。

灰斗攻撃が成功したとの知らせを受けて、蒼潤は戦場だということに思わず笑みを漏らした。

剣を横に滑らせる。敵兵が悲鳴を上げて崩れるように倒れていった。

直ぐさま剣先を返す。そうして、後ろに迫っていた敵兵を切った。騎乗して扱う剣は突くよりも切った方が良いと峨瑛に教わった通りに、蒼潤は二人目を切ると素早く構え直して、次に備えた。

更に、一人切る。

返り血を浴びないような切り方をしていた。それでも、気付くと、肘の上まで真っ赤に染まっていた。

「天連様っ！」

甄此の声で蒼潤は振り向いた。

瓊俱だ。瓊俱が自分に向かって突進して来ている。

なぜ？

どう考えても無謀だった。自軍から突出している。

こちらの守兵がたった五千であることに気付いたか。

そうだとしても、すでに遅い。

蒼潤は西方を見やった。薪塙が一万を率いて、側面から突っ込んでくる。

『蛾』の旗も近い。

蒼潤は城内に逃げ込む合図を出そうとして、止めた。
馬首を返す。

「瓊俱を捕らえろ！」

片手を上げてから、さっと瓊俱に向かって振り下ろした。

瓊俱は逃げる素振りを示さなかった。一直線に蒼潤に向かってくる。

不気味さを感じ、一瞬だが、蒼潤は怯んだ。

腕が伸ばされる。瓊俱の腕だ。

我に返ると、瓊俱は蒼潤と馬を並べていた。

甄此の声が聞こえた。

瓊俱に振りかざした蒼潤の剣が空高く跳ね飛ばされる。

「っ！」

瓊俱の手が蒼潤に触れるか否か、二人の間に矢が射られた。矢は瓊俱の手の甲を薄く傷付けて、彼方へと飛んでいった。驚いて振り返ると、薪葦がこちらに向かって弓を構えていた。

「天連殿、皓煽はあちらだ。あちらへ駆け抜ける」

蒼潤は天狼の腹を蹴った。『峨』の旗に向かって駆け出す。

途中、峨篤軍と擦れ違った。峨峻軍とも擦れ違った。

皆、瓊俱を捕らえようと、蒼潤の後ろに向かって駆けていく。

蒼潤が峨瑛の姿を見つけた時、卓乾が降伏したとの知らせが入った。

それを始まりに、瓊俱の部下達は次々に降伏しているという。

そして、瓊俱を捕らえたと声が上がった。

「天連、怪我はないな？」

お前が城から出たと聞いて、寿命が

縮まったぞ」

猩瑯城の蒼潤の一室。蒼潤の返り血を洗い落としてやりながら、
峨瑛は言った。

手拭いを桶に入れると、水は一瞬にして赤く染まった。

「……それで急いで戻ってきたのか？」

「お前に死なれたら困る。お前は僕の『勇』だからな」

「相変わらず、お前は変なことを言うな。前は俺のことを己の片翼
だと言ったぞ」

「比翼の鳥だ」

「そうそう、それだ。まあ、いい。俺がお前のものであること
に違いない」

蒼潤は素肌を晒したまま立ち上がると、両腕を大きく広げて見せ
た。

ほら、と言って笑う。

「お前の翼だ。受け取れ」

ふっと目を細めて、峨瑛は笑った。

峨瑛と蒼潤が身支度を整えて幕僚たちが集まる場に出てくると、縄を掛けられた瓊俱が地べたに押さえ付けられていた。

幼い頃は、地べたに這いずっていたのは自分の方だった。

そう思うと、峨瑛には感慨深いものがあった。

蒼潤が峨瑛の袖を引いた。

蒼潤には女物を着せていた。そうしていると、やはり女にしか見え
ない。

蒼麗と比べても引けを取らない程の美しさである。

その姿を見て、その場の者たちが皆、息を呑んだようだ。

峨瑛は上座に座して、隣に蒼潤を座らせた。

瓊俱が遠く峨瑛を睨み上げている。

「峨瑛。わたしはお前に負けたわけではない。蒼家の血に負けたの
だ！」

「……」

峨瑛は静かに瓊俱を見下ろしていた。代わって、蒼潤が声を張り
上げた。

「愚かな。己の愚かさに気付けなかったからこそ、お前は負けたの
だ」

「潤皇子！」

瓊俱の眼が蒼潤を捕らえる。

「わたしが、瓊家が蒼家のためにしてきたことをご考慮下され。蒼家を守るのは瓊家だけです。峨家の力では国は治められません」
「血を頼る時代は終わったのだ、瓊奔帷。青王朝も直に終わる。わたしを皇子と呼ぶ者もいなくなるだろう」

「潤皇子……」

「血が国を治めるわけではない。人が国を治めるのだ。国は人の集まりであり、血の集まりではない。峨家が国を動かすのではなく、峨皓煽が動かせば良いと、わたしは思う。皓煽にはそれだけの力がある」

力というのは、武力だけではない。

人を惹き付けることも、十分に力である。

卓乾が瓊俱を見限り、峨瑛に下った。

それは人として、峨瑛が瓊俱よりも勝っているということだ。

「わたしは、その者の生まれや育ちよりも、その者自身の人となりを大事とする」

瓊俱の躰から力が抜け落ちたようだ。がくりと頂垂れた。

楚雀が峨瑛を振り返った。処断を、と言う。

峨瑛は瓊俱を見下ろした。

「儂は絶対にお前の下には付かんと決めていた。死んでも、だ」

瓊俱が嗤う。

「わたしも、お前の下など考えたこともない。考えられぬな」

「生まれた時代が悪かったと思え。瓊俱、お前の死で、血を尊ぶ青の時代を終わりとする」

瓊俱が瞼を閉ざした。峨瑛も閉ざす。

しばらくの間。二人の間に同じ時がわずかに流れた。

だが、峨瑛だけは目を見開き、片手を振り上げ、振り下ろした。

「首を刎ねよ」

葵暦2000年、猩瑯の戦いは峨瑛の勝利で終わった。

この戦いで逃げ延びた瓊俱の息子たちも翌年の戦いで討ち取られ、青王朝きつての名家である瓊家は滅んだ。

葵暦2002年、峨瑛は丞相という地位に昇った。これ以上の地位

は皇帝しか残っていない。

葵暦204年、峨瑛は堯公となった。これは皇室に入ったことを意味する。

翌年、峨瑛は堯王となり、ついには堯の国を興すこととなった。

葵暦206年、蒼絃が禅譲したことで、青王朝は四百年の幕を下ろした。

そして、新たな国 堯の刻が動き出したのである。

64 臭仰ぐ刻 君の蒼い翼（後書き）

彼らの物語はひとまずここで終わりです。

彼らの結末は こちらの小説でお楽しみ下さい。

<http://ncode.syosetu.com/n0687g/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2877j/>

蒼い翼

2010年10月8日21時39分発行